

Fate/Machina order

修司

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

こんにちはみなさん。私の名前は藤丸立華です。

皆さんは突然、大きな力を手に入れたらどうしますか？

その力を使って、世界を救う英雄になるのか。

それとも、世界を滅ぼす悪魔になるのか。

それとも・・・全てをZEROへと返すのか。

▼これはそんな強すぎる力を手に入れてしまった少しだけちがう主人公のお話です。

ダンダンダンさん！イラストありがとうございます！

目次

プロローグ

プロローグ

1

鉄の城編

鋼の城

8

天才と天災

20

番外編

十蔵の屋敷・前編

29

番外編「十蔵の屋敷

中編」

37

番外編

十蔵の屋敷 後編

47

エピローグ バトルシーン追加

59

セプテム編

魔神柱 前編

70

番外編 とある神様の記録

78

魔神柱後編

83

神の鞭

90

光子力のカ

96

セプテム編エピローグ

112

狭間の物語「強き者よ」前編

118

狭間の物語「強き者よ」後編

バトルシーン追加

125

オケアノス編

海賊達の島（前編）

139

海賊達の島（中編）

145

海賊達の島（後編）

153

迷宮「前半」

161

迷宮「後編」

176

海の形	183
黒髭「前編」	187
黒髭「後編」	198
船の補修	205
月の女神	211
投球	220
原初の海賊	229
ヘラクレス	236
海の決戦「前半」	245
海の決戦「中編」	259
海の決戦「後編」	277
エピローグ	292
新章	
次回予告	302
プロローグ	307
霧	317
誰も知らない知るはずもない	324
死k a i魔霧都市：ロンドン	332
蟲達	343
デビルマン	354
世界の終わり	366
調査	377
グレート	389

プロローグ
プロローグ

初めまして。

私はとある所からみなさんを眺めているものです。
いきなりですがみなさんに一つ質問したい。

みなさんは、力についてどう思いますか？

例えばある日偶然違う世界に行ってしまったら、魔法が使えるよう
になったら。

例えば突然現れた謎生物に杖を渡され変身ヒロインとなり、悪
い奴らをやつつけることになったら。

例えば自分にすごい才能が眠っていて、その才能を発揮して沢
山の人達を驚かせたら。

それは非日常を望んでいる皆さんからしたらさぞやワクワクする
かもしれません。

ライトノベルの主人公たちのように、自分もこんな機会が訪れるかもしれないと夢見る方もきつといるでしょう。

力

それはとても魅力的で、触れてみたくて、備わってほしい。そういうものなのかもしれないね？

しかし

しかし大きな力には大きな責任がついてきます。

自身の、人の想像を大きく上回ってしまった力には誰もが恐怖しか感じません。

あなたは、そんな恐怖を受け止めることができますか？

それを抱えることはできますか？

世界を変えてしまった責任を持てますか？

あなたがもし……

ある日突然人の想像を超えた力を持ったとしたら……

あなたはその力をどう使いますか？

その力で、世界を滅ぼす悪魔となるのか。
それとも世界を救う神となるのか。
それとも・・・すべてをZEROへと返すのか。

この物語の主人公は、そんなおどましくも光り輝く様な力を奇妙な因果の元に貰い受けてしまうのです。

「・・・・・・・・・・」

自分はさっきまでコンビニに居たはずだ。

大学の帰りに今週発売される漫画を立ち読みするために、少しの買い物をしてブックコーナーでいつもの漫画を手にしたら真っ白な所に居た。

「・・・・・・・・・・」

白い空間はどこまでも遠く、またはとても狭くとも感じる。

周りに生き物の気配はなく明かりもないのに常に自分の姿が見える。

まるで白い紙の上に自分がいるかの様な錯覚を感じる。

普通ではあり得ない現象に恐怖を感じ始めた時、

「やあ」

自分の後ろで声がした。

「・・・・・・・・え?!」

振り返り声の主を見る。

しかしその人物は自分のいるこの場所と同じくらい変な存在だった。

まず全身がモザイクがかっており、テレビの砂嵐の様なモザイ

クが常に動いている。

声は男とも女とも取れぬ声で、人型のシルエットからはその性別を捉えることはできない。

「あ……れっ……え……だ、誰☒」

「少し落ち着いてほしい」

謎のモザイク人間は手を振り上げると何処からともなく机と椅子を出してみせた。

「うわっ!?」

「ああすまない、余計驚かせてしまったね」

モザイク人間はそう行つて椅子に座った後手を差して「君も座つてくれ」と言った。

「あ、ありがとう?」

「いやいや、落ち着いてもらわないとこちらも話が進められないからね。」

椅子に座り手に持つて居た荷物と漫画を机に置いてポカンとしていると、また向こうから話しかけられる。

「そろそろいいかな?」

「はい……えっと……ここは何処ですか?」

少し落ち着いた自分は一番気になっていることを聞いてみた。

「ここはね、何処でもない場所だよ」

「何処でもない場所?」

モザイク人間によるとこの場所は自分のいた世界の跡地らしい。

世界というのは炭酸水の泡の様なもので常に生まれたり消えたりしているらしい。

自分の世界は何かの拍子に崩れてしまったという。

そんな中で自分はこの目の前のモザイク人間に救われたらし

い。

「・・・スケールが大きすぎていまいち理解しづらい」

「まあそれも仕方ないだろうね。世界と言う概念は君達人間からすれば測りきれないものだ。ましてやただの学生だった君からすれば考えることもない様なことだしね」

「そりやあまあそうだけど・・・」

「例えるならその机の漫画の様に物語が最終回を迎えたとも思えばいいよ」

「なるほど、それならなんとか」

しかし口ではこう言うものの納得は出来ない。

自分の世界が減んだのだ。

しかもそんな中で自分一人を残してだ。

「俺はこれからどうすれば・・・」

「それなら僕から提案がある」

え、と顔を上げるとモザイク人間は手の上に一つの丸い星空の様なものを出した。

「君をこれからこの世界に一つの命として送ろうと思う。もちろん記憶はそのままだし再び人生を謳歌できるよ。君さえ良ければだけどね」

願っても無いことだった。

どんな形であれまた再び生き続ける事が出来るのなら自分としては文句はない。

「乗り気みたいだね。ならば餞別に何か力をあげようと思うけど欲しいものはあるかい？」

自分はそれ聞いてしばらく考えた後、机の上に置いてあつ

た漫画を見てふと思いついた。

「天才的な頭脳が欲しい」

「それじゃあそろそろ送るとしようか」

「ああ、何とか色々とありがとうございました」

「こちらとしてもただ都合がいいだけだよ」

そうして目をつぶり目の前が明るくなり始めた時、ふと思いつきモザイク人間に話しかけた。

「そういえば、あなたの名前は」

その瞬間自分の体はチリとなって崩れた。

「さて、これでプロローグは終了です。異なる世界に飛ばされた彼はその天才的な頭脳でこの世界に何を残すのでしょうか・・・」
その人物は机の上の漫画に手を伸ばすとあるページを開いた。

ページをめくるたびにモザイクからはつきりとした輪郭へと変わっていく。

「ああ、そういえばまだ皆さんに自己紹介して居ませんでしたね」

そして開かれたページには

の孫にして

・
・
・
」

「私の名は藤丸 立華 ……今送った彼、藤丸 十蔵

神の頭脳です。

一体の魔神が描かれていた。

e n d …

鉄の城編 鋼の城

人類は滅んだ。

2015年8月、100年後の文明の光を観測することにより人類社会の在続を保証する人理継続機関フィニス・カルデアは、2016年に何の前触れもなく人類が滅亡する事を証明した。

そしてその未来を修正するために、本来存在しないはずの過去の特異点事象を発見することにより未来を修正するための作戦を始動した。

だが人理焼却を目論む者の使いであるレフ・ライノールによってカルデアのマスター候補は瀕死の重傷を負い、たった1人を残してコールドスリープすることとなった。

マスター適正を持つ彼は1人の少女とともに七つの特異点をめぐり、運命と戦う事となる。

しかしこの物語を眺めているあなた達の中にはこう考える方もいるのではないだろうか？

たった1人の力で未来を取り戻す戦いを生き残れるものなのだろうか？彼はこの先百鬼夜行の化け物に、一騎当千の英雄を相手

に、戦うことができるのだろうか……?と。

無理もない、何せ彼はつい最近まで青春を謳歌していただけの一般人なのだ。

決して一流の魔術師や英雄の子孫というわけでもない。

そう、どこにでもいるような普通の人間なのだ。

だが安心してほしい……

何と言っても彼には

無敵の力があるのだから

邪竜百年戦争 オルレアン

西暦1431年のフランス、ジャンヌダルクが火刑に処されてからさほど日が立っていない時代。

ひと時の平和であるはずのフランスは地獄と化していた。

その地獄を作ったのはジャンヌダルク・オルタ。

己を見捨てた祖国、国民、そしてこの世の全てに憎悪し、復讐を誓った「竜の魔女」。

彼女はフランスを沈黙する死者の国に作り変えるために竜の群れと召喚したバーサーク・サーヴァントを率い殺戮の限りを尽くしていた。

「ごまあないわね・・・」

邪竜ファヴニールの上で口元を歪ませ、人が焼かれる様を眺める。

そして焼けた死体をワイバーンがたかり、辺りにはむせ返るような血の匂いが漂っている。

右手を上げ彼女は命ずる。

「おいでなさい飛竜たち、この空をお前たちの影で埋め尽くすのよ」

空を埋め尽くす飛竜の群れを見て人々は嘆きの声を上げる。

あんな化け物達にかなう筈がない。

ある者は逃げ惑い、ある者はこの子だけはと自分の子供を抱きしめる。

しかし竜の魔女は無慈悲にその手を振り下ろした。

「人を喰らい地を焼き払っておいで！さあ行きなさい！！」

そうして竜の群れは彼女の指示通り地獄を作ろうと人々に襲いかかる。

これでまた自分の復讐が前に進む。

ジャンヌ・オルタは次に現れる惨劇を想像し口元を歪ませた。

だが

『ロケットパアアアンチツ!!?』

その光景は現れることはなかった。

「っ」

自分の横を巨大な何かが通り過ぎる。

だが離れたことでその全貌が明らかとなった。

巨大な手だ。

黒鉄色をした巨大な腕。

その腕は飛竜の群れへと飛んで闇を払い、放った持ち主の元へと戻っていく。

そこにいたのは

「なに……あれ……?」

それを呟いたのは果たして彼女だったか、それとも町の人々の誰かだったか。

そこにいたのはその腕と同じような黒鉄の巨人だった。

全長は大体20から30m程あり、全身を硬そうな鋼に身を包んでいる。

胸には赤い板が付いており耳に当たる部分には黄金色のツノが伸びる。

そして輝く二つの眼光はまっすぐにこちらを見つめていた。

いち早く正気に戻ったジャンヌ・オルタはファヴニールに指示を飛ばす。

あれが何なのかはわからない、しかし飛竜達を蹴散らし自分の前に現れた時点で私の敵だ！

「あんたが何なのかはわからないけど私のファヴニールに敵うはずも無いわ！」

ファヴニールは指示された通りその口から炎を溢れ出した。

あらゆるものを焼き尽くす地獄の業火は鉄の塊すらドロドロに溶かしてしまうだろう。

しかし

「うそ×効いてない×」

しかし巨人はそれを物ともせず立ち向かってくる。

そしてファヴニールの前までたどり着くと、その大きな腕を振りかざした。

辺りに轟音が鳴り響く。

ファヴニールの自慢の牙はその顎門ごと吹き飛ばされていた。

その衝撃の余波を喰らいファヴニールの頭にいた彼女は思わず悲鳴を上げ吹き飛んだ。

しかしそこは英霊、何とかその身を回転させワイバーンへと飛び移った。

そして彼女は見た。

黒鉄の巨人の頭、その上に乗っていた人物を。

「私のファヴニールを……！よくも……！！？」
「あんた……！あの白い方のマスターね！」

辺りに静寂が包む。

その静寂を最初に破ったのは

『その通りだ！』

黒鉄の巨人の方だった。

「俺の名は藤丸立華！そしてこれこそおじいちゃんの作り上げた
！」

―史上最強のスーパーロボット！マジンガーZだ！！―

そう、転生者藤丸十蔵こそ光子力理論を確立し光子力エネルギーの開発を成し遂げた現代の天災である。

転生者である十蔵は未来の自分の孫のことを考え、特異点と化した冬木にて光子力理論を元に世界最強のロボットを遺した。

藤丸十歳の最後にして最強の遺作、それがマジンガーZである

―特異点冬木にて―

「す．．．すごいです．．．20m．．．いえ30mはありそう．．．
こんな巨大な物を先輩のお爺さんが建造していたなんて．．．」
巨人を前にして巨大な盾を持った少女、マシユキリエライトが
呟く。

オペレーターDr. ロマンの指示により特異点冬木の山の中
からカルデアに連絡が届いたらしく、マスターである藤丸立華と共に
調査に来たのである。

「ああ、俺も訳がわからない。小さい頃に急に居なくなったおじ
いちゃんから連絡が入ったって言うだけでも混乱してるのに．．．」
カルデアは現在人理焼却から免れ異空間を漂っている状態
である。

外の方から連絡は来ないことを知らされて居た立華は最初自
分の祖父が、しかも特異点から届いたと聞いて混乱した。

『僕も驚いたよ．．．本来過去や未来への介入なんて出来るはず
も無いのに．．．しかも特異点からなんて』

とロマニアークマンことDr. ロマンが言う。

医師であると同時に科学者でもある彼はモニターに映ったそ
の巨人を見てそう呟いた。

ちなみにその後ろでとある天才が巨人を見て大興奮しているのはここだけの話である。

呆然としている所に壮年の男性の声が響く。

立華！これが！！これこそがお前の力だ！

黒鉄の巨人、マジンガーZの頭部に幼き日に行方不明となった祖父・・・藤丸十蔵が立っていた。

「おじいちゃん・・・」

「あの方が先輩の・・・」

大好きだった祖父である十蔵を前にし混乱する立華をよそに十蔵は続ける。

「久しぶりだな我が孫よ！やはり私の予想通り、奇妙な運命に巻き込まれたか！」

「だが安心せい！天才のわしだからこそ！この日のために準備したのじゃから！」

「見よ！これこそ藤丸立華の力！マジンガーZだ！！？」

「マジンガーZ」

そう驚愕しながら巨人の名前を呼んだ立華に十蔵は満足気にニヤけると

その体を横に倒した。

「きやあ!？」

「おじいちゃん☒おじいちゃん☒」

いきなり倒れた祖父の姿に立華は思わず声を上げた。特異点という特殊な事態であるとはいえ長年離れていた自分の祖父。

会いたくて、でもどこに行つたかもわからなくて。

そんな大切な家族が、やっと会えた家族がいきなり吐血したのだ。

血を滲ませながらも十歳は孫の顔を眺めながら今までのことを振り返っていた。

「おのれアラヤとガイア共め……!ここまで誤魔化して来たものを今更になつて動きだしよつたか……!」

転生者である十歳はこの世界の人間ではない。

本来消されるはずのその運命を今まで何とか誤魔化してきたがこの発明がきっかけで十歳を消そうと動き出したのである。

「アラヤやガイア……ましてや遊星すら無意味にするほどの新たな存在……こんな世界に来たからこそ私は生み出したのだ……立華……愛する我が孫よ」

こちらに飛び移ろうとして少女に抑えられている立華をその霞む目に焼き付けながら十歳は言葉を紡ぐ。

意思ある者を蔑ろにする(この世界)に喧嘩を売るかのごとく。

自分のこれがこの世界最後の役割だと言うかのごとく。

「その力……」

その力を立華！今お前が手にするのじゃ！！お前がマジンガー
Zを手に入れた瞬間から、人間を超えるのじゃ！」

足元からガイアの影響で消えていく十歳は立華に叫ぶ。

「おじいちゃんもう喋るなっ！じっとしてるんだ！」

「先輩！このままだと落ちちやいます！抱えて飛び移るので動
かないでください☒」

「そうじゃ！藤丸立華は

神にでも！

悪魔にでもなれる！

神となり人間を救うことも

！

悪魔となり世界を滅ぼすことも！

お前の自

由じゃ！！？！！？」

笑いながら自分に伝える祖父を見て立華そつと、おじい
ちゃん・・・とつぶやいた。

そして十歳は思う。

これでわしの運命に意味を持たせられたと。

この世界に生きて来た証を刻んでやったと。

だからこそ・・・

「お前の好きなように世界を手玉に取るがいい！

スーパー

ロボット！マジンガーZとなつてな!!!」

そう言つて十蔵はついに足が完全に消滅しマジンガーから落ちて行く。

自分に向かつて涙を流しながら手を伸ばす孫を見て最後にこうつぶやいた。

お前が決める……。お前が選べる……。

「よくも私のファヴニールを！よくも私の復讐の邪魔をしてくれたわね!!!」

ジャンヌオルタがマジンガーZを前に叫んだ。

だが地に倒れ伏したファヴニールを前に立華はフランスの人々が観ている中叫んだ。

「うるせえ!!」

「お前達は何を思つて世界を滅ぼそうとしているのかはわからない！だがおじいちゃんは言った!!?」

「神となり人間を救うことも！悪魔となり世界を滅ぼすこともお前の自由だと!」

「だがお前達が俺たちの！この時代を滅ぼそうとした瞬間に俺の選択は決まったぜ!!!」

そうして目の前のジャンヌオルタに、何処かに居るであろう人理焼却の主犯者に向かって聞かせるように叫んだ

マシユと!!

俺は悪魔になどならない！お前達の野望は！俺と
マジンガーZが打ち砕く!!!

「いくぞマシユ！マジンガーZ！」

「はい！先輩！戦闘開始です！」

そうして立華はマジンガーの肩に乗ったマシユに叫び、彼女もその問いに力強く答える。

そしてそんな空を埋め尽くすほどの敵を前に立ち向かっていく彼らをフランスの人々は、まるで神を崇めるかのように眺めるのだった。

l e n d l

天才と天災

「キュー、キヤーウー！」

何か顔を舐めてる感じがする。

眠い目を少し開けるとそこにはいつもの謎生物ごと（フオウさん）がいた。

最近の朝は必ずフオウさんの顔を見る事が習慣になってきている。

「おはようございます。よく眠れましたか、先輩？」

少し間を置いて後輩のマシユが話しかけてくる。

その問いに対して自分はぐっすりと、と答えると

「よかった。十分な休息がとれた事は喜ばしい事です」と返してくれた。

「フオーウ、フオーウ！」

「この通りフオウさんもやる気に満ち溢れています。睡眠も朝食もバッチリと思われまます」

「レイシフト先の環境は未知数です。いつ、どれだけ休息の機会があるかわかりません。ですから成るべくきちんと眠ってくださいね。」

「大丈夫だよマシユ。ベットがいいものなのかいっつもぐっすり眠れるから」

そうして顔を洗いマシユに言われてロマンの元へ向かう。

これが特異点、邪竜百年戦争を終えて藤丸立華の最初の朝である。

あの後我々は仲間となったルーラー（ジャンヌダルク）と複数のサーヴァントと共にオルレアン城に向かい、そこでジャンヌオルタ陣営と激突する。各サーヴァントが足止めをしてくれている間自分たちはこの特異点の首謀者であるジャンヌオルタとキャスターのサーヴァント、ジル・ド・レエと戦った。

途中ジル・ド・レエは使い魔である巨大海魔をワイバーンと聖杯の魔力で呼び出したが、Zの前には攻撃は通らず結局こちらは無傷で特異点を攻略する事ができた。

後悔が無かったと思えば嘘になる。もう少し早く動いていれば特異点での犠牲ももう少し少なかったのではないかと。

マジンガーZがあるとはいえ神になれる、と考えたわけではない。どんな存在であってもすべてを救うことは出来ないという事も理解している。

だからこそ手の届く人間は成るべく助けたい、と思った。

だってそれこそ、おじいちゃんの作ってくれたマジンガーZの使命だと思うから。

それといい事もあった。

「旦那さま♡おはようございます」

「あ、おはよう清姫」

「おはようございます、清姫さん」

特異点から帰る時、バーサーカー（清姫）が自分たちに付いてきてくれた。最初に出会った時はもう1人のサーヴァントであるラ

ンサー（エリザベート）と共に襲いかかってきたが、最後の戦いでは一緒に敵のサーヴァントと戦ってくれた。

時々大胆な事をする子だが、自分のために色々世話を焼いてくれるいい子である。

「旦那さま？どうしました？」

「いや、ちよつと考え事だよ」

「まあ♡私の事を考えておられたのですか？私も安珍様の事をいつもいつも考えておりますよ♡」

「……」

「……いい子である。」

「清姫さん、私たちは今からドクターの所に行く所ですよ」

「それなら私もお伴します。夫の後ろについて行くのは妻の務めですから♡」

「なんだろう……後ろのくの辺りで変な寒気がした。」

「とはいえ清姫はここに来たばかりだし、案内も込みで一緒に行くのもありだろう。」

「じ、じゃあ一緒に行こうか」

「はい、安珍様♡」

マシユとフォウさんのジト目が背中に刺さりながらも自分たちはドクターのいる管制室に向かうのだった。

「やあ、おはよう諸君。と言ってもここにいるのは君たち3人と、」

「ふわああああ……や、おはよう。回収した聖杯は技

術部で解析ちゆうだよ」

「僕と、そこで寝惚けている天才様だけだけどね」

清姫と途中で別れた後（朝食の準備をして来るとのこと）俺達は少し遅れて管制室についた。

管制室にはドクターと一緒にサーヴァントキャスター、「レオナルドダヴィンチ」ことダヴィンチちゃんが待って居た。

ダヴィンチちゃんはカルデアの技術担当者であり蘇った天才である。なぜモナリザの姿なのかは本人曰く思い込みによつてその姿で召喚されたらしい。

おじいちゃんといいいダヴィンチちゃんといいい、天才と言うのは変わった人が多いのかもしれない。

「さて、取りあえず特異点攻略お疲れ様。改めて礼を言わせてくれ」

「いや、気にしないでよドクター。今回のこの事件は俺自身にも関係することだし・・・」

「それでもだ、僕達は君とマシユ達だけにこんな重荷を背負わせてしまった。大人として僕自身も戦えればよかったのに・・・」

「俺とマシユだけじゃありませんよ」

「え?」

そう、決して俺とマシユだけではない。

夜トイレに起きた時にドクターが寝ずに新たな特異点の解析を行つて居たのを知っている。

他にもスタッフの人たちや技術部門の人達も、自分たちが最高の状態で送り出せるように気にかけてくれる。

決して俺とマシユだけではない。

「ドクターやスタッフの人たちが、俺たちをいつでも最高の状態で送り出せるように頑張ってくれているのを知ってるよ。だから俺とマシユだけじゃない、ここみんなと一緒に戦ってるんだ」

「そうですよドクター。だからまた次の特異点も攻略しちやいま

しよう。カルデアのみんなで」

「藤丸君……君がそう言ってくれるのならありがたいよ。僕達も報われる」

なんだか少しこしょばゆい気持ちになったがこれは俺自身の本音でもあるので伝えておきたいと思った。

「少し湿っぽくなってしまったね。それじゃ早速だが本題に入ろう」

「そうそうー！これが本題だよ藤丸君!!？あのロマンを詰め込んだロボットは何なんだい!!？まさか現代に、しかも藤丸君のおじいさんが

あれほどの物を作り出せるなんてー！」

ダヴィンチちゃんが興奮して詰め寄ってくる。

その目は新しいおもちゃを買って来てもらったかのごとくキラキラしていた。

「い……いや、俺自身もおじいちゃんとは子供の頃にいきなり失踪してそれっきりだったし、何よりマジンガーの存在もあの時初めて見たものだし……」

「そうなのかい？しかしこれ程の物を仕上げるとなるとんでもないほどの時間をかけたはずだ。内蔵されているエンジンはカルデアの原子力発電を大きく上回る電力を生み出せるし使われている装甲や内部フレームなんかの素材も見ることがない！しかもこの私自身を持つてしても解析不可能なブラックボックスにが7つ、ヒンドゥー教の教えというチャクラの位置に備えてある!!？ここまでワクワクしたのはこのカルデアに来てから初めてだよ!!まるで科学の芸術品だ!!!私が天才だとすると彼はまさに天災だね!!!」

ドン引きである。

あまりのテンションにマシユやフオウさんですら少し引いて

いる。

芸術家である前に科学者であるダヴィンチちゃんからすれば、Zはまるで丁寧に仕上げられたペンダントのように感じるのかもしれない。

「僕はそれよりも気になることがあるな・・・」

「気になること？」

ドクターが疑問符を掲げる。

マジンガーについては俺自身もよくわかってないところは多いのだが。

「二応その事ではあるんだけどね。あのロボット・・・マジンガーZはどうしてファヴニールや海魔に攻撃を通すことができたのだろうか？」

なんでつてそりゃあ

「Zのすごい力で殴り倒したからじゃないの？」

「あ、そういえば先輩は一般候補だったので知りませんでしたね」

そう言うとマシユとドクターが説明してくれた。

英霊や幻想種というものは本来何の力も籠ってない攻撃では傷つけることが出来ないらしい。神秘というものはより多く時間を積み重ねることによってその力を強いものへと変わっていくものらしく、本来最新技術の塊であるマジンガーの攻撃じゃあその神秘を崩すことが出来ないはずなのだ。

「しかしあの時マジンガーは英霊やファヴニールに大きなダメージを与えていた。ファヴニールのような幻想種は本来特大の神秘の塊で、ダメージを与えるにはジークフリードのバルムンクのような

に定着した弱点を突くかより特大の神秘による力押しでしかダメージを通せないはずなんだ」

「なるほど。つまり神秘の通ってない棒で英霊とかを殴っても効かないように、あの時のロケットパンチも通らないはずなんだね」

「その通り。見た所あのロボットが生まれたのは特異点である2004年、つまり最近だ。だからこそあの時ファヴニールの顎門を砕いたのが不思議だったんだ」

「私は他にもあるね」

「ここでダヴィンチちゃんが疑問符をあげる。」

「私はやはり藤丸君のおじいさん、プロフェッサー十蔵が気になるかな」

「おじいちゃんが？」

「プロフェッサー十蔵はあの時の足元から消えていつていた。あの消え方はガイア、抑止力によって直接手を下されたものだ」

おじいちゃんの死んだ時のことを思い出し少し嫌な気持ちが上がったが、今考えると確かにあれは不自然な消え方だった。

「抑止力というのはこの世界を継続させようとする巨大な意思のようなもので、この世界が本来とはちがう結果が残りそうになったらその結果を覆そうと手を加える。人理焼却という大きな問題を放っておいてなぜ抑止力はプロフェッサー十蔵に直接手を出したのだろうか・・・」

考えれば考えるほどおじいちゃんに対する疑問が増えていく。思えばそもそもなぜおじいちゃんは平和だったはずの時代にあんな強力な兵器を作ったのだろうか？

しかも特異点である冬木市・・・俺たちから見たら過去からどうやって未来であるはずのカルデアに通信を送ることが出来たのだ

ろう？

「まあそんなに難しく考える必要はないよ。おじいちゃんの作ってくれたマジンガーZのおかげで俺自身もマシユや清姫と肩を並べて戦えるんだ。今はとてもありがたいよ」

「それもそうかも知れないね……。マジンガーZがあるおかげで君がむやみに傷つくことも無いだろうしね」

そういつてドクターと笑うと隣でマシユがむくれているのに気づいた。

「むく」

「ど、どうしたんだいマシユ？何か気に触るようなことを言ってしまったかい？」

「先輩を守るのはマジンガーZだけではありません！先輩のサーヴァントである私も先輩の無防備な時にいつでもお守り出来ます！」

「マシユ……。そうだな。マシユは俺のサーヴァントだもんな」

そう言うとマシユは元気よく「はい！」と答えた。

「はっはっは！ならマジンガーが鉄の城だとするとマシユは鉄の盾、と言ったところかな？」

なんだそれ、と言うと観測室に俺達の笑い声が響いた。

「旦那様をお守りするのは貴方だけではありませんよ……」

「うわっ☒」

気がつくその後ろの方に清姫が立っていた。いつの間に来ていたのだろうか……。

「旦那様♡朝食の用意ができましたよ。冷めてしまわぬようお呼びに来ました♡」

「あ、ありがとう清姫。確かにお腹すいて来たね。それじゃあみんなで食べに行こうか」

「そうですね。先輩、清姫さん、ご一緒してもよろしいですか？」

その問いにももちろん、と答えるとドクターやダヴィンチちゃん達と共に食堂に向かうのだった。

ここで一つなぜマジンガーが神秘に攻撃を通すことが出来るのかについて語ろうと思う。

マジンガーZとは藤丸十蔵の手によって作られたものだ。しかし本来はそうでは無い。この世界に転生して来た藤丸十蔵は謎の存在によって天才的な頭脳を与えられ、その知識を元に作られた。

つまり本来は別の「だれか」の手によって考え生み出されたものなのだ。

だがこの事が近い未来・・・幻想種や悪魔達との戦いで切り札となることとなるのは、まだ誰も知らないことである。

l e n d l

「坊主く？そつちなんか見つかったかく？」

「ちよつと待って、これは……」
「女性の服だけ吹き飛ぶ爆弾」？」

「おう、ちよつとそれ貸してみ？」

『立華くん！是非とも送ってくれ！それはこちらで研究しなければ「お二人とも最低です」マシユ?!』

「……」

なんだこれ？

立華は心の中でひっそりと呟いた。

現在彼は仲間になったクーフリーンと一緒に今は亡き「藤丸十蔵」の屋敷に来ていた。

今回の目的は遺品整理、同時に調査である。マジンガーZの開発されていた施設でもあるこの屋敷は未だに人知に収まらないほどの物が眠っている。

なのでそれをカルデアに持っていき今後の戦いの戦力にしよう。ついでに面白い物があるかも！というダヴィンチちゃんの言葉で始まった。

ちなみに今回清姫はお休みである。まだレベル足りないし是非もないよね！

「しかし今んとこイタズラ道具みたいなもんしか見つかんねーな」

「うん、おじいちゃんよく女子高生のスカートめくったりする人だったからそういう発明多いんだよ。お、これは……」
「空中

元素固定装置」？ふつーに発明も出てくるな。」

『じゃあそれを早速送ってくれ。マシユ？』

「はい。先輩、それをこちらへ・・・」

マシユは盾を構えて転送ゲートを発動させる。

手のひらほどの装置はそのままダヴィンチ達のところへ送られて解析されて行く。

『ヒヤッホーウ！新しいおもちゃだ〜！』

「ダヴィンチちゃんがこれまでにないくらい喜んでる・・・」

「ずっと引きこもっててストレスが溜まっていたのかと・・・」

「それはいいからよ、さっきの爆弾を「ダメ」チツ」
クローリンが頭を掻きながらさらなる階段を降りて行く。外から見るとただの武家屋敷に見えるがその地下はアリの巣のごとく張り巡らされている。全員で動かなければ迷子になりそうなのでマシユと立華もすぐさまその背中を追う。

階段は薄暗くどこまで先があるのかわからない。反響する足音がそれを物語っている。その上セイバーオルタによる宝具の振動などにより足元には瓦礫や機械が散らばっていた。

「しかし・・・」

不意に立華が声を上げる。

「おじいちゃんは何でこんなところでずっと一人で生きていけてたんだろう・・・」

「そうですね。やはり疑問点はそこに着きます・・・」

立華が未だ疑問に思っているのはそれだ。忘れているかもしれないがここは特異点。それもサーヴァントが暴れまわっていた場所だ。彼らは人、命の匂いにつられて寄ってくる。にもかかわらずたった一人彼はこの場所で生き残っていた。

「この屋敷自体に魔力の反応はねえ。まるつきり技術のみで作られたと考えていいな」

「兄貴もこの場所は分からなかったの？」

「ああ、何故かこの場所は生き物の気配を遮るらしいな。キャスターとして召喚されたはずの俺ですらわからんなんて不気味としか言えねえ」

『我々は一度繋いだ事もあって反応を拾う事が出来てるが、それまではやはり感知出来なかつたよ』

「一体どういう事なのでしよう・・・」

そうこう話しているうちに階段は途切れ新たな扉が現れる。立華はそれをゆっくりと開き様子を見る。

「・・・・・・？」

「先輩、大丈夫ですか？」

とびらの向こうにあったのは長い廊下だった。いや、廊下というには少し違う。立華が開けた向こう側には手すりが付いておりそれが廊下と共に横に続いている。鉄柵、というべきだろうか。

「暗くて何も見えないな・・・。兄貴？ルーンで照らすことできる？」

「任せな。いま付ける」

クーフリーンが空中に指を滑らせルーンを刻む。それはやがて大きな光となって暗かった空間を照らした。

そこには――

「うおお?!」

「!先輩!下がって!」

視界にそれを入れた立華とマシユは咄嗟に身構える。

そこには巨大な物がいくつも積み重なったかのような物が光を反射していた。

しかしそれは――

「……マジンガー?」

「坊主、落ち着きな。こいつらは動かねえよ」

それはマジンガーに似た何かだった。

ある程度の形はそっくりだが、胸の放熱板や頭の形が微妙に違う。そんな代物が廊下の奥の奥まで無造作にいくつも並べられていた。

「なんだこれ? マジンガーにそっくりなやつらがこんなに……」

「ずっと向こうまで続いていますね」

立華はふとその中の一つに近づいてみる。見た所埃っばいが完成一步手前で廃棄されたかのように新しい。しかし装甲の一部が露出して中身の機械が見えているものがある。

その部分に目を向けてみるとロボットの名前と思わしき文字が刻印されていた。

「energer Z……エネルギーZだって。なんでこんなにたくさん……」

『それはおそらくプロトタイプだね。試作段階としていくつかの物を仕上げてたんだらう』

ダヴィンチの言葉に立華は十蔵を思い浮かべる。確かにあの人は中途半端な事が嫌いによく失敗作を壊してた。

(クソツタレめ! またやり直しじゃ!)

(おじいちゃんどうしたの?)

(これを見る! これは光子を物質に浸透させる事で対象を透けて映すことのできるメガネでな! しかし透けすぎて体の中身が見えてしまうという欠陥品じゃ!)

(へー、それを使ってどうするの? 病院に送ってレントゲンの代わりに使うの?)

(いや、最近できた銭湯で女湯をな)

(やめて?! 犯罪だよそれ?!)

(ああ?! なんてことを?!)

いや、あの時は自分が壊してたか……。

『こちらで観測した所それは全てジャパニウムで出来てるらしいね。ただちよつとマジンガーより装甲の結合率がゆるいけど。名付けるなら合金Zといったところか』

『立華くん、それも送ってくれ。マジンガーの解析にも使えるし何より戦力になる。後で全て回収はするが』

「全部?」

「大丈夫なのか? その……スペース的に」

マシユが盾を構えてエネルギー達を転送していく。

側から見るとすごいシユールだ。

『そのことなんだがね、先ほど君たちが送ってくれた空中元素固定装置が解決してくれそうだ』

「? あれってどんな装置なの?」

『これは流星に私もびつくりした。起動すると空気中やそこに散らばった元素を増殖、原子変換して別の物質に再構築する。簡単に言えばこれを使うと好きな素材をいくらでも出せるのさ』

「え? それってつまり……」

『魔法に近い技術ってことだよ』

ダヴィンチが額に冷や汗を流して戦慄するように呟く。

魔法とは「魔術」とは異なる神秘。魔術師達が目指す最終到達地

点である「根源の渦」から引き出された力の発現。

その時代の文明の力では、いかに資金や時間を注ぎ込もうとも絶対に実現不可能な「結果」をもたらすものを指して魔法と呼ぶ。はずなのだが……

『これは第1魔法と言われている「無の否定」に近いね。増殖とは言え物質をリスクもなしに増やせるんだ。これが世に出回ったらどのくらいの魔術師が首を吊るだろうね?』

こうして出てくる発明品を見るとやはり自分の祖父は天才なのだと思ひ知らされる。立華は子供の頃から可愛がられその仕事っぷりを見ては来たものの、ほとんどがイタズラやセクハラのための発明だった。

しかしここにあるものは全てが違う。違いすぎる。

そして立華は再び思う。

一体自分の祖父はなにがしたかったのだろうか?と。

一体何とたたかっていたのだろうか?と。

あの時彼は言った。「臆病な自分の代わりに世界をすくえ」と。ならばあるはずなのだ。今まで戦って来た彼の記録が。我々の知らない真実が。

「ダヴィンチちゃん、ドクター。俺たちはこれから一番下まで一気に降りる。やっぱりおじいちゃんが生きて来た記録を見つけたいんだ」

『それがいいかもね。わたしも彼と言う人間に興味を尽きない。探せば日記とかならあるかもね』

「先輩。回収終わりました」

『来た来た♡それじゃ、なんかあつたら呼んでね』

走る足音が聞こえる。おそらく届いたエネルギーを見に行つたのだろうか。

ダヴィンチちゃんえ……と言うつぶやきも一緒に流れてくるあたり観測室は微妙な空気が流れているだろう。

「……うん、とりあえず、行こうか？」

「あのおっさんちゃんとナビする気あんのか……？」

「ダヴィンチちゃんはその……好きなものを見ると夢中になっちゃうと言うか……」

長い通路を歩きながら三人は呟く。

静かな空間には三人の足音が響きわたっており、ルーンから出る光が隣のエネルギー達を照らす。こうして見ると個々のデザインが微妙に違っており、あるものはスリットではなくマスク、あるものは背中に謎の走路のようなものを背負い、またあるものは黒ではなく赤褐色など様々である。

「なんだかお墓みたいですね……」

「さしずめ俺たちは墓荒らしってところか？」

「そんなことねーよ。こいつらはまだ生まれてすらいないんだ。ダヴィンチちゃんの所に行けばきつと心強い味方になってくれるはず」

ふと手すりではなくエネルギーをさすり立華は心の中で思う。

（もしお前らが立ち上がって来れたのなら、俺たちと一緒に戦おうな……）

「先輩……？」

「いや、何でもない。先を急ごう」

立華は早足で通路を進んで行く。

それを見た二人もペースを上げ後ろをついて行く。

だからこそ気づかなかった。

……r……tu……

を。

エネルギーの中の一機の瞳に、僅かではあるが光が灯ったこと

.....
ニ..... アクヲ..... キ..... ミトイツ..... ショ.....

ー続くー

番外編 「十歳の屋敷」 中編

1900年〇月〇日

私が世に生まれて75年の月日が過ぎた。この世界には私の生み出した発明が溢れ人々を支えており、日常生活の中などでもそれらを見るようになった。

温暖化の改善、より低コストで効率的な重機や乗り物、新しい元素の誕生、石油に変わる新たなエネルギー源。

人々が私を天才と称え賞賛する。

これこそが私がこの世に生まれてからずっと望み続けたものだ。

今では美人の嫁に自慢の息子に恵まれ、再来月には孫も生まれるだろう。

二度目の人生。私はついに幸せを掴んだのだと感じている。

〇月〇日

初孫が生まれた！

しかも双子の兄妹だった。孫馬鹿と自分でも思うがやはりイケメンでべっぴんさんだと感じる。私の皺だらけの指を近づけると二人はそつと指を握り微笑んだ。

思わず頬が緩みまくり看護婦が悲鳴を上げた。

全く失礼な奴である。

あと息子と喧嘩をした。孫の名付け親としての権利を巡り久々に身体を動かしたのだ。

ええい！何が白乃と土郎じゃ！この子達には立華と立花という名前をつけるんじゃ！

〇月〇日

しばらく放置していた光子加速器の実験を再び開始する。

実に3年ぶりに触ったと思う。

なぜ再びこの試作品を動かそうとしているのかと言うと、ぶつちやけると孫二人に自慢したいからである！

二人に未来の地球の事を話してやりそれに期待し目を輝かせる。

なんと素晴らしい事だろう！明日にはついに完成するそれを私は見つめる。

きっと素晴らしい未来がわかるのだろう。

明日が楽しみだ。

「あ、先輩見えて来ました！恐らくあの扉が・・・」
立華達は長い廊下を渡り終え新たな扉の前に来ていた。

延々と続いていた先に待ち構えていた扉は今までの機械的な扉と違う木造の物だった。

周りが近未来的なものであるため余計に目立ってしまったている。

「ドクター、ここが一番下？」

『ああ、間違いない。そこから先に続いている様子もないからそこが十蔵博士の部屋なんだろう』

「やっとかよ。いい加減こいつら見んのも飽きて来たつてもんだ」

クー・フリーンがエネルギーガスの足を叩く。

実際そこまでの距離はないのだが山のように置かれたエネルギーガスを見続けるとそんな感想も浮かぶだろう。

立華は扉に手をかける。

暗闇に木材と金属が擦れる音が響き渡り不気味な反響を生み出している。部屋の中をそつと覗くとそこには机を中心として沢山の資料が散らかっていた。

「うわ、足の踏み場もないな」

「先輩お気をつけて。なんなら手を繋ぎましようか？」

「いや、大丈夫だよ。この散らかり方には慣れてるし」

立華がそう言うのと若干がっかりするマッシュ。

しかし実際立華はこの散らかり方に覚えがあった。祖父は何かを作るとき設計図に紙触媒を使用しそれを適当にばら撒く。何故かと聞くとその方が形として残るし何より処分しやすいからだそうだ。

祖父の発明品は世に出すたびに混乱を巻き起こす。そしてそれを狙う奴らなどもいたらしくパソコンなどにデータを入れておくと簡単に持ち去れる。

消したとしても復元される可能性があるのでかさばる形にするとか。

「おじいちゃんの設計図の片付けはよく妹と一緒にやってたよ。部屋に遊びに行くといつも設計図で散らかってたさ」

片付ける者がいなかったその部屋は祖父の地下で過ごした時間を感じさせる。

部屋の隅の設計図なんかは埃を被っており下手に動かすと雪崩れを起こして大変なことになるだろう。

『とりあえず片っ端から送ってくれ。これだけ量があるといちいち調べてられないからこっちで整理する』

「わかった。マシユ、ゲートを開きっぱなしにしてくれ。そこにどンドン投げ入れる形で行こう」

資料をどかし盾を地面に置くところから転送陣が展開される。立華達はそれから手分けして設計図を送って行く。

「小難しいことはやっぱわかんねえな」

「兄貴読むのはいいけど手伝ってくれよ」

そこらへんに落ちていた資料を手にしクー・フリーンがぼやく。

資料の題名は「人工知能による魂の物質化」。細かいところはよくわからなかったが内容は高度な人工の人格を形成することで魂を物質として残すというものだ。

世に流れれば多くの魔術師が首を吊るのだろう資料はそのままゴミ箱に投げ入れるかのごとく転送される。

部屋の端で埃を被っていた事もあり立華も重要なものとは考えなかったのだろう。恐ろしい。

そのほかにも三連発小型散弾銃、ロボット細胞による新生物や質量の収縮によるブラックホール爆弾などの兵器。

食べ物の結合を崩すことによる美味しい老人食や手術の最適解を導ける装置などの医療。

味にするプラスチックやエロ本3Dメガネなどのよくわからないものなど様々な設計図が見つかって行く。

しかし――

「やっぱ日記みたいなもんは見つからないな……」

「置いてあるのはやはり発明関係ばかりですね……」

本人の事に関する情報が未だ見つからない。

「なあ、そもそもその爺さん日記なんて書かないんじゃないやねえか？」

「いや、日記でなくとも本人の事について書いてある物さえあれば……」

そう言って立華は本棚に手をつける。

床の設計図と同じく長年放置されてきた資料は、持ち上げられるたびに埃が舞い上がり三人の鼻腔をくすぐった。

棚の資料は二段構えになっており一冊どかすとその後ろにも資料がびっしり詰まっている。

「この棚はロボット関係が多いな。やっぱり専門だからいつでも手に取れる場所に起きたかったのかな……」

一冊一冊を丁寧に取り除いく内に立華はなんだか目尻が熱くなっている感じがした。

ここにいと否が応でも実感してしまう。

自らの祖父が死んでしまったということ。当然である。

立華はまだ17歳の子供。それなのに今までで一番慕っていた祖父があのような死に方をしたのだ。祖父の部屋によってやはり意識してしまう。

(おじいちゃん……)

「あ、先輩！見つけましたよー！」

突然マシユが大声をあげて立華を呼んだ。

彼は目をこするとマシユのそばに近づき手元をみる。

「マシユ、どうしたんだ？」

「はい、日記ではありませんが本人の心情を語っているとと思われる資料を見つけました」

駆け寄ってきたクー・フリーンも同じくマシユの手元をみる。

そこにあつた資料の題名は

「光子加速器実験経過？」

「先輩はマジンガーの置いてあつたコンテナを覚えていますか？あそこにはマジンガーを囲む様に円形の装置がありましたよね」

立華は思い出す。

マジンガーの格納されていた場所には確かに円を描く様に設置された装置が置いてあつた。それはダヴィンチちゃんに解析してもらつても解明できなかった装置で固定されているため運ぶ事も出来ずに放置していたものだ。

「どうやらあれに対する実験の経過と様子について描かれているようです。最初の数ページこそ破れていますが……」

「なんだ。見つかったのか」

「マシユ、それ貸してみて」

立華はノートを受け取るとその内容に目を通す。そして全員に聞かせる様に音読しはじめた。

「えつと……」

○月○日

直ちに研究の成果を形にする事にする。

私が知った未来の姿、それは私自身を絶望させるのに十分なものであった。

人類滅亡。

それは2016年以降の未来はないという事。

私の孫たちの将来が存在しないという事だ。

そんな事は私が許さない。

幸い全ての平行時空において私の考えは同じらしく、未来の私は全てを救う切り札と一緒に保存していた。

私はそれをなんと少しでも形にすると誓った。

○月○日

侵入者を確認した。

いつものごとく研究の解読、濃縮を繰り返していると監視カメラの映像を確認した。

それは町外れの深い森の中に粒子とともに出現し、紅いコートの様な物を羽織った色黒の人型。抑止の守護者と思わしきそれはこちらの施設に向かっていていると思われる。カメラはそれにすぐさま破壊されたが廃城に設置してあった別のカメラがその様子を知らせていた。

すぐさま光子力フィールドを展開、防衛体制を整える。

その男は目に見えないフィールドに触れた事でそこからあっけなく崩壊していった。

○月○日

劣化量産品としてエネルギーを開発、やつらの対抗戦力として配置した。

エネルギーには人の搭乗ではなく人工知能を設置、人員の問題を解決する。戦う事で様々な戦闘パターンを全機体が学習し、いずれは戦闘のプロといっても過言ではないものになるだろう。

幸い相手は英霊だ。経験値には十分である。

○月○日

抑止力はやはり私を消そうとしているのだろう。

あれから様々な英霊と思われる存在が私の施設に仕掛けて来た。今は光子カフィールドによって私の存在を守ってはいるがいずれ見つかってしまうだろう。

それまでにこいつを生み出さなければならぬ。

こいつさえ作り出せばいずれ来るであろう我が孫が見つかるだろう。

その時は、このフィールドを切って……。

○月○日

日に日に激しくなつて来る襲撃。

先日は巨大な牛のような生物が施設に向かって突進して来た。それを防ぐために仕方なく光子カバリアーを展開。牛は軌道がそれ勢いよく地面に衝突していった。あとは残っている全てのエネルギーがー達にふくろだたきにしてやった。

ここまでの焦りを見せるといふ事は立華が来る日が近いのだろう。

立華の手にこの力が渡ればもう私は思い残す事はない。

人の運命は人の手によって切り開かれるべきなのだ。それを心のない物の怪などに好き勝手されるわけにはいかない。

「……………日記？」

光子加速器の事が書かれていると思われたが中身はどちらかと言うと日記のような内容だった。しかし最初のページが破られているためよくわからない事になっている。

『文から察するにおそらく君のおじいさんは未来で君の何かを見たんじゃないか?』

「なにかって?」

『それが何かはわからない。ただ一つわかるのは…………』

立華はロマンの言葉を聞きながらページをめくる。

次の瞬間————

『あまりいい未来ではなかったのかもしれない』

次の瞬間施設に大きな揺れが響き渡った。

「な、なんだ?!」

立華はクーフリーンに肩を支えられながら叫んだ。

施設は未だ揺れておりやっと思えて来た床を本棚の資料が再び埋め尽くしている。

咄嗟に三人は部屋から出てエネルギーの廊下を走る。

「ドクター!この揺れは一体?!」

『なんだこれ?!いきなり施設の上に巨大な反応が現れた?!』

「巨大な反応?なんだそれ?!」

『今映像に映す!.....』

しばらくの間を置いて立華の前にモニターが映し出される。

それは、巨大な頭だった。

黄金に彩られた頭蓋骨を露出させ、腐りかけの肉を引きずりながら頭だけで施設に向かって来る巨大な牛の頭。

冬木の街を這いずりながらこちらに向かっており、その瞳に怒りを乗せて迫っている。

「オイオイオイオイ!ありゃあ神獣じゃねえか?!」

クーフリーンがその映像に驚愕を浮かべる。

神獣.....

神に仕える獣。

神と同じく権能を宿し、通るだけでその場所に大きな影響を与える大災害。

そんな存在がいま、立華達の元に向かって来ているのだ。

(TITAN System
energy 起動
防衛を開始する)

No. 28

この燃え上がる感情を……

番外編 十歳の屋敷後編

「先輩、しっかりつかまっていますか！」
現在立華達は大急ぎで先ほど通っていた道を駆けていた。
何が起きているのかはわからない。しかしあのまま部屋に居続

ければ間違ひなく生き埋めになる。ロマンからの映像をみたマシユは立華を抱き抱えると大急ぎで来た道を引き返していた。

黄金の牛は現在も凄いスピードで追って来ているらしく、今も施設全体を揺らしている。

キヤスターが思わず声を上げる。

「おい！お前の爺さんマジでなんなんだ?!あんなものに迫られるなんていい加減可笑しいぞ?!」

「そんッ・・・なッ・・・こと・・・！俺が知りたいわ!!!」

揺れる腕の中で立華は言葉を途切れさせながら答える。

確かに自身の祖父はまごう事なき天才だ。その頭脳はこれまでの人類史を見渡しても遜色ないほどのものである事は明らかだ。

しかしこんなものに狙われる程の一体何をしでかしたのだろうか・・・

「！兄貴、そこ右！」

咄嗟に指示を飛ばし立華達は急カーブを曲がる。その先には階段が続いておりこのまま行けばマジンガーの格納されていた場所に着く。そしたらひとまずは安心だろう。10段程を一気に駆け上がり進んで行くと不意に光が見え始めた。

電力の届いている領域までついたのだ。

現在施設は完全には機能しておらず、深いところに潜るほどその配線は届かなくなっていた。つまり灯りが見えるという事は・・・
「もうすぐ・・・！」

三人の中の誰かがそう呟く。

格納庫に着きさえすればマジンガーを呼び出すことができる。そしたら出撃ベッドにマジンガーを乗せあの牛首に対抗できる。

するとーーーー

(反応が消えた?!?!バカな、さっきまで捉えていたじゃないか?!?)

「え?」

暗い空間に電子音が混ざったロマンの音が響く。

「ドクター、どうしたの?あの牛首は?」

(ちよつと待つてくれ!さつきまで捉えていたはずの反応が途絶えた!訳がわからない?!突然その場から消えたんだ!!)

「そんな・・・」

不意に動きを止めた立華達も確認する。

確かに先ほどまで凄まじい揺れに襲われていたはずの施設が今は痛いほど静かだ。

「・・・とりあえず上まで登ろう。何にしても格納庫まで上がらないと」

「えつと・・・そうですね。あ、先輩歩けますか?」

「ああ、大丈夫だよ」

ゆっくりとマシユの腕から降り立華はゆっくり階段を上がる。それを見てマシユも立華の後ろを付いて行こうとし

「・・・」

「?クーフリーンさん?」

(可笑しい・・・あれほどのもんがある姿をわざわざ晒しておいて何もせずに消えるか・・・?)

キャスター、クーフリーンは神話時代を生きてきた大英雄だ。かつて様々な幻想種をも屠ってきた彼は当然神に仕える獣を相手にしてきたこともある。

(あの気配は相当古い。それこそ俺自身よりもだ。よつぼどの神秘を重ねてきた証だ。そんなもんが急に消える?いや、姿を消す?)

だからこそわかるのだ。今自分自身がとんでもなく嫌な予感を捉えていることを。

「マシユどうし・・・」

「あの・・・」

そしてその予感は一――

姿を消す・・・透明？いや、透ける・・・見えない・・・

転移?!!)

やば

悪い意味で当たる。

「うおおおおおおおッ!!!」

「きやあああああッ!?!?」

「ウイツカーマン!!!」

キャスターは咄嗟に立華とマシユを腰に抱き抱え階段を飛び

降りた。

いきなり彼らの前方の階段が盛り上がったと思ったら大きく破裂したのだ。何が起こったのかは嫌でも理解できる。ふと見えたあの色合いは

「神獣?!」

「ウィツカーマン！受け止めろ!!」

最下層の墓場から腕だけ現れたウィツカーマンが立華達を優しく受け止める。着地した彼らは咄嗟に走り出し先ほどのことについて把握していく。

「頂上までの進路が……」

(みんな！みんなの前にまた反応が!!!)

「わかつている！それよりもこの地下のナビゲートを!!」

(わ、悪かった。急いで計測する!!!)

「逃げ!!逃げ遅れるぞ!」

階段があつた場所。

そこでは未だに轟音が響いておりだんだんと音は近づいていく。立華達は先程と同じように曲がり角を進み迷宮の様な渡り廊下を進んで行く。

そして三つ目の曲がり角を曲がったと同時に破裂音。おそらく階段の通路を降りきつた音だろう。

「来るぞ!!!」

「ドクター、なんかどこかに出口は?!!」

(すまないもう少し耐えてくれ!)

再び響く牛首のこの世のものとは思えない叫び。

「兄貴、ウィツカーマンで拘束して足止め「ダメだ！さつきからやってんだが手応えがねえ!!」クツ……!」

「先輩！あそここの壁に階段が！」

その声を聞いた瞬間立華は急いで階段に向かう。階段は非常用の様なシンプルな作りで壁に張り付く様に設置されている。どこにつながるかはわからないがこのまま上に行ければいずれ外に出られるかもしれない。

ペースを上げて三人は階段へと向かう。渡り廊下はだんだんと揺れを大きくして人間の立華の足で走りにくくなってくる。再びマシユは立華を抱え階段まで走りキャスターは杖を振り渡り廊下が落ちないようウィツカーマンで固定する。

すると次の瞬間

「ッ!!!」

「来た!!!」

なんと牛首は渡り廊下の壁を突き破り立華達の前に姿を現したのだ。その姿は近くで見ると酷いものだった。

剥がされたからなのか顔の半分は黄金で覆われておらず筋繊維が露出し、おろろ元は寶石の様なもので保護されていたであろう両目は血走り、真っ直ぐに立華達を見ている。顎は砕け半開きでその隙間からは血の混じった液体が垂れ流されあたりに腐臭を撒き散らす。

あんまりな光景にマシユは思わず口元を押さえええずくの耐える。それを見たキャスターは

「足を動かせ！止まると死ぬぞ!!!」

「は、はい！」

喝を入れられたマシユは階段を登らず立華を抱えて一番上までジャンプした。キャスターも続き鍵のしまっていたドアを無理やりこじ開ける。

そして三人がドアに入ろうとすると同時に牛首はその頭を立華達に先ほどまでいたであろう所に向け、凄まじい勢いで突進した。

「????????????????????!!!!!!」
「ガッ……!!」
「うあッ……!!」
「ぐぬッ……!!」
衝撃により三人は吹き飛ばされドアの向こうに吹き飛ばされる。
施設の壁の破片が飛び散り多少なりともかすり傷を負ってしまった。
う。

「ま、まだ走れ!この先続いている!」
（解析結果出たよ!!!この先を走るとマジンガーが格納されていた場所上がる事ができる!）

「了解です。先輩急いでまた……先輩?!」
最悪なことはまだ続く。先ほどの飛び散った破片により立華は気絶してしまっていた。頭から血をうっすら流し真つ青になった顔はとても見えていられない状態だ。

「先輩!先輩!しっかりしてください!」

「坊主?!しっかりしろ!このまま倒れたままだと……」

「……」
そんな事は知らぬとでも言うかのごとく後ろから牛首が口を開けて迫ってくる。そしてその瞬間悟る。

これは逃げられない、と。

二人だけなら逃げることもできるだろう。しかしこの場にはマスターで怪我をした立華が倒れている。置いて逃げることなど出来るはずもない。

目の前におぞましい顎門が広がる。

二人は次訪れるだろう自分達の運命を想像し……

横の壁を突き破り中から黒い何かが飛び出した。

(生体反応を三つ確認・・・一人は負傷している模様)

(機体を戦闘モードに移行。これより神製生命体3号との接触に移る)

(エネルギースタンバイ)

マシユは一瞬何が起こったのかわからなかった。

あの瞬間次に訪れるであろう出来事に瞳を閉じた瞬間、轟音と

キヤスターはルーン文字を描き立華の頭の傷を塞いでおり、黄金の果実が届いたと同時にそれを触媒に完全に回復させた。

「兄貴、ありがとう。助かった」

「おい坊主。あの巨人つてのはひとりで動くもんなのか?」

「それは俺にもわからない。ただあそこに置いてあつた大量のエネルギーはどれも操縦席がなかった。人が乗らなくてもいい代物つて事は確かだと思うけど・・・」

エネルギーはそのまま口の中に腕を指す込みその舌を引つ張り上げる。苦しみに苦悶の声を上げる牛首に対し、エネルギーは体全体を奥に設置してある機体ハンガーに向けて進み始めた。

当然その間も牛首は暴れる。エネルギーの腕に対して牙をつきたてようとするが、硬い装甲の前に牙の方がヒビを作っている。

そしてついにエネルギーは牛首を機体ハンガーのところまでたどり着き牛首をハンガーに叩きつけた。重さを感じたハンガーは牛首を機体と勘違いし固定しようとする。

「」

あたりに牛首の腐りかけの肉が飛び散りひどい匂いが充満する。その様子を確認したエネルギーは瞳を輝かせ熱線を浴びせる。威力は弱いがそれはまさしく光子力ビーム。当たった部分は熱によって蒸発し気体となってあたりに四散して行く。

「先輩、おそろしくこのままいけば我々も巻き込まれる危険があります。早急に離れるべきです。」

「嬢ちゃん言う通りだ。色々腑に落ちない事はあるが今はここを離れた方がいい」

今まで眺めていたマシユとキヤスターが立華に忠告する。

確かにこのままいけば熱によって自分達の身も危ないかもしれない。よく状況を理解できない部分もあるが今は地上に出ることが先決だろう。

「わかった。ドクター、また地上までのナビゲートを頼む。一応

回収すべきものは大体終わったよな？」

（了解だ。先ほどのエネルギーの破壊した通路のおかげで道が出来た。これよりナビゲートを開始する。）

立華達は轟音に背を向けてゆっくりと地上目指して進んで行く。

果たして彼らは、無事に地上に戻ることが出来るのだろうか……。

そんな中立華は己の耳に何か人の声のようなものを聞いた気がした。

君と……一緒に……。

―次回　エピローグ―

エピローグ バトルシーン追加

エピローグ

冬木市

かつて聖杯戦争の開催地だったこの地は、特異点と化したことにより永遠に続く灼熱地獄となっていた。上空は常に深い曇天で覆われており星空が見える事はない。建物は倒壊し、人間の生み出した文明は等しく崩れさっている。

そんな街の上を、二体の巨大な影がぶつかり合っていた。

片方は黄金の殻のようなもので覆われた牛の生首のようなもの。所々赤黒い血肉が露出しており神聖さと醜さを掛け合わせたかのような、まさしく(怪獣)。

もう片方は鉄の鎧に身を包んだ片腕の巨人。しかしその鎧は所々にビビが入り、体を動かすたびに火花を散らし異音を発する(ロボット、エネルギー)。

「私たちよりも先に地上に上がっていたみたいですね・・・」

そんな二体を遠くから眺めるマシユ。

彼らは傷ついた立華を肩で抱えなんとか地上に戻ってきていた。

『さつき機体ハンガーが誤作動を起こして地上に上がっていた。おそらくあの機体はそれを目的として叩きつけたんだと思う』

「じゃあ俺たちに気を使ってわざわざ動いたってか？随分と気の周る鉄人形なんだなあれは」

『その通りだとも！』

ふとキャスターとの会話を遮ってダヴィンチちゃんが割り込んで来た。どうやら先ほどの映像を見て興味を刺激されたらしい。

「なんだかダヴィンチちゃん久しぶりだな・・・」

『おーっと立華くん。しばらく通信に出れなかったのは了承したまえ。科学者ゆえのサガというやつさ。それよりもあの機体について君の送ってくれた資料に面白い情報が載っていた！』

そういうと立体映像が起動してその資料が映される。それは少し前に立華が送った「人工知能による魂の物質化」という資料だった。『どうやらあの機体には擬似的な人格があるらしくてね。君のおじいさんは敵を相手にする為に各機に柔軟な対応を求めたんだそうさ。その回答があれさ』

そう言つてダヴィンチは破壊音のする方を指差す。

『「タイタンシステム」。様々な戦闘パターン、技術、あらゆる人名救助などを搭載し活躍するたびに発展して行く。まさに戦闘専門のプロだね』

「戦闘の・・・プロ・・・」

「今の彼の指令はそうだね・・・。こここの三人を守る、てどこかな？」
立華は二つの影に目を向ける。

現在 鉄のロボット・・・エネルギーは牛首の上にまたがり残った拳を叩きつけ続けており、辺りには凄まじい衝撃音が鳴り響いていた。牛首は叩き込まれる拳に悲鳴を上げ続けるだけで抵抗することもできない。それでもエネルギーは叩く。

叩く。

叩く叩く叩く。

叩く叩く叩く叩く叩く叩く叩く叩く叩く。

しばらくするとエネルギーは叩くのをやめて牛首の額についている紅い結晶のようなものを掴み、その額の肉ごと引きちぎろうと引つ

張り出した。

先ほどとは打って変わって牛首は断末魔のような悲鳴をあげその体を左右に揺らす。おそらくその結晶が牛首にとっての魂のようなものなのだろう。肉が元の位置から離れて行くたびに活発な動きが段々弱くなつて行く。

そしてついにその結晶が、本体の牛首から離れようとする瞬間……

ゴウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ……

突如異音と共にエネルギーが首を落とす。

当然といえば当然である。エネルギーはもともと地下倉庫に長年メンテナンスもされずに放置されていた兵器である。それが他の機体！を無理やり押しつけ戦いだした。そんなことをすればホコリなどを被った回路は焼き切れてしまう。

光を失った片目は自身の足元を見つめている。

そんな状況でも動くようとしているのだろう。エネルギーは小刻みに振動を繰り返す再び核を引きちぎろうとする。しかしそれを見逃す牛首ではない。

『』
牛首の瞳が輝き魔力の光が溢れ出す。その光は装甲に覆われてい

ないエネルギーの腹に直撃して機体そのものを天高く舞い上げた。

空中でしばし浮遊したエネルギーはやがて背中からビルに突っ込んでしまう。

それがトドメとなったのだろう。

エネルギーの両眼の光は消え失せその体を瓦礫に横たわらせてしまった。

牛首が勝利の雄叫びをあげて力の抜けたエネルギーに迫る。

口元をニヤケさせるかのごとく歪ませて牙に魔力を通す。とどめをさす気なのだろう。ボロボロの身体を引きずり少しずつ近づいていく。やがて目の前まで近づいた牛首は先ほどの攻撃で脆くなったエンジンを見据え振り下ろした。
するとそこに

「させるかってんだ!!!」

牛首の後ろ……首の骨にあたる位置から第三の巨大な影が現れた。牛首はその声に振り向こうとするが、突如として襲って来た浮遊感に邪魔される。

「俺らの恩人を！それ以上やらせねえ!!!」

声を聞けばもうわかるだろう。我らのスーパーロボット、マジンガ1Zのパイロット藤丸立華とである。

Zは牛首の背骨を力の限り握りしめ横薙ぎに振る。するとそれに合わせて円を描くようにして牛首は遠くに投げ飛ばされた。

牛首は何が起こったのかわからない。

再びエネルギーのいる方へ目を向けるとそこには同じ見た目をした巨人が腕を構えて此方を睨みつけている。

そして立華はエネルギーを背中に隠して牛首を睨みつける。

「坊主、こっちは大丈夫だ。今までの分しっかりやんな」

「先輩！こちらオオケーです！」

「おう！おじいちゃん形の屋敷をんなことにしやがって……！
ここで片付けてやる！」

エネルギーを守るように立ったマシユ達とマジンガーは敵を威圧するように雄叫びをあげた。

マジーン！ゴオオオオオオオオオオツ！！！！

牛首もその叫びに答えるがごとく雄叫びをあげマジンガーに襲いかかってくる。ついにこの特異点最後の戦いが始まるうとしていた。

立華は気づかなかった。それは彼に背を向けていたから。

そして牛首も気づかなかった。

二つの巨体がぶつかり合う様子を、光のともってない瞳で見つめる
エネルギーに。

……マジン……ガー……

牛首へと突進したマジンガーはそのまま拳を握りしめ振り下ろすように叩きつけた。その攻撃に咄嗟に反応することのできなかつた牛首は地面をバウンドしながら苦しみの声を上げる。

先ほどとは比較にならない力だ。何が起こったのかわからないまま混乱したかのように魔力を辺りに撒き散らす。

「どうしたおい！歯ごたえがないぞ！」

立華はマジンガーのコックピットの中で再び牛首を攻撃しようとしてレバーを引いた。

牛首も体制を立て直すと高く空中に飛び上がりその大きな顎を広げマジンガーを飲み込もうとする。しかしマジンガーは牛首の下に自分から入って腕を構えた。

「そのまま飲み込もうってか！だが残念！」

マジンガーは落ちてきた牛首の上顎と下顎を両手でキャッチする。

「Hちとらパワーだけなら！」

そしてそのまま閉じよあとする口を強引に開け広げた。

「神様にだって負けないぜ!!」

無理やり広げられた顎の激痛に牛首は声を上げる。

これが全快の状態だったのなら牛首も瞬時に回復できたのかも知れない。しかし長い時間の中で腐り果てた肉はマジンガーの怪力の前にたやすく引き裂かれた。

「やっぱり大したことねえな！さっきまでおいまわしてた時の元気はどうしたよ!!!」

手元から離れのたうちまわる牛首が再びマジンガーを睨みつける。不自然な方向に捻じ曲がった顎を牛首は引きずりながらまた突進して行った。

マジンガーはそれを受け止めようと構える。だが・・・

「！まずい?!！」

直前で牛首は方向を変えてマシユ達の方向に向かって行ったのだ。

「?!? 宝具、展かッ?!！」

マシユ達がそれに対して宝具を発動しようとするがそれは無駄なことと瞬時に悟る。なぜなら

「電撃だと?!！」

牛首が発動したのは可視化できるほどの威力を誇った雷撃だったからだ。

マシユは宝具を突進のタイミングで発動しようとした。しかし雷の速度でいきなり飛んできた攻撃に対処できずに受けてしまったのだ。

宝具の発動していない盾はただの金属の塊だ。その雷撃はマシユの手元に容赦ない攻撃を加える。

「アアアアアアアアアアアアアア!!！」

「マシユ?!?!この野郎!!！」

牛首を咄嗟に投げ飛ばしたおかげで長い間浴びることはなかった。しかしそのダメージは大きくマシユは体を小刻みに震えさせながら膝をつく。

「マシユー・マシユー！兄貴、マシユは?!！」

「悪いー！こつちも咄嗟に反応できなかった。命に別状はないがサポートは難しそうだ!!！」

キヤスターは杖を振るい生えてきた木の葉をマシユに無理やり噛ませる。鎮痛作用のあるルーンの若葉はマシユの体をすこしだけ癒す。

その間牛首が再びツノに電圧を貯め始めた。

「この！何度もさせるか!!！」

マジンガーはそのツノを掴んだかと思うと思い切り力を入れて遠

くに投げようとした。しかしエネルギーの攻撃もあったのだろう。帯電していたツノを根元から抜いてしまったのだ。

制御を離れた電撃はあたりに四散して再び立華達にきばをむこうとする。

「しまっ……!!!」

最悪の結果に立華は顔を青くして次に来る光景を予想する。

地上のキャスターも額に汗を流しその雷を見つめた。

このまま行けば彼らに最悪な未来が待ち受ける。しかしそれを咄嗟になんとかすることは出来ない。破裂した電圧は次第に範囲を広げようとして—————

キ—————ン

牛首の瞳を擦りながら飛んできた何かに吸い寄せられて行った。

「な、なんだ?!?!」

立華は雷を集めて飛んで行ったものに目を向ける。

それはとても見覚えのありマシンガーにも付いているものだった。

「放熱板……エネルギー!!!」

ブーメランの飛んできた方向には何かを投げたかのように佇むエネルギーガー。

そう、エネルギーガーが咄嗟に自分の放熱板をちぎりブーメランのように投げたのだ。

電動率でも世界一のジャパニウム。それを製錬した合金Zだ。マシユ達に飛んで行こうとした雷は、その前を通り過ぎた放熱板のブーメランによって全て吸い寄せられてしまったのだ。

「お前……」

キャスターとマシユが立ち上がったエネルギーガーに目を向ける。先ほどまで動けなかったはずの身体を動かしてマシユ達を守るために立ち上がったのだ。

エネルギーガーは今度こそ力を使い果たしたのかゆっくりと煙を上げ倒れふせた。

「……！よくやった!!」

マジンガーから立華は声を上げると今度こそ牛首を遠くに投げ飛ばした。牛首はそのまま近くの海まで飛んで行く。そこならもう被害は広がらない。

「ルスト！ハリケエエエエエエエエエエエ!!!」

破壊の嵐は海を裂きながら牛首に直撃する。しばらく悶えた様子だったが数秒後にはもう動かなくなった。

そして牛首は段々とその体を散りへと変えて行き、この世から消えて行った。

砂嵐のかかる視界の中目の前の鉄の巨人を見つめる。

自身と似たその姿に何かを感じながら彼は昔のことを思い出していた。

(お前たちは人間ではない。戦う為に作られた兵器でしかない。)

(だが心はある。鉛の体であろうとタンパク質で構成されていようと心があればそれは人になれる)

(いつの日か、ここにわしの孫が来る。その子は世界を救う為にお前たちを時の旅に連れて行くだろう。)

(だから……心ある人としてその孫を守って欲しい……)

そう言つてある程度の修理を終えた彼は、我々を地下の倉庫に封印した。

我々は待った。一人一人の意識が眠つて行く中で、自身の体が軋んで行く中で、ついには自分一人になった中で。

最初はただ入力された命令に従つて守っただけだった。

だが目の前に、自分を護ろうと敵に立ち向かったその背中を見て私はついに自覚した。

自らの感情を。

自らの魂を。

自らの心を。

彼とともに立ちたい。あの背中に自身の背中を預けたい。彼とともに戦いたい。

そしてボロボロの魔人は体に鞭を打って手を伸ばす。

神獣を倒した立華はボロボロのエネルギーをマジンガーで抱える。
すると残ったボロボロの腕を伸ばして来た。

「なんだ・・・？」

同時にマジンガーの通信に合成音声のようなものが流れて来た。
それは途絶え途絶えで、聴く人によつてはよくわからなかつたかも知れない。しかし立華にはその声がなぜかはつきりと理解できた気がした。

「……………ボ……………クラ……………タタカ……………キミ

ト……………イツシヨニ……………

「……………ああ、任せろ」

マジンガーがボロボロのエネルギーの腕を掴む。

まるで長年の友人を見つけたかのように。

自分たちを守ってくれた勇者をいたわるように……………

l e n d i

セプテム編 魔神柱 前編

「……いや、いや。ロムルスを倒しきるとは」

俺達は今、新たな特異点であるローマ帝国にて裏切り者……レフ・ライノールと再会した。

特異点に到着した自分たちはそこで戦っていたローマ帝国第五皇帝……ネロ・クラウディウスと共に、特異点の原因であるローマ連合帝国と衝突した。

連合帝国ではネロ以前の歴代ローマ皇帝が聖杯の力によつて操られ、ネロのローマ帝国を飲み込もうとしていたのだ。途中ネロ自身も、自分が間違っていたのか？自身も神祖に下ったほうが良いのではないか？と思ひ悩むが連合帝国の下の兵士達の顔を見て誰一人笑っていないと、笑顔のない国があつてたまるものかと宣言し神祖ロムルスと戦う覚悟を決める。

そしてロムルスをカルデアのマスターと共に打ち倒し一息ついたところに……カルデアを爆破し人類を裏切った張本人、レフ・ライノールが姿を現したのだ。

「デミサーヴァント風情がよくやるものだ。冬木で目にしたときよりも、多少は力をつけたのか？」

そして自分たちをどうでもいいものだとも言うように見

渡すと

「だが所詮はサーヴァント。悲しいかな、聖杯の力に勝るとなどあり得ない」

「……！」

その視線に反発するように自分たちは戦闘態勢を整える。

『すっかり裏切りが板についたんじやないか、レフ教授』

『と言うより、そっちが素なのかな。カルデアにいた頃より活き活きとしているよ、君。』

「ドクター！無駄口は後だ！それよりも準備を！」

俺の言葉にドクターは大丈夫、いつでも行ける！と答える。

「？……ほう、いっばしの口を聞くようになったね、少年。聞けばフランスでは大活躍だったとか。まったく……おかげで私は大目玉さ！」

「本来ならばとくに神殿に帰っていると言うのに、子供の使いさえ出来ないのかと追い返された！おかげでこんな時代で後始末だ。聖杯をふさわしい愚者に与え、その顛末を見物する愉しみも台無しだよ」

その言葉を聞き自分たちは理解した。

その時代をを狂わせる人間、あるいは英霊に聖杯を授けてしまえば自体は勝手に狂っていく。事実フランスではそうだった。

だが今回は……

「神祖は人類の滅びを望んでいなかった。だから……」

『君が自らの手で干渉するしかなかったと言うコトか』

「ほざけカス共。人間になんか始めから期待していない」

そう言うレフはこちらの方を睨み

「君もだよ、藤丸立華」

「凡百のサーヴァントをかき集めた程度でこのレフ・ライノールを阻めるとも？」

その言葉に自分は口元に少し笑みを浮かべて言う。

「どうかな？この藤丸立華。あの時の何も出来なかった

時とは違うぜ！」

「ああ、君は確かに成長した。無駄にあがけば無駄に苦しむとも分からない、その愚かさが実に成長したとも！人理を守るう？——馬鹿め。貴様達では既にどうにもならない！」

「抵抗してもなんの意味もない。結末は既に確定している。貴様達は無意味！無能！哀れにも消えゆくお前達に！今！私！が！王の吸愛を見せてやろう！」

次の瞬間……レフはその体をかがめると噴き出すかのようにならぬ存在へと変化させていった。

体は醜く膨れ上がり中から黒い触手がその体を包んでいく。そしてそれは柱の形となると——

いくつもある大きな眼球を開いた。

「……………」

「なんだあの怪物は……………！醜い！この世のどんな怪物よりも醜いぞ、貴様！」

『サーヴァントでもない、幻想種でもない！これは——伝説上の、本物の悪魔の反応か……………』

「改めて紹介しよう。私は、レフ・ライノール・フラウロス！」

「七十二柱の魔神が！一柱！魔神フラウロス——これが王の窮愛そのもの！」

「おぞましい……悪逆そのものではないか、これでは！」

その言葉を皮切りに魔神柱――フラウロスはその目を輝かせ

辺りを業火で包み込んだ。

「ほざけカス共が、さあ！どうする藤丸立華！」

「たったそれだけのもの達でこの私にどう立ち向かう！」

ネロその言葉を聞き藤丸を見やる。

しかし藤丸の目はあんな化け物を見ても一切動揺していない。むしろ待ってましたとも言わんばかりに勇敢に睨みつけていた。

「笑わせんな！お前が何者であろうと関係ない！」

「俺だって、真の魔神の力を見せてやる！マシユ！」

「了解です！転送ゲート、展開！」

「ドクター！」

『わかった！転送開始！』

その言葉を始めとし、カルデアのチームは何かを準備し始めた。

それを魔神柱フラウロスは何かをされる前にと瞳を輝かせ、再び藤丸達を燃やし尽くそうとした瞬間――

巨大な陰がその前に立ちふさがった。

「な?！」

「なんだと☒」

その姿を見てフラウロスは困惑する。

ネロは最初その大きさに全貌を眺める事が出来なかつ

だが、それは巨大な人型だった。

自身の十倍はあろうかと言うほどの巨体。

全身は黒鉄色で辺りの炎の光を反射して輝いている。

そしてその巨体はフラウロスの業火をくらい続けてもびくともしていない。

まさしくそれは黒鉄の城

「パイルダー準備整いました、先輩！」

「了解！行くぞ！」

巨人の後ろで藤丸は赤い乗り物に乗り込む。

その瞬間乗り物・・・ホバーパイルダーは空へと飛び上がった。

そして巨人の頭に当たる部分に向かっていく。

「パイルダーアアア！」

パイルダーはそのまま巨人の頭急降下し、巨人と一つになった瞬間――

「オオオオオオオオン!!!」

巨人の瞳に光が灯った。

ネロはその感情が分からなかった。

今まで美しい、と感じるものは多く見てきた。

しかし今日の前にいる巨人に感じているこの気持ちはなんだ？

美しいではない、しかし心の奥から湧き上がってくる熱い気持ち。決して嫌なわけではないこの気持ちは。

それは現代の誰もが一度は感じる感情。

誰かの為にその身を盾として、平和を求めて悪を討つ背中。その感情はまさしく――

「かつこいいい・・・！」

一方フラウロスが感じているのは別の感情だった。
なんだあれは。

ロボット？いや、違う。たかが機械仕掛けのおもちゃにこんな感情は芽生えない。

フラウロスは目の前の巨人から感じるオーラを何処かで見た事があつた。

それはいつだったか、この時代に来る前にのぞいた歴史・・・
ローマが生まれるよりも昔・・・神代の時代にて。

迫り来る神々を相手にその身を盾にして人間共を守っていた者。
雷と光を操りこの星をかの白い巨人から守った全知全能の黄金の神。

あの黄金の神に似ている。

「き・・・！貴様は一体、なんだ！」

声が震えている。

フラウロスが感じている感情、それは魔神が感じるはずのない感情。
情。

その名は――

恐怖。

「聞いて驚け！」

藤丸が叫ぶ。

この場に漂う絶望を吹き飛ばすかのように

「これこそ、おじいちゃんの作ったスーパーロボット！」

「マジンガーZだ!」

そしてローマの地に、二つの魔神の名を冠する者達が君臨した。

「行くぞレフ・ライノール!マジーン・ゴオオオオオオオオオ!!!」

とある島で1柱の女神と2人のサーヴァントが、マジンガーZの出現した方向を眺めていた。

「ちよつと、何も無い方向見てどうしたのよ?」

「フム、以外にも心配で眺めているのでわないカ?」

「こいつが☒ない!」

バーサーカー(タマモキヤット)の意見を真っ向から否定する
エリザベート・バートリー

そして女神はマジンガーのいる方向を眺めながら、それを懐かしむように静かに呟いた。

「ゼウス．．．．．」

その瞳に一筋の涙を浮かべながら
―続く―

番外編 とある神様の記録

Ⅰ 神話の時代Ⅰ

「おのれ、外の世界の神風情が我々の邪魔をするか!!!」

まだこの世界に物理法則が存在しなかった時代、世界は神秘で包まれていた。

地の底には冥界があり、天空には神と天使が暮らしている。

そして神々は人間に試練と称し、様々な苦難を与えていた。

英雄や益荒男の最も多く生まれた時代である。

そんな時代の海の上。

そこでは、無数の神々がある一柱の神を取り囲んでいた。

「貴方には関係のない話でしょう。なぜその蛇共を庇うのです」

そう問いかけるのは古代ギリシアにて守護の女神とされた「アテナ」。

彼女はとある女神の美貌に嫉妬の感情を抱き、その女神とその姉妹をとある島にて怪物となるよう人間達をけしかけていた。

「その怪物共はいずれ人間を殺し続ける。そうなることは貴様も望んだことではないだろう」

そう唱えるのは雷を身にまとった古代ギリシアにて天空神として讃えられた全知全能の神「ゼウス」。

彼もその女神達が人々に殺し、犯される様を見ようと考える彼女達の苦しむ様を眺めていた一柱である。

ゼウスの言葉により周りの神々が黄金の神を責め立て始める。

他の神々はアテナが人間をけしかけていたことなど知らずに二神と共に批難を浴びせる。

その怪物共をよこせと・・・

我々の邪魔をするなと・・・

周辺の島々は、神々の怒りにより震え海は大きく波を立てた。

そんな中黄金の神はふと、自身の足元の島で震えている三姉妹を眺めた。

とても力のあるとは思えない者達だ。

二柱の女神達は一番下の女神をそつと抱きしめている。

彼女に周りの神々の罵倒が聞こえないように。

自身が風で飛んだ小石に当たることも構わずに。

自身も震えていることを隠すように。

黄金の神はその姿を目に収めた後再び神々に向き直る。

そして痺れを切らして直接手を下そうと神々が思い始めたその時――

愚か

者
!!!!!!

黄金の神の放った一言でオリュンポスの神々は皆一様に動きを止めた。

渦巻いていた荒波は収まり曇天に濁っていた空は何処までも続く青空へと変わっていた。

「.....☒」

そして静まり帰った海に再び黄金の神の声が響く。

「確かに私自身は、とある因果によりこの世界に來ただけのよそ者に過ぎぬ！」

「この世界の者達の行いに手を出すのは間違いだらう！しかし

！私は貴様達神の在り方が気に食わない!!!」

「弱い者達を踏みつけ！無垢な者達を食い物にし！人間達を自らの遊具とする!!!」

「神とは本来見守る者だ！人間達の積み上げたものを見守り！それを無慈悲に奪おうとする者達から守る事!!!」

「それこそが本当の神の在り方なのだ！」

太陽の光でその身を輝かせ黄金の神は言い放つ。

そして黄金の神は自らのローブで三姉妹を神々に晒されないように庇った。

「だからこそ！私は無慈悲な貴様達と戦う！この世界の人間達を！この無垢な花達を守るために私はッ!!!」

命を賭けよう!!!

「……戦っている。異界の神が、我々の為に……」

その声は人間達の元にも届いていた。

異界の神は迫り来る神々から一步も引く事なく自分たちに背を向けていた。

なんの関係もないはずの我々を、本当の意味で守る為に戦ってくれている。

人々は涙を流しその黄金の神を讃えた。

そして足元の女神達もその顔を驚愕に染めていた。

彼女達は神として様々な神達を見て来た。

その在り方は様々だったが、たかだか人間や自分達の様な弱い者に手を差し伸べる様な者達は一柱もいなかった。

神としてはあり得ない。

だからこそ、その黄金の神の在り方はこの世界ではあり得なく――

同時にとても美しいものを感じた。

「上姉様……?」

女神の姉は妹に呼びかけられるまで気づかなかった。

神である自分が、その瞳から涙を流していることを……
本当の感情を表に出していたことを……。

黄金の神の放った言葉を皮切りに、再び神々が襲いかか

る。

そんな中黄金の神は腰の剣を掲げて叫んだ。

「来るなら来い！そして聞け！我は異なる世界の者にして、全知全能の神！」

ゼウス!!!又の名をZマジンガーである!!!!!!
「

これは過ぎてしまったお話。
はるか昔の神話である。

l e n d i

魔神柱後編

ガアアアアアアアアアアアアアアアアア!!

魔神柱フラウロスは自分の身に起こっていることがわからなかった。

その身を悶えさせながら赤く大きな目玉から魔神に向かって地獄の業火を放つ。

しかし

なぜだ?!なぜ効かない?!!

黒鉄の体にはかすり傷一つつけることが出来ない。本来ならばその業火は対城宝具並みの一撃である。たかだか鉄の塊程度なら一瞬で蒸発できるほどの温度だ。

しかし、何度攻撃を行なっているにも関わらず応えた様子がないのだ。

なぜだ?!ワカラナイワカラナエワカラナイ!!!!?

魔神柱は己の中で自問自答する。

確かに、この身が長い年月の計画によって弱っていたことは認めよう。

末端の辺りなどが少し腐敗していたのかもしれない。だがこれはそんな問題ではない。

「飛ばせ鉄拳！」

「ロケット！パアアアンチ！」

魔神の放った鉄拳が容赦無くその身を貫いて行く。

そしてその拳を元の位置に戻すと、拳を振り上げて魔神柱の目玉に叩き込んだ。

辺りにフラウロスの肉片が飛び散り王の間を汚していく。

「……………?!」

声にならない叫びを上げてフラウロスは苦しむ。

なんの神秘も通っていないはずの攻撃がその身を削り傷つける。

何とか抵抗しようと触手を伸ばすが、魔神の力の前にはあまり意味をなしていない。

そして魔神はフラウロスを持ち上げ

き、貴様いつたいなにを

その巨体を城の外に放り投げた。

「みなさん早く！早く避難してください！」

その頃マシユとネロ達は、兵士達に被害が及ばぬように避難を呼びかけていた。

「ええい！お前達あんなものを隠しておるなんて水臭いにもほどがあるう!?余もあれに乗りたい！」

「申し訳ありませんネロ皇帝！今は避難の最優先を！」

マジンガーZを見て子供の様なキラキラした目で戦う様子を見るネロにマシユが呼びかける。

いくら離れているとはいえ飛んでくる瓦礫もあるのだ。

逃げ遅れない様にしなければならぬ。

しかしそんな時、城の外から勢いよく魔神柱が吹き飛んで来た。

その際飛び散った破片が、無防備な兵士達に降り注ぐ。

「ああ！ダメ！間に合わない！」

それを盾で防ごうとするも今マシユの位置からでは間に合わない。

だが心配要らない。

今この場にいるのはマシユだけではない。

「アンサズ！」

「転身火昇三昧！」

竜とルーン文字の形をした炎が、兵士達に降り注ぐはずの瓦礫を吹き飛ばした。

「清姫さん！クー・フリーンさん！」

「詰めがめえぞ嬢ちゃん！」

「旦那様を影で支えるのも妻の仕事です……」

そう答えるのは最初の特異点で仲間になったケルト神話の騎士クー・フリーンと清姫。

彼らも兵士達を逃す為にマシユ達のサポートを行っていた。

「しっかしあの小僧派手にやってやがんな」

城の方では今も凄まじい轟音が鳴り響いている。

そして兵士達が全員揃ったことを確認すると、マシユはそっと息を吐いた。

「兵士さん達の避難もこれで完了しました。あとは我々も先輩もサポートに専念出来ます」

「一刻も早く旦那様のお側に向かわなければいけませんね」

「いや、その必要はもうねえだろう」

そう言うところクー・フリーンは魔神達の方角をあとで刺す。

その方向を見てみるとそこには完膚なきまで魔神柱を叩き潰しているマジンガーZの姿があった。

「そろそろ決着だ。ゆっくり向かってもかまわねえだろ」

「いいえ、私は一刻も早く旦那様のお側に居りたいので」
そう言うが早いか清姫は物凄い速さでマジンガーの元に向かって行った。

それを見てマシユやネロも急いで向かって行く。

「全く落ち着きのねえ奴らだな・・・」

そしてクー・フリーンも呆れる様子でマジンガーの元に向かうのだった。

貴様ああああ！人間風情がこの私にいいい！

そう叫ぶや否やマジンガーに向かって触手を伸ばすフラウロス。

あれに攻撃が通じないのは理解した。

ならば頭の間人間のものにダメージを与えてやれば良いだけのこと。

そう考え様々な方向から触手を伸ばす。

これならあの拳も使えまい。

四方から迫り来る触手にマジンガーは一度距離を取り、触手を迎え撃つ様に身構える。

そして

「ルスト！ハリケエエエエン!!!」

マジンガーの口のスリットの部分から嵐が噴き出した。

ルストハリケーン

ルストと名のつくが酸などという代物ではない。

それは光子を加速させ対象の構成している物質の原子を崩壊させ塵へと返す破壊の嵐。

その嵐を身に受けた触手は次々と動きを止め塵と化して行っ
た。

な?!

そして撃ち終わるが早いか、マジンガーZはフラウロスの元に物
凄い速さで突っ込んで行く。

フラウロスの元に着くとその腕で動くことが出来ぬよう拘束し
た。

は！離せ?!!

「これでもう逃げられねえぞ！」

フラウロスは振りほどこうともがくがそのパワーの前にはビ
クともしない。

しかしこれはチャンスだ。

残りの触手によって人間そのものを攻撃すれば

ドルルルルルルルルルルル・・・

するとフラウロスの耳にマジンガーZのエンジン音が聞こえた。
先ほどまでこんな独特な音は出ていなかった。

その瞬間フラウロスは嫌な予感がした。

あの日あの場所で助けることが出来たかもしれない人への無念。
手を伸ばしても届かなかった時の悔しさ。

「所長やカルデアのみんな、そしてマシユの仇だ……。観念して」
そしてそれは咆哮となってフラウロスへと叩き込まれた。

地獄に落ちやがれエエエエエエエエエエエエエエエエエエ
!!!!!!

そしてフラウロスは藤丸の言葉を耳に残し……

その身体を完全にこの世から消滅させた。

ー続くー

神の鞭

結論から言おう。

フラウロスは生きていた。

しかしその身体は魔神柱としての形ではなく本体であるレフ・ライノールとしてだが。

もちろんその状態でもほぼ虫の息。胸から下はなく、左腕も肩ごと残っていない。全身が炭と化しており近くに寄らなければ人はそれが元生き物であったなどわからないだろう。

事実藤丸が勝ったのを見届けてこちらに寄ってきたサーヴァント達も1人も気づいていない。

チャンス……これは……チャンスだ……

レフは藤丸達が気づいてないことをいい事に指のない焦げた右腕でそつと聖杯に触れた。せめて実は取らねばならない。この事を我らが王に知らせなければ我々の計画が崩されてしまう。

レフはサーヴァントに気づかれない様に注意しながら聖杯の力で神殿に連絡しようとしていた。

「あん？」

その違和感に気付いたのはクー・フリーンだった。

「どうしました？クー・フリーンさん」

「兄貴なんかあった？」

そう藤丸達が聞くとクー・フリーンはレフの死体を指差した。

死体は完全に炭と化しておりとても何かあるとは思えない。

「いやな、ちよつと気になってな……マスター、奴の持っていた聖杯はどこだ？」

「聖杯？」

そう、聖杯だ。

これまで聖杯は主謀者を倒せばその場所に落ちていることが当たり前だった。しかしレフは死んだはずにも関わらず聖杯はどこにも無い。

確かに何かおかしい……。

そう感じて藤丸はそつとレフの死体に近づく。

「……………」

死体だ。

完全に死体。

どうみても何もおかしい所もない。

一般人の藤丸はあまり見たくないと言をそらして

次の瞬間レフの死体は眼を開き、藤丸に襲いかかった。

ガキツ!!!

辺りにい金属同士がぶつかるかの様な音が響く。

そのレフの一撃を間一髪防いだのはマシユだった。

「先輩！下がって！」

盾を構えて藤丸の前に立つ。

他のサーヴァントやネロも動き出したレフにとどめを刺そうと動き――

次の瞬間レフの右腕が輝き出した。

失敗だ！

レフは薄れゆく意識の中でそう呟いた。

もう自身には報告を行えるほどの力もない。そう考えたレフは藤丸が生身で近づいてきたところを打とうと力を溜めていた。しかし近づいた藤丸に攻撃しようとしてサーヴァントシールドに防がれた。

ならばとレフは自らの身体の中に隠していた聖杯に魔力を起動させ、サーヴァントを召喚しようと考えた。

（並みの英霊ではダメだ。あの化け物、マジンガーZを倒せるほどの化け物と呼ばなくては！）

聖杯の魔力を全て使い、私の命令を記す……！

そしてレフはついに身体を維持することができずに崩れさった。

聖杯は召喚の魔力を辺りに撒き散らしながら――

「やりやがったあの野郎!!!」

クー・フリーンは召喚の様子を見てそう叫んだ。

レフライノールは生きており、最後の力を使ってサーヴァントを召喚した。何が召喚されるのかは分からない。しかし魔力の量からして並みの英霊ではないことだけは確かだ。

「まさかあんな状態でも生きてるなんて……!」

「しかしこのままではマズイぞ!?!」

そうして召喚の光は少しずつ治っていき

其処には、純白の服を着た褐色の女性が立っていた。

誰も動けない。

マジンガー再び乗った藤丸も。

マシユも、クー・フリーンも、清姫も、ネロも。

全員がその存在に警戒していた。

辺りに静寂が漂う。

その静寂を最初に破ったのは、褐色の女性の方であった。

「私は――」

「私は、フンヌの戦士である。」

「そして大王である」

「この西方世界を滅ぼす、破壊の大王」

「破壊のー」

次の瞬間褐色の女性ーアーアルテラに物凄い魔力の本流が駆け巡り始めた。

「何か、何かいやな感じがするぞ?!マシユ!何かがある、余にも解る!」

『魔力反応、増大!これは宝具のーーそれもレフライノール以上の大解放だ!』

藤丸はマジンガーで仲間達の前に立ち、みんなの身を守る。

「マシユ!令呪を持って命ずる!その魔力を使い宝具を展開せよ!」

「はい!」

魔力を受け取りマシユが宝具をマジンガーに向けて放ち全ての衝撃が来ないよう力を入れる。

そしてアルテラはまた言葉を紡ぐ。

お前達は言うー

私は、神の懲罰なのだー

神の鞭、なのだとー

そしてアルテラが言葉を紡ぎ終えたと同時に

ローマに七色の光が輝いた。

ー続くー

光子力の力

衝撃は凄まじいものだった。

七色の光は周りの岩を溶かし草木を蒸発させた。

マジンガーZとマシユの防御だけでは、生きている人間であるネロは耐えられなかっただろう。

その危機を救ったのはブリテンの勝利の女王、ライダーのサーヴァント【ブーディカ】だった。

「……………死ぬかと思ったぞ。」

『ああ。あれを受けてもビクともしないとは本当に君のおじいさんが作ったマジンガーは何なんだい……………?』

「俺にそんなこと言われても……………」

ロマンの問いに立華は呆然と話す。

『だけどナイスタイミングだったよ立華くん。それにブーディカも。マジンガーでは衝撃は殺せても熱までは防げなかった』

「いや、マシユが踏ん張ってくれたからだよ」

「……………正直ギリギリだった」

「王宮入り口から攻略して、駆けつけたと思ったらすごい魔力でさ。慌ててこっちも真名解放してさ」

「いえ、私の宝具だけでは防ぎ切れませんでした。ありがとうございます。ブーディカさん」

そう言ってマシユは頭を下げる。

それにブーディカはこっちこそ、と答えると。

「しっかしどうしたもんかね。」

「ああ、あのどきくきに紛れちゃったせいで奴さんを見失っちゃまった」

七色の光は目くらましとなって謎のサーヴァントの行方を

くらませてしまった。

クー・フリーンもその行方をとっさに測ることが出来ずに辺りを見回している。

「ドクター、あのサーヴァントがどの方向に行ったか解る？」

『今調べてる……これは……！おそらくサーヴァントは首都ローマに向かっている！』

謎のサーヴァントは動く。

自らの宣言通り、世界を破壊するために。

「なんだと！ではあれは余の都を灰燼と化すつもりか?!」

『そうだろう、その力が彼女にはある！』

それを聞いてネロが焦る。

あの褐色の女は自分の国をこの荒野と同じ有様にするつもりらしい。

このままではせつかく連合帝国 から守り通した国が……

「一刻も早く奴を追わないと！」

「ドクター、奴の現在位置を送ってくれ！」

『わかった！今送る！』

そしてマジンガーのコックピットにサーヴァントの現在位置が送られる。

此処からそう遠くない。

今なら充分間に合う！

「みんな！急いでマジンガーの手に乗ってくれ！」

「はい！先輩、あれですネ！」

サーヴァントはそれを聞くとマジンガーの手の上に乗って行く。

全員が乗ったのを確認すると藤丸はクー・フリーンに耐衝撃のルーンを掛けさせる。

そしてマジンガーは悠然と立ち上がると

「なんだ？何が始まるのだマッシュよ？」

「ネロさん、しっかりつかまってくださいー」

走ります
!!!!!!

ネロ達を乗せて全力で走り出した。

そして明かりが見え始める。

国の、文明の光だ。

彼女アーアルテラは右手に持った剣、軍神マルスの剣を天へと振りかざす。

「私は……………」

そして周囲にアルテラの魔力が漂い始める。

それにつられてワイバーンなどの獣も寄ってくる。

軍神の剣は輝きを大きなものへと変え始め――

「私は……………命を壊したくない……………」

凄まじい轟音と共にその輝きを納めた。

「間に合った!」

その轟音の正体はサーヴァントをその手に乗せたまま全力疾走してきたマジンガーZ、延いては藤丸立華率いるカルデアの者達だった。

「確かに乗ってみたいとは言った!そして乗せてもらったのも事実だ。だがこんな全力疾走で手のひらに乗るなど余は望んでおらんぞ?!」

「旦那様に無茶苦茶にされる……………いい♡」

「嬢ちゃんどうしていつもこんな耐えられんだよ……………」

「え、それはこの上に立つのはコツがあつてです

ね……」

「いや……みんな敵の前なんだから真剣にしよう

よ……」

サーヴァントは全員マジンガーの全力疾走で若干グロツキーになっていた。

いや、若干平気そうな人が一名いるが……

「……………」

そんな彼らを見てアルテラは剣を構える。

そしてその様子を見てサーヴァント達も戦闘態勢に入る。

（今のところどんな攻撃手段なのかは分からない。だが俺にはこいつを相手にするのは難しいな……）

相手を冷静に分析する立華。

いかにマジンガーZが強くても相手は人型。

体格差に大きく差のあるサーヴァント相手だと、ルストハリケーンやブレストファイヤーなどのマップ兵器出なければ捉えるのは難しい。

（だがそんなものを使えば近くの町にも被害が出てしまう。此処はサポートに回った方が良さそうだな……）

最初に口を開いたのは、やはりアルテラだった。

「……………いく手を阻むのか、私の」

「ああ。この国の人たちが殺されるのを黙って見ているわけにはいかない……………」

「……………」

その言葉にアルテラは口を閉ざす。

次に口を開いたのはネロだ。

「うむ、立華の言う通りだ。貴様は言った。世界を滅ぼす、とな」

ネロは全く理解できないと言うように続ける。

「余には分からん。なぜ世界を滅ぼすなどと口にするのだ？ この世界は美しいもので溢れている。花も良い。歌も良い。黄金も

良い。愛も良い。」

「そうとも、何よりも、この世界は余の愛で満ちている！」

「それなのに貴様は滅ぼすのか？ 勿体無いと思わぬのか？」

アルテラはネロの言葉に答えられない。

美しいもの。

その心をどこかで感じた事がある。

それはいつだったか、まだ自分が白いー

次の瞬間アルテラの頭に激痛が走る。

召喚者の怨念がアルテラの心を蝕んでいく。

そのことにアルテラは気づけない。

いや、そんな疑問さえももう消え去っていた。

「美しさなど、愛など。私は知らない。」

そう言っつてネロ達を強く睨みつけた。

そんな中アルテラを解析していたロマンはアルテラの中にバグのようなものがある事を発見した。

『この反応はー何かがそのサーバントの中に蠢いている！
ダメだ！対話では収める事が出来ないぞ！』

『魔力反応増大中だ。またあれを撃たれる前に止めるしかない！』

ロマンはこれが最後の戦いだ！と言うとマシユと立華の名前を呼ぶ。

「対サーバント戦闘！先輩、指示をお願いしますー！」

その言葉と共にマシユ達はアルテラに立ち向かった。

マシユとネロは同時にお互いの得物をアルテラにぶつけた。

しかしアルテラはその攻撃をかわすと七色の剣を鞭の様にしならせた。

「な?!」

「・・・ッ!?」

マシユはネロをその大盾でネロを庇う。

おかしい。

盾で受けた感じはまさに剣の様な感覚だ。

しかしその剣は鞭の様にしなりあらゆる長さに伸び縮みしている。

そこへ清姫とクロー・フリーンが炎を出してアルテラに撃つ。

だがその身を空中に飛ばしアルテラは空中でバク転の様に動きながら伸びた剣を2人の間に叩きつける。

その瞬間大地は抉れ、衝撃が2人を襲う。

ブーディカは2人に駆け寄るとそこにアルテラの放った魔力弾が飛んだ。

しかしブーディカは自分の持っていた盾で防ぐと土煙の中からアルテラに斬りかかった。

「ヤアアアアア!!!」

盾を捨て両手を使って剣に力を込める。

だがアルテラの筋力ステータスはB。

筋力ステータスCのブーディカでは少し力が足りない。

次の瞬間ブーディカは跳ね返されお互いが元の状態に戻る。

(まずい・・・!このままではジリ貧だ。なんとかあいつの動きを止めないとこつちが先に参ってしまう・・・!)

そして立華は何か動きを止められる方法はないかと探る。

そこである事に気付いた。

(カルデア戦闘服・・・!)

立華は自分の腕のパネルを開いてあるコマンドを入力す

る。

カルデア戦闘服とは。

カルデアのマスター候補達に支給予定だった、戦闘時に必要な魔術を即座に発動出来る礼装である。

作ったのはもちろんダヴィンチちゃんだ。

(チャンスは一度！)

サーヴァント達は再び戦闘を行なっていた。

その動きは一般人である立華にはなかなか捉える事ができない。

(クソ……！)

しかし当てなければならぬ。

たった一発しかないだけあって構えた指先が震える。

そうして覚悟を決めて魔力を込めようとしたその瞬間

「?!」

世界が止まった。

周りは、いや自分自信も動けない。

いや、動けないんじゃない。

動いてはいる。

ただしゆっくりとスローモーションの様にサーヴァント達の動きが見えた。

それだけではない。

わかる、解るのだ。

敵の動く先が、相手がどう動くのか予想出来る！

そして立華は魔力をもう一度込めて発動した。

呪いの弾丸……ガンドはアルテラに向かって真っ直ぐに

飛んで行く。

しかしそんなものに当たるアルテラではない。
マシユを押し退けその弾丸を避けようとする。
失敗……！そうマシユが考えた瞬間

「なに!？」

アルテラの足が何かに躓いた。
それはブーディカが先ほど捨てた盾だった。
そしてアルテラは後ろの方に倒れかかり――

「ガア!!!」

呪いの弾丸に命中した。

当たった事を確認した瞬間立華はネロに呼びかける。

「今だ!!!」

「うむ!!!良くやった立華よ!!!」

ネロは剣に魔力を込めアルテラに斬りかかる。

しかしアルテラは動けない。

そのままネロは剣を振り上げ

美しい炎が軌道を描き、アルテラを切り裂いた。

「今のはいったい……?」

そう藤丸は声を洩らした。

アルテラは肩から腰にかけてネロの剣で切り裂かれており、とても限界し続けるのは不可能な程の傷を負った。

しかし……

「うそ……でしょ……」

ブーディカは思わずそう呟いた。

アルテラは自分を切り裂いた剣を掴み引き抜いていた。

脚も力が入っておらず震えている様に見える。

だがアルテラは立っていた。

そして自分の剣を空へと掲げた瞬間、空中に魔法陣が展開した。

展開した魔法陣の上にアルテラが乗ると、空から光の線が降りてきてマルスの剣と接続する。

アルテラの胸の辺りには聖杯が浮いており、その力を全て攻撃に変えてローマの町ごと吹き飛ばそうとしているのだ。

『みんな!!!そこから離れてくれ!!!このま j m d は m g m g d m

p

「ドクター?!応答してください?!ドクター?!」

通信が安定しない。

おそらく周りの魔力がノイズとなって通信を妨害している。

しかしそんな事に気を向けている場合ではない。

あの魔法陣を放たれたらおそらく全てが台無しになってしまう!

ネロが立華に目を向ける。

しかし目に映る立華はそんな絶望的な状況でも一切諦めていなかった。

「・・・マシユ? 宝具展開出来る?」

声をかけられその方向を向くマシユ。

彼女はなにを、と問おうとしてやめた。なぜならその声をかけた少年の瞳が（自分を信じろ）と語っていたからだ。

そうだ、冬木の時もそうだった。膝をつきそうな自分の隣に一緒に立って同じ表情をしていた。

ならばもう心配する事はなにもない。

「はい、任せてください・・・」

答えた少女のその瞳は、少年と同じように強く魔法陣を見つめていた。

立華はマジンガーのコックピットに座り自分の頬を叩くと

「よし!!!」

操縦桿を二つに割り中のつまみを握った。

第一の特異点では使うことの出来なかったマジンガーの武装。今なら思う存分使う事ができる。

立華がレバーを引くとマジンガの関節から光が漏れ始める。そしてマジンガはその頭を魔法陣の……その向こうのアルテラに向けて目を輝かせ始めた。

マシユは宝具を展開し終えてすでにマジンガの足元に他のサーヴァント達と避難している。

ふと、マジンガの頭にいる立華と目があう。

自分はいつでもオーケーです。

そう伝えるがごとく眼を合わせる。

その反応に立華は親指を立てる事で答えた。

辺りに轟音が鳴り響く。

そしてついに、アルテラの魔法陣から破壊の本流が吹き出した。

ティアドロップ・フォトンレイ

涙の星、軍神の剣！

その光は太古の、戦闘の概念がカタチとしたもの。
軍神マルスと接続する事でその力の一端を敵に照射する対城
宝具だ。

その光はローマの国にも届いており、人々はその光景に絶望す
る。

だが

光子力!!ビイイイイイイイイイイイイイイムツ!!!

その光を塗りつぶすかのごとく黄金の柱が押し返した。

「ぐうぐうぐうぐうぐうッ……!!!」

コックピット内に熱がこもり始める。

そのあまりの威力にマジンガーが軋みを出し始めた。

……ッ！負けるかッ……!!!

立華の頭の中に、様々な光景が浮かんでは消えてゆく。

この国の人たち

傷つき去って行った者たち

自分のサーヴァント

そして……色彩の少女

……ドクター達が、ネロには国の人たちが、帰りを待っているんだッ……!!

俺と……マジンガーの力を信じているんだ！

そして黄金の光が七色の光を押し返す。

「こんな所で……お前なんか……!!」

何故忘れていたのか。

この記憶は、どんな事があっても心から消える事はないはずなのに。

ああ……そうか……貴方はまた……

「私を……自由にしてくれたのだな……」

そうして眼を閉じたアルテラの瞼の裏に最後に移ったの

は――

いつの日か花畑で自分に手を差し伸べてくれた黄金の神様
だった。

―エピローグ―

セプテム編エピローグ

戦いは終わった。

兵士達はその疲れを癒す為に自分の家に帰っている。そんな中荒野の真ん中に、一体の巨人が立っていた。

そしてその巨人の手の上に乗っているのはローマ帝国第五皇帝ネロ・クラウディウス。

彼女はその場所で、朝日に染まる自分の国を見ていた。

「……………余の国は美しいだろうか？立華、マシユ」

「……………ああ」

「はい、綺麗です……………とても」

国の中からは朝早くであるにもかかわらず帰ってきた兵士達を出迎える声で溢れている。

まだ影のさす街並みに朝焼けの光が照らし、それはまるで一枚の絵画のごとく輝いていた。

「……………」

3人とも口を開けずその光景を眺めている。

沢山の犠牲があった。

今回の戦いで、国の人々は大きく傷ついた。

その傷は決してすぐには塞がらないだろう。

だが、今だけは太陽がその傷を暖かく癒して居るように見えた。

やがてネロが口を開く。

「この光景を見ると、やはり余は間違っていなかったのだと
感じる……………」

「ネロさん……………」

「あの時……………神祖様の下れと言う誘いを蹴った時……………」

「実は少しだけ後悔したのだ……………。笑ってしまうよな、

皇帝である余が後悔など……」

「何と言つても神祖だ。曲がりなりに建国王に他ならぬ」

「もしも任せていたら余は一体どんな景色を眺められたのであろうかと……それはどんな光景だったのだろうかと考えた」

ネロはそう言うとき少しだけ顔を下げる。

そして再び顔を上げると腕を広げ藤丸達に向き直る。

「だが余は間違っていないかった！この光景を見よ！たとえ神祖のローマであろうとも、過去も現在も未来であっても、余のローマが一番なのだ！」

「神祖から続く絢爛たる余のローマこそ至高の芸術！なればこそ余があの方のローマに圧倒される事はない！」

そう言つてネロは笑う。

その笑顔は今まで見てきた彼女の中でも、まるで大輪の薔薇のように輝いていた。

「……ああ。そうかもな……」

「ええ、そうですね……」

そう言つて藤丸達も静かに笑う。

彼らはそのまま朝日が昇るまでローマの街並みを眺め続けた。

その光景を忘れないように、ずっと、ずっと……。

「行ってしまうのか？」

「はい、この時代は修正されます。そしてきつと、連合との戦いもなかったことになるでしょう……」

ネロを町の近くにおろし、藤丸達は帰る準備をしていた。

この国は悪くない。

だが次の戦いが……未来を取り戻す戦いが彼らを待っている。

「正直言って残念だ。無念だ。まだ余はなんの報奨も与えておらんと言うのに」

「立華、お前であればきつと余にとって配下ではなく、もつと別の……」

そこまで言ってネロは

「いや、やめておこう。お前達の行く先にもきつとローマがあろう」

そして自分たちの足元が光に包まれる。

お別れの時だ。

ネロはそのまま藤丸達を見つめ、言う。

「だから別れは言わぬぞ。礼だけ言おう」

カルデアへと戻る光の中、藤丸達は確かにその言葉を聞いた。

そしてその言葉は藤丸達にとって何よりの報奨となるのでした。

薔薇を捧げるぞ！

ありがとう！そなた達の働きに、全霊の感謝と

「おかえりみんな、そしてお疲れ様。聖杯を見事に回収したね」

帰りを迎えてくれたのはロマンだった。

「ただいま帰りました。ドクター」

「あゝ、今回も疲れたぜまったく・・・」

「お疲れ兄貴」

「旦那様・・・ネロさんと浮気なんてありませんよね・・・」

？」

「清姫何言ってるの?」

帰るなり想い想いの言葉を漏らす藤丸達。

マッシュがダヴィンチちゃんに聖杯を渡すと全員が元の部屋へ戻っていった。

「どうしたのマシユ？」

「はい、ネロさんをあの世界に残した事が申し訳なくて……」

そうしてマシユは言う。

たとえなかった事になったとしても最後の瞬間彼女は一人きりになったと。

尊敬していた先達を倒し。

死別した好敵手達とも別れ。

あの広い帝国にただ一人皇帝として残された。

この先誰に頼ることもない、一人のままで……。

その言葉に立華は頭を掻いて言う。

「……今回の戦いは辛かった？」

「……いいえ、いいえ。それはきつと、違うと思うんです」

その言葉に立華はそつと頷き懐からあるものを取り出す。

それは金色に輝く板のようなものだった。

「マシユ、もしかしたら。もしかしたらだけど……」

「来たぞ立華！マシユ！今度こそ余に乗せろく！」

―セプテム編終了―

狭間の物語「強き者よ」前編

それは、ローマでの特異点からしばらく経った時の事、
「またローマに特異点？」

「ああ」

藤丸とマシユはロマンに呼び出されて管制室にいた。

ロマンによると一度修復したはずのローマにまた再び特異点らしきものが現れたと言う。

「とは言っても本当に僅かな誤差程度のものなんだけどね。だけど用心に越したことはないし何よりその場所がね……」

「場所？ローマの何処にその特異点はあるんですか？」

「うん、これを見て欲しい」

そう言つてロマンはモニターを映すその特異点となつてい
る場所とは――

「ここつて……形のある島？」

「そう、君達が女神【ステンノ】に試練と称した嫌が
らせをうけた場所だ……」

（女神ステンノ）

ローマにてネロ達と共に向かった形のある島、そこで出
会った女神がステンノだ。

彼女は自分達に気まぐれかつ理不尽な一面を見せて翻弄す
るも、島に侵入して来た招かれざる客を倒した自分たちに連合ローマ
の本拠地の情報提供という形で報いた。

「……ドクター、なんか俺すげー嫌な予感がするんだけ
ど？」

「ぼくも同意見だけど……一応レイシフトして来てく
れないか？」

「なんだ？出かけるのか？」

そこへこの間召喚したセイバーのサーヴァント、「ネロ・クラウド・デウス」が入ってくる。

「ネロ、実はあの時行った形のある島で特異点を確認されてさ……」

「おお！あの女神がおる島か。なら余も連れて行け！ようやくマジンガーに乗れるかもしれんしな！」

彼女はあの特異点でマジンガーを見て以降、よく藤丸に乗せてくれと頼むようになった。

しかし形のある島までの船の操縦を任せられた際、まさに洗濯機の中にも入ったかのような乗り心地であった為「次の特異点でね」とやんわり断り続けていた。

下手したらマジンガーが悪魔になってしまおうし……
「う、うん……じゃあネロも一緒に来るといふことで……」

（先輩、大丈夫なんですか……？下手したら形のある島が粉々になってしまうなんてことも……）

（いざとなったらなんとかするよ……たぶん）
「お主ら何をこそそそやっておる。早く行くぞ！」

その言葉に自分たちはぎこちない動きで頷くとレイシフトのコフィンに入った。

「それじゃあみんな、気をつけて行って来てくれ」
ロマンはそういうとレイシフトのシステムを起動した。

『アンサモンプログラムスタート、量子変換を開始します。マスターは指定のコフィンに入ってください』

『レイシフト』	3	2	1・・・レイシフトスタート』
---------	---	---	----------------

そして藤丸たちは、再びローマの形のない島へと向かった。

気がついた立華たちは形のある島の砂浜に立っていた。

「先輩、無事レイシフト完了です。ここは・・・あの時の砂浜ですね」

「うう・・・このれいしふとというもの、余はあまり好きになれそうにない・・・」

「何事もな慣れだよ、慣れ」

そう言つて立華は辺りを見回す。

あの時からあまり変わってないところを見るにマシユの言う通り無事特異点の時代についたらしい。

しかし

「特に何か起こった様子はないね」

「はい・・・あの時と特に変わっていません」

見た所特異点の原因と思わしき物はない。

ドクターによれば誤差程度、と言っていたのでやはりあの女神様が気になる。

「ドクター、あの女神様の反応は近くにある？」

『ちよつと待っててくれ……あ、君達の後ろの方から来ていないかい?』

それを聞き藤丸たちは後ろを見る。

すると少し遠くの方からステンノが歩いて来ていた。

「やつと来たのね……」

ステンノは自分たちを見るなりそう呟いた。

しかしその顔は以前の悪巧みを考えているような笑みではなく、とても真剣な表情をしていた。

「ステンノさん、お久しぶりです。実はこの島で特異点……異変の反応を確認したのですけれど何か知りませんか?」

マシユはそうステンノに聞く。

しかし帰って来た答えはある意味予想通りの

答えだった。

「貴方たちを呼んだのはこの私よ」

「な?!」

「なんだと?!やはり貴様か!今度は一体何を企んでおる!」

その言葉に立華とマシユはそう洩らし、ネロはまたかとも言うように怒っている。

あの後筋肉痛でひどい目にあつたのだぞ?!ネロは言うがそれを見てもステンノの表情は崩れない。

立華がステンノに質問する。

「なんで俺たちを呼んだんだ?何も無いんだつたらこのまま帰るんだが」

「慌てないで……今回貴方達を呼んだのはとある物を受け取って貰いに来て欲しかったからよ」

そう言って立華達に背を向けるとひとりでに歩き出す。

ついてこい……と言うことだろうか?

しばらくの間迷ったが藤丸たちは結局ついて行く事にした。

「立華よ……余はもうつかれたぞ……いつまでついて行くのだ？」

「もうちよつと頑張ってください……」

「ネロさん、良ければ私が背負って行きましょ

うか？」

立華達は洞窟の中にいた。

あれからしばらく歩いて、ステンノは洞窟の中に入つて行つた。

最初畏でも仕掛けてあるのかと心配したが、特に変わった様子もなく続いている。

ふと立華がステンノに聞いて見る。

「なあ、俺達に渡したいものって結局なんなんだ？」

「……」

しばらく口を閉ざしていたステンノだが、しばらくして話し始めた。

「私が貴方達に渡すのはある神の忘れ物よ」

「神の忘れ物？」

以外な言葉に立華は聞き返す。

神の忘れ物？何故それを我々に渡すのだろうか。

「この間の光の柱・・・あれは貴方達のやった事でしよう？」

そうステンノに言われ立華はあの時のことを思い出す。

レフの召喚したサーヴァントに光子カビームを放った時この島にも光の柱が見えていたらしい。

「あの力はね、はるか昔の神が人間を守るためにふるった力よ。その力は地を裂き、海を割り、全てを生み出すと言われていたわ・・・」

そうしてステンノはある石壁にたどり着く。

その石壁には複雑な壁画が記されており、ステンノがその石壁に指を振ると扉のように開いた。

「私達ゴルゴン三姉妹はこの壁の中のものをあるべきものに渡すためにずっと守り続けていたわ。悪しき者に渡らないように人を傷つけて行くうちに、妹はだんだん壊れていった・・・」

そうして扉の中へと入るステンノ。

立華達もそのあとをついて行く。

「どうしてそこまでして守って来たものを渡すんだ？あるべきもの達ってのは俺達なのか？」

「ええ、これを受け取る際同じ力を使うもの達に渡せとその神に言われたの。出会ったあの時は分からなかったけど貴方達のことよきつと」

そしてまた道を進むと急に明かりが見え始める。

「何故この島に多くの勇者たちが来ていたのか、何故我々はこの島で戦い続けたのか、その答えがこれよ」

その明かりに向かって進んで行くところにあつたのは――

「?!」

「これは?!」

「これこそ……我らゴルゴン三姉妹が守り続けた物。はるか昔の約束を守るために、貴方達に託すために我々が「命」をかけて守ると誓った物よ……」

たくさんの輝く結晶の中で一際強い輝きを放っていた「巨大な剣」だった。

―続く―

狭間の物語「強き者よ」後編

バトルシーン追加

(貴方はなぜ神なのにそんなにも優しいの?)

(何も私は優しい訳ではない。私はただ自分自身の我が儘を押し付けているだけにすぎん。そう言う意味ではこの世界の神々と変わらん)

(でも貴方の戦いで私達姉妹は救われた。神々は今後人と関わることもなくなるでしょう)

(.....)

(誇らないの? 貴方は新しい時代を切り拓いたのよ?)

(..... 私は、ただ彼らに解って欲しかったのだ)

(?)

(良いか? あの者達はただ己の快樂の為だけに他者を傷つけ踏み躪った。もしもあれを繰り返していたらいつの日か幼き人類は神々を見習って(悪魔)となるだろう)

(.....)

(私は外の世界から来たよそ者だ。だが神として、人々を悪魔にしようとする者達を見過ごすことは出来ん.....)

(神となるのも、悪魔となるのも、最後は人の心を加えてこそだ。ならば幼き人類に、少しでも他者を思いやる心を育て欲しい。私はそう思った)

(貴方は.....)

(お前達もそうだ。たとえ神であろうとも、そこには人と同じ心がある。ならば守るさ。命をかけてね.....)

(..... ホント、変わった神ね貴方は。

私たちを人だなんて。異界の神ってみんな貴方のようなのかしら?)
(さあな..... まあ私自身変わっているとは思
うがね。そろそろ戻ろう。お前の妹が呼んでいるぞ)

そして彼は立ち上がる。

岩しかない島で、その黄金の身体が夕焼けの光を浴び輝

く。

遠くで自分と彼を呼ぶ妹と「私」の声が聞こえる。
自分も立ち上がると妹の元へ歩いて行き、それに気付いて
妹も側に近づいてくる。

そして神殿へと4神で歩いて帰る。

陽が沈んで夜が来た。

さあ、今夜は彼からどんな面白い話を聞けるのだろうか……

― 遠い昔、まだ穏やかで、幸せだった日々の記憶―

「なんだ……これ」

立華達はその存在に圧倒していた。

それはとても巨大な剣だ。

剣は自ら強く輝いており、暗闇の中でも周りの鉱物に反射
して辺りを明るく照らしている。

「こ……この剣が俺たちに渡したかったものなのか？
？」

「す、すごいです先輩……あの剣……物凄い神秘を
放っています！」

「なんと……」
「なんと……こんな物が我がローマの島にある
うとは……」

『なんだこれ?!こんな物まさに神々の権能レベ
ルの代物じゃないか?!』

4人は各々の反応を見せるが、みんなに共通するのは（驚き）という感情を抱いていると言うことだ。

しかしそんな中にステンノの声が響く。

「いえ、違うわよ?」

「「「違うの?!」」」

その言葉に4人は呆然とする。

やはりこの女神、人をおちよくるのが好きなのかもしれない。

れない。

いや、素でやっているのか?

「この剣は神の忘れ物よ。貴方達に渡したかったものはこれ」

はこれ」

そう言うとステンノは近くに生えていた結晶を抜き

取る。

「この結晶には異界からやって来た神の力が宿っているの。この結晶こそ貴方達に託された力よ」

それを聞いて立華は近くに生えていた結晶を手に

持って見る。

美しい宝石だ。

緑がかった色をしていながら奥の方から金色の光を

放っている。

ネロは大喜びでその宝石を眺めている。

そこにロマンの声が響く。

『立華くん! 気をつけてくれ! 近くにサーヴァントの

ような反応がある!』

その言葉にネロとマシユは身構える。

立華もマジンガーを呼び出そうとロマンに声をかけ

ようとして

「ダメよ」

ステンノに止められた。

「?」

「?」

「これからやってくる試練に、貴方の力を使わ

せる訳には行かないの……」

「どう言うことだ？」

そして岩の陰から現れたのは、蛇を頭にいくつもつけたようなシャドウサーヴァントだった。

「あれは人を傷つけすぎて心を壊してしまった私の妹。この場所を守るために死んでもその思念でここを守っている怨念よ……」

『女神ステンノの妹って、あのゴルゴーンかい?!とんでもないビツクネームじゃないか?!?』

「ええ、でもあれは本物ではない。このくらいの試練を力を使わずに超えて貰わないと私も妹に示しがつかないから……」

そう言つてステンノは黒い陰に目を向ける。

その目に映るシャドウサーヴァントは一体どのように見えるているのだろう。

ネロとマシユが剣と盾を構える。

それと共にシャドウサーヴァントも戦闘態勢になる。

「さあ、貴方達の力でこの試練を乗り越えて。そしてどうか、あの哀れな子を自由にしてあげて……」

その言葉と共に立華達は、シャドウサーヴァントを迎え

撃った。

ネロとマシユはシャドウサーヴァントの蛇の様な髪が動くのを確認すると、すぐさまその場所から動いた。

「危ない！」

「なんのー！」

先ほどまで立っていた場所に髪が牙を立てている。それを好機と見た二人はサーヴァントに突進していった。

しかしサーヴァントは他の髪を動かすとその顎門からいくつもの熱線を吐き出した。

「ネロさんわたしの後ろに！」

「もう来ておる！」

ネロはマシユの盾に隠れ熱線をやり過ぎす。

そしてサーヴァントの近くまで寄るとネロはジャンプして、上から斬りかかる。

「……?!」

「やはり一筋縄では行かんか……?!」

「そんな……」

その攻撃はサーヴァントの鋭い爪によって受け止められた。

サーヴァントはネロを片腕で支えている。

マシユはその様子を見て嫌な予感を感じ、サーヴァントにシールドバツシュを喰らわせる。

「……?!」

「すまんマシユ！助かった！」

「ネロ！大丈夫か?!」

立華はその様子を見て二人に駆け寄る。

サーヴァントはマシユの攻撃をもろに受けてしまい、しばらくは動けないだろう。

『！マズい！今ので洞窟内が崩れかけている！また大きな衝撃を起こすと君達は生き埋めになってしまう！』

「『！』」

ロマンの忠告に立華達は危機感を覚える。

難しいのに

ただでさえサーヴァントは大きくダメージを通す事が

その上これ以上動く事が出来ないと言う。

そんな中立華は考える。

(ステンノはあのゴルゴーンが心の病んだ状態だと言っていた……。つまり今の状態は怨霊みたいなものという事)

(ならば、この方法ならあるいは……)

「先輩！離れてください！」

瞬間サーヴァントの突進がこちらに向かって来る。

立華はその様子を見て避けようとするが、立華は途中で足を止めた。

「先輩?!」

「リツカ！危ない！」

彼はなぜか突進して来るサーヴァントのそばに走る。

その先にいたのは……

「↑」

「急げ！」

ステンノが立華に抱えられ驚きの表情を浮かべる。

立華は迫り来るサーヴァントをなんと近くの岩壁を蹴る事により跳び越えて避けたのだ。

そんな危険な行動にステンノは声を荒げる。

「何考えているの?!私はすでに死んだ身。そんな身を案じて貴方が死んだら！」

「うるさい！ならばもつと離れてろ！」

立華はステンノをそつと降ろすと再びサーヴァントに目を向ける。

マシユとネロは立華に近づくと早口に言葉を紡いだ。

「先輩無茶しすぎです！」

「リツカよ怪我はないか?!」

「ああ、大丈夫だ。心配かけた……」

立華はマシユとネ口に頭を下げると近くに生えていた結晶を引き抜く。

そんな様子を見てステンノは立華に問いかける。

「なぜ助けたの？さつきも言った通りわたしはサーヴァント。もし貴方が死んだら文字通り全てが終わったのよ？」

ステンノは目の前の少年がなぜ自分を助けたのか本当にわからなかった。

これが親しいものならまだ理解する事ができた。

しかし自分が彼らに関わったのは本当に短い間だけ。

何が彼を動かしたのか。

女としての自分の体？

この剣を譲り受けるため？

それとも……

しかし立華の答えはそんな自分の予想通りでも、予想外でもなく、自分の望んでいた答えだった。

「なんだよ、神様とか言ってもやっぱりあんたは人なんだな」

「え？」

「俺が助けた理由？そんなもん

だろ」

見過ごす事が出来なかったからに決まってる

その瞬間ステンノの脳裏にいつの日か誰かと語り合った一言がよぎった。

「たとえ怨霊だったとしても、同じ物を守って、同じ想いを背

負って、生きてきた妹に殺されるなんて事があつてたまるかよ。だから守るぜ……」

(たとえ神であろうとも、そこには人と同じ心がある。ならば守るさ。……)

「(命をかけてな!)」

あの日の光景と重なる。

立華は言い終わると再びサーヴァントに向かつていく。

「マシユー・ネロー・なんとか動きを止めてくれ!俺に考えがある!!」

(この光の結晶は聖なるものはず、これを体内に押し込めばもしかしたら浄化も可能かもしれない……!)

足元の30センチはあるかという黄金の結晶を拾うと同時に立華は二人に声をかけた。

その言葉に二人は頷き自分の武器を掲げる。

そしてマシユがシールドでサーヴァントを押さえ込みネロが蛇の形をした髪を切り落とす。

「今ですよ!先輩!」

「しっかりとやるのだぞ!」

「任せろ!」

ステンノは立華を眺めながら想いを馳せる。

いつの日か、あの方が願っていた言葉を……

(優しい心を育んでほしい……)

「ああ、ゼウス……貴方の思いは……」

そして立華の掲げた結晶をサーヴァントの胸に突き刺

した時、結晶に宿っていた光がその身を覆っていた闇を裂き、サーヴァントをゆつくりとこの世から消滅していった。

「……………おとうさん……………」

(行ってしまうのね)

(ああ、私はただの通りすがり。とある魔神によってこの世界に行き着いたものに過ぎない……………)

(……………)

(そんな顔をするな、別にお前達が嫌で離れるわけ

ではない)

(なら!ここに居たって構わないでしょう!?!妹だつて貴方のことを父親のようにしたつているしそれに私自身も……!)

(ステンノ……)

(……いいえ、それは我が儘なのでしようね。

私達は貴方に救われた。ならばこそ、貴方の邪魔をする訳には行かない……)

(……)

(最後までいい、恩を返させてくれないかしら?)

(ふむ……ならば)

彼は腰の剣を島の奥の洞窟に向かって投げつけた。

投げた剣はそのまま眩いばかりの光を放ち洞窟全体を照らす。そしてその姿をゆつくり溶けるかのごとく消していった。

(……?)

(ならば、あの私の剣を守っていてくれないか?いつの日かこの島に私と同じ力を持った人間たちが来る。そのもの達に私の剣から溢れ出た力を渡して欲しいのだ……)

(!……ええ。その願い聞き届けた

わ……)

(なに、いつの日か必ずまた会いにくる。

それまで、頼んだぞ……)

彼はそう言つて光と共に空へと消えていった。

私達はその約束を守るために、島に力を求めて来る悪しき人間たちから彼の物を守つた。

そしてようやく、私達はその肩の荷を降ろしたのだつた。

「それじゃあこれで大体全部かな」

立華達はシャドウサーヴァントを倒し、洞窟の中にあつた結晶を全てカルデアに転送した。

あの結晶はマジンガーの素材の元らしく、エネルギーにも装甲にも変わる新素材らしい。

これで万が一マジンガー故障した時にも直すことができる。

ダヴィンチちゃんはその結晶を使っておじいちちゃんの残した設計図で、マジンガーの新装備を作ってくれるらしい。

通信の時物凄く喜んでいた。

「でも本当に良かったんですか？いくら剣本体でないからといってステンノさん達が守ってきた物なのでしょう？」

「ええ、良いのよ。もともとそう言う約束だったですものね」
そう言うとステンノは笑う。その顔はあの時みた悪巧みを考えている笑みに変わっていた。

「……本当に大丈夫なのか？あとから酷い要求をしたりしないだろうな……？」

「案外疑り深いよね……。それじゃあ貴方の持つ光の力、それを見せてくれないかしら？」

「そうだ！立華よ、この島なら動かしても問題あるまい！もともとその為に来たのだからな！」

「あの……ネロさん、特異点修復の為にきたんですよ？」
その言葉に立華は了承し、マシユにマジンガーの準備を始める。

そしてマジンガーがステンノの前に現れ――

長い約束だった。

確かに約束を守ろうとして私達は傷付き妹は影となったのかもしれない。

それでも今までのただ無意味に傷付けられてゆく日々と違つて自分の意思で戦うことができた。

他の者からすれば酷く映るのかもしれないが、この約束を果たすことができたのは私達の中で誇りに思っている。

(でももう少しだけ我が儘を言うのなら……)

いや、やめよう。

今は彼との約束を果たした事を喜ぼう。

あとは彼が私達の約束を守るだけ……。

(彼の力を受け継ぐ者の力……一体どんな物なのかしらね……)

彼が大きな盾を持った少女に指示を送る。

そしてその盾から魔法陣が現れて――

「あ……」

ステンノはマジンガーを見た瞬間その大きな足に縋り付き静かに涙を流した。

状況がわからず立華達はただその様子を困惑して眺めている。しかしステンノの流す涙は決して悲しみではない。

それはまるで——長いあいだ探し求めていた者に出会えたかのような、喜びの涙だった。

こんな形で再会でも、今の自分には嬉しくて仕方がなかった。

彼は人間たちに託すという形で約束を果たしてくれた。

「あなたのツ……！あなたの姿をまた見たくて……！私達は……わたしは……！」

間も無く日が沈む。

辺りはすぐに暗くなるだろう。

しかしステンノにとってはこの瞬間、自分の目の前が輝いているかのように見えていた。

そう、彼女の記憶の中はきつと——

あの朝日の様な神と過ごした日々が・・・

―狭間の物語、完―

オケアノス編

海賊達の島（前編）

封鎖終局四海オケアノス

ロマンから新たに知らされたその特異点は一画が海に囲まれており、白い霧のようなものが一定の範囲を取り囲んだ場所だった。

そんな特異点でカルデア一行、彼等は今――

「……………」

「……………先輩、海が青いですね……………」

「そうだね、マシユ……………」

「……………先輩、私海って初めて見ました……………」

「そっか……………」

「……………先輩……………」

「……………なんだい？」

「私海賊って初めて見ました……………」

「できる事なら俺は一生見ようとは思わなかったよツ……………」

「！」

彼等は今、船の上で無数の海賊に囲まれていた。

『あ！やっと思つけた！良かった、無事レイシフト出来たんだね！』

「いやモニターよく見ろ?!全然そんな状況じゃないからね?!!何敵陣のど真ん中に送ってんの?!!」

『え、敵陣?.....!!!みんな気を付けて!周りに沢山の反応が「いや知ってるよ?!?教えたの俺だから!!!」ご、ごめんなさい!』

「ドクター、帰ったらドクターの胡麻団子没収です.....」
マシユ?!!

そうマシユから言われて絶望するロマン。
とりあえず立華は周りを冷静に分析する。

「よくわからねえが.....野郎ども、やっちまえ!」

以上、分析終了。

「茫然としてる場合じゃねえぞ坊主!」

「来るぞ立華よ!」

「旦那様.....指示をお願いします」

「アアもう!!!みんな峰打ちでお願い!そして帰ったらドクターの胡麻団子を食べるぞ、!!!」

了解!!!

え!!!決定なのそれ?!!

そんな感じでレイシフト3分で戦闘が始まった。

いきなりこんな始まり方で、この先大丈夫だろう

か.....??

「すみませんでした……」

あれから俺たちは海賊達を全員気絶させ、起きた順に正座させていた。

「……ふう。荒事は苦手ですが、事態が事態なので力づく……いえ、強引に尋問します」

一度海賊達を全員を見渡してからマシユが聞く。

「どなたかこの海がどこで、どういう状況なのか説明していただけますか？」

「いやあ、それが俺たちもさっぱりですよ。気付いたらこの辺りに漂流してたんです。」

「嘘は言っていないですよお安珍様？」

「お主が言うのなら間違いない……。本当何故毎回解るのだ？」

「ネロ、慣れだよ」

「んじゃ何か？あてもねえのに俺たちを襲ったのか？」

クー・フリーリンが呆れた様子で聞く。自分達の安全性も確保できていなかったのに、その場の勢いで襲ってきたと言うことか？

「バカ？」

「ほかでもあるがアテもあるっす。この近くに海賊島があるって同業者から聞いたんで。」

それを聞いてマシユ達から疑問符が浮かぶ。

「海賊……島？そこはそのやはり海賊が沢山？」

「へえ、海賊島なんで」

海賊によるとその島は、この海に囲まれた時に出られなくなった海賊達が集まった島らしい。

『ふーむ……。とりあえず手掛かりらしい手掛かりがない以上その島に向かって見たほうがいいかもしれない』

「そうですね……では皆さん。勝者としての権利を行

使します。その海賊島に面舵いっぱい！」

マシユが海賊達に指示を出す。すると海賊達もアイアイサーー!と返すと同時に作業に取り掛かった。

マシユ……ノリノリだね……。

「ヒヤツハー! 獲物d「オラア!」ほぶぎツ?!」

「またかよ……このパターン何度目だ?」

立華が呆れたように呟く。あれからしばらくしてその島に到着し、砂浜を歩いていたら何か何度も海賊達に襲われる。仕方なく峰打ちを繰り返しているのと腰を低くした海賊が前に出てきた。

「勘弁してつかあさい。悪気があつた訳じゃないんです……。海賊の本能なんです……。」

『な、情け無い海賊だなあ!』

「嘘は言っていませんわあ、安珍様」

「本当に本能なのだな……汗」

もうぶつちやけ手掛かりとか見つからないんじゃないだろうか。もし海賊がこんなのしかないのならあまり期待出来ない。

そんな海賊達にマシユが聞く。

「この島に状況を把握している人間はいないのでですか？」

「あ……. だったら姐御じゃないかと」

「姐御とは?」

それを聞かれた海賊は急に態度を変えるとその名前を言う。

「へっへっへ、聞いて驚け。我らが栄光の大海賊、フランシス・ドレイク様だ！」

「なんで急に居丈高になるんだ……」

『あれじゃない？……海賊としての必死なキャラ立てじゃないかなと』

フランシス・ドレイク？

わかってない立華を他所に話は進んで行く。

「へっへっへっ、てめえ達はもうおしまいさ。ドレイク船長の手にかかればてめえ達なんか……」

「何故この方はいちいち小者なのでしょう……」

『いつの時代でもキャラ立ては重要だつて事じゃない？ほら、うちにも憧れの女性に変身するとかいう変態がいるし……』

海賊の反応に清姫は呆れている。

しかしロマンのいう通り昔の人間というのは濃い人が多いのかもしれない。

ところでうちのダヴィンチちゃんは、形のある島で手に入れた素材……「ジャパニウム」を持ってラボに引きこもっている。

今回の特異点では出てこないだろうとはロマンの談。

そうしてジャングルを歩くなか立華はマシユに尋ねる。

「マシユ、フランシス・ドレイクってどんな人？」

「はい、フランシス・ドレイクは世界を開拓した偉大な英雄の1人です。時代的に大航海時代の真っ只中ですから……今から会うのが本物のドレイクなら、生前の人物と思われれます」

そう言つてマシユは歩きながら答えて行く。

「人類史で最も早く生きたまま世界一周を成した航海者。その活躍でイギリスは莫大な富を得て当時世界の海を制覇していたスペインを撃破します。決して沈まない太陽と言われたスペイン、そのスペインから海の悪魔と恐れられた人物……」

「まさに、太陽を沈めた英雄、ですね。ドレイク船長なくして

後の大英帝国の繁栄はありません」

でも……とマシユは続ける。

「これまで出会ってきた海賊の生態から推測してロクでもない人物である可能性大です」

その言葉に立華はこれまで出会ってきた海賊を思い出す。

妙にキャラ立てしてくる男。

何となくで攻撃してきて返り討ちにあった男

「……うわあ、嫌な予感がする」

「はい、その通りです。おそらく大食感で巨人、樽を片手で掴んで一気飲みするような豪傑と思われまます」

そう言っマシユは何か協力を仰げないでしょうか……と呟く。

そうこう言ってる内に立華達は海賊達の集まる広場に到着した。

「姐御！姐御！敵、じゃねえや客人です。」

―続く―

海賊達の島（中編）

「……こりや随分キテレッツなのを連れてきたねボンベ」

広場の真ん中で海賊の声に応えたのは、顔に大きな傷のある女性だった。

「へえ、でも見所はあるっすよ。あつしらの命を助けたばかりか、船長に会いたいとか何とか」

「ふうん、アタシに会いたいねえ……」

そう言っつてこちらを見る。

彼女がおそらくマシユの言うドレイク船長だろう。

「……あの、先輩。わたし、驚きで声が出ないのですが……」
「そうか？よくあることなんじゃないか？」

立華はそう言っつてネロの方を見る。

彼女も歴史上では男性と記されていたらしいし冬木の特異点でもアーサー王が女性だったし、結構こういうことは多いのかもしれない。

ちなみにネロはドレイクの顔を見てなんか唸っていた。

「……あやつの顔、何処かで見た気がするのだが……」

「？まあいい、下りなボンベ。話は私がする。」

「それで、あんたら何者だい？」

部下を下がらせ立華達に問う。

その様子を見てマシユと立華が前に出る。

「あなたがフランシス・ドレイクですね。我々はカルデアという機関に所属するマシユ・キリエライトと申します。こちらは私達のマスターの……」

「藤丸立華だ。よろしく」

立華達が自己紹介するとドレイクは訝しげな顔でこちら

に聞いてきた。

「カルデアあ？星見屋が一体何の用だい？新しい星図でも売りつけに来たとか？」

『うわっ、意外に博識だぞこの酔っ払い……！カルデアの起源を知ってるのか！』

ロマンが驚きに声をあげる。

するとドレイクは眉をひそめ辺りを見渡した。

「……なくんか薄っぺらい気配がするねえ」

「アタシが一番嫌いな、弱気で、悲観主義で、根性なしで、その癖ねっからの善人見たいなチキンの匂いだ」

その言葉に立華達は驚く。

ロマンの人間性を声を聞いただけでここまで把握できるとは。

「か、完璧です。先輩、この人の分析、と言うより直感も完璧です！」

マシユのそんな言葉にシヨボーンとするロマン。

しかし自分も確かに、と感じてしまうため何も言わない。

「まあいいや細かいことは。面倒だし。それで、カルデアとやらはあたしに何の用だい？」

「……はい、私達はこの時代の異常事態を修正するため、さる場所から送られて来たものです」

「……はあ」

「フランシス・ドレイク船長、あなたなら気づいているのではないですか？この時代、この世界は何かがおかしいと言うことを。あなたが過ごして来た海と、今広がっている海は別のものだと言うことを」

そう伝えるとドレイクの目つきが鋭いものに変わる。

「……ふうん、世界だの時代だの言われても無視を決め込むハラだったが……海の話がされちゃあ無視出来ない。確かにあたしもおかしい、とは思っていた」

その言葉を聞き、案外上手く事が運んでいるんじゃないか？と考える。

しかし

「……ですよね！では、私達がその原因を説明しまー」
「ーーだがね、そのおかしいは異常って意味じゃない。こんなに面白おかしい世界は他にないってことさー」

そうだな野郎ども！とドレイク船長が叫ぶとあちこちからヒヤッハー！、という声が聞こえてくる。

その反応に立華はええ……またこのパターン？と呆れた反応をする。

「なんと言うか懐かしいなこの雰囲気。影の国の連中を思い出しそうだ」

「兄貴ってどんなところに住んだの……？」

「いや、今はそんな事を言っておる場合ではなからう……」

立華よ、あやつ恐らく戦うつもりだ」

そうしてドレイク船長は一呼吸置いて腰の銃を構えた。

「というわけだ！あたし達海賊は自由の為ならあらゆる悪徳を許容するんでね！どうしても話がしたいってんなら、まずは腕試しとしようじゃないか！」

「またかよ……初めから話が全然進んでない……」

「まあいいじゃねえか！こっちはわかりやすくてありが

てえ！」

「仕方ない……清姫、ネロ、マシユ、兄貴！準備はい

い!?？」

その声にサーヴァント達は肯定すると、戦闘態勢に入った。

最初に仕掛けたのはやはりドレイクだった。

「そらよッ!!!」

彼女は高くジャンプしてに持った2丁拳銃で、全員に満遍なく銃弾を撃つ。

「マシユ！防御」

「はい！ステータスアップ、これで堪えます！」

その攻撃にマシユがスキルを使用し全員の防御力をあげる。

撃たれたと同時にネロがドレイクの前に出て剣を振り上げるが、その攻撃をドレイクは銃の砲身の部分で受け止め罅迫り合いになる。

「……ッ！むう、お主……ドレイクとやら。やはり余と何処かで会ってはおらぬか？」

「はあ？……あいにくあんたみたいな赤いの、見た事ないね！」

そしてドレイクは銃弾で剣を弾き距離を取る。

そしてこちらを捉えようとして視線を向けるとその顔の前を二つの火の玉が通る。

「ごっちも忘れてもらっちゃ困るぜ！」

「焼きつくします……」

「兄貴、矢避けの加護で肉弾戦に！清姫はそのまま援護をお願い！」

そしてクー・フリーンは杖にルーン魔術を描き槍の代わりに振るう。

それにドレイクは銃弾を浴びせるが当たらない事を悟ると、清姫の方に攻撃を加えようと近づく。

しかし

「やあああッ!!!」

「！へえ、やるねえ……。大人しそうな顔して結構攻めてくるじゃないか」

そこにマシユがシールドバツシュを仕掛け清姫の前に立つ。

しかしドレイクはシールドにわざと近づきそのままヤクザキックでマシユごと吹き飛ばした。

「うああ?!」

「だがまだ勢いが足りないよ!」

「マシユ!?!」

その様子を見た立華はクー・フリーンに援護を指示する。

「おっと、あんたには肉弾戦がキツそうなんでね……。悪いが避けさせてもらおうよ!」

「そう言うなよ!もつと俺のや……。杖さばきを味わっていきな!」

そうして徐々にクー・フリーンが追い詰めていく。

しかしその時

「うおあ?!」

「兄貴?!」

「へへっ、あんたの運も足りなくなつて来たんじゃないかい?」

ドレイクの銃弾がクー・フリーンの頬を掠る。

掛けておいた矢避けの加護が切れ始めたのだ。

そうしてドレイクは近くにあった大砲に火をつけてマシユ達の近くに砲撃した。

「藻屑と消えな!」

「あぶない!」

とつさにマシユが前に出て全員の盾になる。

いくらデミサーヴァントといえど、砲撃の直撃を間近で受けたことで大きなダメージを負った。

「マシユ?!大丈夫か?!」

「……。っ!!は、はい。まだ大丈夫です、先輩!」

その言葉にホッとする立華。

そこへネロ達3人も集まり状況は振り出しに戻ってしまった。

ドレイクもネロ達も動かない。

お互いに自分の距離を凶っている。

(困った・・・！生きた人間だから宝具を放つのは難しいし、だからと言って手加減してたらこつちがやられる！)

立華はこの戦いにやりにくさを感じていた。

生きた人間と戦うことは何回かあったが、ここまで英霊と互角にやりあえる人とは初めてだったのだ。

(どうすれば・・・！)

「ラチが開かないねえ・・・」

そこにドレイクの声が響く。

彼女は立華を見て何かを思いついたかのような顔をする。

「あんたらを相手にするのは骨が折れる・・・ならばこつちの指示するボウヤを狙うってのはどうだい!!!」

「先輩！あぶない!!」

「坊主！逃げろ！」

ドレイクはマシユ達の間を潜り抜けると一直線に立華の元へ迫ってくる。

立華はその状況を見て焦る。

しかしドレイクは立華の目の前に銃口を向け、引き金の指を動かす。

(や、やばい?!!)

しかし次の瞬間

「?!」

世界が再び止まった。

これって、あの時の!?

セプテムでサーヴァントアルテラとの戦闘の際に起こった現象。

立華以外の動きは遅くなり、目の前のドレイクの動きもゆつくりとなる。

でも・・・!好都合!!!

立華はドレイクの腕を取り、肩の上に乗せる。

そしてそのまま体重を前の方へと移動させドレイクを投げ飛ばした。

再び動きが元に戻りだす。

「「「な!」」」

「なんだって?!」

ドレイクには何が起こったかわからない。

気がつけば銃を向けていたボウヤはいなくなり、自分の体はそのまま空へと投げ飛ばされている。咄嗟のことにドレイクは反応できずろくに受け身も出来ぬまま立華の一本背負いをもろに受けてしまった。

「がはあッ?!」

肺の中の空気がいつぺんに抜ける。

このままではまずいとドレイクはそのまま立ち上がろうとして

「俺たちの勝ちです・・・！」

立華はドレイクの落とした銃を向けている。

ドレイクはその光景に目を見開き、しばらくすると

「ああ、あんたらの勝ちだね・・・」

と呟いた。

その光景に彼女の部下たちもマッシュ達も口を大きく開けて呆然としていた。

―続く―

「先輩?! お怪我はありませんか?!」

『立華くん! 大丈夫かい?!』

呆然としていたマシユが心配そうに立華に近づき、ロマンの声が響く。

周りの海賊達はドレイクが投げ飛ばされた所を信じられないと言った様に見ていた。

「ま・・・マシユ、ドクター。俺は大丈夫だよ。銃を向けられた時はかなり焦ったけど・・・」

「申し訳ありません。シールダーである私が付いていながら・・・」

マシユは申し訳なさそうに立華に頭を下げる。

それに立華はその場面じゃ仕方ないよ、と答えるとゆっくりと地面に座った。

どうやら今ので力が抜けたらしい。

「あのお方・・・燃やし尽くして差し上げましょうか・・・」

「清姫、大丈夫だから落ち着いて・・・」

マシユの後ろから清姫が現れてその口から青い炎をチラつかせている。

立華はそれを見て止めに入っているとクー・フリーンとネロが近づいてきた。

「おう、坊主やるじゃねえか! あの場面で咄嗟に投げ飛ばすなんざ

なかなか出来るもんじゃねえぜ。」

「立華よ! 大丈夫であったか?! 何処かに穴でも開いておらぬだろうな?!」

その言葉に立華はゆっくりと立ち上がることで無事を答えると改めてドレイクに目を向けた。

「ほんとうに強かったね。この人生身だよね・・・?」

『いや、それを咄嗟に投げ飛ばす立華くんもだいたいぶおかしいよ・・・?でもなんだろう、彼女から魔力の反応がある』

「かあくっ！効いた効いた。ラム酒なんざ問題にならないレベルだねえ」

「あ、姐御！大丈夫っすか！」

「アツハツハ、何言ってるんだい！大丈夫に決まってるだろ！」

ドレイクは部下に心配されながら改めて立華たちを見やる。

「それはともかく、ボウヤなかなかやるじゃないか！このアタシが投げ飛ばされるなんざガキの頃くらいだ。文句なしに、アタシの敗北さね」

「煮るなり焼くなり、抱くなり、好きにしな！」

その言葉に立華はご遠慮申し上げておきます、と答える。

ドレイクは立ち上がり息を整えると答える。

「とにかく負けは負けだ。あんたらの話を聞こうじゃないか。でもまああれだろ？見た感じ足が欲しいってことじゃないかい？」

「あんたらは探し物があるがこの海には不慣れだ。なんで、海賊だろうがあたし達に頼るしかないってわけだ。」

そうだろ？とドレイクが聞いてくる。

確かに自分たちはこの海を移動するための手段がなく、海賊船はその為に必要になってくる。

マジンガーは海に入るとその重さで沈んでしまう上に、パイルダーは全員を乗せて飛ぶ事は出来ない。

ならばこの海に慣れているドレイク達に乗せてもらったほうが効率がいい。

「で、具体的には何をしろって言うんだい？あたしらは負けた

んだ、命以外なら差し出すよ?」

「まずは状況が知りたいんだ。ここは具体的にどこなんだ? 太平洋、またはインド洋? それとも日本海?」

「・・・先輩、ちよつと具体的すぎます。そもそもドレイクさんの時代にはその概念がありません」

そう言ってドレイクの答えを待つ。

しかしやはりと言うべきか

「あー、悪いね。そういやわかんないわ、アタシら。てか太平洋ってなんだい?」

「はい、太平洋というのはですねーって状況わからないでどんちゃん騒ぎしてたんですか?」

「そうだよ。だって食料や酒にはこまらないしねえ。よし、じゃあ降伏もした事だし。アタシたちは今からアンタの仲間だ!!」

「さあ、とりあえず乾杯だ!!」

ドレイクは手にジョッキを持ちマシユの背中を押す。

「え、ちよ、待っ・・・!」

「宴会か。まあいいじゃねえか嬢ちゃん、こいつらもわかんねえっていうしよ」

「良くないですよ?! え、ダメ、待って、先輩助けてください・・・!」

クー・フリーンもドレイクに便乗してマシユの背中を押す。

しかしマシユはその勢いに流されてあつという間に連れて行かれてしまった。

そして今に至る。

「ああ、こんなことをしている場合ではないのに……」

「マシユ、この海老美味しいぞ。食べてみ？」

「あつさり順応しないでください……！一刻も早く船を出して海域の様子を調べないと……あ、美味しい」

そう言つてマシユは近くにあつた海老を口にすする。

なんだかんだ言つてマシユも楽しんでないだろうか。

「なあにしけたツラしてんだい！そんなんじやお宝は逃げちまうよ！」

「そういうことではなく……協力していただければのならこちらの事情を……」

「ああ、知ってるよ。この海は異常なんだろう？少なくとも、砲弾の直撃を受けてピンピンしてるやつがウヨウヨいるんだからね！」

その言葉に立華とマシユは反応する。

船の大砲を正面から受けて平気な存在となると

「サーヴァント……！」

「おそらくそうだろうな」

「この海域は異常だよ。ジャングルがあつたかと思えば、地中海の温暖な海に出たり……海流もしつちやかめつちやかだ。とてもじゃないがまつとうに海に出るのも難しい」

「……そもそもこの海域には大陸がない。ついでにイングランドもね」

どうやらドレイクはある程度この海の事情を把握していたらしい。そして明日にでも街の一つ見つけてそこを拠点とする予定

だったらしく、今やっている宴会はその前夜祭とするつもりだったらしい。

「なるほどな、それはすまんことをしてしまったな」

やがて歌を歌い終えたネロがこちらの話に入ってきた。

ちなみにネロの歌を聴いた海賊は絶賛気絶している。

「なあに！こちらとしてはアンタらみたいなのが仲間になってくれたんだったらありがたい！見た所ボウヤも大砲の一発や二発なるとかなるんだろ？」

「いや俺は普通の人間だから」

「そうなのかい？まあどっちでもいいよ、なんたってアタシを投げ飛ばすような奴さ。心強いには変わりない！」

そうら飲みな！そう言つて立華の口にラム酒を流し込むドレイク。

口の中に辛い味わいが広がり思わずむせてしまう。

「ぶふうツ?!」

「なんだ坊主下戸か？男なら今のうち飲めるように鍛錬しときな」

「お水です安珍さま……」

「あ、ありがとう……」

清姫から受け取った水を流し込み一息つく。

すると隣のマシユとフォウくんが大きく口を開けたままこちらを見てきていた。

「あ……あの、先輩？」

「どうしたのマシユ？」

「その手に持っている物って……」

「ああ、清姫からもらったみずー」

そこで立華ときずいた。

なんかこのジョッキ見たことある……

「なんか聖杯に似てるねこのジョッキ」

「しつかりしてください！先輩の！それは！本物です！」

その一言で立華は隣に座っていた清姫に目を向ける。

「清姫これどこに?!」

「この器ですか？それなら私の目の前においてありませんが？」

「おっとこいつに目をつけるとはお目が高い。金でできたジョッキなんて悪趣味だがこいつは別き。汲めども汲めども尽きない酒だけじゃない。机におけばあら不思議、肉と魚がドガドガ盛られていきやがる」

ドレイクは聖杯を受け取ると湧き出たラム酒を煽る。

それを見てマシユは慌てて質問をした。

「あ、あのドレイク船長?!その聖杯どこで?!」

「ああ、たまたま拾った」

「拾った?!」

まさかの回答にマシユが驚愕する。

自分たちが命を燃やして手に入れてきた聖杯をまるでコイン拾ったみたいな感じで言われれば誰だって驚愕する。

てゆうかそんな事あってたまるか。

「何言ってるんですか姐さん、たまたまじゃねえ、とんでもない大冒険だったつスよ！」

その答えにドレイクの部下が声を上げる。

「いつまでも明けない夜、海という海に現れた大渦！そしてメイルシュトロムの中から現れた崩れかけの神殿！」

「時は来た。異界の神なき今再び神話の時代に帰る時……!!」

「とか言っていたデカブツを相手に大立ち回りして、そのお宝を奪い取った姐さんはなんと言うかこう……なんかの間違

いにちげえねえんですけど、サクツと世界を救った英雄だったんじゃないですかね！」

「え?!じゃあ何?この特異点もう解決?!」

頭に手をおいてそんなバカな?!と叫ぶ立華。

そこにドクターの通信が入る。

『ごめん通信できなくて・・・何か君達の近くに聖杯の反応があったからさ、メンテナンスがなかなか終わらなくて』

「ドクター、その反応は間違っています・・・!聖杯はドレイク船長が持っていました!」

『はいい?!』

ボーゼンとしながら目を合わせる立華とマシユをおいて、ドレイクとその海賊達とうちのサーヴァントはどんちゃん騒ぎを繰り返している。

そんな中机の上の聖杯が夕暮れの光を浴びて鈍く輝いていた。

迷宮「前半」

「よし、出航だ！旗を掲げろ、黄金の鹿号、出撃だ！」

「あいよ、姐御！」

「景気付けと確認ついでに一発、大砲ぶちかましな！」

翌朝立華達はドレイクの船に乗り、海の上に浮かんでいた。

ドレイクの放った大砲は水柱を遠くであげ、その波が船の元にも届く。

「うぶっ……すまん、揺らさないで……」

「兄貴え……二日酔いまだ取れねえの？」

「ああ、無限に湧くからって調子にのちまった……師匠に見つかったらどやされちまう……」

クー・フリーンは昨日の飲み比べでグロッキーになっていた。

近代の酒は彼の時代に比べてアルコール度数が格段に違うため、ガパガパ飲みくらべしていた彼は今にも吐きそうだ。

「船の揺れもあるしなあ……」

そう立華は呟くと海を見渡す。

綺麗な海だ。

物静かで水平線の向こうまで見渡せる。

「はあ……」

「ましゆさん？どうなされたのですか？」

「あ、清姫さん。その……前回は陸が見えてましたが見渡す限り海というのは初めてなんです」

「む？マシユよ、このような海は初めてか？まあ余も初

めてなのだがこの景色は実にいいな！歌でも歌いたい気分だぞ！」

「ほーう、あんた歌えんのかい？なら一つ聴かせておくれよ」

「うむ、よかろう！なら「オアアアアツ！」むぐう?!」

ネロの口を咄嗟に塞ぐ立華。

危なかった！

こんなところで昨日の宴会の悲劇を起こすわけには行かな

い！

危険を察知していた一部の海賊はあからさまにホツとしておりマシユも息を吐いている。

ドレイクは頭にはてなマークをつけて立華の奇行を眺めていた。

「ぶはあー何をするか立華！いきなり口を塞ぐからびっくりするではないか！」

すると立華はネロの耳元に近づきそつと呟く。

「ネロ？真の歌い手というのは抜群の状態になってから歌うものなのだよ。もし少しでも不完全な状態で歌ってしまったら、ネロの歌にも傷が付くし聴く方もガツカリしてしまうかもしれないだろう」
それを聴きネロは納得しドレイクにすまんがまた今度な、と伝えた。

「……………旦那さま？今のは？」

「……………嘘は言っていない……………」

清姫の目が怖いことになっている。

しかし嘘は言っていないのでなんとかセーフをもらえた。
かくして、グダグダな一行を乗せた船は次の島を目指して進んでいった。

「もう……………むりい……………」

「ああ！クー・フリーンさんの口からエーテルが?!!」

「キャスターが死んだ！」

「この人でなし！」

「し……………死んでねえ……………」

「んー……?」

「どうしました?」

「ああ、空気の味が変わったみたいだね」

不意にドレイクが呟いた。

彼女がいうには違う国、違う陸地に行くとき空気の味が違うらしい。

『ふーむ、M.S. ドレイクは温暖の差や海流の変化による風の差違を感じてるのかな?』

「なあ学者の兄さんよ、昨日からつけてたそのミスつてのをやめないかい?なんだか気色悪いよ』

『す、すみません。では失礼してドレイクと。と言うわけでみんなドレイクの言葉は正しいのかも知れない。現在君達がいる場所は明らかに先ほどの島と気温や海流が異なっている』

『もうしばらくすれば具体的な場所も判明するはずさ』

ロマンがそう言うとき確かに遠くに陸らしきものが見えてきた。

「霊脈ポイントを設置出来る場所があればいいんですが……」

「確かに設置出来ないとマジンガーが出せないしなあ……」

マジンガーを転送する際の電力は、マジンガー自身の動力源――光子力エンジンと接続することで補っている。

しかし転送の際にはマシユの魔力による方向性が定まらなく

てはいけないため、マジンガーを出す際はマシユがポイントとつながってなければならぬ。

「しかしあれだな。お前のアレがあれば俺のウィツカーマンが立つ瀬ねえな」

「あ、兄貴大丈夫？」

気づけば近くにさつきまでグロツキーになっていたはずのクー・フリーンが近づいてきた。

今は釣りのついでにこちらにきたらしい。

「おう。しかしなんでお前ランサーで呼んでくれなかったんだ？」

「でも俺クラス指定とか出来ないしなあ……帰ったらダヴィンチちゃんに超合金Zで槍でも作ってもらおう？」

その言葉にお、そいつはいいな！よろしく頼むぜ、と答えると再び釣りを始めた。

そうしている間に船は新たな島へ向けて進んで行くのだった。

『うん、この島はさつきと比較してみると格段に大きいな。おかげで霊脈のポイントも発見できた』

ロマンの言葉にホツとする立華。

彼らは島についてまず、霊脈のポイントを探してその場所を拠点とするべく動いていた。

『座標を送るから、ひとまずそこを目標にしてほしい。ただし、いくつか生態反応もあるから要注意だ』

「了解です。ドレイクさん、こちらへ進みたいのですが問題ありませんか？」

「いいよ。アタシも同じ方向がいいと思っていた」

ドレイクは部下に船を守る指示を行い、立華達とともに島の探索へと乗り出した。

島の中は広く森の奥には草原が広がっている。

「広いねえ、島とは思えないわこりゃ。それにいい風だ」

「確かに。さっきの島と違ってなんと言うか……」

「オルレアンですか？」

「あー、確かに。初めてレイシフトしたあの草原ににてんな」

立華とマシユとクー・フリーンは初めてレイシフトしたオルレアンを思い出した。

今思えば少しジャンヌオルタに酷かったかも知れない。

ロケットパンチが迫ってきた時の顔はすごい涙目だったと思う。

「マスター。間も無く指定座標地点です」

「了解。そんじゃあ準備始めてくれ」

はい。と答えマシユは盾を地面におき、カルデアと接続し始める。

その様子を見てドレイクは目を丸くした。

「改めてみると変な光景だねえ……」

「まあ俺も最初に見た時びっくりしたしなあ」

そう言つてマシユの様子を見る2人。

しかしそこでロマンが違和感を感じた。

『……うん？今何か……』

「ドクター？どうかしましたか？」

『いや、気のせいだろう。いつものように設置を始めていいよ』

マシユはその言葉に疑問符をあげるが言われた通り自身の盾と霊脈を繋いだ。

「召喚サークル確立。ポイント生成完了しました」

「よし、これでマジンガーをいつでも出すことができるな」

「マシユよ、少し小腹がすいてきた。食べ物を送ることは出来ぬか？」

「はい、少し待っててください。ドクター？」

『うんわかった。他の物資と一緒に送るからちよttmd gまつmgjtadwjwjxjddgd』

すると急にロマンの通信にノイズが入り出す。

やがてノイズは強くなっていきついにロマンの声は聞こえなくなった。

「ドクター？ドクター、通信の様子がードクター?!」

「どうしたんだい？急に学者の兄さんの声が聞こえなくなっただけど」

「マシユ？」

そして通信が切れるとともにその島を、巨大な地震が襲った。

「キャア?!?」

「地震だ?!結構大きいぞ」

「みんな！」

「はい！しっかり掴まっております。旦那さまにー」

「言っていないよ?!」

しばらくすると地震はやみ、辺りは先ほどと同じように静寂が包み込む。

立華達はその地震に嫌な予感を感じ始める。

「マシユ、通信は?」

「はい、通信は未だ途絶しています。召喚サークルは確立しているのですが……」

「どうも嫌な予感がすんな……」

クー・フリーンが呟く。

その言葉を初めに、立華達は船の方へ戻ることにした。

船に戻った立華達は、何やら乗組員達が船の周りで騒いでいることに気づいた。

「ん?どうした、何かあったか?」

「姐御……船が、動きません」

「はあ?」

「ですから!船がうごかぬエんです、全然!」

乗組員の言葉を聞きドレイクは船の上に向かって行く。

そして船がうんともすんとも言わないことを悟ると再び立華の元に戻ってきた。

「ダメだ、動かないや。船そのものに異常はないと思うんだけどねえ。ただ何かで固められたようにがっちり固定されちまつてる」

その言葉に立華はクー・フリーンを見る。

「なんだ？どうした坊主」

「いや、兄貴の宝具で動かす事出来ないかな？マジンガーだと船ごとバラバラになりそうだし・・・」

「あー、多分ダメだな。こいつはおそらく結界の一種だ」

「はい、私たちなら脱出できる程度のランクですが・・・船はそうはいきません。結界を構築した何者かを打たない限り永遠にこのままです」

「じゃあネロは？ネロの結界で上塗りするとか」

「いや、むりだな。余の結界には海はないからな。船が乗り上げてしまう」

「どうすんだい？」

ドレイクの質問にマシユが答える。

「探し出して討ちます。それ以外に脱出方法はありませ
ん」

「よし、あんたらがそう言うんならそうなんだろう。
野郎ども！しばらくそこで待機だ！」

「行儀よくダラダラしてな！本番は海の上なんだ、無
駄遣いするんじゃないよ！」

海賊達がその言葉に頷くとドレイクは立華達を連れ
て島の奥に入って行った。

「なんだか殺風景だねえ。さっきの砦も人っ子ひとりいなかったし」

しばらく歩いていたが立華達は特に異変を見つけれなかった。いた。

ここに来る途中砦を見つけたが、その中には誰もおらずもの抜けのからだだった。

「そもそもこのような島に建物がある事自体不自然です。あの様式は……もしかすると……」

マシユが何かを考えている最中に立華は岩山に洞窟らしきものを見つけた。

「みんな、あそこになんか洞窟あるんだけどなんか怪しくない？」

「ふむ、地下迷宮というやつか？面白そうだ！」

「いいねえ！海賊の血が滾るってもんさ！」

それを見つけたネロとドレイクは急ぎ足で洞窟に向かって歩き出す。

「待ってください。規模がどの程度かもわかりませんし、一度撤退してー」

「あー、だめだ嬢ちゃん。あの様子じゃあ聞く耳もたねえぞ……」

嬉々として洞窟に入って行く二人を見てマシユとクー・フリーンはため息をつくともったく、と呟いて洞窟に入ってしまった。

「右か左か……直観左！」
洞窟に入った立華一行はドレイクの勘で迷宮内を進んでいた。

中は広く様々なモンスターが生息しており、迷宮内に入った立華達を殺すべく襲いかかっていた。

「またガイコツか！いい加減、おとなしくしろ！」

「立華よ！やるではないか！」

「先輩！危ないですので後ろに下がってください！」

（最近坊主みるみる成長してやがんな……。師匠に目をつけられねエだろうな……。汗）

「はあ♡旦那様……」

立華は落ちていた剣を握り迫り来るガイコツ達を打ち倒していつている。

それを見たサーヴァント達は焦って後ろに下げようとする。

まあ後ろからも来るんだが……

「そっぴや道覚えてる？」

「あ、はい。一応記録しておりますし逸れることはないかと……」

「まあこの迷宮も主を倒せば消えるだろうしあまりきすることねえぞ」

そうして迷宮内を進んで行くと不意にドレイクが動きを止めた。

「フオウ、フオウ、フオウ！」

「あれ？フオウさんいたの？」

「はい。一応私の盾の中に入っていましたので」

「ちよつと待ちな……。何か臭うな」

「ああ、確かに臭う。こいつは血の匂いだ」

クー・フリーンとドレイクの言葉に一気に警戒する立華達。ドレイクは頭を掻きながら立華達に説明する。

「商売上どうしても嗅ぎなれるからね。この匂いは」

そう言つて再び迷宮を進み出す。

しかしここまで来て立華達は嫌な予感を感じていた。

「ねえ、また来たみたいよ。全滅したと思つたのに」

「まったく、しつこいつたらないわね。どうする？」

「……………そ、暴れたいのなら好きにすれば」

「言つておくけど、私は汗を掻くのイヤだから。

手伝つてあげたりしないからね」

「……………ッ！」

「予感的中つてことだね。何かくるよ……………！」

腰の銃を構えてドレイクが警告する。

そして迷宮の陰から何かが姿を現した。大きさは大体3mほどはあるだろうか。全身に拘束具のような金具をつけており、赤い腰巻をつけている。

頭は牛を模したかのような兜をつけ、その両腕に二本の大斧を携えていた。

「これは……サーヴァントです!」

「で、でか……!?なんだいこいつ……!」

「……しね」

サーヴァントはこちらを見つけるなりその両腕の大斧を振り上げてこちらに向かって振り下ろした。

轟音が響くと同時に、迷宮内に亀裂が走る。

「バーサーカー……!問答無用ってわけだな!」

「先輩、気をつけてください。この迷宮の固有結界といい牛の兜といい、おそらく彼の真名はアステリオス!またの名をミノタウロスといいギリシャ神話の怪物です!」

その言葉と共にマッシュがアステリオスに向かって行った。

マッシュのシールドバッシュがまともに直撃する。しかし

「き、効いてない!」

「一旦下がるのだマッシュ!」

そこへネロが剣を振りながら突進する。

その攻撃を二本の大斧で受け止めると、横薙ぎに振るうと同時にネロを吹き飛ばした。

「があああああッ!」

「ええい馬鹿力め!迷宮ごと吹き飛ばすきか?!」

ネロに追撃をしようとするアステリオスの腕に植物の蔦のようなものが絡みつく。

「おとなしくしろってんだ!」

クー・フリーンのウィツカーマンの一部がその動きを止めようと

するがアステリオスは無理やり千切ること脱出し、近くにいたドレイクを攻撃する。

「危な?!!」

頭を下げることでその攻撃を避けたドレイクは銃の弾をアステリオスの体に叩き込む。

しかし

「あんだだけ鉛玉貰っても動くのかい?!」

「ドレイク船長下がって!俺たちじゃ太刀打ち出来ない!」

そして清姫が口から炎を吐き攻撃するが、少しけむそうにするだけでやはり効いてそうにない。

(一番の筋力を持つマシユの全力のシールドバツシユを食らっても効かないなんて・・・!これじゃあ力で対抗するのは難しい!)

大斧を振りながら近づくアステリオスにガンドを浴びせるが、この前の様にはいかずその狙いはずしてしまう。

「なんとか動きを止められたら・・・!」

そして体を拘束しようとして引きちぎられたウィツカーマンの破片が立華の元まで飛んでくる。

瞬間立華の頭にアイディアが閃いた。

「ネロ!兄貴!清姫!ちよつとの間そいつを抑えてられる?!」

「何か策があるのか坊主?!」

その言葉に頷きマシユをこちらに引き戻す。

「先輩!何か考えが!」

「ああ!マシユ、マジンガーをここに呼び出すぞ!」

「ええ?!こんなところで出したら生き埋めになっちゃいますよ?!」

「大丈夫！出すのは本体じゃない！」

そして立華はマシユに耳打ちするとわかりました！と答え
すぐさま準備を始める。

ネロ達もその作戦を念波を通して聞き、そのために動き出
す。

「おいボウヤ！アンタ一体何を始める気だい！」

「ドレイク船長下がって！破片がとびちるよ！」

クー・フリーンは作戦を聞いたと同時に迷宮の壁一面から蔦
を生やした。

「いまだ皇帝！蛇の嬢ちゃん！」

「わかった！」

「ええ」

二人はその蔦に炎を浴びせるとすぐに燃え上がり、迷宮の
中を煙で覆い隠す。

「うがあああッ!!」

前が見えないことで苛立つアステリオスは、足元の蔦のせ
いで走りにくそうにしている。

アステリオスは斧を振り回すことで周りの煙を払い始める。

しかし次の瞬間

「マシユー！いまだ！」

「はい！飛ばせ鉄拳！」

ロケットパアアアンチ!!!」

アステリオスの前に巨大な腕が指を広げ物凄い勢いで迫ってきた。

「があああッ?!」

腕はアステリオスを掴むとそのまま迷宮の壁をぶち抜き続け、10枚目ほどの壁のあたりで掴んだまま止まっていた。

目を大きくしながらその光景をドレイクは見つめる。

そんな中立華の声が響く。

「動きさえ止められれば倒す必要はない。Zの腕だけ転送して掴めばもう動けないだろう」

立華は向こう側から操作をしてもらい、マシユの盾を通してロケットパンチだけをアステリオスの前に転送したのだ。

倒すとなると迷宮ごと吹き飛び大惨事になるが、マジンガーの怪力で動きさえ止められればあとはどうとゆうこともない。

迷宮内という閉鎖空間だった事も幸いし、立華達は見事にアステリオスを拘束したのだった。

―続く―

迷宮「後編」

「このでっかい腕もアンタ達の時代のもんなのかい？」

迷宮での戦いでバーサーカー（アステリオス）を押さえ込んだ立華に、ドレイクは不思議そうに呟いた。

「いや、まあ……一応そうだよ」

「はー、未来ってもんはわからないもんだね。あのデカブツを押さえ込んだりなんて……」

アステリオスは今もマジンガーの腕から逃れようと暴れている。
しかしガツチリ抑えられているせいで逃れられる気配はない。

「ヴヴヴヴヴヴヴヴヴガア……！」

「こんなところで倒す戦いなんかすれば俺たちも生き埋めになってしまう。ならば動きさえ封じれば何の問題もないってわけだ。」

「第1特異点でクロー・フリーンさんがアーチャーを押さえ込んだ技を真似したんですね」

「なるほどな。確かにあの腕なら動く事は出来ねえな……」

立華達はマジンガーの腕の近くまで行くとアステリオスをみる。

このまま押さえ込んでる間に通りすぎよう。

そう考えた矢先にネロがある事に気づいた。

「……………む？」

「どうしましたネロさん？」

「いや、マジンガーの腕はどうするのだ……………？」

「何って押さえ込んでるんだからそのまま……………あ」

現在マジンガーの腕はアステリオスを押さえ込んでいる。

このまま脱出しようと考えていた立華はマジンガーの腕をどうやって回収するか考えていなかった。

もし回収したらアステリオスはそのまま襲いかかってくるだろう。

しかもここは迷宮とはいえ地下であるのでこのままアステリオスを倒せば自分達は生き埋めになる。

しかし結界を解くにはアステリオスを倒すしかない。

「……どうしよう？」

「どうか動けなくなつた者に集中攻撃というのもあまり好きじゃないねえ……」

立華達はここで途方にくれた。

このあとどうすれば……

そんな考えが全員の顔に浮かび上がってきたその時

「アステリオス?!」

誰かの声が響いてきた。

「ちよつとーもうわかつたわよ！私がついていけばいいんでしょ！煮るなりなんなり好きにすればいいわ！」

「……さっさと帰りましょう。道案内は任せなさい。」

迷宮の壁から現れたその少女はアステリオスの前まで来ると立華達にそう言い放つた。

明らかに何か誤解しているような様子だったのでマシユが声をかけようとして、ある事に気付く。

どっかで見たことある。

具体的に言うとなセプテムあたりで。

「ステンノさん？」

「あの島の女神ではないか？」

「ほんとだステンノだ。ここで何してんの？」

その質問に彼女は少し驚いた顔をして立華達に言った。

「あなた達私（ステンノ）に会ったことあるの？」

「あれ？違うの？」

「私は女神エウリュアレ。なに、そんな事も知らないで追い回してたの？」

呆れるように呟くエウリュアレに立華は言葉をかける。

「そもそもなんか勘違いしてない？」

「勘違い？・・・ていうか貴方人間じゃない」

「俺たち別に君を追いかけてきたわけじゃないぞ」

「・・・はあ？じゃあ一体どこの誰よ貴方達」

その質問にマシユは説明を始める。

自分達は人理を修復しにきた者である事。

ドレイクと仲間になってこの島に来た事。

地震のあと島から出ようとしたら結界によって船が動かなくなった事。

ステンノに関しては前の特異点の島で預かりものを受け取った事。

全てを話し終えた時エウリュアレは納得したように呟いた。

「そう・・・貴方達がそうだったのね。通りでその腕からあの方の力を感じるわけね」

「エウリュアレさんはなぜアステリオスに結界を？私達はそれを解こうと考えてここまで来たのですが・・・」

「そうだよ。こちとら出航出来なくていい迷惑だよ」

その言葉にエウリュアレは訳を話し始める。

「別に貴方達を閉じ込めた訳じゃないわ。あれは外から来る連中を防ぐためのものだったのよ」

聞く所によると彼女はとある海賊から逃げてきた所をアステリオスに出会ったらしい。

しかしその海賊があまりにしつこく追って来るため、島全体に结界をして外の連中からみを守っていたという。

「そうだったのですか。ですが解除していただかないところからも立ち往生で……」

「……うん、なら仕方ないわね」

そう言うとエウリユアレは割とあっさり承諾をする。

ドレイクは意外そうな顔でエウリユアレを見た。

「おや、意外にあっさり納得したね」

「簡単な足し引きの問題でしょ」

「貴方達が外に出るにはアステリオスが死ぬか结界を解除するしかないんだから。だったら解除する方がマシ。……一人になるよりは、はるかにね」

「……なるほど。いいね、うん、気に入った」

ドレイクはそう言っつて少し考えると顔を上げ、エウリユアレ達に質問した。

「アンタ達、よかったらアタシの船に乗らないかい？」

「……は？」

「アタシはね、面白いものが好きなんだよ。世界一周とか、冒険とか、地下迷宮とか、怪物とか、世の中には面白いものばかりだ！なんでも面白くもんじゃないよ。金目のものなるつてのが世の常なんで海賊に落ち着いちゃったが、まあそれはそれだ」

「アンタ達は金目の匂いがする。福利厚性は期待しないで欲しいけど給金なら弾むよ」

その言葉にエウリユアレは驚いた顔をする。

自分だけならまだしもまさかアステリオスも一緒に誘わ

れるとは思ってもいなかった。

「でも……いいの?」

「ああ! あんだけタフで体力あって、おまけによく見りやいい男だ! こんな人材逃したらそれこそ笑いや者になっちまう!」

そう言うのとドレイクは立華達の方を見て質問する。

「アンタ達も構わないだろう!」

「ああ、俺たちは特に問題ない」

「はい。エウリュアレさ間接的とはいええ、我々の事もご存知なので特に問題はありません」

立華達もこれに頷く。

これから先にもどのくらい敵の戦力が来るのか分からない以上仲間が増えることには越したことはない。

立華達の反応を見てドレイクは人の良い笑顔でどうだい?、と聞く。

「……アステリオス。貴方はどうする?」

「行く」

「……いいの?」

「おまえ、が、いく、なら、ついていく。ひとり、は、さびしい」

その答えにそう……と呟くとエウリュアレは頷いた。

「……なら、いいわよ。船に乗ってあげる。それにそこ人間があの方の言っていた者なら、どういう者なのかも知りたいし……」

そう言うとエウリュアレは、ドレイクに色々注文し始める。それに少し困った顔を浮かべるドレイクを見てマシユが呟いた。

「……先輩」

「ん? どした?」

「私、ドレイク船長が世界一周出来たの、すこし納得出来た

気がします」

その言葉に立華は確かに、と頷くとネロ達と共にドレイク船長へ近づくのだった。

―続く―

おまけ

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「アステリオス?どうしたの?」

「うぐ・・・・・・・・そろそろ、はなして、ほしい・・・・・・・・」

「「「「「・・・・・・・・あ」」」」」

そういえば掴んだままだった。

―完―

海の形

「するつてえと何かい？アンタ達はこの魔法のジョツキーーいや、この聖杯を回収しに来たど？これがあれば自分の国に帰れるつて？」

夜になり立華とマシユはドレイクの元に来ていた。

用件はドレイクの持っている聖杯を何とか譲ってもらおうと交渉するためだ。

「・・・はい、一応そういうことになります。」

マシユは言いにくそうにそう呟いた。

「ふーん。まあアンタ達に負けたのは確かだし、命以外はくれてやるつて言ったしね。」

そういうとドレイクは胸から聖杯を出すと立華に投げ渡した。

聖杯は立華の腕に収まるとドレイクは言う。

「はいよ、受け取りな。遠い時代から来たんだろ。遠路はるばるご苦労さん」

「あ、ありがとうございます。聖杯を回収したのでこの時代は解決ー」

「・・・いや、やっぱりしないんじゃないか？」

「ですよね・・・」

そう言つて頭を下げる2人。

よく考えたら聖杯を受け取った時点で自分達の体が消えていくはずなのでここに在る時点で事件は解決していない。

『多分その聖杯はこの時代にもとあつた聖杯なんじゃないかな？』

『レフ・ライノールが配置したと思われる聖杯。それは七つの人理定礎を乱している。でも、この海にはそれ以外の聖杯があつた。ドレイク船長はその聖杯に認められた人物だ』

「じゃあこの海がここまで乱れてるのつて二つの聖杯がきつこうしてるからじゃないか？」

『多分ね。世界を救ったドレイク船長の正しい聖杯とレフ・ライノールのこの時代に蒔いた聖杯。だからドレイク船長がいる限り、この時代は崩れない。その代わり元の形にも戻らない。元の海に戻すにはーいやはり、レフの聖杯を回収するしかないだろう』

「なるほど、最終目標は変わらないんだな」

すると話を聞いていたドレイクが立華に質問する。

「そーいやアンタ達何と話してるんだい？あれかい、小人でも飼ってんのかい？」

「小人・・・いや、俺たちをサポートしてくれるロマンって仲間だよ。俺たちしかこの時代に来れないからここにはいないけど」

その言葉にドレイクはふーん、と呟くと立華達は答える。

「ドレイク船長、この聖杯は返すよ。これは俺たちが探しているものとは少し違った。そしてもう一つ頼みがあるんだがこれとは違うもう一つの聖杯を探すを手伝って欲しい」

「はい、それを回収しなければこのままではこの海は永遠にこのままです」

「お宝をあっさり返されるのは初めてだね。しかしその物騒なこと・・・本気かい？」

「マジだ（です）」

ドレイク船長はそのあまりの事態に言葉をなくす。

冒険好きな彼女からすればその事実はとんでもない事なのだろう。

『僕からも頼みたいM.S. ドレイク。君は君の時代を取り戻さなくてはならない。君の側にいるマシユと立華くんはこういう事態を解決するための存在、君の言うところの「無敵の人間」たちを幾度と打倒したプロフェッショナルだ』

「なるほどね。ロマンとか言ったか？よくわかったよありがとう」

ロマンはどういたしまして、と答えると再びドレイクに聴く。

「それで、返答は？」

「こちとらもともと協力するつもりだったさね。いくらあたし達でも奴らを相手にするのは骨が折れるからね」

「ドレイク船長……！ありがとうございます！」

「は、あ、でもこんな海だと大してお宝もあつたもんじゃないのかねえ。」

ドレイクはしけてやがる、と言うように息を吐く。
しかしそこにロマンが待ったをかける。

『いや、あるかもしれないよお宝』

「え、あるの？」

『うん。良きにつけ悪きにつけ、大航海時代とは世界をひとまわり広げた、不可避の出来事。未知の海や見果てぬ水平線の向こうに夢を託す。そう言った思念が集結してできたこの海なら財宝があつても不思議じゃないね』

その言葉を聞いたドレイクは顔を上げ口元に笑みを浮かべ言う。

「つまりあるんだね?!船に詰めないほどの金とか銀とか香辛料とか!」

『その可能性は充分あるよ。このドクターロマンが保障する』

「………たまらない。燃えてきた、燃えてきたよ!よし、野郎ども、まずはしこたま飲むよ!」

「まだ飲むんですか?!」

「当たり前よ!明日からの航海はこれまでにない無理難題だ!生きて帰れる保障はないからしこたま飲むんだよ!」

「金銀財宝!香辛料!美味しい酒や未知の冒険があたし達を待ってるよ」

そう言うってドレイクは仲間達の元で再び酒を飲み始める。

マシユと立華はしばらくボーゼンしていると不意にクスリと笑って、酔っ払いやネロの唄を聴きグロッキーになったもの達の元へ看病をしに行くのだった。

―続く―

おまけ

「そういえば先輩。お宝があると聞いてもあまり驚きませんでしたね。先輩そう言うの好きそうなんですけど……」

『あ、確かに。男の子だけとそういうワクワクするのはあまり興味がないのかな?』

「……確かにそういうことは好きだけど……」

「?」

「ほら、前回形のある島でさ……」

「……あー、」

『確かにあの剣を見た後ではそこの財宝ではなびかなくなりかもねえ……』

「あれほどのものはなかなかないでしょうしね……」

おわり

黒髭「前編」

アステリオスとエウリユアレを連れて立華達は、船のある砂浜に戻ってきていた。

「しかしお主は本当にあの女神とそっくりだな」

「ええ、まるで双子のようですね」

ネロと清姫はエウリユアレの顔を見てそう呟いた。

確かに彼女は立華の目から見てもとてもそっくりで、仮に並んだらどちらがエウリユアレでどちらがステンノなのか分からなくなるだろう。

「そんなの当たり前でしょう？ 私達はもともと「完成された女神」として一緒に生み出された者。だから私は「ワタシ」でもありワタシは「私でもあるの」

「なるほど。わからん」

「先輩。つまり分身のような事では？」

「マシユ頭いいね」

なるほどなるほど、と頷く立華を見てエウリユアレは思う。

本当にこの人間達あの方が言う者なのかしら……汗と。

「ま、それはともかくだ。早速その結界とやらを解除しておくれよ。」

ドレイクはエウリユアレにそう言うと、彼女はアステリオスに結界を解くように言った。

「わか、った」

アステリオスはそう呟くと大きく息を吸い、辺りを揺らすほどの大声をあげる。それと同時に何かが崩れるような音が響き結界は解除された。

「もう、大声上げるなら最初に言っとくれ！」

「うはー、すごい声だ。下手したら鼓膜が吹っ飛ぶな」

結果が解除された事で動くようになったので、立華達は早速船の上に登る。そして海賊達がアステリオスを見て騒ぎ出す。

「デカツ!? デカい上に、コワツ!?？」

「え、姐御☒この二人も連れて行くんすか?!」

「なあにが怖いだ！歴戦の海賊だろうが、アンタ達！そうだよ、この二人は客人だ。名前はえつと・・・?」

「覚えなさいよ。エウリユアレ。それからこっちはアステリオス。一応言っておくけど、私達はあのマシユって人間と同レベルの存在だから」

エウリユアレはそう言っただけで海賊達に手を出したら殴るわよ、と伝えるとドレイクの案内された部屋へアステリオスと共に入っていった。

「そんな攻撃的な・・・」

「いいえ、淑女たる者このような時には釘を刺しておくものですよ」

「おお・・・清姫よ、怖いぞ」

「女性って怖いね兄貴・・・」

「いや、あの嬢ちゃんが特別なんだろう・・・」

清姫は口の端から炎を少し灯し笑顔で言う。側から見たら怖い。すごく怖い。

「よし、そんなじゃあ立華達も乗ったね。それじゃあ出航だ！」

ドレイクはそう言うのと帆を広げ舵を回して、船の船体を沖の方に向けた。とりあえず無事に動いたので立華はため息をする。

「やっと動いた。しかしこの特異点は本当に色々な出会いがあるね」

「確かにそうですね。と言うよりもキャラの濃い方が多いのかもしれない」

やはり英霊は個性がないとなれない者なのかもしれない。そう考えると立華とマシユはそつと自分の陣営を見て、大変だなあ……と呟くのだった。

「なあ、ちよつといいか?」

立華はしばらくしてエウリユアレのいる部屋をノックした。中から歩く音が聞こえ、しばらくすると彼女がドアを開けてこちらを見る。

「何よ。こっちはずつと迷宮の中に居たから疲れてるんだけど?」

不機嫌そうにこちらを見るエウリユアレに立華は少し迷った後質問した。

「いや、君とステンノが言っていた神様について聞いたんですけど……」

「……」

しばらく無言で見つめた彼女はゆつくりとドアを閉め始めた。それを見た立華はちよ、ちよつとーとドアに手をかける。

「何よ。私から貴方に言うことなんて何も無いわ。」

「でもさ、気になるんだよ。　なんでその神様は俺たちがあの島に来るのを知ってたのか。なんであの宝石を渡したのか。そしてその神様は何者なのか。少なくとも、俺はその神様と話した事はないし、会ったこともない。おんなじ力は持つてるって聞いたけど・・・」

そう言つて疑問符をあげる立華。

当然と言えば当然である。　見ず知らずの神様が過去で自分たちを待っていて、その力を託すなんて気にならない方が難しい。

前回の形のある島でステンノに聞こうと思つたが、涙を流すその様子を見てとてもじゃないが話せる雰囲気でなかった為結局何も聞かぬまま帰つてしまった。

「そりゃありがたいがたかつたけどさ、何も知らないままはいありがとうございますとは受け取りずらいだろ」

「・・・そうね・・・」

エウリユアレはしばらく考えた仕草をすると再びドアを閉めてしまった。

「ちよーおーい！」

「貴方があの方について知りたいのなら、せめて全部終わつてからにしないで。そう簡単に話せる事じゃないのよ」

「で、でも「いい加減にしないとアステリオスぶつけるわよ」「りつか、えうりゅあれ、かおこわい。」わ、わかつたよ」

立華はドアの前から離れるとマシユ達の元に行く。

「あ、先輩どこに行つてたんですか？」

「ああ、エウリユアレ達の言う神様の事について聞きに行つただけけど何も教えてくれなくてさ・・・」

「そう言えばステンノさんから、その神様の話を聞いてませんでしたね」

「剣の事とか泣いてた事とか色々聞きたかつただけど・・・」

そう言うと立華は頭を傾げる。

するとそこに清姫が立華の背中からぬうツと出てくる。

「旦那様。あまりその神様の事について、えうりゆあれさんにお聞きにならない方がよろしいかと……」

「俺はたった今君に聞きたいことが泡のように思い浮かぶんだけど」

立華の声を無視して清姫は続ける。

「あの目は誰かを見つめている目です。何処かへ行った方の背中をずっと見つめ続ける瞳……それが私にはよくわかる」
そう言っただアの方を見つめる清姫。

その目はまるで鏡に映る自分を見つめるかのような光を灯していた。

「……てか割とマジでどこから後ろにいたの？」

「やっと動いた、とおっしゃられていた所からですわ旦那様♡」

「あの時俺海を背にしてただんどだけど?!」

「えうりゅあれ、おこっている?」

「……大丈夫よアステリオス。少し昔の事を思い出しただけ」

エウリユアレはそう言ってアステリオスとは別の方向に寝返りをうつ。自分達はあの約束の後、心を閉ざした妹に飲み込まれてその生を終えた。だがこうして受け取った者がいると言う事は約束は果たされたという事だ。

私（ステンノ）が判断したと言う事は間違いではないのだろう。

しかし、やはり納得のいかない部分があった。

「……どうして、会いに来てくれなかったの……」

そう言ってエウリユアレはそっと目を閉じ、意識を夢

の中へと落として行くのだった。

「姐御！前方に船一隻！」

あれから数時間たって、マストの上にはいた海賊が突如望遠鏡片手に声を上げた。その声を聞いたドレイクはすぐさま意識を向けその部下に聞く。

「海賊かい?!」

「そうです!...ああ、あれだ。あの旗だ!姐御!あの船、俺たちをしきりに攻撃して来た連中と同じ旗を掲げてます!」
ドレイクはそれを聞くと身を乗り上げて部下の刺す方向を見つめる。立華達はその様子を見て戦闘態勢を整えようとした所で、忘れていた声を聞く。

『マシユ?!良かった、やっと通じたか!一体そつちで何がおこっている?!』

「あ、ドクター久しぶり。なんか全然忘れてた」

『え、もしかして忘れられてたのかな僕!?!みんなのロマン、頼れるロマン先生ですよ?』

「先輩、ドクター、後にしてください!」

マシユはドクターに相手の旗を解析するよう頼み、盾を構える。ドクターも送られた画像を元に当てはまる物を探しだす。

「また戦闘か?鯖しか釣れなくて飽き飽きしていた所だ」

そこへ先ほどまで釣りをしていたクー・フリーンが近づく。

その時ロマンから解析結果が送られて来た。

「出来たドクター!」

『ああ!その旗は伝説の海賊旗だ。おそらく史上最高の知名度を誇る海賊だ!』

「史上最高の...知名度...まさか!」

『そう、黒髭だ!真名はエドワード・ティーチ!気をつけるんだみんな!』

戦闘態勢が張られる中ドレイクの声が響く。

「あー!あいつ!あいつだ!アタシの船を追いかけ回してた海賊!」

「ここであつたのが100年目だ。水平線の彼方まで吹き飛ばしてやる!」

苛立った様子のドレイクに周りの海賊が震える。そして船はお互いの姿が目視出来るほど近づいた。

「!そこそ……」

「?……女神さま何してんの?」

「いいから黙つときなさい」

「おい、聞いてんのかそこの髭!」

相手の船の船長らしき男にドレイクは叫ぶ。

髭の男はこちらを見るなりドレイクに言った。

「はあ?」

B B Aの声など一向に聞こえませぬが?」

「—————は?」

瞬間空気が凍った。

具体的に言えばこちら側の空気が凍った。

「……え?」

「おまえ、今、何、言った?」

「だーかーらー! B B Aはお呼びじゃないんですう。何その無駄乳ふざけてるの?」

「まあ傷はいいよ? イイよね刀傷。そういう属性はアリ。でもね、年齢がね、困るよね。せめて半分くらいなら、拙者許容範囲でござるけどねえドウルフフフフ!」

それを聞いた立華は動揺するよりも先にマシユ達を盾の後ろに隠す。

(マシユ何あれ?! 英霊つてそこまでして個性確立させないとなれないの?! 完全にやばい人だよあれ!)

(……………は!?すみません、意識が飛んでいました。その……………あれは英霊なのでしょうか……………?)

(いや、絶対認めんぞ。もしあれと余が同じ存在と断言するのなら余は英霊をやめる)

(……………旦那さま? 私鳥肌が立って来たのですけど。蛇なのに)

そして言われたドレイクに全員が目を向けると

「……………」

「姐御? 姐御ー。死んでる……………(精神的に)」

(ダメね、凍ってるわ。ムリもないわね、私も最初に遭遇した時、こうなったもの)

(まじかよよく生き残れたね)

(……………ほんとに、ね)

黒髭は船を見渡しエウリユアレ氏、エウリユアレ氏はどこ?、と探している。すると盾に気づきこちらに話しかけて来た。

「ちよつとー、その盾ー。後ろにエウリユアレ氏いるんでごじやろう? 出せよー、エウリユアレ氏出せよー」

その声にエウリユアレはビクツとなつて腕を摩る。

確かにあれは逃げるよなあ……………。立華はアステリオスの隣に立ちマシユ達を隠す。

「……………撃て」

「はい?」

するとドレイクはゆらりと体を揺らしながら部下に言う。

「大砲」

「あ、姐御?」

「大砲、ありったけ、全部、いいから撃て。さもないとアンタ達を砲弾がわりに詰めてから撃つ」

「ア、アイアイ……………ママ!」

そういうと部下の海賊は周りに指示を飛ばし、大砲に火をつける。そんな様子を見ても黒髭は余裕の表情を崩さない。

「あれ、BBAちゃん？おこななの？げきおこ、なの？ぷんすかぷん？」

「船を回頭しろッ!!あんのボケ髭を地獄に叩き落としてやれエエツ!!」

怒髪天!と言う様にドレイクは頭に血が上っている。船はそのまま方向を変え大砲の砲身を黒髭の船に向ける。

「あらやだ怖い。んー、ブラッドアクス・キングさーん」

黒髭は近くにいたサーヴァントに話しかけると指示を飛ばす。

サーヴァントは頭に牛の様なツノが生えており、黒髭と同じ様なコートを着ている。そして右手には血管の様な委託が施された戦斧（トマホーク）を持っていた。

「ちよいとBBAからあれ取ってきてくれない?その間に拙者はエウリュアレをペロペロする人類の義務に勤しんでくるから!」

「……はあ、船長。頼むからそれらしい態度をとってくれ。俺の方が恥ずかしくなる」

そう言うランサーのサーヴァント「エイリーク」はこちらの船まで飛び移りその戦斧を振り下ろした。

「ネロー!」

「わかった!」

空中で武器同士がぶつかる音が響く。

そして二人はドレイクの船に着地すると再び戦いだす。

「清姫と兄貴はあの二人組のサーヴァントを相手にしてくれ!マシユと俺はもう一人のランサーをやる!」

「おう、任せな!」

「わかりました！」

そう言うと二人は女海賊達に向かっていく。

「マシユー！やるぞ！」

「はい、いつでもいけます！先輩！」

そして立華とマシユももう一人のサーヴァントを相手にするために黒髭の船へと乗り込んで行った。

―続く―

黒髭「後編」

ドレイクの船で戦っているエイリークは、持っている斧を横薙ぎに振るいネロを弾き飛ばした。

「見事だ。こちらの攻撃を咄嗟に後ろに下がることで受け流している」

「貴様こそ我が剣撃をその大斧で防ぎ切るとはたいしたものだ！」

ネロはそういうと高く飛び上がり炎を刃に灯しながら切りかかった。

エイリークは斧を構えるとその攻撃を正面から受け止める。

「これを防ぎきるか！」

「伊達に王をやっていない！」

ドレイクの船に衝撃によるクレーターが出来る。

受け止めた剣の力点をずらすとそのまま跳ね上げる。

武器が上に上がったことにより、ネロは今無防備だ。

「!!」

「獲ったー！」

しかしそう簡単にやられはしない。

「私の事も忘れてるんじゃない？」

そこにエウリュアレによる弓の攻撃がエイリークの体をかする。

その間にネロは体を後ろにブリッジさせ、横を向いた瞬間地面を蹴る。

それによりその場から瞬時に離脱する事が出来た。

「隙を見せたとはいえ今のを避けるか！」

「こちらこそ！伊達に皇帝はやっておらん！」

落ちて来た剣を掴み、ネロは再び嵐の様な剣撃を浴びせた。

その一つ一つを時に体を逸らすことで、時に斧で防ぐ事で対応する。

風が吹く。

そしてお互いの一撃がぶつかった時、周りに衝撃がはしり

金属同士の擦れる音が響き武器から火花が散る。

(このままでは埒が明かな．．．そろそろ決定打を与えた
いのだが．．．)

ネロはそう考えながら剣に炎を灯す。

エイリークは炎に怯み一旦距離を取る。

その時

「なんだと?!」

ネロは剣をそのまま振り抜くと、炎は剣から離れかまいたちの様にエイリークに襲いかかった。

「だが、舐めるな!」

炎のかまいたちを防ごうと斧を振り回す。

しかしそれが間違いだった。

「今度こそ隙ありだ!」

「!!」

ネロは炎で自分の体を隠してエイリークの間をついた。

咄嗟の出来事にエイリークは反応出来ず、ネロの一撃を

もろに受ける。

「チッ!そろそろ限界か．．．!」

「まで!クッ!」

エイリークは斬られた肩を抑え黒髭の船へと戻つ

て行く。

ネロはそれを追いかけてよとしようとするが船の大砲による揺れで足を取られてしまい逃してしまう。

「仕方ない．．．!この船にも上がってくるやつら

がいる。ここは防衛に集中した方が良さようだな．．．!」

ネロはそう言う今度は敵の海賊達に向かって行った。

「大砲撃て、撃て、撃てエエエッ！」

ドレイクは部下に命じてありつたけの大砲を撃っていた。

しかし装甲の違いからかあまり攻撃が通っている様子が見られない。

「クソ、ダメです！こちらの砲弾が弾かれちまいます！」

「装甲の分厚さが段違いです！やべ……こっちきまりました！」

しばらくするとお互いの船は撃つのをやめ、その船体をぶつけ合わせる。

轟音の後黒髭の海賊達はドレイクの船へと乗り込んでくる。

「チツ、まったく！撤退するしかないか……！」

「この状況で逃げられますか!？」

「やるしかないだろ！砲弾、再装填！煙玉を使う。煙幕張りな！」

ドレイクの言葉にマシユは問いかける。

そこへ先ほどまで戦っていたランサーが隙を見

て仕掛けて来た。

「よそ見してていいのかな〜」

「マシユ！危ない！」

「……………ッ！」

盾と槍のぶつかる音が響く。

マシユはシールドバツシュを放とうとするがランサーは寸前で躲し再び槍を振るう。

「さっきからしつこい、あの、男……！」

「一撃一撃が受け流されてマシユの攻撃が通らな

い……!!」

マシユの放つ攻撃は空振りランサーの攻撃は一つ一つが確実にこちらを消耗させてくる。

シールドという防御に徹底したクラスであってもこのままでは長く持たない。

「はっはア！背中見せて「甘い！」ウゴアア?!」

背中から迫って来た海賊を足払いでバランスを崩し、そのまま海に突き落とす。

なぜか前回の特異点から明らかに身体能力が上がっている立華は、並みの兵士程度なら複数相手でも立ち会えるほどになっていた。

「先輩！あまり無茶は！」

「へえ……手っ取り早くマスターを始末すればどうにでもなると思っただけどねエ……。なかなかいい筋してんじやない?」

そう言つてランサーはマシユを盾ごと蹴りあげるとその右手の槍を投げつける。

しかしマシユは盾を横に振り回し弾き飛ばす。

「そう簡単にやられません！」

「なるほどなるほど。でもこの程度で潰れるようじゃ生かしておく価値もないしな。せいぜい「お前こそよそ見してんじやねえか?」ッ?!」

急遽二人組のサーヴァントを相手にしていたクー・フリーンが火の玉をランサーに向けて放つ。

「兄貴！あの二人組は?!」

「ああ、蛇の嬢ちゃんのだ炎で足止めしてこっち戻って来た……。そろそろ難しくなりそうなんだな」

「旦那様！お怪我はありませんか?!」

立華は少しずつ動いている船の様子を見てマシユ達に一旦戻るよう伝える。

全員が揃ったことを確認したドレイクは部下に帆を広げる

よう命じる。

「これでよし！帆を開け！面舵一杯！こいつらから離れるぞ！あの図体じゃ速度はこっちの方が上だ！」

「わ、わかりやした！」

風邪を受けドレイクの船は動き出す。

しかし二人組のサーヴァントはそう簡単には逃さない。

「あ、船同士を繋いでいた綱が全部うたれた。撤退するつもりらしいね」

「ふうん、銃の腕は私と互角みたい。さすがフランシス・ドレイク。生きて世界一周を成し遂げた最初の人物だけあるかしら」

「ーーさて、このままではさすがに悪いし。少しは手伝いますか」

「真面目だねアンは」

「うふふ。私も服を焦がされ黙っているほど、お人好しではありません」

「海賊だからね」

「ええ、海賊ですから」

そう言っ身の丈ほどの銃を持つサーヴァント「アン・ボニー」はドレイクの船の底に照準を合わせその引き金を引いた。

轟音がドレイクの船に響き渡る。

「く……！何が起こった!?!」

「船底で爆発が起こったらしいです！」

「なんだとお……!」

それを聞き立華は船底の方を見る。

その場所からは煙がモウモウと上がっており、このままでは水が入って来て沈没するのは目に見えていた。

「駄目だ、追いつかれる。船底の穴を塞ぎにいく！アタシが行くからアンタ達は船のバランスを取れ！」

「無茶言わないでください！おい、全員姐御を止めろ

！」

海賊達がドレイクの体を抑える。

しかしドレイクはそのまま船底の穴を塞ぎに行こうとし、部下たちを引きずる。

立華はそれを見てマシユとドクターに言った。

「このままじゃまずい……。マシユ！盾を黒髭の船に向けてくれ！」

「あ、先輩！ロケットパンチですね！」

「ああ！ドクターも操作をよろしく頼む！」

『良し！任された！』

黒髭の船では本人がこちらをバカにするように煽っていた。

「おいBBAA。このままだと追い付いちやうぞ。その前にエウリユアレと聖杯落としてけよ」

「ねえアン？やっぱりさっきの船に寝返ってたほうが良かったんじゃない？」

「本当ですね。そうすればこんな女性に痴漢でもやるような声を聞かずに済んだかもしれませぬしね」

「拙者の辺りが酷すぎてつらい……。しかしこのままだと楽に済みそうでごじやるなw w w」

そう言うと黒髭は身を乗り出してドレイクの船を見る。

そしてふと、あの大きな盾がこちらを向いている事に気付いた。

「？一体何をし『ロケットパアアアアンチッ！』ファ?!」

すると次の瞬間盾の方から黒い巨大な腕がこちらに向かって飛んで来た。

「な、なんじゃありやあああああ!?!」

「！ヤバイ……。！」

腕はそのまま黒髭の船の横に直撃して船体を大きく傾ける。バランスを崩した船は横に倒れそうな勢いである。

「ちよつとちよつと?!何あれ?!なんでロボットの腕?!ファンタジーしてたらいきなりロボットゲーが割り込んで来たんですが?!」

腕はそのままドレイクの船の方に飛んで行き、指を開いて船を押し始めた。

船は凄まじい勢いで進んで行き、黒髭達が船体を元に戻す頃にはもうすでにドレイクの船と共に姿を消して言った。

「ポカーン……」

あまりの出来事に困惑していたのか、黒髭達はそのまま腕の消えた方向をジツと見つめ続けていた。

―続く―

船の補修

「二度とあんな事はやめておくれよ……」

ロケットパンチの推進力で浜まで戻って来たドレイクはそう呟く。

いくら海賊とはいえあのスピードで動くのは初めてらしくみんなグロッキーになっていた。

「アンタ達は平気そうだね……」

「まあ慣れてますし」

「こんなものになれるなんて普段どんな事してんのよ……」

「め、が、まわ、る……」

ドレイク達は立華達をドン引きした目で見ている。

しかし無理もないかもしれない。

対象に穴を開けるほどの衝撃を推進力にしたのだ。

無事に岸までたどり着いただけマシだと思う。

「しかしま、水が入る前に沈まなくて良かったぜ」

「ドレイクさん、船の方は……」

「駄目だね。とてもじゃないが動けやしない。でもあの腕で船を海岸まで運んだおかげで、修繕作業だけはなんとかかなると思う」

「だが材料が足りない。この島の木を切って材木にするしかないか……」

そう言つてドレイクは森の方を見る。

森からは鳴き声とともに自分達を襲うために魔物が複数寄って来ている。

「とりあえず状況を立て直したいです」

「やれやれ、じゃああいつら片付いたらあの大ボケ海賊

に一発かますためにどうするべきか、一つ相談するよ！」

ドレイク達は襲いかかる魔物に船を護る為に、武器を構えむかえ討った。

「船の性能にそれほど違いはなかった。問題はあの装甲の厚さかねえ」

「はい、こちらの船に配慮したとはいえロケットパンチの衝撃を受けて沈まない辺り宝具としての能力でしょうか。．．．ドクター、黒髭について詳しく教えてください」

ドレイク達は魔物を倒しながら森の奥に入り、材木を集めていた。

そしてロケットパンチを食らったのにもかかわらず甚大な被害を免れた黒髭の船について考える。

『ああ、黒髭はそこにいるフランシス・ドレイクの100年後に生まれる海賊だ。本名はエドワード・ティーチ。カリブ海を支配下に置いた海賊の一人。船を襲う際、抵抗しなければ無傷で解放したが抵抗すれば皆殺し。ナツソーを拠点とした彼はヴァージニアからホンジュラスまでの海を愛用の船で荒らしまわった』

「愛用の船って？」

『女王アンの復讐号』という。彼はそこに三百人の部下を乗せた。その船を中心に大船団を築き上げた彼は、まさに最強最悪の海賊の一人として君臨したのさ』

『．．．．．そんな大海賊が、ねえ。まさか、ねえ』

気持ちには解る。

歴史的大海賊がまさかあんな事になっているとは誰も思うまい。

というかあのネットスラングは聖杯の知識だろうか。だとしたらなんと罪深いのだろうか。

「ロマンよ、その先はいい。あまり思い出したくない」

「あれが精神汚染というものでしょうか……」

「二人とも顔色が……」

「海賊つてのはみんなクズだが、その中でもさらにクズ。キングオブクズ。それがあれ」

「みんな、すまない。同じ海賊として本当にすまない」

ドレイクが謝りながら凄じ顔をしていた。

あまりにも酷すぎる同業者に、自分自身も申し訳無く思ったのだろう。

「そ、それはそうとドクター。宝具として可能性のあるエピソードとかない？」

空気を変える為にドクターに話しかける立華。

あれ以上考えるのは体に悪そうだ。

『いくつかあるが……やはりあの船そのものが宝具という可能性が一番高いと思う。戦闘中一番魔力の波動が大きかったし』

しかし見た所こちらも聖杯の力によって宝具並みの威力を出していた。

なのにもかかわらず明確にあちらの船の方が波動が強いというのとはなぜだろうか。

「あとなんでエウリュアレを攫おうとしたのかも気になる。聞いたところによると聖杯はついぞぽかったし……」

「……ただの趣味じゃねえか？」

クー・フリーンの言葉に再び嫌な空気が走る。

エウリュアレ本人なんか絶望しきった顔でアステリオスの頭に抱きついている。

とにかくこのままでは黒髭の船には勝てない。

なんとか奴の攻撃から船を守ればいいのだが……。

「船の上にZが出せればいいんだけど……。」

「先輩さすがにそれは……。」

いくらなんでも沈んでしまう。

30メートル近くの金属の塊だ。

こればかりはロケットパンチを撃つことしかできない。

そこまで考えていると、再び遠くから獣のような声が聞こえてきた。

「また来たか……。清姫？お願いできる？」

「はい、お任せください」

そう言うとき清姫は扇子に炎を灯す。

すると木の陰からワイバーン群が現れ立華達に襲いかかる。

「ハッ!!」

清姫の放った火の玉は群に直撃し、けたたましい鳴き声と共に地面に沈んでいった。

何匹か逃れたワイバーンもいたが、すぐさま清姫が炎を出した事で地面に落ちる。

その様子を見ていたネロは何かを思いつく。

「ム？」

「ネロさん？どうかしましたか？」

「イヤな、何か思い出せそうな感じがしてだな……。」

「へえ、これが本物のドラゴンかい！ホントにトカゲみたいだねえ！」

ドレイクは落ちたワイバーンを見て驚いている。

そして角や牙を触っている様子を見て、ネロが声をあげた。

「そうだ！こいつらを材料にすると言うのはどうだ！清姫の炎を受けても割れてない鱗を見るに衝撃には強いのではないか！」

「……ネロ！それだ！」

「は？龍でアタシの船を補修するってこと？」

ネロの考えに立華は声を上げる。

確かに清姫の炎を受けてヒビ一つ入ってない鱗を使えば砲弾の一撃も耐えられるかもしれない。

ドレイクはその提案に疑問符を上げると、今度はエウリュアレが口を開く。

「……あら、いいわね。竜種の鱗つてのは、鎧に加工すれば鋼より頑丈よ。ただ相当な力を持つものでないと加工は難しいけど……」

「うー……」

「あなたがいたわね。やれる？」

「う」

彼女の言葉にアステリオスは答える。

アステリオスはマシユのシールドバツシュを受けても身じろぎ一つしなかったほどの力を持っている。

加工にはちょうどいい。

「アステリオスさんなら問題なさそうですね。では、さっそく鱗を剥いできます！」

マシユはそう言うのアステリオスと共にワイバーンの元に向かう。

その間立華は他のワイバーンの反応がないかロマンに聞く。

「ドクター、近くにワイバーンと同じ反応はない？」

『あるよ。ここから少し歩いたところに複数の反応が見られる。船の補修ほどではないけどそれなりに沢山いるよ』

「なるほどな。だったら話は早え。下手に考え事するよか性に合ってるさね」

腕がなるぜ、と言杖を振りまわす。

船の上での戦闘ではやはり物足りなかったのかもしれない。

「よしわかった。ネロと兄貴は鱗のワイバーンの討伐を。清姫とマシユは剥ぎ取り。アステリオスと俺は船の補修を手伝うよ」

「先輩？船の補修なんて大丈夫ですか？」

その言葉に立華は大丈夫と答える。

幼い頃藤丸十歳と共に過ごしてきた彼は、妹と共に祖父の仕事や作業を真近で見してきた。

そのおかげから彼は手先が器用になり、一度作業を観たのなら大体作り出せるほどになっていた。

ネロとクー・フリーンは他のワイバーンを探しに行き、清姫も鱗を剥ぐ為に倒したワイバーンのもとへ行く。

「それじゃあアンタ達に任せても大丈夫そうだね！立華とアステリオスには後で鍛冶に会わせてやるよ！」

銃を構えてドレイクはクー・フリーン達に着いて行く。

そして立華とアステリオスも船へ鱗を運ぶためマシユの元に向かうのだった。

ー続くー

月の女神

「ごめんなさい悪気はなかったんです！どうか見逃してください！」
今立華達の目の前には弓を持った白い女性が土下座していた。

何事か分からない立華達は女性の前でオロオロしている。

「あ、あのくあなたは「一応同意の上なんです！なのでどうか雷だけは！」い、いや、だから……」

「こいつのこんな態度初めて見た……」

「ま、当たり前でしょうね」

そんな様子をクマのぬいぐるみのような生物が信じられない、と言うような顔で見つめている。

エウリュアレは唯一当然と言うような態度だったが、なぜこんな事になっているのか。

其れは今から1時間前にさかのぼる――

「あつい、疲れた、くたびれた、酒が欲しい……」

ドレイクは額に汗を流しながら呻く。

あれから鱗や素材が半分ほど集まった立華達は、竜種の反応の多い乾燥地帯に来ていた。

「だらしないわね船長は」

「アンタずつとアステリオスに任せきりじゃん……」

「いいのよ、それで。私が指示をして、彼が働くんだから」

そう言うとエウリュアレは前を向く。

アステリオスはバランスを整える為に一度少しジャンプをすると再び歩き出す。

「しっかし見当たらなくなって来たな……」

「仕方ないですよ。あんなに狩ってしまったんですから」

「でもまだ半分足りないんだよな……」

立華はそう言うと先の見えない作業にため息を吐く。

この地帯で狩り続けているせいかだんだんワイバーンが見つからなくなってくる。

そろそろ別の地帯へ、そう考え始めた時――

『みんな大変だ！ワイバーンよりも大きな反応がそこに近づいている！』

「！」

ロマンがレーダーに感知した影を立華達に伝える。

「ああ、そいつは親だな」

「親？」

クー・フリーンの言葉に疑問符を上げる立華達。

遠くをこらして見ると大きな影のようなものが空に浮かんでいるのがわかる。

「ワイバーンのような亜竜種じゃねえ。ワイバーンを生み出

すのは、その上位に当たる竜種なんだよ。親って言うよりは手下みたいなもんなかな」

影はだんだん近づいて明確な形がはつきりしてくる。
その影をみて立華は嫌な予感がする。

「ま、まさか手下であるワイバーンを倒していると興奮、または逆上するのではあるまいな?!」

「……まあ許さねえだろうな……」

「マスター……」

「やつばあれかな、ボスバトルはお約束というか……」

「私の知らない約束です、それ！ドクターお願いします！」

マシユはドクターに合図を送りマジンガーの準備を始める。

「ちよつと！アンタら戦う準備しなくてもいいのかい?!」
ドレイクはネロ達に心配そうに聞く。

その間に立華はカルデア戦闘服を装着しており、頭を守るためのヘルメットを被るとマシユを呼ぶ。

「マシユ！パイルダーは?!」

「はい！準備出来てます！」

「兄貴！パイルダーの横に！」

「おうよ！」

立華はパイルダーに乗りアクセルを踏む。

その隣にクー・フリーンを乗せ、パイルダーは空へ飛び立った。

「兄貴！奴の動きをしばらく止めてくれ！」

「任せときな！」

そういうと杖を振り地面に魔法陣を展開して宝具のウィツカーマンを召喚する。

ウィツカーマンは空のドラゴンへその身を崩し蔦植物のように全身を巻きつけている。

『エネルギーオールグリーン！いつでもいけるよ

！』

「先輩！準備出来ました！」

「よし！じゃあ行くぞ！」

マシユは盾の周りから全員を避難させてカルデ

アとゲートを繋ぐ。

「？ あなた達は一体何の準備をしているの？」

「あ、エウリュアレさん達は見るのは初めてで

したね。ならば見ていてください！」

これが先輩が、あなた達の待ち人である理由です！」

る。

マシユはそう言う盾から魔法陣を展開す

パイルダーは魔法陣の上をどび、立華はある

キーワードを叫んだ。

マジーン・ゴオオオオオオオオオオオツ!!!

すると魔法陣の中から黒鉄姿の巨人が出現した。

「な、なんじゃこりゃあああ?!」

ドレイクは巨人を見て叫び、目を大きく見開いて

いる。

エウリュアレはその姿を目に収めると信じられない、といった目で口元を押さえていた。

「よし！パイルダアアアア！オオオオオオオオ
ンツ!!!」

パイルダーが巨人の頭とドッキングすると、巨人はその両目に光を灯し、ドラゴンに向けて雄叫びを上げた。

巨大魔神見参！

ウィツカーマンによって拘束されていたドラゴンは
罵をすでに引きちぎっており、マジンガーを目に収めるとそちらに襲
いかかって来た。

「船の材料に使うもんだからな！極力無傷で倒す！」

立華はドラゴンの首元を片腕で抑え込むと、顔面に鉄
拳を叩き込んだ。

視界を潰されドラゴンは無茶苦茶に暴れまわり、その口か
ら炎を吐き出そうと息を吸う。

「そんなことさせるか！」

マジンガーはその口に腕を突っ込むと指先からロケット
パンチ用のジェットを噴射させる。

「ヒイヒイヒイトツ！フィンガアアアアアアアア!!」

己の炎以上の熱で口腔内を焼かれ悶え苦しむドラゴン
は雄叫びを上げてマジンガーに突進する。

それを首から背負い投げの容量で投げ飛ばすと辺り
に地響きが起こる。

ドラゴンは立ち上がり再びマジンガーへとその体をぶ
つけようと突進してきた。

衝撃で辺りの土が舞い、軽い砂嵐のようになっている。

それを片腕で受け止めるとマジンガーはドラゴンの頭を
両拳で挟み込み、肘の部分からロケットパンチ用のジェットを噴きだ
させる。

「悪く思ふなよ、アイアン・プレッシャアアアアアアッ!!」

ロケットパンチの推進力に挟まれたドラゴンの頭はすぐにその力

に耐えられなくなり、風船のように破裂してしまった。

マシユは慌てて宝具を展開して全員をドラゴンの肉片から守る。

頭を失ったドラゴンはその体から力を抜き、ゆっくりと地面へ倒れていった。

「いやー、マジンガーを使うまでもなかったかな？」

「いいえ。これからは船の上での戦闘がメインとなつて来ますので、余計な消耗は避けるべきです。ですので、使えるときに使った方がよろしいかと」

パイルダーから降りた立華はマシユに話しかける。

実際サーヴァントだけでも倒す事は出来る相手だったのでマジンガー相手だと余裕で勝利することができた。

「確かに、対人戦闘でしかも海の上だとマジンガーを使うのは難しくなってくるだろうしな……」

「ちよつとちよつと！アンタ達こんな隠し球があつたのかい?!アタシに教えてくれてても良かったじゃないか!」

ドレイクは興奮しながら立華に近づき肩を寄せてくる。

こいつがあつたらあの時デカブツにかましてやれたのにねえ、とマジンガーを眺めながら言う。

「なんと言うか……随分と懐かしい見た目してるのね」

「えう、りゆ、あれ?うれしそう?」

エウリユアレはマジンガーを見て少し嬉しそうな、それで

もって懐かしいものを見るような感じを出している。

「なるほどね、私（ステンノ）が渡した理由も納得できるわ……」

「あなた達の神様と言うのはそんなにもあの絡繰りとそっくりなのですか？」

「ええ、そっくりよ。あの時見た姿とそっくり」

清姫の言葉にエウリュアレは頷く。

それを見た立華は今度こそその神様の事を聴けるのではと考え、エウリュアレに話しかけようとし――

ドサツ

不意に何か重いものが落ちるかのような音が聞こえた。

立華達はその方向を見ると、そこには肩にクマのぬいぐるみをつけた白い服の女性が弓を落として立ち尽くしていた。

「サーヴァントツ……！」

マシユはとつさに盾を構えて立華達の前に立つ。

しかしそのサーヴァントはいつまでたってもその場から動かずマジンガーを見たまま立ち尽くしている。

立華はしばらく全員と顔を見合わせるとマシユと共に近づいて行く。

近くでその様子を見た立華は、サーヴァントのものすごい冷や汗を見て思わず声をかけてみた。

「あ、あのー、

すると次の瞬間サーヴァントは頭を下げて立華達の前で声を上げた。

「ごめんなさいー！」

そして場面は最初に戻る。

「えーつと、あんたは一体？」

完全に怯えきっていたサーヴァントをとりあえず立たせた立華はそう聞いた。

サーヴァントはいまだに震えており、マジンガーと立華を交互にチラチラ見ている。

「あの・・・その・・・あなたはこの方の神官？」

「? この方って・・・マジンガーの？」

そう言うとサーヴァントはコクリと頷き視線を下にさげる。

それを見ていたエウリュアレは彼女に話しかける。

「安心しなさい。その巨人はあなたが思っている方とは違うものよ」

「え、でも・・・同じ力を感じるわよ・・・？」

「彼は力を受け継いだただの人間。だからそんなに怯えなくても大丈夫よ」

その言葉を聞いたサーヴァントはゆっくりと肩の力を抜き、大きくため息をついた。

肩のクマのぬいぐるみのような生き物がその様子を見て話しかける。

「おい、大丈夫かよ・・・お前のそんな様子初めて見たぞ」

「だ、だってだって！あの時神々を全員引っ叩いて引きこもりにしたあの方そっくりなんだもん！もしダーリンとの関係がバレたらまたあの雷をもらっちゃうー！」

「だったら俺を元の姿に戻せよ……。そしたらまだ許してもらえたんじゃないの？」

「ヤダ！だってそしたらダーリン浮気するでしょ?!」

そう言っつてサーヴァントは首を振りイイヤヤと駄々をこねる。

その様子を見ていた立華はもう一度そのサーヴァントに話しかける。

「それで、あんた達は一体なんだ？ 敵か味方か？」

「ああ、自己紹介してなかったな。俺はアーチャーのクラスで召喚されたオリオン。そしてこいつが」

月の化身こと、女神アルテミスだ。

その名前を聞いた瞬間、立華達はあまりの驚きで声を上げた。

―続く―

投球

「……………なるほどねえ。大まかな事情は分かったよ」

立華達はひとしきり驚いた後現れたサーヴァント「オリオン」「アルテミス」と情報交換をしていた。

「しっかし驚きだな。まさかオリオンがさあ……………」

「俺としても召喚されたらこんな事になるなんて思っ
てなかったよ。まさかさ、召喚されたらさ……………こんな……………
こんな……………」

「生きろ」

クマのぬいぐるみのような姿で四つん這いになるオリオン。
そんな様子を見て立華は肩に手をやり同情する。

「……………」

「こつちもこつちで驚きだな。まさか女神が直接召喚されるなんて」

クー・フリーンはそう言ってアルテミスを見る。

本人はいまだにマジンガーが恐ろしいらしく、チラチラ横
目でみている。

「そんなにマジンガーが気になるのですか？」

「う、うん……………気になると言うか、落ち着かないとい
うか……………」

「マシユ、マジンガーしまっていていいよ。多分このド
ラゴンくらいの脅威はもうないと思うし」

それを聞くとマシユは魔法陣を展開してマジンガーを
カルデアに戻す。

その様子を見て安心したアルテミスはようやく普通に顔を合わせる。

「ああ、怖かった。あのお方のお説教怖いよね……」

「落ち着いた？」

「うん。なんとかね。ところであなた達はどなた？見た所人間……みたいだけど？」

「お前聞いてなかったのかよ……。此奴はようやく見つけたマスターだよ。そんでもって今回の召喚は聖杯戦争じゃないんだと」

オリオンは再びアルテミスに事情を説明する。

その間立華はマシユ達にこっそり耳打ちする。

「なあマシユ？なんか俺この一人と一頭の関係がなんか釈然としないんだが……？」

「ええ……たしかにそうですね……」

「うむ、第三者から見たら人形に語りかけるまじい者達であるからな……」

「旦那様を束縛するなどあつてはなりません」

「ん？ちよつと何言ってるかわかんないな？」

しばらくすると話し終えたのか、オリオン達はこちらを向く。

「んゝむ。ねえ、ダーリン？協力してあげたいんだ

けどいい？」

「なんだ？お前が協力的なのは珍しいな」

「ええ。だってそのリツカちゃん？に協力しないと後が怖そうだし……」

「え？協力していただけるのですか？」

その問いに首を振る二人。

ドレイクはオリオンを指で突き「フォウのほうが可愛いな。あつちのが上品な見た目してるよ」とぶつぶつ呟いている。

アルテミスはいじめないで！とオリオンを胸元に隠す。

「……ぎまめ」

「エウリュアレ？」

「なんでもないわ、行きましょう」

エウリュアレは一瞬アルテミスを見て黒い顔をし、立華達の元に近づいていった。

「へー、たしかに船に使うのは名案だな」

立華達はドラゴンの鱗を剥ぎながら、その素材を船に持っていった。

マジンガーで本体ごと運ぼうと思ったのだがアルテミスが怖がるため、結局解体してから持っていく事になった。
しかし

「え？もう充分？」

「ああ、小さいやつらだけで足りたんだとき」

どうやら補修と強化に使う素材は足りていたらしく、立華が倒したドラゴンはかなり余分になってしまった。

「どうする？せっかくだし焼いてたべてみる？」

「いや、鱗とか甲羅を剥ぎ取るのにまた手間がかつちまう。こいつは完全に大きすぎだな」

鍛治の海賊はそう言うのと右手でドラゴンを叩く。

せつかく倒してきたのに骨折りとなった事で、立華達は腰を落とす。

「もったいないなあ……。こんなに大きいのに」

「はい。どうにか使い道があればいいんですが……」

「兄貴どうにか出来ない？」

「無茶言うな。こんな代物あの大砲でも傷つくかどうか……」

そう言つて頭を掲げる立華達。

元の場所に置いてこようにもそんな事をすれば強い力に魔物が寄つて来て再び戦闘となってしまう。

すると不意に、立華の耳にクー・フリーンの言葉が耳に残った。

「無茶か……。大砲……。傷……。！」

「先輩？どうしました？」

立華はマシユの言葉に頷きドラゴンを指差した。

「いい事思いついた！」

「ウツヒツヘツヘツヒツヒツ……。フツヒユツヒユツ
フツヒヨツ……。はっ！おお、夢から覚めてしまえばハーレム
ははるか彼方」

「此処に居るのは我らが先生二人と、二人の世界を築き上
げている百合ツプルだけでごさる」

現在黒髭達はドレイクの船を探して島々を移動していた。
あの後聖杯の力により船を直した彼らは、船が消えた方向
を頼りに進んでいた。

「……いやまあ、拙者百合もイケる口ですが。いかんせ
ん、独り寝は寂しいですなあ（ちら）

そう言つて黒髭はアンとメアリーを見る。

それに気づいた二人は黒髭をゴミのを見るような目で見つめ
て言った。

「凄い、アン。この船長同衾を求めてるよ」

「好感度がゼロというよりマイナスの分際で、素晴らし
い発想だと思えますわ。ていうか、夢に私達出てませんよね？出てた
らあなたが夢を忘れるまで銃床で殴り続けますが」

「マフー。出て来たヒロインが多すぎて覚えてないですな
あ」

「……この船長、僕たちを有象無象のモブヒロインにし
たよ」

「うん♪やっぱり殺しましょう♪」

そういうとアンは黒髭に向けてためらいなく引き金を引く。
キモい声を上げながら避ける黒髭を見ながらエイリークは
ため息を吐き出す。

「せつかく自由な時間を得ることが出来たのに……。まさかこ

んな役割とは」

「まあまあそう言いなさんな。あれはあれで切れ者なんだ。そんなに悪いもんでもないさ」

船の端でヘクトールはワインの瓶を片手に語る。

もともとエイリークはバーサーカーのクラスで呼ばれるサーヴァントであったのだが、とある事がきっかけでランサー、またはライダーのクラスでも召喚が可能となった。

なのに召喚された理由がサーヴァントとはいえ少女を追いかけ回す事とは……。

エイリークはなかなか参って来ていた

それからしばらくすると新たな島が見えて来たのでヘクトールは黒髭に伝える。

「船長！次の島が見えてきたぜ！」

「エウリュアレちゃん見える?!聖杯は?!」

「今んところは見えねえなあ………ん?」

島を眺めていたヘクトールは島から謎の煙が上がっているのに気づいた。

「どうしました?」

「イヤな、なんか島から煙が上がってるのが見えてよ。多分奴らだと思っただが……」

「?そんな露骨にばれるような真似するかしら?」

「まあでもいることには変わらねえと思うし……」

ヘクトールは煙に違和感を感じ始めていた。

あの煙、なんか燃焼による煙というより土かなんかをばら撒いた見たいな煙じゃないか?

「エウリュアレちゃん結局あの島にいますのでござろう?ならば真つ直ぐ進むのが礼儀でござる!」

「アン。あの船長礼儀を語ってるよ」

「あらあら、無礼の塊のような方ですのでよく口にできませんでしたね」

それになんか音が聞こえる。

何かでかいものがだんだんこっちに近づいてるかのような音だ。

そこまで考えたヘクトールは船長に忠告する。

「なあ、船長？一旦あの島から——」

すると次の瞬間

島の森の中から首のないドラゴンが船を目掛けて飛んできた。

「「「「は？」「」」」」

「これ相手の船に投げつけられないかな？」

「こいつさ、大砲の攻撃にも耐えうるんだろ？ならば途中で攻撃されて吹き飛ぶこともないしさ、船の上までたどり着いたらあとは落ちるだけだろ？」

「サーヴァントの中にはアーサー王みたいにビームを撃つ奴もいるけ

どき、あの中にはそんな高火力の奴はいなさそうだったし。この質量を叩き込めば一網打尽に出来る」

「一発で勝負を決められる」

「坊主！見えてきたぜー」

クー・フリーリンが合図を送る。

それと共にマジンガーがドラゴンを掴み、船の方向に足を踏み出す。

それと共に少しずつ森の魔物を巻き込みながら走るスピードを上げて行く。

ちなみにマジンガーの走るスピードは軽く断熱圧縮を発生させるほどの健脚である。

そんなスピードのままドラゴンを船に向けて放ったらどうなるか？

「行つくぞオオオオオオオオオオオツ!!!」

岸までたどり着いたマジンガーはそこでドラゴンを手放す。

ドラゴンはその身を熱で真っ赤に染めながら黒髭の船に向かっていく。

船から大砲を数発放っているのが見えるがもう遅い。

ドラゴンはそのまま威力を変えることなく進み

黒髭の船を砕きながら破裂した。

―続く―

原初の海賊

「……………やって、くれやがったな……………あいつら……………」
燃える船の中で黒髭は憤怒に燃えながら呟く。

ドラゴンの直撃した船は辺りに部品を撒き散らしながら浮いていた。

部下達はほとんどが死に、アンとメアリーも船と飛び散ったドラゴンの破片に押しつぶされた。黒髭はエイリークが盾になったおかげでなんとか押しつぶされることはなかったが、腹にヘクトールの槍を突き刺され今にも座に帰りそうだ。

「はっ、まーったく派手なことすんね奴さんら……………」

「……………なるほどな……………。道理で……………裏が読めぬ相手だと……………」

ヘクトールは槍を引き抜くと共に黒髭の隠し持っていた「聖杯」を掴む。それと共に黒髭は光の粒子となって消えていった。

「まったく、馬鹿に聖杯を預ければ時代が狂うって話だったのにさあ……………。こんな事になるなんて知らねえぞ……………」

しかしヘクトール自身もドラゴンの衝突により虫の息となっており、その足取りもふらついている。最後の力を振り絞りボートを出すとその上に身体を放り出す。

そして聖杯の魔力を解放した瞬間、ボートは目的地へ進んで行く。

「本命は女神の方だったんだが……こいつはちよつとキツイかな。一旦引き上げて体制を立て直さねえと……」

ボートは進む。

傷ついた英霊を乗せて。

煙に巻かれて動くボートに、立華達は気づくことはなかった……

「兄貴、どんな感じ?」

「ああ、直撃だ。船は衝撃でバラバラだ」

海岸のそばで立華達は燃える船を見ていた。

立華の作戦を聞いた後ドレイク達は船を島の陰に隠し、いつでも飛び出せるようにしていた。直撃を受けた船がもしまだ持ちこたえていたら、そのまま追撃を行うはずだった。

しかし見た所その必要はなさそうだ。

「先輩！聖杯の回収を行いたいのので来てくれませんか?」

マシユの呼ぶ声に立華は答え、マジンガーを回収してもらいパイルダーで船のあった場所へと飛んで行く。

「しかし随分と大胆な発想でしたね……」

「ああ、俺もドレイク達に毒されて来たのかもしれ

ないな」

この作戦を提案したところドレイクから男らしい良い案だと肩を叩かれた。そしてマジンガーから放たれた神秘の砲弾は、黒髭の船をバラバラに吹き飛ばした。

これで聖杯を回収すれば今回の特異点は解決する。

そう思い船の残骸に近づくが……

「あれ？聖杯がない……」

「おかしいですね……聖杯は本来持ち主を求めため海に沈むということはないと思うのですが……」

そう、聖杯が見つからない。

本来ならば海の上であろうと持ち主を求め浮かぶかのようにあるはずなのにだ。

立華はロマンに聖杯の反応を調べてもらおうとした瞬間

『大変だ！聖杯が船にいたサーヴァントに奪われてその場所からどんどん離れている！』

「なんだって!?!」

「まさか!?!」

ロマンの言葉に二人は驚きの声をあげる。

まさかあの衝撃から生き残っていたサーヴァントがいるとは。二人は慌てて岸に戻り、待っていたドレイク達に言う。

「みなさん船に乗ってください！聖杯があの中誰かに持ち去られました!」

「なんだと!」

「!」

サーヴァント達はその声に反応してすぐさま船へと乗り出す。パイルダーは船の上へゆっくりと着陸するとドレイクの元へ急ぐ。

「へっ！海賊からお宝を横取りするなんざやってくれるじゃないか!」

「ドレイクさん!」

「わかってるよ、野郎ども！帆を張りな！」

ドレイクの掛け声に部下たちが答え、マストの上に登って

いく。

しかし立華はそれに待ったをかける。

「待ってくれドレイク！多分今のままじゃ間に合わない

！」

「はあ?!アタシの船が遅いってのかい！」

「いや、そうじゃない。ドクター！マシユ！」

「了解です！」

『またあれをやるのかい……?』

ドクターの声にサーヴァント達は嫌な予感を感じる。

ドレイクも思いついたその考えに顔を青くする。

船内のそんな様子を見てオリオンとアルテミスは頭に疑

問符を浮かべた。

「な、なんだ？何が始まるって言うんだ？」

「オリオンさん、アルテミスさん、捕まってください

い。

ぶつちぎりますー！」

「全員対ショック体」

しかしドレイクの叫びよりも早く、船はロケットパンチの推進力で凄まじいスピードで目的の方向まで進んでいった。

「にどとするなとととととととっ?!!?」

「ドレイクさん聞こえませんか!」

「失礼します。お邪魔しますねマスター」

とある船の上。

そこで薄紫の髪を杖を持った少女が金髪の男に話しかけた。男は振り向き人の良さそうな笑顔を浮かべ答える。

「おお、どうしたのかな!愛しい君よ!」

その言葉に少女は淡々といった感じで報告する。

「ヘクトール様から連絡がありました。どうやら女神の奪取に失敗したそうです」

「……はあ?」

報告を聞いた瞬間金髪の男はその顔を憤怒に染める

と近くにあつた樽を蹴り飛ばす。

「何やってんだよあいつは……この私が、誰よりも強く無敵の存在になるために必要な物を撮り損ねただあ？あの役立たずのクズが！」

樽はその力に耐えられず砕ける。その様子を見ていた少女は先ほどと同じように男に話しかけた。

「イアソン様、しかし黒髭の持つ聖杯の奪取には成功した模様です。今はそれを届けに戻ってきているとの事」

「……ふう、落ち着いた。いや、すまないね。つい取り乱してしまった。しかしヘクトールの奴手ぶらではないようだね」

壁に手をついて金髪の男「イアソン」は少女に再び笑顔を向ける。そんな変わり身を一切きにする様子もなくイアソンは少女に語りかける。

「しかし君も疲れているようだね。大丈夫かい？」

「なにしろ長時間この船の動力炉になっているんだ。辛くなったら言つて欲しい。ほら。ほんの少し、ほんの少しぐらいなら休憩も考えてあげるからね」

「あ、ありがとうございます……でも大丈夫です、そのお気持ちだけで頑張れます！」

少女の言葉を聞きイアソンは満足そうに頷く。

「それではイアソン様、ヘクトール様を迎えに行きましょう。どちらにしろ次のアレを探しに行くには聖杯は必要ですから」

「我らアルゴナイトのメンバーは絶対不敗の英雄達。寄せ集めの彼らに勝てる道理はありません」

イアソンは先ほどまで浮かべていた人の良さそうな笑顔を崩し頬を裂いたような笑みを浮かべると腕を広げて言う。

「そうだね！その通りだ！我々は最強だ！間違いない、文句なし

に最強だ！なにしろ世界最強最大の英雄と魔女がついている！ああ、1人どうしようもない女がいたが」

「ふん、月の女神などに純潔の誓いを立てて、私の誘いを断るとはな。今頃は鮫に食われてる頃か。いい様よ」

そしてイアソンは船の真ん中に立ち乗組員の前に出ると演説のごとく語りかける。

「さあ諸君！！出立の準備だ！」

『契約の箱』を！『契約の箱』を手に入れよう！それは黄金の羊など歯牙にもかけぬ究極の財宝。私は！聖杯と『契約の箱』とで、この四海の王になる！！」

乗組員達はその言葉に雄叫びにあげた。

イアソンはそんな中で高笑いをし、いずれ来るこれからを想像する。

そうして原初の海賊船『アルゴノーツ号』は、そのままヘクトールを追う立華達の船の元へ向かう。

その上に岩色の巨人を乗せながら・・・

— 続く —

ヘラクレス

「先輩！見えてきました！おそらくあの船が！」

立華達の船は凄まじいスピードで目的の場所まで進んで行く。本来ならバラバラになるはずの船はワイバーンの素材によりビクともしていない。

しかし

「せせせせせ船長おおおッ!?？」

「お、お助けええええッ!!」

「オボロロロロッ！」

しかし海賊達はそのスピードについて行けない。あるものは助けを呼びあるものは胃の中の物を全て吐き出している。

海賊達だけではない。

「オオオオオオオイ?!絶対!絶対離すなよ!?!?ふりじゃねえぞ！」

「いやあああああッ!?!」

「えう、りゆ、あれ、つかま、る！」

カルデア組以外のサーヴァントもそのスピードに参っている。あのアステリオスも船の上でなんとか吹き飛ばないようにエウリュアレを抱えている。

「……俺たちよく平気だよな」

「もはや慣れた!立華よ、もっとスピードを出さんのか?」

「ああ!旦那様私も立っていられません！」

「いや、メツチャしっかりした足取りでこっちきてん
じゃん……」

カルデア組のサーヴァントはもはや慣れた事からなのか余裕のある感じである。散々特異点において同じような目にあっているため、この程度の物ではなんて事はない。

そしてマシユの言った通り聖杯を持ち去ったと思われる船が見えてきた。

「よし！このままロケットパンチを奴らの船に叩き込む！」

『いや待って!?!このスピードで船を離したらスピードが激減してひっくり返るぞ!!』

ロマンの声が響くがもう遅い。二つの拳の一つが船を離れ目標に向かって飛んで行く。船は急激なスピードダウンにより大きく傾く。

しかし

「もう一つのロケットパンチで押さえつける！」

その瞬間もう一つのロケットパンチは船の鎖を全体に巻きつける。

そしてそのまま鎖を船の反対方向へ引っ張る。

本来ならGにより吹き飛ばされるはずの乗組員達は、ロケットパンチが一つになったことにより余裕をもってそのスピードを落とすして行く。

敵の船に向かったロケットパンチはどんどんスピードを上げて迫って行く。

このままいけば船に風穴をあけることが出来るだろう。
だが……

塵屑の分際で」

男は自分の隣にサーヴァント2人を並べると立華の質問に答えた。

「私はこの船、「アルゴノーツ」の船長イアソン。そしてこっちは私の妻にして魔女、メデイアさ」

「私たちの目的はその落ちぶれた女神とある箱を探していてね、そのためにヘクトールを差し向けていたんだが……どうやら君たちの方が上手だったらしくてね。仕方なく私自らが出向いたというわけさ」

「キャプテン？ちよつと体治してくれませんか？こんままじゃちよつと難しくてね……」

「ハッ！失敗してきた分際でよくもまあ要求できたものだな。まあ許そう。聖杯の方は持って帰ってきたしね。メデイア？」

そういうとイアソンは少女「メデイア」に指示しヘクトールの傷を治させる。それを見た立華達は一気に警戒態勢に入る。

「アルゴノーツといやあ黄金の毛皮を求めて旅立った冒険者達の船。人類最古最強の海賊団と言っても過言じゃねえ……」

「という事はあちらの巨人は……！」

マシユはそう言い灰色の巨人の方を見る。巨人の瞳

は爛々と輝いており今にもこちらの方に襲いかかってきそうだ。

「さて、先ほども言った通り我々の目的はその怪物に守られている女神でね。見た所君たちは渡してくれそうもないしね……」

イアソンは腕を上げて乗組員達に合図を送る。

そして振り下ろされた時アルゴノーツの乗組員達はこちらに襲いかかってきた。

「力づくで奪わせてもらうよ！」

「いきなり来るか！」

「えうりゆあれ、さがれ」

ドレイクの銃が火を吹き相手の牙を寄せ集めたような魔物「竜牙兵」を吹き飛ばす。しかし竜牙兵はメディアの手により着々と生み出されておりあまり意味をなしていない。

アステリオスはエウリユアレを背中に隠し二本の斧を振り回し進行を阻止している。

「このやろう！この骸骨の群れといいそつちの方が悪役むいてんじゃねえか！」

立華は借りたサーベルを振り回し竜牙兵を蹴散らしている。マシユと背中合わせに戦う事でお互いの身をささえあっているのだ。そんな中ドレイクの部下達も、先ほどの揺れに酔いながら懸命に戦っている。

……今更ながらやめておけば良かったと考える。

「????????????」
「!!!」

ふと立華達が相手の船を見ると灰色の巨人は態勢を低くしているのが見えた。

「オイオイオイオイ！まさかあの野郎?!」

「！先輩！一旦引きます！」

「来るか！」

クー・フリーンが立華を抱えてその場を離れる。ネロとマシユはこれから来るであろう衝撃に備え身構えている。

巨人はそのまま大きな巨体を空中へと飛ばし、船の甲板の上に着地した。

「マシユ！さつきなんか言いかけてたけどこいつて・・・！」

「はい・・・、アルゴノーツはかつて数多の英雄豪傑が集いましたが、その中でなお英雄と呼ばれた破格の存在・・・！」

マシユのその言葉に向こうの船の方からイアソンが答える。

「そうさ！こいつこそかつて我々が憧れ挑み勝てなかった究極の英雄！ヘラクレスさ！」

「あらゆる場所であらゆる怪物と戦い、敗北なく最後に神にまで至った男！それがヘラクレスだ！」

巨人、「ヘラクレス」は船を揺らすほどの雄叫びを上げ、一番近くに居たネロを手に持った石斧で吹き飛ばした。

「!!か、ツハア・・・!!」

「ネロ?!」

立華は咄嗟に令呪を使いネロを回復する。

しばらく腹部を抑えながら咳き込んだネロは、なんとか立ち上がる。

「ネロ、大丈夫か？まだ行けるか？」

「ケフツ・・・。問題ない。リツカよ、指示を！」

「清姫！君はアルテミスと一緒に奴の揺動を頼む！ネロはアステリオスと一緒に遊撃戦で翻弄して兄貴とマシユは船長と一

緒にエウリユアレを守る！」

「「了解！」」

その声とともに清姫とアルテミスはヘラクレスの顔の付近を狙って視界を奪おうとする。しかしヘラクレスは体を見事に翻し2人の攻撃を避ける。

石斧をふり振り2人の元へと向かおうとした瞬間

「ウオオオオオオオオオオオオッ!!!」

「行かせはせんぞ！」

そこへネロとアステリオスの下段切りがぶつけられる。

2人の武器はそのままヘラクレスの身を切り裂くかに思われたが、鎧のごとき皮膚の前に弾かれる。

「勝てないさー！勝てるものか！君達二流三流とはわけが違う！無造作に引きちぎられるのが雑魚敵としての運命さー！」

「もつとも、今の彼には二つほどかけているものがある。知性と品性さ。今のこいつはどう猛な野犬に過ぎないん言いたい様だとは思うがね」

イアソンは笑う。

こちらを見下しながら。

彼は立華の方を向くと問いかける。

「さて、そのマスターらしき者よ。女神を引き渡せ。そうすれば……ヘラクレスを止めてやってもいい」

「どうする？」と問いかけるイアソンに立華は、なんの迷いもなく答えた。

「笑わせんな！何が止めてやつてもいいだ！さつきから何もしない案山子野郎！」

「……」

「先輩……！」

「ヘラクレスだ？敵わないだあ?!リスクが怖くて戦えるか！」

「俺たちは！決して仲間を見捨てない！どんなにロボロになろうが！死にかけようが！最後は必ず勝利を掴む!!」

立華はイアソンに指を突きつけ言い放つ。

お前には絶対に渡さないと言うように。

その瞳には絶対に惹かないという強い闘志が見えて取れた。

「この俺！藤丸立華をなめるな!!!」

立華のその言葉にイアソンは笑い声を上げる。

「ハッハー！そうかそうか！君は勇気があるな！とてもとてもとても気に入ったよ！」

「おまけにそんな可愛いサーヴァントまでついている。いいよ、いい！英雄みたいだ！」

するとすぐにその笑顔を歪ませると、隣にいたメデアに指示を出す。

「———つたく塵屑風情が生意気な。サーヴァント共々消えてくれる？メデア！私の愛しいメデア！私の願い

はわかるよね？あいつらを粉微塵に殺して欲しいんだ！」

「君が弟をバラバラにした時みたいだね。ああ大丈夫大丈夫。私は反省したから！もう君を二度と裏切らないとも！」

「弟を、バラバラ、ですか？イアソン様は時々妙なことをおっしゃるのですね」

そう言うと杖から魔法陣を形成してそこから無数の魔力弾を浮かび上がらせる。

「ヘラクレス！お前もやってしまえ！私はここで君達を見守ろう」

イアソンの言葉に、三人のサーヴァントは立華達を打たんと立ち向かう。

「わ、あれ知ってる。DVって言うんだよね」

「そんなもんじゃねえ。あの二人どっちも相手を見てねえっばい！」

「先輩！」

「おう！目に物を見せてやる!!!」

それと共に立華達も立ち向かう。

戦いは今、最終局面へと向かおうとしていた。

—続く—

海の決戦「前半」

「……で、なんとかここまで来た、と」

「……」

「わ、私はかつこ良かったと思いますよ先輩！」

立華達は現在とある島にて新たなサーヴァントと話をしていた。

あれからどうなったのか説明せねばならない。

立華達はあの後戦闘を続けバーサーカーヘラクレスをなんとか殺したのだが、その直後宝具「ゴッドハンド」によって全快。後11回別の方法によって倒さなければならずそんな事は船の上では不可能なため一旦離脱することに。

当然ヘラクレスは追いかけて来ようとする。

だがそこは相手の船底にロケットパンチを浴びせることで怯ませその隙に離脱。

とりあえず誰も欠けることなく逃げる事ができた。

「あんだだけカッコいい事言ったのに仕留めきれないて……」

「ま、そういう空回りする時もあるだろ。そんな気にすんな」

「ううううう……！」

立華は顔を抑えながら体育座りをしている。そんな様子を見てマシユは慰めるがあまり効果はない。

「アタシ達はそっからなんとか仲間を増やせないかと思っ
ね。島から島を探したらアンタ達を見つけたというわけさ」

「弓が頭に刺さった時はマジで焦ったよ・・・」

「それに関しては本当にすまない。私もだいぶ
焦っていてな」

そう言い動物の耳をつけた狩り人「アタランテ」は頭
を下げる。立華達は島から島を巡っていた際船に向けて矢文が
飛んで来た事によりアタランテ達と出会った。

『・・・試すような問いかけをしてすまなかつたな。
わかってはいたのだが念のためだ。何しろ我々はこの海の最後の希
望だ。』

『アタランテ——でよろしかつたでしょうか?』

『ああ、そういえばフランスで顔を合わせていた
な・・・。今回は一応汝らの味方側という認識だ』

『ありがとう。俺は藤村立華。こっちはマシユで
こっちは船の船長のドレイクとエウリュアレ』

『こちらはクー・フリーンさんとネロさん。清姫
さんにアステリオスさん。そしてフォウさんとオリオンさんとアル
テミスさんです』

『うむ、よろしくたの・・・え?』

ちなみに出会いの最初は色々混乱があつたりしたが、オルレア
ンでの出来事もありそこまで取り乱すことはなかった。

「それはそうと戻らないなあいつ・・・」

「ダビデ・・・だったかしら?その箱を持つというサー
ヴァントは」

エウリュアレがアステリオスの膝の上でアタランテに問う。
この島にはアタランテの他にもう一人サーヴァントがいた。
サーヴァントの真名はダビデといい、古代イスラエルにて巨

人を打ち倒したという王の一人である。彼は立華達と出会った後森の中に食べ物を探しに行くと言ったつきり戻って来ない。

するとそこに

「いやー、お待たせお待たせ。ちよつと仕留めるのに時間がかかってしまつてね」

「遅いぞ。皆話を聞けずに待ち惚けではないか」

「いえ、そこまで気にしてませんよ」

ダビデは石の上にとっこいしよ、と座ると立華達を見回し口を開く。

「さて、それじゃあみんな集まったところで話に入ろうか」

「ああ、そんじや聞かせてくれ。その「契約の箱」ってものの話を」

クー・フリーンがダビデの獲ってきた猪を捌きながら見据える。

「まず「契約の箱」ってのは僕、ダビデの宝具だ。」

「契約の箱は宝具として見ると三流の宝具でね。この箱に触れさせれば相手は死ぬ、それだけ。悪用は……うん、出来るだろうね。あの宝具は僕のものという訳ではない。あれは神が人間に与えた契約書のようなものだ。容易に奪えるものでもないが奪われれば最悪だ」

ダビデは一旦口を閉じドレイクからもらった酒をあおる。

そして喉を潤すと再び話し始める。

「おまけにこの宝具は霊体化が出来ない。僕は契約の箱と一緒に召喚されるサーヴァントだ。僕が死んでも誰かが所有していれば残り続けるだろう」

「箱の中には十戒が刻まれた石板があると伝えられていますか……」

「それだけじゃない。あれは比喻でもなく『死』をもたらすものだ。ともかく……イアソンが契約の箱を狙っていると聞かされた僕は彼女と共に森に隠れて機をうかがっていたわけだ」

あたりに肉の焼ける匂いが漂う。

そんな中アタランテが口を開く。

「私はアルゴノーツの船員として召喚されたが、ヘラクレスのように自意識を奪われることはなかった。元々生前からイアソンを嫌っていたせいか、あるいは単独行動可能なアーチャーとして召喚されたせいか……。ともかくイアソンは召喚されてからすぐに契約の箱を求めていた。」

「それがあれば海域の王になれると公言していた」

「ちよつと待って。今聞いていた話からするととてもじゃないが王になんかなれなさそうなんだが？」

火の温度を調整しながら立華が疑問符を上げる。触れたら死ぬなんて物騒なものがなぜ王の資格となるのか。

だが帰ってきたのは首を振る仕草である。

「その通りだ。あれは王が持っていたというだけであって資格という訳ではない。だからなぜ彼が求めているのか疑問だったんだ」

「ふむ、あの者は女神であるエウリュアレを捧げると言っておった。それと何か関係しているのではないか？」

「それは私も知りたい。イアソン達はそれを目的としているようだったし……」

二人の言葉にダビデは顎に手をやる。

「エウリュアレ、だったね。本来神霊である君が契約の箱に捧げられるとなると——」

「うん、この時代そのものが死ぬだろう」

『はあ……やっぱりそうか』

そこに今まで黙っていたロマンの声が響く。

立華達はその言葉に顔を険しくしダビデを見る。

「なんと言うか……ある程度ろくなことにならないとは考えていたが……」

「どれほど低ランクであろうと神が生贄にささげられたらこの箱は暴走する。だって神が死ぬんだ。つられて世界も死ぬだら

う。えーと、特異点だっけ？そいつの崩壊を待つことなくこの時代は消え去ってしまうだろう」

「するってえと何かい？その箱を使い女神さまを捧げればその時点で全てが終わるってワケかい？」

ドレイクの質問にダビデは肯定する。

契約の箱はいわば風船のようなもので、神霊という大量の空気を吸ってしまい周りも吹き飛ばすというワケだ。

清姫は立華の汗を拭いながら考える。

「……あの者はなぜそこまで世界を滅ぼしたがつているのでしょうか」

「……もし、かして、しらな、い？」

「確かに。契約の箱にエウリュアレを捧げればいいのだと、誰かに言い含められているのかもな」

「——ともかく」

「あとはどうやって彼らを倒すかですが……」

そう言つてマシユは全員を見渡す。

こちらのサーヴァントはセイバー、キャスター、海賊が一人。アーチャーが三人にバーサーカーが二人。そして自身であるシールドとマスター……。

そこまで考えたところで立華が言葉をあげる。

「どうなんだろう……戦力的には優れていると思うけど？」

『いいや、ちよつと難しいよ。イアソンによるとバーサーカーヘラクレスはあと一呼吸斬り殺す以外の方法で倒さなければならぬ。そうなるとアーチャーに偏っている我々は数に優つても難しい……』

「そもそも俺たちも含めて遠距離出ないと本領発揮出来ない連中ばっかだしなー」

「契約の箱に触れてくれれば多分一発で昇天してくれると思うんだけど」

「そんなに簡単に触つてくれるものなの？」

アルテミスの言葉に全員が口を紡ぐ。

理性を失っているとはいえ大英雄。対峙したからこそわかるが技量そのものも曇っていない。全員が焼けた猪を食べながら対策を練る中、立華は顎に手をやり何か考え事をする。

「……………」

「せめてヘラクレスただ一騎を引き離せば――

――」

『……………ここはひとつしばらく契約の箱を持ったまま隠れてチャンスを伺うというのは』

「ドクターは賞味期限切れのゴマ饅頭でも食べててください」

「籠城戦などどうだ？この近くに城などはないのか？」

「ないね。あるのは異教の狭い地下墓地くらいだ」

「もつとも？やつの攻撃食らって耐えられる城なんてそもそもないと思うけど」

「……………」

「フオウ？フオウ、フオウ、フオウ！」

そこでフオウが立華の様子に気づく。

マシユはそのまま目を向けると立華が目を瞑って瞑想していた。

「先輩？どうし「あーっツ!!」?!」

「そうだよ、あんじゃねーか。城!!」

クー・フリーンが突然声を上げ立華を指差す。

そしてダビデを除いた全員がある事を思い出し目を見開いきながら立華を見た。

立華は目を閉じたまま口元をニヤケさせると、マシユに向かってこう言った。

「あるじゃねーか。とっておきのが……！」

「あの島ですね」

メディアはとある島を指差しイアソンに言う。

彼らは逃げた立華達をメディアの魔術により追跡していた。ロケットパンチを喰らった船底の穴は、ヘラクレスが支えている間に塞ぐことができた。

「よし、エウリュアレは殺されていないね？」

「ええ、生きておりますわ」

「……狙われているのがわかっていながら、ねえ……どんな判断なんだか」

「……ま、いいでしょ、あっちの選択だ。こっちの判断はこっちの船長に任せよう」

船は島に向けて進んで行く。そんな中イアソンは彼らに命令する。

「よし、いいぞ！天運はやはり我らにある！ヘラクレス、メディア、ヘクトール！あの島に上陸して契約の箱とエウリュアレを奪え！」

「散々やってくれたんだ！タダでは殺すな！私は——」

「おっと！」

その時一筋の矢がイアソンの額に向けて飛んできた。

近くにいたヘクトールは飛んできた矢を槍で弾く。

「何だ、矢か？・・・馬鹿な奴らだ。この程度の矢がヘラクレスに効くとも——」

「・・・ツ！違います。これは——イアソンさまを狙っています！」

「え？」

すると次の瞬間、イアソンに向けて雨と言っていいほどの何かが降り注いだ。

「よし！みんな撃ちまくれ！そのままヘラクレスがこっちに来るまで撃ち続けるんだ！」

立華はサーヴァント達に指示を送り弓を引かせ続ける。

いや、弓だけではない。カルヴァリン砲、火の玉、銃弾に木製の槍までがアルゴノーツに向けて放たれている。

「やはり一点に向けて集中攻撃というのは気分がいいな！」

「あんな奴にはもったいないけど送ってあげるわ！宝具——

——「女神の視線」！」

「いやあ、モテモテで羨ましいなイアソンくん」

「そうか？俺ならこんなアプローチ、絶対御免さね！」

「それもそうだね！」

「旦那さまを貶した罪……その身で味わいなさ

い」

『立華くん！準備は出来ているよ！』

そんな中ロマンが立華に向けて言う。

立華は腕のパネルを操作すると敵の船を見据える。

「さあ、来い……」

一方船の上では大混乱が起きていた。

「うわお、宝具の集中攻撃だ。まったく煩わしい、なつと……」

！

「Aランクの攻撃も混じっています……！隙が出来ま

せん……！」

二人のサーヴァントがイアソンに向けて飛来する武器を時に打ちほらい、時に逸らす。

そんな集中攻撃に晒されたイアソンは混乱しながら呟く。

「な、なんだよ！なんで俺ばかり——この、卑怯者め！」

「どうか冷静に、イアソンさま。あなたは私が守ります！」

「あ、ああ、ありがとうメディア……しかし未熟なお

前だけじゃ……」

イアソンはしばらく迷った末にヘクトールに命令し、ヘラク

レスを立華達に向かわせる。

「よし、ヘクトール！サーヴァントらしく私を守れ！」

「ヘラクレス！どうせアーチャークラスだ。お前の一撃で挽き潰せ！」

命令を受けたヘラクレスは雄叫びをあげて海へ飛び込む。

凄まじいスピードで島へと泳いで行くヘラクレスを見てメデアはため息を吐く。

「……ここまで敵さんの思惑通りか。だがヘラクレス相手にどうする気だ？何か手段が？あの時の飛んできたドラゴンも気になる……」

ヘクトールは島を眺めると一人の魔術師を思い浮かべる。

そしてメデアと同じくため息を吐いて誰にも聞こえないように呟いた。

「……ま、なんでもいいさ。とにかく、お手並み拝見だ。未来の魔術師さん？」

島に着いたヘラクレスは辺りを見回すと、生き物の痕跡のある方向に向かって駆け出した。

ヘラクレスが前に進むたびに周りの木々が吹き飛んで行く。
暗い森の中で彼は目を凝らす。 指示された命令を遂行するた
めに。

「……………」
そして彼が辿り着いた先には――

そこには何もなかった。

確かに人の痕跡に向けて走ったはずだ。

しかしそこにあるのは海。

島の反対側まで走り抜けた証だった。

おかしい、理性のない頭で彼はそう考え再び敵を探そうと後ろを向く。

次の瞬間――

『隙を見せたな!!!』

海の中から黒鉄の巨人が現れヘラクレスを掴んで海のそこまで
引きずり込んだ。

「いいねいいね、いいじゃないか！さっすがアタシの見込んだ男だよ！」

ドレイクは笑いながら立華の背中を叩く。

そんな中ダビデは信じられないものを見るかのように立華を見る。

「…………正気かい？そんな作戦してもしも君の身に何かあつたら——」

「そうですね！私には反対です！いくらなんでも…………」

マシユもその提案を却下した。

そんな二人に立華は大丈夫、と言い腕をまくる。

「覚悟の上だ。それに俺がやれば戦力をヘラクレス以外に絞ることができる。それに心配要らないよ」

「？」

「あの野郎には散々やられたんだ……。こつちも度肝抜くくらい的事を見せてやらねえと気がすまねえ！」

立華はカルデア戦闘服に着替えフォウを肩に載せた。

マシユはそれを見てもやはり不安なのか立華の手を握る。

「俺はこんな時どんな言葉を言えばいいのかわからない。氣の利いた言葉が言えればいいんだけど今の俺にはこれしか言えない…………」

「マシユ、みんな。俺を信じて欲しい。俺の信じる俺を……」

それを言われた彼女は目を閉じ周りのサーヴァント達に聞く。

「……みなさん、みなさんはどう思いますか？」

「俺はいい考えだと思うぜ。こいつならやってくれそうな気がするしな。それにあいつは一度振り回される苦しみを味わった方がいい」

「余も別に構わん！むしろ安心して背中を預けられると言うものだ！」

「私は待ちますよ。だってそれが嫁の役割ですもの」

その答えにマシユは再びもう一人に問う。

「ドクターはどう思いますか？」

『……僕としては反対したい。だってたった一人のマスターなんだ。サーヴァントの指示だってあるし極力リスクのある事はさせたくない。でも……』

「でも？」

『でも彼の決めた事なんだろう。ならば信じてみるよ。幸い安全制は保証してるしね』

そう言ってロマンは困ったように笑った。

その様子を見たマシユは立華と目を合わせ両手で彼の手を握った。

「わかりました、先輩。くれぐれもお気をつけて下さいね」

????????
|
????
|
????????????????!!!!!!
|

ヘラクレスは一瞬の判断が遅れてしまい、巨人の腕に捕まってしまった。何とか躡いて脱出しようとしているがその力の前にビクともしない。

「フオウフオウ！」

「悪いなヘラクレス……！お前の相手はこの俺だ!!」

マジイイイイインツ！ゴオオオオオオオオオツ!!!

立華の叫びと共に両目に光を灯したマジンガーは、そのままヘラクレスをつかんだまま海底へと進んでいった。

ー続くー

海の決戦「中編」

『立華くん、ヘラクレスと接触！以降は彼のバックアップに入るよ！』

「了解です。それでは私達はイアソンとの交戦を開始します！ドレイクさん！」

「あいよ！面舵いっぱい！」

舵を回転させドレイクは船をアルゴノーツに向ける。

マシユ達は立華がヘラクレスと接触した後速やかに船の方に移動していた。

立華の考えた作戦。

それは「自分一人がヘラクレスと戦い残りのサーヴァントをイアソンに向ける」という正気とは思えない作戦だった。

しかし立華にはマジンガーZという大きな力があつたしマジンガーZもヘラクレスを圧倒し得るほどの力を持っていた。

立華は何とか全員を説得した後、ヘラクレスと自身の戦いによつてみんなに被害が出ないよう海の中に沈んでいった。

「みなさん！攻撃お願いします！」

「ああ、了解だ！ポイホスカタストロフイ訴状の矢文！！」

「宝具展開！愛を歌うわ！トライスター・ア・モーレミオ月女神の愛矢！」

アイオブザ・エウリュアレ

「女神の視線！」

「僕もやらせてもらうよ！五つの石！」ハメシユ・アヴァニム

アーチャーのクラスがアルゴノーツに向けて宝具を展開する。

そして辿り着いたマシユ達はそのまま船の上に乗り込んだ。

「では予定通り、私達は敵と接触し交戦に入ります。ドレイクさん達はそのまま遠距離からの援護をお願いします。」

「任せときな。死ぬんじゃないよ！」

「はい！」

「ようやく戦闘か！腕がなるぜ！」

「行くぞ！あのランサーには借りを返す！」

「焼きつくします……」

「グウウウウウウウウウウウ！！」

船から離れたのを確認するとドレイク達は一定の距離をとった。

遠距離からの支援に徹底することでマシユ達にまで被害を出さない為だ。

そしてマシユ達は船の甲板に躍り出ると目当ての人物——
—イアソンを確認する。

「よくもやってくれたなお前ら！ヘラクレスはどうした!？」

イアソンは彼女達が全滅していないことに疑問符をあげる。

ヘラクレスは確かに彼らを皆殺しにするためにかけていったはずだった。

しかしそれでも攻撃は止まず、拳句の果てには船への侵入を許してしまった。

やられてしまったか？いやありえない。

ヘラクレスを倒すにはBランク以上の攻撃を10回以上当てなければ勝てないはず。

しかしそこで隣で見ていたメディアが何かおかしいこと

ヘクトールは一旦後ろに下がると今度はクー・フリーンに向けて槍を突き出す。

「ハッ！そんな大振り当たるかよ！」

「知ってるよそんな事・・・」

クー・フリーンはその突きを避けるが槍の行く先にいたの

は

「くうッ!?？」

「ネロさん!!!」

「慌てるでない！」

「今のを避けんのか。やっぱ攻めつて苦手だわ」

槍によつて手先を傷付けたネロはすぐさま剣に炎を灯し横

薙ぎに振るう。

高くジャンプする事で避けたヘクトールは着地し船の甲

板を蹴り上げる。

するとかけらが清姫のところに飛んで行き一時的に視界

を妨げた。

「・・・甘いですね」

しかし清姫は口から灼熱の焰を吹き出しかけらを消滅さ

せた。

焰は消えずそのままヘクトールの元へと流れて行く。

焰を確認した瞬間それを避けようとする。

しかし

「マジ!？」

焰は通りすぎる事なくヘクトールを追尾し始めたのだ。

これは清姫のスキルである「ストーキングB」による合わ

せ技である。

この焰に狙われた獲物はその身を焼き尽くされるまでつ

いて行く。

「旦那さま以外の方を長々と追いかけるつもりはありません

ん。早々に焼けてくれませんか？」

「あいにくおじさんそんなお人好しじゃないのよ」

ヘクトールは近くにいた竜牙兵を焰に投げつけ追尾から逃れる。

そして前方から突撃して来たアステリオスの顎に蹴りを食らわせた。

脳を揺らされ足元がふらついた隙に槍で腕の腱を切り裂く。

「アステリオスさん!？」

「野郎さつきからちまちまと！」

身体強化を使い持つて杖で立ち向かっていく。

やはりランサーのクラスで有名なクー・フリーンだけあって、ヘクトールも中々攻めることができない。

だが

「ういっ……!」

「俺が避けるだけでいっばいだなんて何であんたキヤスターしてんだい?」

避ける避ける避ける。

決定打を与えられない。

ネロも一緒になって斬りかかるがそれでも攻め切ることはできない。

二人は一度その場から離れ武器に焰を灯し火の玉を放つ。

その様子を見ていたマシュは額に汗が滲んでいる。ネロとアステリオスはやはり先ほどの傷が痛むのか顔を曇らせ腕を抑えている。

弱体化

ヘクトールはそれを重点的にして攻めているのだ。

「二番決定打を与えられる二人が……!」

「やっばヘクトールっつー名は本物みたいだな」

ヘクトールはかつてトロイア戦争にて軍勢を指揮し、個人の勇猛さをもってアカイア勢を敗北寸前まで追い込んだことがある。

防衛、持久戦のスペシャリストである彼を追い詰めるのは至難の技である。

長い戦いになる。

マシユたちがそう感じ始めていると。

「……………」

間合いをつめたまま頬を掻き、ヘクトールはイアソンに叫んだ。

「キャプテン！流石にちよいと時間がかかりそうなんです。

……………

お願いしてもいいですか？」

それを聞いたマシユ達はイアソンの方を向く。

イアソンはここより少し高いところでメディアと共に結界の中にいた。

「ははははははははは！散々やられておいてそれか！だが許そう！私としてもさっさと終わらせたいのでね。メディア！」

「わかりました……………」

イアソンがメディアに命じると杖を振り魔法陣を展開する。

それを見ていたドレイク達は急遽攻撃を加える。

「まずい！あいつら何かするつもりだよ!!」

「やらせるか!!」

アタランテが弓を引いて魔法陣向けて矢を放つ。

しかし防御も同時に展開している為か効いている様子がない。

「オイオイオイオイ！やばいんじやねえか?!」

「突撃しますー！」

マシユも魔法陣を見て冷や汗を流した。

なぜならあれはまずい、という事が一番わかるからだ。

そう、あの魔法陣はただの魔法陣ではない。それはマシユの盾にも搭載されているもの。英霊の座へとアクセスし、一騎当千のつわものどもを呼び寄せるもの。

超巨大な召喚陣である。

「君たちは大きな勘違いをしている！いや、そもそも忘れて
いる！我々の手の中に聖杯はあるのだぞ？ならば戦力差など

いくらでも覆す事ができる！」

次の瞬間イアソンの聖杯が輝き、召喚陣の中から何かが溢れ出て来た。

「な!?!」

「あ、あれはまさか?!?!」

その黒い影は船の甲板――マシユ達の前に溢れると、その一つ一つが形をあらわにしていた。

「まさか・・・これ一つ一つが・・・英霊!!?!」

マシユは悲鳴に近い声をあげた。

無理もない。今もお勢いを止めず溢れ出て来ているもの。その全てがシャドウサーヴァントとして溢れているのだ。

それを見てイアソンは再びワライを上げてマシユ達を見下した。

「どうだ？私の無敵の軍勢は！だから言ったのだよ、無駄だね！

ヘラクレスも大きな手段ではあるのだが私の源はこの聖杯なのだ！
これがある限り！私の神話は覆らない!!!」

そして最初の時と同じように手を挙げると、それを見ていた影達

がいつせいにマシユ達に襲いかかって来た。

「さあ！あの悪の軍団を叩き潰すのだ!!」

冗談のような光景が広がっている。

大剣を構えたサーヴァントがネロに向かって振り下ろす。

「ぐぬう!？」

空中で一回転して斬りかかるが片腕が傷ついて入る状態ではうまくさばききれない。相手も大剣を器用に操りネロの乱舞をさばく。そして再び振り降ろされた時、ネロは後ろに吹き飛んで行く。そこには三体のサーヴァントが。

「ネロさん！危ない！」

咄嗟にマシユはシールドバツシユをすると共にネロを守る。金属同士のぶつかる音が船に響くが、同じくシールドを構えていた三体に効いている様子はない。

「マシユよ、まずいぞ!!こやつら全員雑魚ではない!!」

「ツ………！先輩は、先輩はまだ……？」

マシユはヘラクレスと共に海の中に入っていった立華のことを頭に浮かべる。そんな時マシユの耳に立華のサポートをしているはずのロマンの声が聞こえた。

『マシユ?!マシユはいる?!』

「ドクター!!先輩はどうしたんですか?!」

マシユは咄嗟に立華の安否を訪ねる。

しかしドクターから聞かされたのは最悪の事態だった。

『大変なんだ！立華くんの………!』

立華くんの反応がロストした!!』

「！！！！」

「・・・え？」

その言葉に咄嗟に動きを止めてしまったマッシュに、サーヴァント達が迫る。

「ーしまッ」

「ぐむううッ！！」

横薙ぎに振るわれたメイスがアステリオスの横顔にぶつかる。

その巨体故にしばらく耐えていたが、耐えられなくなり船の端まで吹き飛ばされる。

「アステリオスさん！！」

「やべえな・・・！時間稼ぎにすらならねえぞこんなもん・・・！」

クー・フリーンは船からウィツカーマンの一部を召喚する事で打たれ弱い清姫を守っていた。しかし宝具の一撃一撃には耐えられずにすごい速さで崩れて行く。

「ドクターさん・・・！旦那さまの身に一体何が・・・!?」

『ああ、途中まで確実に捉えて居たんだけど急に消えるみたいに反応がなくなった・・・！こちらでもなんとかラインを探しているが見つからない。このままでは・・・このままでは彼が意味消滅してしまう!!!』

「そんな・・・！」

「もう無理だ！敗れる！」

瞬間清姫とクー・フリーンに無数のサーヴァント達が組み伏せる。いくら二人でも数の暴力には対処できずに床に抑えつけられてしまった。

「・・・やべえ・・・しくじった・・・！」

「この・・・！離さない！」

「清姫さん！クー・フリーンさん！」

その頃ドレイク達の船の方も対処に追われていた。

「こいつら！大砲がきかない！」

「船長！もう限界です！このままでは船に乗り込まれちゃう

！」

溢れたシャドウサーヴァント達はドレイクの船にも乗り込もうとしていた。彼らは主人の命令通り、エウリュアレを捕まえようと集まっているのだ。

「くっ！貫いても貫いてもきりがない！」

「きやー！ダーリン助けてー！」

「俺に引っ付いてる暇あったら撃ち続けてくれたのむから
!？」

なんとか船に近づけないよう近くのものから倒し続けてはいるが、奴らは消え去る前の死体を踏み台にして登って来ようとする。

「波も強くなって来たな・・・！このままだと持たないかも、ね！」

宝具をブラックジャック「殴打武器」のように使いながらダビデは呟いた。

このままでは船に彼女らを迎えに行けなくなってしまう。

「この！この！女神に重労働させるなんて何様のつもりよ！」

彼女達はどんどん追い詰められて行く。

「ぐううう・・・！ぐあがあうううううう！」

「アステリオスさん!!今助けます！」

マシユはシールドを構えてサーヴァントの群れに突進して行く。しかし行く手をはばまれるばかりで近づく事が出来ない。

その間にもアステリオスはサーヴァント達の鎖や拘束用

の宝具により縛られていく。

「このーこれで・・・！倒れて！」

サーヴァントはどんどん溢れて全員を拘束して行く。

「ここで余の宝具を使うのは・・・！」

ネロも五体満足ならば、全員を一気に殲滅する事も可能だっただろう。だがヘクトールとの戦いで弱体化してしまった今の状態ではとても出来るようなことではない。

次の瞬間ネロは剣を弾き飛ばされ手ぶらになる。

そこを狙ってサーヴァント達がネロに向かって槍や弓を放つ。

「ぐ、う、くっ、あああああああッ！」

そしてネロは船のマストに縫い付けられ全身の激痛によつて気を失った。

「りっ・・・か・・・」

「ネロさああああああああああんツ!!!」

マシユはシールドを横薙ぎに振るいサーヴァント達を吹き飛ばす。立華さえ辿り着けばこの状況をなんとか出来る。それを考えてマシユはある事に気付く。

(先輩とのラインが・・・消えている?!)

それはとんでもない事態だった。

サーヴァントとマスターをつなぐライン。それが切れているのだ。それはすなわち、立華が死んだという事に他ならない。

(そんな・・・！そんな・・・！)

「先輩・・・！」

横から放たれたモーニングスターによつてマシユの盾が弾き飛ばされる。丸腰になった彼女をサーヴァント達が押さえつけ、マシユは甲板のイアソンの前で拘束された。

「ご苦労さまー。随分楽しませてもらったよ」

マシユの前でイアソンが手を叩きながら笑う。

そんな様子を見たマシユはイアソンを強く睨みつける。

「ああ？なんだい？その目はさー！」

「ッー！」

平手がマシユの頬を打つ。

イアソンは彼女の顎を上げて見据える。

「なんだいなんだい？マスターとのラインも繋がってないじゃないか。やっぱりあの男はくたばったらしいね？」

「……！そんな事はありません！先輩は……！先輩は！」

「あーあーもういいよ。お前達はこれが終わった後でじっくり可愛がってやる」

そういうとマシユを突き飛ばしイアソンはドレイク達の方を見つめる。

「もうすぐ女神も私の元に来る。そしたら後は契約の箱を手に入れるだけ！ははは！やはり正義というのは勝つと決まってるんだね！」

「はい。イアソンさま、これで貴方は再び王になれる。今度こそ正しく民を導く事が出来ます」

「はははははははははは！さあ、それじゃあヘラクレスを呼び戻すでしょう！そのためにお前達を殺さずに生かしたんだからね！」

どうしようもない絶望がマシユ達に降り注ぐ。
ここでヘラクレスが来たら完全にこちらに勝機は無くなるだろう。

マシユは何度もラインを確認するが立華との念波は繋がらない。

（先輩！先輩！答えてください！先輩）

「お願い……！」

マシユは悔しさに涙を流す。

きつとイアソン達はこのまま船にいるエウリュアレを捕まえるだろう。

そしたらもう誰も止められない。

今までの事が全て無駄になってしまう。
そんな思いが頭に浮かんでは消えて行く。
マシユは動けない中奥歯を噛み締め、立華の顔を思い浮かべた。

さて、ここで皆さんに質問したい。

彼らが戦っている海は四つの島に囲まれており、風があまり吹くことのない場所である。

そんなところでダビデはこう呟いた。

波が強くなっている

これは一体なにを意味するのでしょうか？

最初に異変に気付いたのはヘクトールだった。

(波が……)

船の端で見ていたヘクトールはだんだん船の揺れが大きくなっている事に気付いた。

この辺りはいつも穏やかで、渦潮なども起こることなどない。

強い風なども吹いている様子もない。にもかかわらずどんどん船は揺れているのだ。

「なんだ？」

次に気づいたのはクー・フリーン。

彼は地面に押さえつけられていた故にその異変に気付いた。

(衝撃音……?)

床に耳を当てると聞こえて来る。

船の底。いやもっと下の海底で何かの音が聞こえて来るのを。

「おや？　なんだか船が動いてないかい？」

碇を下ろして止めていたはずの船がだんだん動いている。

イアソンのそんな疑問符にマシユは顔を上げる。

それはだんだんと早くなっている気が

(一体……)

その時

全令呪をもって命ずる！

マシユ達の耳に、今一番聞きたい人の声が響いた。

「ツ・・・!!!」

「今のは・・・？」

至急！全員でドレイクの船に転移せよ!!!

それが聞こえた瞬間マシユ達は全員ドレイクの船へと転移し、アルゴノーツを眺める形になる。

「！なんだ！今一体何が起こった!？」

イアソンは突然目の前で敵が消えた事に驚愕した。
そしてドレイクの船を見てそこに全員が逃げていること
を確認した。

「無駄な足掻きを……！メデイア！奴らを至急追いかけてくれ！」

「かしこまり……！」

しかしそれを追いかける事は出来なかった。

アルゴノーツは突然現れた巨大な渦潮によってどこにも動けなくなってしまうていたからだ。

「くう?!なんだ！なぜいきなり渦潮が!!？」

「イアソンさま！おつかまりください！」

おお

お

おお

ドレイク達は突然現れたマシユ達に驚いていた。

「なんだいアンタたち?!いきなり船の上に現れるなんて?!」

「みなさん！今……！今……！」

「おう！確かに聞こえたぜ！」

おお

おおお

おおお

マシユはアルゴノーツを飲み込もうとしている渦潮
を眺める。

渦潮が目にかかる速さで強くなって行くのと同時
に聞き覚えのある声がだんだん強くなって行く。

おおおおおおおお

そして渦潮から竜巻と言っても良いくらいの速度に達
したとき

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
!!!!!!」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ
?!?!?!」

渦の真ん中からそれはついにその姿を現した。

「マジンガーZ!!!先輩!!!」

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

それを見たマシユは涙に濡れた瞳でその名前を叫ぶのだった。

巨大魔神見参!!!

ー続くー

マジンガーはその重い体を持ち上げて海底を進み出す。

海の底は太陽の光があまり当たらず薄暗い岩はが広がっている。マジンガーがメインカメラのライトを照らし目の前を照らすと、魚の群れがその光を反射し輝いた。

「フオウフオウ！」

「綺麗だな……。海の中ってのは……」

たとえ薄暗かろうとそこは神秘のこもった太古の海。

現代の汚染された海とは違い、わずかな明かりでもその先を見渡せる。

立華はその美しさに感嘆の声を上げる。

「でも見惚れてる場合じゃないな。一刻も早くみんなのところに行かないと……」

『結構沖の方に行っちゃったから出来る事なら少し急いで欲しい』

「了解。この海はいつかまたゆっくり行くことにしよう」

「フオウ！」

立華はそれからマジンガーのスピードを上げてマシユ達の元に急ぐ。

しかしヘラクレスを片手に深海を走る姿は、側から見たらものすごくシユールな光景となるのだった。

「ん？」

海底に足を取られながら進んでいた立華はある事に気付いた。

どうにも深海の景色が変わってきている。先ほどまでサンゴや魚の溢れていた海は、今はなぜか何も無い状態へと変わっていた。いや、何もない訳ではない。

砂だ。

先ほどまで薄肌色をしていた砂は今真つ白な物へと変わっている。

それが海底一面に広がっているのだ。

「環境が変わったからか・・・？」

立華はその光景に首をかしげる。

ただ環境が変わっただけで魚までいなくなるだろうか？いや、それどころではない。そもそもとして生き物の気配を感じない。

その事に不気味さを感じた立華は ロマンに話しかける。

「ドクター？本当にこの先にマシユ達はあるのか？なんだかさつきから景色が変わらねえんだけど・・・」

通信を待つて数秒待つ。

しかし返事が帰ってこない。

「ドクター？ドクター？あれ、おかしいな・・・。故障でもしたのかな？」

「フオーウ？」

「ああ、なんか繋がらねーな」

フオーウに立華は話しかけ通信機の様子を確認する。

しかし通信機の調子は変わる事はなく、ロマンの声が聞こえてくる事はない。

パイルダーの中に機械をいじる音が響く。

しばらく続けて繋がらないと察した立華が顔を上げた。するとそこには――

「い、これは．．．!!?」

「フオウ?!」

それは遺跡だった。

先ほどまで何もなかったはずの場所に、巨大な遺跡が現れたのだ。

「な、なんで．．．?さっきまでこんな物は．．．」

立華が驚くのも無理はない。

遺跡は所々が崩れているとはいえちよつとした町ほどの広さだ。遠くから見えないなんて事はないはずなのだ。

作りとしては石造りの立派な柱を並べたようなギリシャ遺跡に似ている。所々が少し崩れてはいるが、白い石で統一されたそれは水中ということも重なり神秘的で、しかし不気味な光景を生み出していた。

だが不気味さを醸し出すのはそれだけではない。

(こんな物が海の中に．．．?いや、そもそもなんだこの大きさは．．．)

そう、でかいのだ。

人間サイズなどという問題ではない。マジンガーほどの大きさの巨人が使用しなければ使えないような大きさなのだ。そんな代物がいきなり現れる?ありえない。

「というかマシユ達の船はどこに?ドクターの案内がないからつてここまで見つからないのはおかしいぞ．．．」

それにマシユ達の船も見つからない。立華はパイルダーの上を眺め船の影を探すが、海面には波すらたつてない様子だ。

嫌な予感を感じる。

そう感じた立華は一旦元の場所に戻ろうとして――

『貴様アアアアアアアアアアアアアアアア!!』

マジンガーZは遺跡に吹き飛ばされた。

「な、なんだ!!?」

「フォーウ?!!」

突然の衝撃に立華は驚きの声を上げる。

遺跡に衝突した事により水中に砂埃が上がる。マジンガーは体制を立て直すと改めて自分を吹き飛ばした相手を見た。

それは童話などで言う人魚のような形をしていた。青い鱗の下半身に男のたくましい上半身。ウェーブのかかった金髪で所々に鎧のようなものをつけている。突き出した三又の槍から察するにそれを使って吹き飛ばしたと思われる。

そんな存在がこちらを、マジンガーZを怒りのこもった目で睨みつけているのだ。

「見つけたぞ、見つけたぞ異界の神!!よくも我々オリュンポス十二神を地の底に追いやってくれたな!!」

「な、なんだってんだ一体!!?」

「忘れたとは言わせんぞ!!貴様さえいなければ我々は今も地上を支配出来たのだ!それを力を奪い封じ込めておいて記憶にないと言うか!!!」

人魚は言い終わると同時に手に持っていた槍を振りかざしマジンガーの頭に向けて投げつけた。

「あぶねえ!!?」

マジンガーは横に転がることで槍を避けると再び人魚に視線を移す。

「我が結界内に入った事こそ貴様の運のつきよ!貴様は今ここで我が打ち倒す!そして再び地上に返り咲いてみせよう!!!」

そうやって人魚はそこらの遺跡から青い鎖を出現させ、マジンガーZに襲いかかってきた。

「くそーなんだか知らねーがやるしかねえか!!」

マジンガーは迫り来るそれにファイティングポーズを構えて向かいうつ。人魚が拳を振りかざすと同時にマジンガーも拳を振りかざした。そして拳がぶつかりあつた瞬間

水中内に凄まじいまでの衝撃と轟音が走った。

「!マジンガーの拳を受け止めんのかよ?!」

「ぬううううううううううん!!」

人魚は再び槍を掴み今度は縦に振り下ろした。マジンガーはそれを腕を交差させる事で防ぐが、あまりの力に膝をついた。防がれたと気づくと今度は周りの鎖を操りマジンガーを雁字搦めにして尾びれを叩き込んだ。

「フオウフオウフオウフオウ?!」

「フオウ、落ち着け。どうやら俺ドクターと繋がらないのはこいつが原因らしいな・・・」

そう言うとマジンガーを動かし巻きついて鎖を剥がす。一体奴がなんなのかは分からない。しかし一刻も早くみんなのもとに駆けつけたい立華は人魚に向かって拳を構える。

「だったらー!さっさと押し通らせてもらうぜ!!」

マジンガーは腕を構えてロケットパンチを人魚に向かって放った。人魚は一瞬驚いた顔をするが持っていた槍で飛んでくる腕を逸らすと同時に突っ込んでくる。

「二度も三度も喰らうかよ!ルスト!ハリケエエエエエン!!」

やられる前にやる。立華がレバーを引くとマジンガーのスリットから破壊の嵐が噴き出した。すぐ目の前まで来ていた人魚は避けることも出来ずにその嵐を正面から食らってしまった。

「やったか?!」

同時に巻き起こった砂嵐の中を立華は目を凝らしてみる。するとそこには下半身を消滅させた無残な姿の人魚がいた。

一瞬手応えのなさに驚いたが、周りの鎖が下半身のあつた場所に集まり次の瞬間には完全に再生してしまった。

「そんなのありかよ?!」

「はああああああああああああああああ!!!」

立華は人魚の突きに反応することができず、マジンガーはその槍を腹に直撃してしまった。

その瞬間立華はあまりの光景に息を飲んだ。

「超合金Zのボディに穴が・・・?!」

なんと槍はマジンガーZの腹に僅かながらの穴を開けたのだ。

本来マジンガーZのボディである超合金Zは、戦車の砲撃すら耐えられるダイヤモンドナノロッド体の10倍をはるかに上回る合金なのだ。

そんな素材にわずかとはいえ穴を開ける。

立華は人魚の持っている槍に恐怖を覚えた。

「どうだ！我がこれまでの全てをかけて生み出した槍は！たとえば貴様の体がいかに頑丈でもこれを受け続けることは出来まい！」

「くそッ！そもそもこいつ何と間違つてんだよ・・・!!」

悪態をつきながら迫り来る一撃一撃を避けていく。もう片方の腕を使いたいが、ヘラクレスを未だに拘束しているため動かせない。やりづらさを噛み締めながら立華は考える。

(このままではマッシュ達の所に行けない・・・!!でも再生能力なんて持たれてたら幾らやつてもいたちごっこだ・・・!!)

人魚は持っていた槍を今度は鎖に持ち替えると鞭の様にしながらマジンガーに浴びせ始めた。

鞭と言ってもその一振りは凄まじく、鎖の通った後には断熱圧縮による水の蒸発で泡が噴き出している。超合金Zの装甲には効かなくとも、操縦者である立華には衝撃が応えて来る。

「ぐッ！」

「フオウ!? フォーウ！」

立華はキャノピーに頭をぶつけ血を流す。コックピット内には未だに振動が伝わっており、気をぬくとまたどこかをぶつけそうだ。立華はフオウを抱えて彼に衝撃が掛かるのを防ぐ。

(こ、こいつこの攻撃が有効だって気づいたか・・・！)

「この野郎!!!」

ルストハリケーンがマジンガーから放たれるが、人魚は再び体を再生させる。だんだん動きが悪くなつて行くマジンガーに人魚は言う。

「無駄だ！ 我は海の神であり同時に水の神でもある！ この場に水がある限り我は無からすらも再生できる！」

鎖を引き寄せると同時に巻き付いていた辺りの遺跡も飛んで来てマジンガーに直撃する。

「そしてここは我の固有結界！ 貴様に今の我を殺すことは、不可能だ!!!」

遺跡に埋もれながらマジンガーは立ち上がろうとする。しかしパイロットである立華の腕に力が入らず空回りするばかり。その様子を見た人魚は再び槍を手元に寄せて言い放つ。

「今こそ！ 2万年の因縁に決着をつける時!!!」

「見よ！ これこそが!! 我が新たに生み出した新たな神具!!!」

その瞬間周りの水が槍を中心に回転し始める。回転が早まる度に槍は青く輝きくらい水の中を照らす。

(ま、まずい・・・！ あんなもん食らっちゃったら・・・！)

確かに、マジンガーのみならずあの槍を喰らおうと僅かに凹ませるのみで終わるだろう。しかしパイロットである立華にはその衝撃が直接来る。そうなったら人の形を残さずコックピットでミンチとなるだろう。

(なんとか・・・！ なんとか手段は・・・！)

立華は朦朧とする意識の中人魚の言葉を考える。何か、何かヒ

ントとなることがあるはず。

状況を察したフォウがコックピット内で走り回る。

「フォウ、落ち着け！そんなに走っちゃったらバターになっちゃまうぞ！」

ひたいの汗を拭いマジンガーを立ち上がらせる。

流した血と混ざって不快感を感じた立華は腕でひたいを拭う。しかしその瞬間

(・・・！までよ？拭う？)

(拭う、拭う、拭う・・・)

(・・・・・・乾く!!!)

立華の頭にアイデアが閃いた。

「む!!」

突然構えたマジンガーに人魚は神具の発動を中断し警戒する。幾ら手負いとはいえ、かつて神々を相手に戦った者が相手だ。警戒するに越したことはない。

持っていた槍を構え相手の様子を眺める。

次の瞬間

「ブレスト!!!ファイヤアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!!」

マジンガーは胸の放熱板から灼熱の炎を噴き出した。

熱線は人魚に向かって行くが、最初から警戒していた為余裕で避けられてしまう。

「馬鹿め！どこを狙っている!!」

熱線はそのまま海の彼方へと向かって行くが、それでもマジンガーは放ち続ける。

最後の抵抗というやつか？

そう考えた人魚は熱線が途絶えるのを待つことにした。熱線が止まった瞬間がお前の最後だ。とでも言うように。

一方マジンガーの中の立華はブレストファイヤーの威力に焦っていた。

(足りない．．．！威力が全然．．．！)

立華は精一杯ブレストファイヤーのレバーを引いてはいるものの、水中ということもあって威力が上がらない。

これでは考えた作戦が全て水の泡となってしまう。

レバーを両手で掴みながら立華は思う。

(頼むマジンガーZ．．．！このままじゃあみんなが．．．！俺の登場をみんなが待っているんだ．．．！こんな奴に負けちまったら．．．．全てが悲しい思い出に変わっちゃうんだ．．．！)

マジンガーはだんだんとブレストファイヤーの威力を弱めて行く。

光子力エンジンがオーバーヒートを起こして居るのだ。このままではいくらマジンガーといえど耐える事とは出来ないだろう。

だが

だが立華は否と叫ぶ。

自分に託されたマジンガーの力を信じレバーを引き続ける。

その身が悲鳴を上げようと。

頭から再び血を流そうと。

立華はやめない。

やめるはずがない！

(だから．．．．！)

「頼む乙・・・！答えてくれ・・・！」

次の瞬間

マジンガーの瞳が輝いた。

「なんだと?!」

人魚は驚愕の声わあげながらマジンガーを見た。

さつきまで弱々しかった熱線が、段々とその威力をあげていつて
いるからだ。それはやがて段々と燃える範囲を広げて行く。

一方立華も驚愕していた。

先程まで限界と感じていた光子力エンジンが正常に戻っているの
だ。

いや、戻るどころではない。まるで丸々メンテナンスしてもらった
かのように快調なのだ。

それだけではない。

ブレストファイヤーは段々と威力と範囲を上げていつている。や
がてそれは燃える範囲を広げ、ついにはマジンガーの正面そのものを
燃やし尽くした。

「っ、これは・・・！」

立華には覚えがあった。

この感覚はそう、第2特異点のあの時と同じような感覚・・・！
マジンガーそのものが、強化されているようなー

「小癪な！いかに強力な攻撃といえど当たらなければ・・・！」
人魚は沸騰した水の中で気づいた。

先ほどまで広がっていた自分の固有結界が段々と狭まってきていることに。

「！まさか貴様、我が海を全て蒸発させる気か?!」

そう、立華の狙いはこれだった。

彼はブレストファイヤーで全ての水を蒸発させて、人魚の再生能力が使えないようにするつもりなのだ。しかし朦朧とした意識の中での作戦だったのでとてもじゃないが成功するはずのない作戦だった。

だがマジンガーのとある力と、立華の思いが加わった時――

「そ、そんな・・・！バカな!!」

ついに人魚の結界を打ち破った。

「やっと、元の世界に、戻ったか・・・！」

息を荒くしながら立華は先ほどまで見えなかった海面にドレイクの船とアルゴノーツを確認する。人魚は本物の海で体制を立て直すと再びマジンガーZに槍を構える。

「やはりその力！我らにとって目障り極まりない！今度こそト

ドメを・・・?!」

しかしそれは先ほど飛ばしたロケットパンチが、人魚の頭に直撃した事によって崩される。

立華はロケットパンチをもとの場所に戻し、レバーの左下に設置してある新兵装を起動させた。

「これがダヴィンチちゃんの新兵装！フィンガーネット!!!」

次の瞬間マジンガーの指からいくつもの糸が吹き出した。

もちろんただの紐ではない。

形のある島にて受け取ったジャパニウム、それをダヴィンチが極限まで精製して糸のように仕上げた物。

それは海の中で複雑に絡まると布地となり人魚を網漁のように包み込んだ。

「どうだ！ダヴィンチちゃんが作った新素材「超合繊維Z」は！これでもう逃げらんねえだろ!!!」

「おのれ小癩なアアア?!」

人魚は超合繊維Zの網の中でもがき暴れる。

しかしこのまま捕まえておいた所で海に囲まれたこの場所ではいくら攻撃しようがすぐに再生してしまうだろう。

「周りに水がなけりやあいいんだな!!!」

マジンガーは網をしっかりと掴んだかと思うと、今度はそれを全力で振り回し始めた。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!」

「な、何をする気だ?!」

立華はアルゴノーツの下で人魚を振り回し続ける。

そして周りに海流が生まれ出したところを見計らい、自分のサーヴァントに全ての令呪を使った。

「全令呪をもって命ずる!!!」

至急全員でドレイクの船へ転移せよ!!!」

すると腕の令呪が赤く輝きサーヴァント達の元へ送られる。

立華はそれと同時にマシユに向けて念波を送った。

「マシユ！ドレイクに言つて今すぐそこを離れろ！でかいのするぜ！」

返事を聞かず立華は掴んだレバーに力を込める。もう空振りなんかしない。力の限り奴に叩き込む！

そして元の場面へと戻る。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ!!!」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ?!?!」

マジンガーは人魚の入った網を振り回す。

その力が強くなると同時に海流はやがて渦となってマジンガーの周りの水を吹き飛ばしていった。

「お前が誰だか知らねえけどなああああああああ!!!」

そして立華は叫ぶ。

自身の邪魔をする者達を圧倒するように。

「俺たちの邪魔を!!!」

自身の仲間達を勇気づけるように。

「すんじゃねエエエエエエエエエエエエエエエエエエツ!!!」

立華、マジンガーZはその叫びと共に人魚を天高く舞い上げる。そしてある程度の高さまで到達したと同時に、人魚をアルゴノーツへと叩き込んだ。

「.....の.....!化け物めええええええええええ!!!」

悲鳴のような叫びをあげる人魚とアルゴノーツが衝突した瞬間辺りに轟音が鳴り響く。

エピローグ

「なんなんだよこの渦は?!」

揺れ動くアルゴノーツの上で柱に捕まったイアソンが叫ぶ。
先ほどまで甲板を埋め尽くすほどいたシャドウサーヴァント達はその揺れによって今も吹き飛ばされている。

「せつかくもう少しで奴らを始末できると思ったのに!!」

「イアソンさま!おつかまりください!!!」

そんな中でもメデイアはイアソンに防御魔術をかけようと必死になっている。

しかし暗唱をうまく唱えることができずに空回りしてばかりだ。

「.....」

船の淵に手を置きヘクトールは渦の中心を眺めていた。中心を眺めるその表情は、無表情か。それとも懐かしむ表情か。

「おい、ヘクトール!!なにぼーつとしてるんだ!早く奴らを追うんだ!」

「.....」

イアソンがヘクトールに向かって怒声を浴びせる。

そんな時でもヘクトールは中心を眺めたまま動かない。

それが気に障ったのかイアソンは再び叫んだ。

「ヘクトール!おま「ちよつくら黙ってくださいやキャプテン」はあ?!」

不意にヘクトールが言葉を重ねる。イアソンは苛立ち

口を開けようとしたが、彼の表情を見て再び口を閉じた。

「……………」

「お……………おい。何だよ、その顔は?」

慈悲。

ただひたすらに慈悲。

哀れむように、それでいて子供に物を教えるかのように彼は言葉を重ねる。

「なあ?確かアンタってさ、王様になりたいとか言ってたよな?」

「あ、ああ!その通りさ!それが一体なんだって「あんたはさ」」

「あの時人々の為に命を張った勇者を見て、それに並べるような王様を、人々の笑顔で包まれてるような国を作るって言ったよな?」

イアソンはそれを聞き心の中で思い浮かべる。
かつて人々の為に命をかけて戦った黄金の勇者を。
子供の頃に憧れ、手を伸ばしたくて届かなかった神のことを。
「だからそれが何だって言うんだ?!今は関係ないだろう

?!」

「それとも何か?!今更僕に間違いがあると言いたいのか?!」

「……………さあな」

ヘクトールは再び目線を渦の中心に向ける。

それを見てイアソン、メディアも彼の視線の先を辿った。

そして見てしまった。

「……………はっ」

「……………えっ」

疑問符をあげたのは同時だった。

この渦の中心、ヘクトールの視線の先にいたのはかつての黄

金の神と同じ姿を持つもの。

マジンガーZがいた。

「俺たちが戦ってたのはさ、最初からあの神さんだったんだ。」

「神さんに誇れるような事をしようとしたが、あんたは何か間違っていたんだよ」

ヘクトールはそう言うと言を下ろし足元に転がってきた瓶を煽る。

イアソンは信じられない。認めたくない物を突きつけられたかのごとく言葉を吐き出す。

「そんな・・・！あの方が、俺の憧れたあの方が敵のはずはない！だってそれじゃあ・・・！それじゃあまるで・・・！」

『僕達こそが悪の軍団じゃないか?!』

ヘクトールは頬を掻きながら困った表情を浮かべる。

そして不意に船の上に大きな影が現れる。

（酷だね・・・。ま、しかし今回は仕方ないつか・・・）

（俺もキャプテン達も、人の心を弄びすぎた。なら当然の報いってやつだろう）

「嘘だ！嘘だ！嘘だ!!僕が一番見下していた悪と同じだなんて！そんなのうそ」

直後に轟音が鳴り響く。

アルゴノーツは、マジンガーの振り回した人魚（特大の神秘の塊）の直撃をくらいバラバラに吹き飛ぶ。

イアソンは結局最後まで現実を認められないまま、

熱の本流にかき消された。

エピソード

「せんばあああああああああああああああ
「だんなさまあああああああああああ
!!!」

「まって、落ち着いて、揺らさないで、傷開く・・・」

海から上がった立華は一直線に飛んで来た涙目のマシユと清
姫に抱きつかれた。

それもそのはずである。一度はパスが消えた事で最悪の事ま
で考えたのだ。心配しないはずがない。

しかし二人は泣きながら胸板に頭をグリグリするので、立華は今
にも気絶しそうだ。

「先輩・・・！一度ラインが切れた時はどうなったかと・・・
！どうなったかと・・・!!」

『立華くん無事だったんだね！一体海の中で何があったんだ
い?!』

「ドクター、その話は後で。それよりも早くカルデア制服を送ってくれ」

立華は一旦二人を離すとボロボロになったネロの手を掴む。

「おお・・・りつ、かよ・・・おそいでは・・・ないか」

「すまんネロ、もっと早く駆けつけていたら・・・」

「よい・・・」

ネロはボロボロの体を少し起こして立華に笑顔を向ける。

あの異形を見たらわかる。彼自身も大変な思いをした事が。そんな状況の中自分達を先ず最初に逃がしてくれた。

それだけで充分。

「・・・大儀である」

立華はその言葉を聞いて頷くとカルデア制服を起動してネロを回復する。それで少し楽になったのかネロは体を倒しゆっくりと意識を手放した。

「・・・みんな、遅れて本当にごめん」

「なあに、暗い事は言いつこなしだ。お前さんは充分よくやったよ」

クー・フリーンは立華の肩に手を置き励ました。

実際の所謝りたいのは彼らのほうだ。いくら立華がマジンガーZを動かせようともやはり普通の人間。守るべき者に戦わせ、しかも満足に役割を果たせなかった事にクー・フリーンは唇を噛む。

（・・・やはり槍が欲しいな。俺自身キャスターのままじゃ奴らに対抗し続けるのは難しい）

帰ったらダヴィンチのオツさんに頼むか。

彼は心の中でそう呟くとオリオン達の方を見た。

そこには

「ゴメンナサイゴメンナサオゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイオゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ」

「オヤジ・・・・・・・・・・・・・・・・飛んでったなあ・・・」
そこはカオスだった。

仮にも女神のアルテミスは頭を抱えてガタガタ震えており、オリオンはあの人魚の消えた方を延々と眺め続けていた。
「・・・・・・・・あいつらは一体どうしたんだ？」

「それがリツカを見たときからずっとこんなんでねえ。こっちが話そうにも聞きやしない」

ドレイクが肩をすくめながら困った顔を浮かべる。

それに心当たりのあるロマンは立華に聞いた。

『彼らのはあの人魚を見たときからあんな感じだったよ。結局あれはなんだったんだい立華くん？モニターに映りはしたけどリーダーにはなんの反応がなくて・・・』

「それについては私が説明するわ」

すると先ほどまでアステリオスのそばにいたエウリュアレが立華達に言う。

彼女はどうかやらあの人魚について知っているようで、近くの岩場に腰を下ろすと語り出した。

「あれはとある神霊の分霊みたいなものよ。この場所に漂っていた懐かしい気配に当てられて寄ってきたみたいね」

『神の分霊？しかしそれにしては神霊の波動を観測できなかったけど？』

「ええ、かつて私達の神話の神々は異界の神に寄って封じられた。それ自体は彼が帰った後に解けたのだけれど、それ以来彼らは人に関わる事をやめた。俗にいうトラウマってやつね」

「だけどそんな中でもわずかに闘志を燃やしている神霊も存在してね。懐かしい気配を感じた瞬間本体と別れてここに来たのよ。ただあの負けようからするともう最後の闘志も燃え尽きただろうけど」

そう言つてエウリュアレは悪い顔をする。

とても女神とは思えないそれに周りの者達はドン引きした。

「じゃあオリオン達があんななのは昔のトラウマなのか？」

「わたしの中の信仰が・・・」

アタランテ膝をついて暗い雰囲気を纏う。自分の信仰する神のあんな姿を見るのはやはりきついのだろう。

「ま、何はともあれこれにて一件落着だな」

「風が止んだ・・・ああ、こりや終わりだね。この海は終わる。大渦のような破滅じゃあない」

「アタシたちの海が帰ってくる！」

世界が輝き始める。聖杯が回収されこの特異点が光とともに崩れて

いく。ドレイクは海の向こうを眺めながら、みんなに聞かせるようにそう叫んだ。

「オオーイー！これでこのトンチキな海ともお別れだー！」

「やったなヤロウども、でもちよつと寂しいぜ！こっちの海はロマンに満ち溢れてたからな！」

「じゃあなマシユちゃん、立華！船長を助けてくれてありがとうよ！」

ドレイクの部下たちが言葉を言い残しながら消えてゆく。おそらく一足先に元の世界へと戻っているのだろう。

「おい、サツサと正気にもどれ。そろそろ帰るぞ〜」

「・・・！ええ、帰りましょう！もう怖いのはたくさん!!」

「ああもう、なんか疲れた・・・」

そう言つてオリオン達もサツサと消えてゆく。

アルテミスはよっほど怖かったのだろう、消えてゆく瞬間は今までで一番の笑顔を見せていた。

「・・・これから先アルテミスさまをどう敬えば良いのだろうか・・・」

「まああれだ。お疲れさん」

アタランテがため息を吐きながら消えていく。

彼女は彼女で色々思うことがあるのか、悟ったような顔を浮かべていた。

「や、そろそろお別れだね。そちらは色々大変そうだけれどくじけず頑張ってくれ」

「なんとというか災難だったな。来て早々狙われるなんて・・・」

「全くだね。できることなら次は女の子に追いかけて回さ
れたいね」

そう言ってダビデも消える。

それを見送った立華達も、足元から粒子を出しながらこの時代から消えてゆく。

「お、俺たちもそろそろだな」

「はい、皆さん。今回は我々に協力してくださいありがとうございました」

『僕からも言っておくよ。今回は特例ばかりで何もできなかった。おかげでこの歴史も修復できそうだ』

それを聞いたドレイクはハットを被りなおし立華達を見る。

今回の特異点は彼女のおかげで本当に助かった。マジンガーだけでは決して攻略することは出来なかっただろう。

「ああ、こっちこそ楽しかったよ。アタシへの報酬はそうだねえ・・・アタシらとの旅は楽しかったって思い出してくれればそれで良いさ!!」

「あーあ、これで私達の役割もお終いか。でも・・・
つまらなくはなかったわ」

そう言ってドレイクの横に來たエウリュアレが言う。

彼女は座っていたアステリオスの頭を撫でると立華達に微笑み手を振った。

それに立華は手を振って答えると唐突にあることを思い出した

「あー！　そういや聞いてなかった！　結局あんた達の言う神様ってなんなんだよ?!」

そう、立華は約束していた。

この特異点が終わったら彼女にとある神の話を聞くことを。
しかし

「ああ、もう時間がない!」

「残念。仕方ないからまたの機会にしてください。それに私達の思い出をそう簡単に聞けると思わないことね」

エウリュアレはいつの日か見たような悪どい顔を浮かべた。

せつかくここまで頑張ったにもかかわらず情報の収穫なしに立華はへこんだ。

だんだんと特異点から消えてゆく。もうじきいつも見慣れたコフィンに戻ってくるだろう。

するとエウリュアレは唐突に口を開き――

「覚えておきなさい。Zマジンガー、それが私達の救い主の真名よ」

完

新章

次回予告

「貴様は．．．貴様は一体なんだ!!!」

瓦礫に覆い包まれた場所。はるか地下のとある場所に反響した様な声が響き渡っていた。

声の主、元凶は獄炎に包まれた黒い魔神の前でうろたえている。彼は指をさしながら震えた声で最後のマスター．．．藤丸立華に問うた。

「．．．．．」

「せ、先輩．．．．．?」

立華は答えない。顔ををうつむかせた様子はまるで気絶したかのように見える。しかし彼の瞳は自身の足元を（螺旋の刻まれた瞳）で見据えていた。

「答える!!! 貴様はいったいツ．．．?!」

そして、そんな静寂を破るかのごと魔神の前に光の粒子が集まり始める。

唐突に現れたその光子をその場にいる一同は黙って見つめた。

それはやがて文字の形となり――

？ う 思 と だ ん な

それは、数分前にさかのぼる————

四つ目の特異点、産業革命時代の霧煙るロンドン。

歴史と伝統が佇む石畳の街は、人体を死へと蝕む霧に包まれていた。

立華、マシユ、クーフリーン、清姫、ネロの五人はロンドンを守らんがために剣を振るう叛逆の騎士、モードレッドと出会った。

限界した“はぐれサーヴァント”である彼女はこの時代の碩学者のヘンリー・ジキルとともに致死性の不可思議な霧“魔霧”の謎を追っていた。

お互いの事情を理解した彼らは手を結びこの特異点の解決に走る。

「は、は、は、はッ．．．！」

そして魔術の総本山「時計塔」の地下にて原因たる聖杯（アングルボダ）とそれを操る魔術師M．．．マキリ・ゾオルケンに遭遇。

マキリは聖杯の力により魔神柱バルバトスとして変質し立華一行に襲いかかった。

「は、は、は、はッ．．．！」

しかしこれまでも言う通り立華には無敵の力、マジンガーZがある。大した変化のない魔神柱ごときに遅れを取るはずもなくやすやすとそれを撃退した。

「く．．．！クソ!!!」

しかしマキリもそう簡単には倒れなかった。

最後の力を振り絞り彼はアングルボダの特大魔力を触媒にサーヴァントを呼び出す。

召喚されたサーヴァントは霧に包まれるロンドンを稲妻のごとく切り裂き天へと昇っていった。

「みんな．．．ッ！」

「．．．ドクター、レイシフトを。このままでは全滅です．．．！」

後に現れたサーヴァントも含めた二体を倒した立華は今度こそと
聖杯の回収に地下へと戻る。

そこに待ち受けていたのは――

「無駄だ……」

「貴様らとは靈基の格が違うのだ。どんなに足掻こうとも変わ
らない……」

さあ……苦悶の海に溺れる時だ……

口元をにやけさせた元凶は道端の雑草でも見るような目で立華一
行を睨む。

立華、マジンガーは膝を立てて魔神柱たち相手に全員の盾となつて
いる。少しでも動けば仲間たちに地獄の業火が届く。そんなことは
させるわけにはいかない。

それぞれが自分自身の問題に夢中だ。

立華も、元凶も、マシユも、サーヴァントたちも。

だからこそ気づかない。

だからこそわからない。

マジンガーの変化に……

――来たか・
・
・
・
。

次回予告

????
悪

プロローグ

暗い空間。

そこに自分は立っている。

いや、意識のみ漂っていると言うべきか。

ほとんど先は見えず自分の姿もわからない。

なんだここは……

口に出して呟いてみる。しかしそれは誰に聞かれるまでもなく反響するだけ。そんな不可思議な状態で彼は思う。

夢？だとすると変な夢だな……

夢ならせめて面白可笑しいのが見たいよな……。そう考えた矢先、急に視界が光を捉えた。

??

光は最初火花のようにポツリとあるだけだった。だがそれは時間とともにどんどん増えて行き、しまいには暗い空間を埋め尽くした。

おお……

その光景に思わず声を上げる。先ほどまで真っ暗だった空間はまるで星空のように光の粒をちりばめ輝いていた。手を伸ばすと届きそうなそれに彼は目を向ける。するとまるで導かれるように光の一つに向けて自分の意識が動いていった。

だんだんとはつきりして来た光。そこにあつたのは――

「……テレビ？」

そこには古いテレビがあった。しかもだいぶ古いタイプ、ブラウン管によって光を灯す正方形のテレビだ。

彼は不思議に思いながらテレビの前まで近づく。よく見渡すと光の一つ一つはテレビから漏れている光でそれが空間一面に広がっていたのだ。

彼はそんな一つのテレビに近づいて画面を覗きこんだ。しかし画面は砂嵐で何も写っていない。

なんなんだ？

そう思い辺りを再び見渡す。

そして気付く。無限に漂うテレビの一つの前に人影が座っていることに。

彼は人影に向かって近づいて行った。

この場所についてわかるかも知れない。そんな思いを抱きながら視線を向け続け――

お前は……まだ早い。

突如襲い来る激痛に止められた。

?!?!
ッ

何が起こっている？わからない。突如訪れた苦しみは身動きの取れない彼に襲いかかる。

誰か・・・！

わずかに残った思考の中で彼は腕を白い影に伸ばした。

そんな激痛の中、視界に入ったテレビの画面に変化があることに気付く。

段々とテレビに映る人の影。

ある者は拳を。

ある者はハーケンを。

ある者は斧を。

ある者は螺旋の刃を。

ある者は弓を。

ある者は電磁を。

ある者は月の輝きを。

ある者は日輪の力を。

ある者は技を。

ある者は銃を。

無限

歌

戦

時空

獣

黒渦

天使

破壊神

進化

狩人

ありとあらゆる人の形。

先ほどまで砂嵐だったテレビの画面に段々と色がつき始めたのだ。
いや、違う。これは……これは、————自分が見えてなか

t

テレビの前の白い影は映っていた画面を消すと先ほどまで彼がいた場所に振り向いた。

素晴らしいな……彼らは……。
そして美しい

「ツ……!!」

「あ、おはようございます先輩。……顔色が、今朝はあまり優れないようですね」

気づけばベットの上。

立華は全身に汗を掻きながらマシユを視界に入れた。

そこはマイルーム。カルデアのマスター達にあてがわれる部屋の
一つだ。

「マシユ……?」

「眠れなかったのですか? いけませんカルデアにいるうちはきちんと眠っておかないと。休息も作戦行動に含まれます。以前も言った通り、わたしたちは」

マシユが心配そうな目で注意する。しばし惚けていた立華は安心させようと思ったことを伝える。

「夢を……見たような……」

「夢を見たんですね。どういった夢、でしたか?もしかしてですが

……それは、わたしの、その……」

立華はそう言われて考える。

先ほどの夢、それは一体どんな夢だったか。なかなか内容は思い出せないが覚えていた感情を伝えた。

「確か……なんかクトウルフっぽい？」

「そうですね……良かった」

そう言うのとマシユは溜息をついて安心したように呟く。立華は渋い顔をしながら思わず突っ込みを入れた。

「いや、全然良くないよマシユ。せつかくの朝だったのに見た夢が悪夢なんて幸先悪いだろ？」

「あ、いえ。そう言うわけではなくてですね……その、何とか……」
「どうやら言葉に詰まっている様子のマシユは下を向いてゴニョゴニョ呟いている。心なしか顔も紅くなっているので再び声をかけようとして、何かを思いついた様にマシユが答えた。

「いいえ、何でもありません。ミーティングが始まりますから管制室へ行きましょう。ドクターが待っています」

そして早足にマイルームを出る後ろ姿に立華はぼかんとした後自分もと考えて観戦室に向けて歩いて行った。

「そういや、結局どんな夢だったわけ？……まあいいか」

「おはよう、諸君。良いタイミングだ。丁度、準備も整ったところだよ」

観戦室ではいつもの様にロマンが立っていた。しかし側に同じくいつもいるはずの天才の姿が見当たらず立華はまたかというような顔で言う。

「ダヴィンチちゃんはその・・・また？」

「いや、今回は少し違うよ。」

また、というのは祖父の研究資料についての事だ。というのもあの天才はかつて持って帰って来た研究資料を読み漁り自分の工房に籠っているのだ。

最近など廊下で見かけたときは顔色を悪そうにしながらとても気分がいいなどと呟き続けていたのだ。それを見たスタッフやサーヴァントたちはドン引きした目を向けてそつと廊下の端に行き道を開けていた。

「今回色々成果が出たらしくてね、数時間前に叫びながら「寝るから起こすな！ って言って僕のソファァを占領しちゃったんだよ・・・」

「うわあ・・・」

その光景を想像して立華は顔をしかめる。

あの見た目完璧美人が発狂しながらソファァに横になる光景はさぞや酷いものだったのだろう。

あれで自分の仕事は終わらせているのだから余計にたちが悪い。

「とりあえずまずは前回得た情報の解析結果からいこうか。」

「七十二柱の魔神・・・そう呼ばれる召喚術を使ったという、ソロモン王の時代の観測、ですね？」

「そうだ。結論からいうと、ソロモン王の時代に異変はなかった。紀元前10世紀頃に特異点は発生していない。これがどういう事かと言うと、七十二柱の魔神を名乗るモノたちとソロモン王は無関係という事さ」

そう言うって立体映像の解析画面を立華とマッシュに見せる。

まったくの無関係。その言葉に立華は思わず尋ねる

「それはまたどうして？自分で名乗るくらいだし手がかりくらいある

と思ったんだけど・・・」

「どうしてもこうしても、あれだよ。ミステリでいうなら不在証明が成立したという事だ。もしソロモンが七十二柱の魔神を使役しているのなら必ずその痕跡が観測される。紀元前10世紀から未来に向けて使い魔を放っている。という流れがね。でもソロモン王の時代には何の異常も見られないつまり彼の時代は“正しい人類史”のままで。」

立体映像にはその時代の次元振が計測されている。

そしてその数値は・・・”0”

「だからレフ・ライノールや魔神を名乗る連中はまったく違う”何処かの時代”から現れている。なのでソロモン王と彼等は無関係だ。」

立華はしばし考え顎に手をやる。すると何か思いついたかのように手を合わせた。

「そうだ。サーヴァントだ。ソロモンがサーヴァントになってしまっているというのはどうだ？」

「そうです。先輩のように、自分の時代でソロモンを使い魔にすれば“七十二柱の魔神”も配下にできると思うのですが・・・」

その答えを予想していたかのようにロマンはすぐに答える。

「七十二柱の魔神なんて使い魔が本当に実在するのなら、の話だよそれは。だいたいソロモン王がそんな悪事に荷担するとはボクは思えない」

「お言葉ですがドクター。サーヴァントはマスターには従うものです。マスターが命令すればソロモン王も従うしかないのではないですか？」

「そんな悪人にソロモンは呼べないよ。冬木の聖杯戦争じゃあるまいし。カルデアの召喚システムはマスターと英霊、双方の合意があつてはじめて成立するものだ」

カルデアにおけるサーヴァント召喚。

それは座にいる本体からの同意が確立して初めて成功される。

サーヴァントが座にて召喚者を気に入らなかつたら決して応じることはないし召喚者が心のどこかで拒絶しても召喚出来ない。

「ダヴィンチちゃんもそうだったからこそ来たんだな」

「君の召喚したサーヴァントもそうだね。真っ直ぐな君だったからこそ彼らは答えてくれた。ならばこそソロモンの人柄を想像するに召喚される事は無いと考えたのさ」

そう言うところマンは再び計測器に向き直り今回の特異点を表示する。

そんな中立華は考えた。

（ソロモンが召喚出来ないとなると別の犯人がいると言うことか……。となると一体どう言う事なんだろう。あいつらは自分のことを魔神と呼ぶしあれほどのもんを操るとすると……。いや、さて）

（操る……。なんか引つかかるな……。あいつらはそもそもとして操られてー）

「先輩？」

「そろそろレイシフトを始めるから準備いいかい？」

声をかけられて立華は顔を上げた。どうやら自分の思うよりだいぶ考え込んでいたようだ。

「悪い。ちよつと考えてて……」

「お、出発すんのか？」

すると管制室にネロと清姫とクローリーリンの三人が入って来た。クローリーリンは立華達をみてウォーミングアップを始めた。

「旦那様？朝ごはんを食べていないと思ひ用意しておきましたよ」

「あ、おにぎりだ。ありがとう清姫、ちよつとお腹空いてたんだ」

「なんだ？もう新しい所が見つかったのか。この前のからそう時間も経っていないではないか」

「そのことに着きましたはこれから説明する所でして……」

全員が静かになるのを見届けるとロマンは次の特異点の映像を表示した。

「……さて。どうあれ、残り四つの特異点。

このいずれかの時代に黒幕が潜んでいる可能性は高い。なにしろ他の時代に異常はないんだ。特異点を潰していけば必ず黒幕に遭遇するさ」

「では今回のオーダーの詳細を説明しよう

第四の特異点は十九世紀――」

「七つの中では最も現代に近い特異点と言えるだろう。けれど驚くに値しない。道理ではあるんだ」

そう言うと言面に蒸気を吐き出し続ける煙突群を表示する

「すなわち文明の発展と隆盛この時代に人類史は大きな飛躍を遂げることになる。――つまり、だ。」

産業革命さ！まさしく決定的な人類史のターニングポイントだ！

霧

物語を始める前に、少し皆さんに結末のヒントをあげましよう。

皆さんは物語についてどのような考えを持っていますか？

例えば漫画やアニメの世界。

これらはあなた達によって紡がれた夢の世界。そこに暮らす住人達は誰もが不思議な力や運命を持っています。

当然です。物語とは誰かの心にとどめて欲しくて紡がれる物。伝えたい思いを形にする為にも彼らには様々な「何か」がのしかかるのです。

そんな創作の世界を皆さんは文字通り好きにすることが出来ます。

ただ文を紡ぐだけで住人達を動かすことができる。

ただ記すだけで都合の良い物事を引き寄せる事が出来る。

ただ創造するだけで世界が進む。

天地創造。ああなんと素晴らしい言葉だろうか。皆さんは誰もが神様となって「世界」を好き勝手に出来るのです。

しかしそんな物語を、多くの人々が胸の奥に閉まったままにしています。

何故、と問われればいくつも理由は出てきます。

大変

めんどくさい

恥ずかしい

照れ臭い

こんな都合の良い展開あるわけない
技術がない

妄想だけでいい。
なるほど、全て納得できる。

書くのは大変だし時には面倒に思うこともある。誰かに見られるのが恥ずかしかったり、厨二病と言われるのが怖かったりする事も、ご都合主義で想像しきれないところもあるだろう。

心を形にする事は、想いを文に乗せる事はとても難しい事です。

しかしそれでも、私はこう思うのです。

「形にしないままはもったい」と。

駄文、つまらないと言われようと、

恥ずかしいと思っただとしても、

低い評価をもらおうと、

貴方達にはその世界を救う力があります。

貴方達には、その世界の運命を切り開くことができます。

たとえ人々に否定されたとしても、あなた達の物語は生ま
れただけで救われるのです。

だから皆さんも、その力を使って見ませんか？

紡いで見ませんか。

そうでなければ—————

生まれなのままの世界は……ずっと救われる事はありません。

第1話 霧

「レイシフト成功しました。これは視界が阻害されるほどの状態です。霧？もしくは煙でしょうか。いえ、凄く濃度です……」

ロンドンについた立華一行は霧に包まれた大通りの真ん中にいた。

「空にはやはり、これまでと同じ「光の輪」を確認。しかしそれさえ、この霧または排煙のせいではつきりとは……」

昼間であるはずの辺りは薄暗く、光さえも通さないような状態だった。電柱から時折揺れるように覗かせるガス灯はその効果をあまり成せていない。

「空を埋め尽くすほどの霧、煙それ自体は産業革命の頃には珍しくはないけど……」

かつての産業革命、その時代ではより多くのものを生み出そうという流れがあり暗やみの空にそびえる煙突からはとてつもない量の有害物質が流れた。

暗い中にロマンの声が響く。キーボードに指を走らせながらモニターの計器を見るとその数値ははどれも異常を記していた。

『いや、ただの霧や煙ではないようだ。こちらでは異常な魔力反応として検出されている。凄い濃度だ。とても濃い。濃いな。いや、これはちよつと濃すぎるんじゃないか！まるで、大気に魔力が充満しているようだ。大気の組成そのものに魔力が結び付いたクラスだよ！生体に対して有害なほどのモノだよ、これは……マシユ、立華君、体の調子は？』

「わたしは問題ありませんデミ・サーヴァントであるからでしようか……。先輩はどうですか？様子は普段とそう変わらなく見えますね」

「ああ、俺は大丈夫だと思う。一応兄貴に診てもらったけどルーンは何も無いって示してるらしい」

「この霧は俺たちにとつちや栄養だが坊主からしたらたまったもんじゃねえ……。サーヴァントを限界させる程の濃度、こんなもんな手したら弾け飛ぶぞ」

キャスターがルーンの文字を空中に浮かべて辺りを照らす。魔力の含まれる霧が作用してのことなのかいつもより輝きが強く感じる。

「良かった。ですが、できれば濃い霧には入らないで下さい。」

「立華君も異常なし、か。確かにバイタルの測定にもさしたる変動はないかな。」

マシユとドクターは安堵のため息と共に胸をなで下ろす。そんな中立華はこの特異点についてあることを考えていた。

（今回の特異点・・・マジンガーを出すことはないかもしれないな。町があるし下手に動かすと人が巻き込まれちゃう）

今回の特異点はロンドンの街中。

マジンガーを動かすには邪魔なものが多すぎる。確かに必要な場面はあまりないかもしれないが切り札を失ったのは大きい。

そう考えていると――

「なんだこの有様は!!!」

横から大声が響いてきた。

「ね、ネロ?どうした一体?」

「どうしたもこうしたもではない!なんだこの有様は?ここがロンドン?婦人にとつての憧れの街?ブランド店は?!スコーンは?!」
「いや遊びに来たんじゃないよ?!」

思わず突っ込んでしまった立華はある意味仕方ない。これからさあ世界救うぞというシリアスな場面でこの台詞なのだ。予想外にも程がある。

「そうですよねろさん・・・私達は遊びに来たのではないのですよ?」

「そうそう、清姫の言う通り」

「新婚旅行に行く場所になるかもしれない場所!もつと真剣に見極めなさい!」

「今日も絶好調かよ畜生!」

よりにも寄つてこの二人、世界を救う救えないの場面でこ

の有様である。清姫の言葉に衝撃を受けた様子のネロは顔に影を作り背中に稲妻を浮かべた。

違う。そもそも真剣になれよお前達。

「二人とも・・・いくら好調が続いてるからといって気を緩みすぎたらダメだろ。今回はマジンガーも使えないしどんな現状かもわからないんだぞ？」

「何を言うリツカよ！この余が側にいると言うのに何を心配すると言うのだ！魔神が使えないと言うのなら仕方ないと諦めよ！なあに、大船に乗ったつもりで安心せよ！」

「ねろさんの言う通りです旦那様？それにここ最近旦那様にとって危ない事が多すぎたのは事実。しかし私、これでもさあばんと。旦那様の為ならたとえ火の中マグマの中！」

そう言いながら二人同時に鼻息を吐く様子を見た立華は思った。

ああ、昔の人って強いなあ・・・と。

「街路沿いに確認できる限りでは建物のすべての戸や窓が閉められています。おそらく、犠牲者が発生した後生存者が屋内へ避難したものと考えます」

「街に人がいないのはそういうことか……」

『こちらでも、確かに周辺の建物に生体反応を相当数確認している。生き残ったロンドン市民だろうね。皆、屋内から出られずに困っているんだろう・・・』

予想通りと言うべきかロンドンの住人は全員室内に閉じこもっていた。

立華一行が歩き始めて十数分、未だに町で動くものは見当たらない。解析した情報によると人は全員室内にこもって霧をやり過ごしているらしい。しかし被害は今も拡大していて生命反応は着々と弱まっているらしい。

「急がないと・・・」

そんな状況に立華は焦る。焦りを浮かべる立華を心配してなのかマシユが言った。

「わたしたちが聖杯を入手・破壊すればこの異常なロンドンの存在そのものが修正されます。ですから、きつと・・・この霧で命を落としたはずの市民たちも屋内で霧から逃れている市民たちの存在も被害さえ存在しないことになります。ですから その ですね、ええ、と……」

「・・・ありがとうマシユ。心配してくれて」

でも、と立華は続ける。

「でもここにいる人たちは「今」苦しんでいる。無かったことになるにしてもそれを放っておいたら何つーか・・・スツキリしないだろう？」

考えても見てほしい。道の真ん中で果物を落とした老人がいたら拾ってあげたくなるだろう。電車で妊婦がいたら席を譲ってあげたくなるだろう。

つまり何が言いたいかと言うとだ。

「つまりは良心が痛むのでしょうか？本当、お優しい」

「どうせ人を助けるんだ。それならあとぐされなく終わりたいよな」

そういうと再び立華は歩き出した。その背中をマシユは心配した目で見つめたがやがて振り払い後続に続いた。

(先輩・・・どうか背負い過ぎないでくださいね)

「なんだお前達、こんな所で・・・父上☒」

誰も知らない知るはずもない

「紛らわしい面してんじやねえよ！先走っちゃまっただらうが！」

「む?!何を言う！余はこの世で一つの至高の芸術。つまりオリワンである！失礼なことを言うでない！」

現在立華率いるカルデア一行はロンドンで出会った全身鎧の英霊、モードレットと共に彼女の拠点にいた。

「でもわかる気もするな。アーサー王とネロって瓜二つでそっくりだし」

「ああ、たしかに。あの騎士王と比べると畏怖っつーの？そういうのが全然ねえが……」

立華とクーフリーンがネロの顔を見て思い出すように呟く。

一時は数時間前に遡る。

霧の中で立華達と遭遇したモードレットはネロの顔を目にするや否や、戸惑った表情で話しかけてきた。最初はしどろもどろだったが情報交換をすると態度を軟化。自分の拠点に連れて行ってくれた。

最初しどろもどろしていたのは どうやら第一特異点で戦ったアーサー王とネロを間違えたかららしい。

「ああ、もう。セイバー。見知らぬ人にすぐ真名を明かしちゃうんだ、君は。」

困ったような表情をしながらモードレットに話しかけるのは眼鏡をかけた好青年。

彼の名はドクタージキル。この特異点にてモードレットと共に事件解決に臨んでいた（人間）である。

「言ったじゃないか。話したじゃないか。名乗るのならばせいぜいクラスにしておこう、って。わかるかい？真名が露呈すれば性能が露見するのと同じだ。だからこそ、通常の聖杯戦争では真名というものは秘匿されるものなんだ」

そう言うと言い争っている二人に近づきモードレッドの前に指をたてる。

「それなのに、君というひとは比較的気軽に真名を明かしてしまつて……」

「しようがねえだろ、そこにいる父上そっくりのニセモンを見たら話さずにはいられなかつたんだよ」

「だから偽者とはなんだ無礼者！そういう貴様こそ余とキャラが被っておるではないか！そちらこそ余の偽者みたいではないか！」

「誰がお前の偽者だコラ！」

「あ、確かにお互い赤いセイバーだよな……」

世の中には自分にそっくりな人物が3人はいるとどこかで聞いたことがある。しかしこんなわずかな間で簡単に3人揃ったところを見ると、まだまだ増えそうな気がしてならない。

「とりあえず二人共、今回の件については一旦置いておこうぜ。」

お互いまだ情報の交換もしつかりしてないし……」

「いや！ここで引き下がるわけにはいかんのだリツカよ！余の中の何かが叫ぶのだ、「時代は青より赤！」と！」

「あ？青って父上の事かてめえ……！父上をバカにしているのは俺だけだぞ！」

そういうと再び二人は睨み合う。それを見た立華とジキルは溜息を吐くと二人の間に入りお互いのセイバーに語りかけた。

「モードレッド、そもそも最初に間違えたのは君だろうか？ならば最初に言うべきことがあるんじゃないか？」

「なんだてめえ！そっちの肩を持つっていうのかよ！」

「肩を持つ持たないじゃありません。君だっていきなり勘違いした後に偽者扱いなんてされたら怒るだろう？自分の立場になって考えてみなよ」

「うっ……」

冷静になって考えると相手の方に罪はない。こちらがいきなり突っかかってきたようなものなのだ。

「ネロ、もうそのくらいにしておこう？確かに間違えられた後に偽者扱いはひどかったと思うけどさ……」

「ならばこそ決着はつけるべきであろう！リツカはあちらの肩を持つとでもいうのか！」

「肩を持つ持たないじゃない。それにネロも同じように偽者なんて言っちゃっただろう？お互い様になってどうすんのさ」

「ムグ……」

確かに言い争う最中に同じように偽者扱いをした。これでは相手を偽者扱いするなど言ってもブーメランになってしまう。

「ひどいだろう？だからこそ君も折れるべきだ。これから一緒に戦う仲間なんだから」

「自分に自信があるのならもつと心を広く持とうよ。受け流す事もこれからはきつと大切なんだしさ」

「君たち大人だろうか？」

言葉が被ったと同時にわずかな静寂が走る。

そしてジキルと立華はしばらく顔を見合わせると無言でお互いに握手をした。

「……謎の友情が芽生えました」

「てかなんだよこの変な空気は」

『ええ……?』

「先輩、一体何が通じあったんですか……?」

ネロとモードレッドもお互いにしばらく睨み合ってはいたが、ジキルと立華が睨みを効かせたことで渋々という感じに握手をした。

「さて、早速だけど情報が知りたい。この街は今どんな状況かわかる?」

ここまでにとどり着くまで立華達は感じていた疑問、それはあまりにも街が静かだった事だ。

これまでの特異点では何かしらの争いや戦争といった特有の空気があった。それはただの一般人である立華ですら『あれ?なんかへんな空気』とわかるもの。そのおかげでこれまでも心構えが出来ていた。

しかしこの特異点ではそんな空気が一切なく、周りには人影どころか敵の影も見当たらないという始末。同様にサーヴァント達もその違和感に疑問符を浮かべており、妙な不気味さを感じ取っていた。

「さっきも言った通り自分達はこれまでに4つの特異点を攻略してきた。それらはどこも殺気とかで溢れてて自分ですらも把握できるほどだった。でもここは敵意とかが全くない。暗殺とかそんなんがあるとかも考えたけど一向に何もない……」

『君達に出会うまでに軽く2時間はこの街を彷徨ったと思う。街自体には毒の霧が漂ってこそいるがそれだけだ』

ロマンはここにくるまでに解析班に特異点の映像を見張らせ

ていた。だがやはりというべきか影や生き物の気配もない。

「……突然の出来事だった」

やがてジキルは重々しく口を開き語り出した。

「あれは今から三週間くらい前の出来事だ。その頃はまだ雨が酷い梅雨の時期でさ、昼間なのに夜と同じくらいの暗闇を雨雲が作っていた。」

そう言っつてジキルは街の地図を取り出し街の中心部を指差す。

「傘や雨具なんかも全く効果がなくて、街の人たちは中心部の広場に大きなテントを張る事で物資の流通を行なった。そんな時だ。あのおかしな現象が起こったのは……」

「その日はいつものごとく雨だった。しかし空を見上げた誰かがその日の天気は異常な状態だと気づいた」

「異常な状態？」

「ああ、例えるのなら渦というべきか……街のテントの真上を中心に空全体が巨大な渦を巻いていた。風はその日吹いておらず、台風の目というわけでもない。なのにもまるでタイヤの回転の様に凄まじい速さで雲が空に螺旋をえがいていたんだ」

「やがてそれはだんだんと小さくなっていった。あたりには久しぶりの青空が広がってはいたがそんな事は誰も気にしていなかった。当然さ。その雲は小さくなって行くというよりは、圧縮されていくという様に灰色を強い黒へと変化させていったんだから。街にいた誰もが不気味さを感じていたよ」

すると次の瞬間、集まった黒い雲は槍の様に地上へ向けて落ちていった。その場にいた人々は風圧に吹き飛びテントは完全にバラバラになっていた。

やがて雲は街全体に広がり霧となって覆い尽くした。

「君達の司令官も知っている様にこの霧には魔力が含まれている。その影響でロンドンにはまるで神代の頃の様に幻想種が闊歩する街になってしまった……」

「アア、まさか魔猪をこの時代で見ることになるなんてな。オレの時代ならともかく……」

モードレッドはその事を思い出したからなのか眉をひそめる。

「ん？ちよつと待つて？ならなんで今はこの街に何もいないんだ？少なくとも俺たちが来た時は何も出会わなかったぞ？」

そう、それならこの街は今頃大混乱となっているはずである。なのに街の人たちは引きこもるだけになっている。

「……本来ならね。呼ばれていたのは幻想種だけじゃない。魔力に惹かれたためか、はたまた何か別の理由か、サーヴァントの出来損ないとでもいふべき存在も多数召喚された」

「モードレッドの様にこちらに味方してくれるものもいたが多勢に無勢、とてもじゃないけど抑えきれるものじゃなかったよ」

それを聞いて立華はますますわからなくなる。だがそれを察していたのかジキルはすぐにこう続けた。

「悪魔だ」

「悪魔？」

カルデアの面々が最初に思い浮かんだのは魔神柱である。あれも一応はソロモンの悪魔と呼ばれていた存在だ。

「サーヴァントも少なくなり、我々が劣勢を強いられている中霧の中からそれは現れた……」

「あの野郎……オレの獲物を横取りするどころか場にいるやつらを全て片付けやがった」

二人はそう言ってあの時の様子を思い浮かべる。

(な、なんだあれは！幻想種達をいとも簡単に☒)

(退がれもやし！巻き込まれるぞ！)

そうやってモードレッドに抱えられる中彼は見た。霧の中を何かが動いているところを。それは背中と頭を蝙蝠の羽のような形をしており、わずかな光を反射して鋭い瞳を鈍く輝かせていた。

「それが味方かどうかはわからない。けれどその存在は街に迫っていた脅威をことごとく殲滅し、ひとまずの落ち着きをもたらしてくれたよ」

戦いの後も幻想種やサーヴァントの出来損ないは召喚され続けはいた。だがそのことごとくが召喚されたそばから悪魔の手に寄って叩き潰されたらしい。

「その存在を見た子供によるとその悪魔は涙を流して自分を殺そうとしたナイフのサーヴァントを倒していたという。子供は泣きながら悪魔が助けてくれたといい、街の人々はそれ以降彼の事を親しみを込めて「デビルマン」、と呼んでいる」

「僕たちもお陰でこの街の異変に落ち着いた対処が出来てとてもありがたい。そんな時に君達がやってきた、というわけさ」

暗い街の中、黒づくめの格好をした男が歩いている。

「やっぱりそう簡単に尻尾を出すわけねえか・・・」

手に持った骨つきの獣のあしを豪快にかじり辺りを見渡す。

「・・・くそつたれ、あの目玉ども次こそ全滅させてやる」

そう言うのと彼は腰につけた水筒から豪快に水を飲み喉を潤す。

せっかく、悪魔に打ち勝って、人間をやめてまで戦ったと言う

のに、奴らは途中から全部台無しにしやがった。

「待ってるよ・・・ミキ、了。必ずあいつらから俺たちの全て、

取り戻してやるからな」

そして彼は再び歩き出す。

異なる世界からの新たな来訪者、彼はカルデアに、この世界に、
いったいどのような影響を残すのだろうか・・・。

続く

死 k a i 魔霧都市：ロンドン

「デビルマン・・・かあ・・・」

街を歩きながら立華は呟くようにその名前を出した。

「いったいどういう方なのでしょう・・・。これまでの戦いで、私たちは悪魔と呼ばれて来た魔神柱と戦って来ました」

『警戒してしまうよね・・・。目撃証言によると子供を助けたみたいだったけど』

「そもそもとしてあまりに唐突すぎる。これまでの戦いでは何かしらの敵対勢力と対峙して追い詰められたら出て来る、というパターンだった。なのに此処じゃあどっちも死にかけ。戦いすらねえ・・・」

あれからしばらく情報の交換を行っていたが、ロマンがその広場で調査してみたいと言いモードレッドに案内を頼んでいる。ジキルによると広場は未だ放置されたままらしくその日の風景がそのまま残ってるらしい。

「オレ自身奴を見たのは一度だけだ。いつも昼くらいまではこの街を捜索しているが未だに出会わねえ・・・」

彼女はいつも午前前の時間は街の捜索とパトロールを行なっている。しかしそこで出会うのはゴーストやよくわからない生き物のみ。手がかりはつかめていない。

「・・・」

「旦那様、どうかいたしましたか？気分が悪いのであれば休憩を挟みますが・・・」

「・・・え？あ、いや、そうじゃないよ。ただちよつとね、懐かしい響きだな・・・て」

「懐かしい響き？何が？」

「デビルマン、て名前がだよ」

立華の言葉に全員が足を止める。視線が集まった事に気づくと立華は困惑したように全員の顔を見渡した。

「み、みんなどうしたんだよ。そんなキョトンとした顔で見て来てさ」

『立華くん、デビルマンの事を知ってるのかい？』

「英雄かなんかなのか？俺には聞き覚えがねえが・・・」

「ああそう言う事。どうしたのかと思ったよ」

どうやら立華はデビルマンについて何か知っているらしい。全員が疑問符を挙げているであろう中、立華は話し出した。

「俺がまだ3歳か4歳くらいだったかな・・・。その頃は父さんも母さんも研究職で午前中にいない事が多くてさ、おじいちゃんの家遊びに行っていたんだ」

「え、先輩のご両親は科学者だったんですか？」

「うん。それでさ、おじいちゃんがどうしても手が離せないって時には古いビデオデッキをつけてくれて昔のアニメなんかを見せてくれたんだ」

「そんなアニメの中にあっただんだよね。デビルマンって名前のやつが・・・。」

『あ、そうだそうだよ。なんか聞き覚えがあるなと思ったたらデビルマンか。懐かしいな』

立華の言葉に一同は再び呆然とする。

「あにめと言えばあれであろう？何枚も絵を描きそれをパラパラとすると動くと言う・・・。」

「デビルマンは俺の父さんくらいの頃に放送していたアニメでさ、主人公が悪魔の身体を奪って悪い悪魔と戦うって物語なんだけど・・・その主人公もコウモリの羽みたいなの頭をしていたんだ」

そう言うのと立華は頬をかいて思い出す。

かつて分厚いテレビに映っていたヒーロー。

全ての物語を見たわけではないが悪魔というインパクトのある題材だった為印象的だった。

立華は少し考えるそぶりをするとロマンに質問した。

「なあドクター、物語のキャラクターって英雄になったりするの？」

口に出すとなんだか恥ずかしい質問だ。まるで子供が「このヒーローって本当にいるの？」とでも聞いてるかのような内容に立華は頬を赤らめる。

そして返ってきた答えは少し予想外なものだった。

『そうだね・・・英霊を英霊たらしめるものは信仰、つまり人々の想念によるものだからにその真偽は関係なく、確かな知名度と信仰心さえ集まっていれば物語の中の人物や概念、現象であっても存在すると思うよ』

「え?!じゃあ有り得ない話じゃないの?!」

『うん。ただし、大抵のサーヴァントは虚構のみで成立するものではなく、基礎(ベース)となる神話、伝説、実在の存在がある。虚構だけで成立し得るには、絵本のように子供を守る概念(ユメ)が結晶化したものなど、それ相応の理由がなければならぬ・・・つまり伝説としての成り立ちが薄いデビルマンはちよつと難しいと思うよ?』

すると立華は一度上がったテンションを下げて今度はがっかりした雰囲気を出し始めた。

「うーん、そうか。じゃあデビルマンじゃないのか・・・」

「あの、先輩?何故少しがっかりされているのですか?」

「そりゃあファンだったからね。カッコ良かったんだくデビルマン。特に歌が好きだったよ。うらぎーりものー名をーうー」

けてくっつて」

『僕もあの作品は好きだったなあ……。知り合いに勧められて見たんだけどよく出来ていたよ』

二人の息が統合して段々と盛り上がってくる。話が脱線し始めたのを感じたモードレッドは二人に聞こえるくらいの音量で声をかけた。

「つまりだ！そのあにめ？とやらは使い物になる情報じゃねえんだな？」

「あ、うん。そうらしいね。手がかりになると思ったのになあ……」

結局何かが進展するわけでもなくそこで話は終わった。

立華はこの時当てずっぽうに呟いただけのつもりだったが、これが後に驚きの真実へと変わって行くことになるうとは、今は誰も分かっていなかった。

「ここが例のテント街か・・・」

モードレッドに案内されてついた街の中心地。

そこはテントこそぐちやぐちやに崩れかけてはいるものの、当時の店などがそのままに残っていた。

テントとはいったもののそれは凄まじい大きさで、数百人程度なら楽に入るであろう程だった。その下もアー路上市場とでも表現するべきだろうか。そこには野菜や果物、肉魚、生活用品まである。

「勿体ないですね・・・。せつかくの食材もこれでは報われません」

「ああ？別に持ってつてもかまわねえんじゃねえの？どうせ街の人間なんてほとんど出やしない。置いておいても無駄になるだけだ」

俺もいつも拝借してるしな。そういうとモードレッドは近くにあった林檎を手に取り豪快にかじった。

その言葉に気をよくしたのか清姫は笑顔を浮かべる。

「まあまあ！それでは私達も頂きましょう。この間冷蔵庫を覗いて見ましたがもう良いものは残っていませんでしたのですよ」

そう言つてマシユの手を取り清姫は奥に進んでいこうとする。

「つて何故私も?!」

「当然持つて帰る為ですよ。ましゅさんの盾に入れればいくら持つていっても構わないんですもの！」

「それはそうですけど!」

せんぱああああああい！とエコーを残して二人はテントの中に入つていった。

呆然とする四人。モードレッドなんかは林檎を口に含んだ状態で硬直している。

「・・・どうしたんだろう清姫。あんなに必死になつて」

「そーいや最近食料の備蓄が限界らしいぞ。前回の特異点で持つて帰んの忘れてたしな」

「え？何気に大ピンチだったんじゃね？それ」

カルデアにはいざという時のために幾らかの食料を貯蓄し

ている。今回の事件が起こってから3ヶ月か、2ヶ月か、貯蓄の数はギリギリのところに来ていた。

レイシフトを使つての補充はある。そしてクー・フリーンも協力の元狩りを行なつたり、栽培室での野菜の育成などもやってはいる。しかし調達のメインとなつていゝのは特異点での大量補充となる。前回の特異点では人々の営みとなる街がなかつたこと。海での魚の採取の時間がなかつたことからギリギリのラインを走つていたのだ。

『清姫ちゃんが今のカルデアでの料理人なんだけど、やっぱり少ないことに悩んでいたらしいよ』

「・・・やっぱりいい子だね、清姫。病んでる事がたまに傷だけだ」

「だいぶ大きな問題ではないか？余は美少女が好きだがあの娘には寒気を抑えられんぞ」

「ま、まあなんだ。好きなだけ持つてけよ。たまにおかしいものもあるけど」

モードレッドはそう言うのとテント街の中に入つていく。

(おかしいもの?)

『僕たちも入ろう。立華くん、腕のセンサーから外部の計測を行つてくれ。その場所は異変の大元だ、きっと何かがある』

「う、うん・・・」

(なんだ？おかしなものって・・・)

中の様子は不気味としか言いようのない雰囲気だ。

まずテントそのものが低い位置になってしまったためとても薄暗く閉鎖的な空間となっており、一部地面に幕がついてしまっていることもあるのか、向こう側が見えない。

足元にはさまざまな物がその日のままの形で置いてあり、暗闇の向こう側まで続いている。食材などもそしてネズミか何かがいるのか時折暗闇に二つの目が光を反射して交差する。

悪い夢、――というべきだろうか。

非現実的な風景に思わずネロが身震いする。

「な、何というか・・・その・・・あれよな、中々の雰囲気よな。これ・・・これ立華よ。余の手を握っては見ぬか?」

「了解。うっわー、これは怖いなあ・・・。マシユと清姫大丈夫かなあ」

「・・・」

「ここでは日中こうだよ。日も当たらない霧も中までは入らないでいつも冷えている。ネズミどももこの中では生きていけねえから飯も腐らねえ」

「なるほど、だから新鮮なままなのか。でもさつきからこつちを見ているあれはなに?」

「そいつらはただの低級霊だ。こいつらは例の悪魔に怯えていつもここに隠れてる。それもこの寒さに関係してんだろ」

ま!俺に怯えてんのもあるけどな!

モードレッドはそう言っつて剣をふるう。すると暗闇に光る目は慌てたようにその場から離れていった。

「ドクター、何か変化はある？」

あれからしばらく調べてわかった事。

一つはここには多くの低級ゴーストが住み着いている事。以前起こった戦いで残っていた霊がここに集まって身を潜めている。

二つ目はこの中までは霧が入ってこない事。何故かは判らないがこのテントの中にまでは霧は入って来ず、人体にも大きな影響が出ないという事。

そして最後に――

「放射線？」

『ああ、そのテントの中は濃度の高い放射線が所々確認できる。人体には特に影響は出ていないがそこに置いてあった食材には大きな変化を起こしていたよ。これを見せてくれ』

四人が見守る中空中のホログラムに写真が写される。そこに写っていたのは――

「なんだこれ？林檎に魚が刺さってんのか？」

そこには林檎に魚の胴体がかくつついたような謎のオブジェが写されていた。

『刺さっているというのは少し違う。これは清姫達が送ってくれたものの一つなんだが、分解してみると魚の頭は林檎の細胞と完全に結合していた。つまり完全に融合していたんだ』

『これだけじゃない、中には無機物と有機物が融合しているものもあった。いや、融合というのは適切じゃないな。溶けて混ぜるとでも言ったほうがいい』

立華はそれに冷や汗をかく。もしかしたらここにいれば自分も溶けてしまうのだろうか、と。

『いや、大丈夫だ。さっきも言った通り放射線は所々にしか発生してなくてしかもその濃度の高いポイントに何日も連続で居

続けたりしない限りこんなことにはならないよ』

「・・・そっか、良かった・・・」

その一言にホッと一息つく立華。

「しかし気持ち悪いぞ、その林檎。組み合わせも悪いし料理にも使えまい」

「・・・」

「・・・おい、少しいいか?」

するとここまですつと黙っていたクー・フリーンが初めて声を上げた。

「?どうしたの兄貴。そういえばここに入ってずっと黙ってたけど・・・」

「なあ、それは長いあいだ一つの場所にとどまり続けりやとろけちまうんだよな?」

『え?あ、ああ。その通りだよ。それがどうしたの?』

「・・・もしそれが、生きているもん同士の間で起こったらどうなる・・・」

『え、多分生きている脳をメインとして足りない部分を補い出すんじゃないかな・・・』

「どういうこと?」

『生き物というのは自身が異なる姿になると幻の感覚を持ち始める。手足の亡くなった人が幻の手の痛みを訴えるそれはゴーストペインと呼ばれているんだけど、おそらく異なる物と融合を果たした生物は異なる身体を正しい形に戻すため動き出す・・・と・・・まさか!』

「え、なんだ!?どういうことだ!?!」

蟲達

最初にそれを見た時立華が想像したのは、レフライノールこと魔神柱だった。

あのときは怒りのあまり意識してはいなかったが、その表面は幾人の人型によって形作られていた。老若男女が張り付いたその姿は今思い返しても嫌な思いが浮かぶ。

そして目の前にいる巨大な蟲。

ぱっと見甲虫のような見た目のそれは、老若男女どころか化け物や獣もそのまま型に入れて固めたかのような見た目で、ルーンの炎が当たった場所はその下からテラテラと光を反射する内臓をさらしており、様々な目玉で構成された複眼はこちらを無機質にじっと見据えていた。

「リツカとかいうの！舌噛むなよ！」

「えぐつむっ?!」

モードレッドが立華の襟元を掴みテントの外に向かって投げ飛ばす。同時に蟲は首を何度か傾げる動作をすると、その口から生々しい触手を飛ばしてきた。

触手が地面のインテリアに触れる。と同時にインテリアと融合し再び蟲の中に取り込まれて行った。

「・・・悪いなマスター、反応が遅れちゃった」

目の前の蟲を前にしながらキヤスターが呟く。

自らに油断があったわけじゃない。勿論相手の存在には気づいていたし警戒もしていた。

だがキヤスターはその相手を小さい生き物か虫かと勘違いしていたのだ。

無理もない。何故ならば――

「こやつ・・・どう見ても虫としての気配程度しか感じん。普通これだけの化け物だと・・・」

た？

初めて特異点に来た時ここでは霧が出ている以外何も変化はなかった。戦いがあつたと言うこのテントでもそれは同じ。血痕すらなく綺麗なテント、戦の気配すらなかった様子。

たしかに多少の鼻に付く匂いはあつたがそれらは食材の腐った匂い。死体から発生したものは無い。

だからこそクローフリーンはその違和感に苛立ちを覚えた。過剰に反応したのだ。

「そりゃあ化け物どもも少ねえだろうさ！みんな食われたんだから！」

そしてテントを出ると同時に立華達の背後から、同様の蟲が群れとなって襲いかかって来た。

「焼け死にやがれ！」

モードレッドが横薙ぎに剣を振るうとそこから赤雷かほとばしり蟲を焼き払った。しかし焼き払ったものの中から脱皮の様に同じ蟲が出て来たことでモードレッドは嫌そうな顔をする。

「再生した?!」

「気持ち悪いいな！」

それだけではない。元々死体と融合してしまつたせいなのか焼けるとともにむせかえる様な腐臭が辺りに蔓延する。他の蟲が脱皮

についた肉片を貪りその勢いで血が飛び散る。

それに怯んだモードレッドは蟲の甲羅から生えた怪物の手足に捕まってしまった。好機と思つたであろう蟲達はそのままだモードレッドに突進して行く。

「しやらくせえー！」

しかし彼女は蟲ごと腕を振り回すことで張り付いたままの状態を逃れた。

そしてお返しとばかりに今度は近くにいた蟲を兜割の要領でぶった斬る。それにより死んでこそいないが、動きを止めることに成功した。

「みんな、そいつらに炎とか雷は余り効かない！一体ずつでお願い！」

「ええいめんどくさい！それに此奴らあの柱にそっくりだ！あんまり見たくない！」

近くにいる蟲達を払いのけながらネロが叫ぶ。

英霊の力は生前と比べると破格となっている。それは逸話や伝説、伝承によつて新たに備わつたものだからだ。そしてそんな一撃を食らつたものは本来無事では済まない。

にもかかわらず蟲達は叫びすらあげない。

身体が吹っ飛んでも千切れても、ただ無音で集まつてくらおうとする。それが余計に不気味さを際立たせていた。

らちがあかなくなつたネロは空中に飛び上がると蟲達を踏み台にして足元を斬りながら駆けてゆく。しかし蟲は壁の様に重なり合うことでネロをそのまま押し潰そうとする。

「アンサズー！」

しかしその壁はクーフリーンのルーンによつて散らされた。

「つたく！やっぱりきかねえか！」

蟲達は互いに炎によつて焦げた部分を喰らいあい修復していく。

怒りを抱いたであろう蟲達は複眼を赤く輝かせ立華とクーフーリンの元へと向かつていった。

ルーン文字は爆発となつて蟲達を散らして行く。しかしその死体を再び飲み込んで新たな蟲が生まれて行く。

立華は焦りを感じていた。

ここは街中、大規模な宝具はいたずらに被害を増やしてしまう。だからといってこのまま続けても時間はかかる上、下手したら魔力よりも体力を消費してしまう。今蟲は立華には来ていない。だが時間の問題だった。

そして何よりもー

(二人からの反応がない・・・！)

「兄貴！」

魔力を巡らせていた立華はクーフーリンが押され始めていることに気づいた。彼は今自身の杖で蟲の進行を防いでおり、しかしどんどん押しつぶされていた。

するとー

「坊主、心配すんな！こっちはー」

ジリ貧だと悟ると同時にクーフーリンは持っていた杖にいくつものルーンを刻んだ。そして空中に投げて一回転した杖は先端から生きてるかのごとく地面に根を宿した。

「何をー」

そして刻んだ文字が淡い輝きを放った瞬間ー

「とっておきがあるんでな！」

杖が砕け散り中から槍が飛び出した。

「兄貴、それは・・・」

煙を吹き出しながら伸びたそれに立華は目を見張る。

いや、立華だけではない。モードレッドも、ネロもその輝きに思わず目を向け硬直していた。

その槍は不思議な見た目をしていた。まず長さは先ほどの杖と同じくらいはある。色は銀色に近い鉛色で重厚なイメージを持たせる。しかし持ち手全体にルーンが刻まれており、脈動するかのごとく金色の光を放っている。

そして切っ先には鋭利な刃があり、そこには『Z』という文字を刻んでいた。

あれを知っている。あの輝きには見覚えがある。

それはかつて形のある島にて女神とともに眺めた代物。

闇を裂き、海を割くであろう光の神の剣に似て非なる物。

そう、あれは――

「超合金・・・Z?」

「お、結構重い・・・が、中々馴染むじゃねえか」

何度か確かめる様に抜き取った槍を振るった。

すると満足そうな顔を浮かべクーフリーンは蟲に向かつてその槍を投げた。

次の瞬間

え？

立華は思わず声を漏らした。

見えなかった。

投げた瞬間は見えた。そして槍は少し離れた所にある民家に刺さっている。

しかし飛んでいる所は全くと言っていいほど見えなかった。

それだけではない。

先ほどまで溢れんほどにいた蟲の大群、それらが槍の前から消え失せたのだ。

「兄貴、それって・・・」

「ダヴィンチのおっさんからもらってな、ルーンを浸透させるために杖に仕込んでおいたさね」

前回の特異点でクーフリーンは力不足を感じていた。いや、もどかしさでも言うべきか。生前と比べて明らかに力不足な自身の身体、そして愛槍が手元にならない状態。それらを解決するためにダヴィンチの元に尋ねた。

すると彼女は微量ながら超合金Zの生産に成功したらしく、それを彼の要望の形に削りあげたのだ。これにより彼は身体強化に全魔力を巡らせる事が出来、本来のスタイルを行える。

それだけではないー

(この槍……下手したらゲイボルグに近いか同等の……)
霧に沈む広場の中を金色の線が走る。

先ほどまでわからなかったが、蟲は槍が当たるときに何故か活動を停止しており、殆どは風圧によりバラバラになっているが中にはその身体を溶かしているものもある。

啞然としている中ロマンの声が響く。

『解析出来た！そいつらはただくつついただけじゃない！群体の様な特性を持つものだ！』

「群体？」

群体というのは、無性生殖によって増殖した多数の個体がくつついたままで、一つの個体のような状態になっているものことである。主として動物および藻類に対して使われる。

『違和感を感じたんだ。奴らは虫と死体が融合したはずなのにどう考えても虫の体積が少なすぎる。それだけの死体を支配下には本来その質量と融合する20分の一くらいは必要なんだ』

『それを補うために奴らは複数集まりその形を維持しているんだ。だから身体の一部を攻撃しても、残りがそのままおそつてくるぞ！』

それを聞いた立華はすぐに切られた死体に目を向ける。

死体は先ほどまで痙攣していただけのはずなのに、今は千切れた身体を合体させようとしていた。

「でも兄貴の槍は聞いてる感じだけ？」

『それは何故かはわからない。でも今は彼に頼るしかない！そして多分だけど奴らに有効打をあたえるのは……』

「！超合金Z・・・！ドクター！マシユと清姫の居場所は?!」

『二人は今テントの西側に・・・!? 動体反応? まずい! 彼女達も囲まれてる!』

「あぐううう・・・!」

「マシユさん・・・!」

現在二人は多くの蟲に囲まれていた。

元々耐久力のないバーサーカーである清姫には、蟲達の猛攻に耐え続けるのは不可能だ。宝具を使えば再生能力関係なく吹き飛ばすことは出来る。しかしここは街の中心、多くの犠牲が出てしまう。

「今は・・・!今は耐える時です!この蟲が再生出来る能力がある以上私たちでは相性が悪いです!」

ならば先輩達が援軍に来るまで待つ!

しかしそれはいつになるのだろうか。この規模からして、恐らく立華達の所にも蟲は来ているだろう。あの3人がこの群れと戦うとして、一体どのくらい時間がかかるだろうか・・・。

そんな事をうつすら考えながら、マシユはシールドバツシユで蟲達を後ろに突き飛ばす。

しかしまた先ほど以上の蟲が攻めて来て押し込まれる。

二人はその後耐え続けたが、やがて建物の壁に追い込まれ

てしまった。

好機とみたのだろうか、蟲達は二人に向かって生々しい触手を伸ばし出した。恐らく二人の身体を自身の一部とすべくトドメを刺そうとしているのだ。

「清姫さん！焔で私ごと・・・！私なら耐久力があるので死ぬ事はありません！」

「そんな！そんな事」

二人が言い争う暇も与えない。

蟲達はすぐさま己の触手を二人に隙間なく放つ。いくらサーヴァントといえ、マシユは生身。このままでは蟲の一部とされてしまう。

しかし！その時二人の耳に、聞いたことのない声が響いた。

「その二人！地面に伏せな！」

デビル！ビイイイイイイイイム！！！！

デビルマン

俺はいつも泣いてばかりだ。

(まーたアキラくん泣いてるー)

(なぜそんなに泣くんだ。アキラ?)

俺は昔から人の心に敏感だった。

だからこそ、人の顔を見るだけだその人がどんな思いを抱いているのかがすぐにわかった。

そんな人達の中には、顔に出さずに心の中だけで涙を流す人達がいた。

なんで顔に出さないのだろうか？

なんで我慢しているのだろうか？

なんで・・・誰にも頼らないのだろうか？

声に出したいはずなのに、顔を覆いたいはずなのに、それでも周りには明かさない。

そんな人達を見ると、どうしようもなく悲しくなって、俺の方が涙で溢れた。

(馬鹿な・・・俺は泣いてなんかない・・・)

成長して俺は陸上部に入った。なぜ入ったのか理由はいろいろあるが、やはり一番の理由は幼馴染だ。幼馴染に何か1つでもいい、少しでも実力で追いつきたかった。

俺の幼馴染は強かった。男の俺より強く、俺はいつも泣いてばかり。だからこそ俺は同じくらい強くなりたかった。

誰の前でも泣くことのできない奴らのために、代わりに俺が泣いてやろう。そいつらの分まで俺が涙を流そう。

それが出来るくらい強くなりたい・・・、そう思った。

(アキラくんは、決して自分のことでは泣かないんです。彼が泣くときは、決まって誰かのために泣くんです。強いんです！)

強くなりたい。

(本当に私と敵対する気か、アキラ?)

強くなりたい。

(アキラくんはアキラくんだもん)

強く・・・

強く

強く!

(何かあったときは必ず話せよ、約束だぞ?)

強く・・・なりたかったのに・・・。

結局・・・俺は何も守れないまま・・・

面白い。異なる世界の観測、かつてラウムの提唱した説もあながち間違つてはいなかったということか……。

とはいえ、このサーヴァントの力無くしての観測は不可能だったのだが……。物語の結晶、実に興味深い。

それにこの生き物の生態、これを利用すれば我々は「半永久的なエネルギー」も可能だろう。

ではロンドンにて行ってみようか。あそこなら、この生き物たちを有効利用することが出来る。

もう、そこにバトンを受け取る人達はいない。

題、デビルマン

「急いで兄貴！このままだとマシユが持たないかもしれない！」

「わかってるよ！担がれてんだから暴れんじやねえ！落ちる！」

蟲達の猛攻をなんとか脱出した立華達は、最初に別れた二人の元に急いでいた。

あの二人はこの蟲とは相性が悪い。マシユ一人ならなんとかなるかもしれない。しかし彼女は必ず清姫を庇いながら戦うはず、そうなれば後は持久戦をせざるを得ない。

シールドのクラスとはいえ、あの物量を完全に防ぎきるには難しい。

「ドクター！二人の様子はどう?!」

『待ってくれ！霧のせいで反応が薄いんだ！生きてることは間違いないけど……!』

「モードレッド！西側のテントには後どのくらい?!」

「もう着く！てか、あの盾野郎ならこの程度……」

「む?!リツカ！あの蟲達は！」

走っていると目の前にいくつもの蟲の焼けた死体が散乱していた。それも10匹20匹という数ではない。立華達の走る先にならずと続いている。

(いやまて！なんだこの死体、なんで芯まで焦げてんだ?!)

死体は全て芯まで焼き焦げている。おかしい、この蟲達は1匹1匹が自身と同じくらいの大きさをしている。それだけの物を芯まで炭にしてしまおうとするのととても時間がかかる。

そもそも物を焦がすというのは簡単なことではない。核爆弾でさえ人一人を芯まで焦がすことなど出来ない。せいぜい表面を焦がす程度だ。なのにここの死体はすべて、芯まで焼き焦げている。

(こんなこと・・・清姫だつて・・・)

「立華よ・・・気づいておるな？」

「これつて・・・やっぱ清姫でも出来ないよね・・・」

「うむ、あやつの宝具でなら出来ぬ事もないと思うが・・・」

「違うだろうな。なんせあの娘の宝具ならこの場所がこんな綺麗なわけがねえ」

死体の周りは確かに所々焦げてこそいるが清姫の宝具ほどの被害はない。テントの布も黒いところはあがるがそれも焼けているのではなくはいがついているだけ。

つまりだ。

「いるな・・・」

「？モードレッド？」

「この惨状は・・・多分奴の仕業だ。ついに見つけたぜ！」

そういうとモードレッドは立華達を追い抜いて先の方に飛んで行ってしまった。それに一瞬啞然としてしまった立華達はすぐさま追いかける。

「待つてモードレッド！そもそも敵か味方かもわかってないんだぞ！それに俺の予想が正しければ・・・」

クーフリーンが魔力を込めてスピードを出し始めた。担がれたままの立華は苦しそうにグエツ、と漏らす。それに耐えて再び前を見据える。

暗闇がずっと続いていく。しかしそんな暗闇の中に、だんだんと金属音のような音が響いてくる。その音を頼りに進むと、先ほどま

で見えなかった灯——火花が金属音と共に散っている事がわかった。

「あそこだ！」

思わずその声を上げる。だんだんとはつきり見えて来た火花がはつきり見えてくる。そしてそこに広がっていたのは——

「グウツ!!!」

「.....!」

立っていたのは二人、一人は先ほどすごいスピードで一人進んでいったモードレッド。

そしてもう一人、それは人から大きく逸脱した姿をした存在だった。

体長は2〜3メートルはあるだろうか。全体的に筋肉質でありながら細身という人間では難しい体形をしている。蝙蝠を模したかのような頭部、口は耳までさげ、肩には紅い傷のような模様がある。下半身は体毛で覆われており、腕からはブレードのような骨が突き出ている。

(あの姿、やっぱり!!!)

そんな存在が、モードレッドの剣を腕をクロスさせる事で防いでいた。

「オラア!!!」

剣を力で無理やり跳ね上げたそれは、そのままモードレッドの腹に拳を突き立てテントの路上販売に叩きつけた。

しかしモードレッドは答えてないとばかりに立ち上がり、首を一回こきりとならすと剣を呼び戻し構えた。

「一体なんだってんだお前……!」

それは腕を一度振ると油断なくモードレッドを見つめる。

「お前にはあの時の借りを返してもらわなくちゃならないんでな……。悪いが嫌でも付き合ってもらおうぜ!」

「何を訳のわからないことを……!」

「……兄貴、あれって……八つ当たり?」

「あとストレス発散だろうな。厄介極まらないおい」

「ええ……」

思わず身構えてしまった立華は呆れたような目線を向ける。

そんな中彼は気づいた。そう、あの男の足元……そこにいた

のは

――

「マシユ×清姫!」

「!まで、坊主!そのまま飛び込んじゃまうと!」

思わず立華は対峙する二人の間に割って入るように飛び込んでしまった。その頃には二人は再び戦おうとスピードを出した状態であったため、このままでは立華は衝突により大怪我を負ってしまうところだ。

だが――

(あの時の……来い!)

その瞬間、立華の中で時間がゆっくりと進み始める。

これはこれまでの特異点で発動した謎の能力である。立華のここぞというべきところで発動していたこの能力。カルデアでの訓練により僅かな時間のみ自身で発動することが可能となっていた。

(まあ、結局これがなんなのかは分からずじまいなんだけど・・・)

ドクターに聞いても結局魔術的なものは感知されなかったらしく、クーフリーンにも皆目見当がつかなかった。

(でも今は！)

二人がこちらに近づいてくる。それに対して立華は吹き飛ばないように両足に力を込めると両手を広げて上へとあげた。そしてゆっくりと二人がぶつかるといふ瞬間、その手のひらを二人の頬に叩きつけた。

「へぶっ?!」

「ぶっ?!」

「そこまでー!!、二人とも、そこまでー!」

勢いを削がれた二人は思わずよろけてしまう。止まったのを確認した立華はそのまま大声を上げて伝えた。

「二人ともそこまで！何出会い頭に喧嘩してんの！まだ敵か味方かもわかってないのに戦つてもしようがないでしょ!」

「つゝゝゝ！ウルセエ邪魔すんな！こちとらそいつには借りがあんだよ！それ返すまでは「もう！それにしても考えが浅いよ！マシユや清姫も気絶してるんだよ？2次被害が広がれば目も当てられないでしょ!」被せんな!」

いきなり言い争いを始めた二人に彼らは呆然とする。

「いいから落ち着けて。俺も、そして多分そのあきらさんも色々わかってないところがあるんだよ。ここは一旦矛をおさめてさ。いい子だから、ね?」

「なんだその言い方?!バカにしてんのか?!」

子供に言い聞かせるような言い方にモードレッドは怒りマークを頭に浮かべ立華に怒鳴る。

そしてそんな中、先ほどまで黙っていた彼が、驚いたような表情で立華に話しかけた。

「おい……」

「だいたい……!ん?」

「お前は……なんで俺の名前を知っている?」

その言葉に立華はぽかんとする。だが直ぐにその顔を笑顔に戻すと彼の前に走り……

「握手して下さい!!!」

『初対面なんだからそこら辺もつとさあ……』

「いや、本当に驚かせてしまつてごめん……。俺としても驚

きが大きくて・・・」

「あ、ああ・・・気にすんなよ・・・」

お互いに落ち着いた彼らは先ほどまで戦っていた場所に腰を下ろしていた。

「・・・にしても変な奴だよな、お前。普通なら今の俺の姿を見た奴は怯えるか警戒するのどっちかなんだがな」

「いやいや！あんたは子供の頃から俺にとってのヒーローだよ。」

「不動明、正義のヒーローデビルマン」

そういつて立華はキラキラした目を向ける。デビルマン・・・不動明はその目線に居心地の悪さを感じて思わず目をそらした。

(・・・こんな事も、あるものなんだな・・・)

『何で物語の存在がとか、どうやって存在しているかとか今はどうでもいいや！ミスター不動、是非変身するシーンを後でお願いしたい！』

ロマンはそういつて不動明に興奮した様子で交渉した。それに少し引きながら彼は渋々と言った様子で頷くと、立華もロマンと一緒に喜んだ。

「・・・なんかついて行けねえ・・・」

「なあキヤスターよ、見よあの立華の顔を。ローマ皇帝である余とあつた時でもあのような顔はせんかったぞ。もう一度言う、余はローマ皇帝なんだが・・・？」

「・・・そこら辺は仕方ねえよ。ガキつーのは好きなもんには全力だがそれ以外にはさっぱりだからな」

「しかし・・・！しかしなんだこの敗北感は・・・！余だつてかつて美少女美少年にキヤーカーキヤーカー言われた事もある！なのになん

なのだこの差は！」

「・・・俺だってケルトじゃ有名だったの」

そんな様子を見たサーヴァント達は多かれ少なかれジエラシーを感じた。

一応自分達も伝説に残るほどの英雄だ。なのにこの明らかな態度の差はなんだろう・・・？

「取り敢えずさ、マシユ達を助けてくれてありがとう。お陰で怪我も少なかった。俺の名前は藤丸立華だ。よろしく」

「ああ、じゃあ俺も改めて。不動明だ」

そう言うと二人はお互いに握手をした。明はその手をしばしじっと見つめやがてゆっくりと話した。

「・・・」

「?..どうした?」

「いや、ここまでスムーズに事が進むのは珍しくてな・・・。ましてやあの姿を見た奴が・・・」

「ああそう言う事、きにしないでいいよ。俺達は慣れてるし何よりあんたが理性的だから通しやすかったし」

「・・・変な奴だな、お前は」

そう言つて不動明はクスリと笑った。それを見た立華は満足そうに頷いて言葉を出した。

「それじゃあ教えてくれ、君の事と、この場所の事。そして一体

何が起こっているのかを・・・」

世界の終わり

マーーーーーマーーーーシユ……マシユ

「マシユ！」

「ひやいッ?!」

耳元で聞こえた大きな声に私は思わず悲鳴を上げてしまった。そして身体を起こすと同時に目を開くと、そこには先輩が心配そうな目をして見つめていました。

「よかつた〜！痛いところはないか？結構長く気を失ってたけど……」

「は……い？えと……先輩／＼？」

すぐ目の前の立華の顔にマシユは思わず赤面してしまう。

「あの……どうしてここに先輩が？私と清姫さんは先ほども……」

そういうと頭をあげ周りを見渡す。そこは見覚えのある最初の拠点、少し向こうにジキルと知らない誰かが話をしているのが見える。

自分はソファアアの上で横になっておりその周りには立華と清姫、クーフリーンが見下ろしていた。

「あれから大体4時間くらいは経ったよ。清姫は先に目が覚めたんだけどマシユはずっと目覚めなかったから心配だったんだよ」

『一応バイタルを確認してるけど異常は特に見当たらない。強

いて言うのなら少し体温が低いかな?』

ロマンのその台詞を聞いてマシユはため息を吐く。それは先程までの恐怖と来てくれたことによる安心感からくるものであった。

「マシユさん、ありがとうございます。．．．貴方のお陰で生き延びることができました」

「清姫さんそんな．．．私はただ自分の強みを活かして戦っただけです」

「それでもどうかお礼を受け取ってください。あの時は．．．ほとんど貴方一人に任せてしまいました．．．」

清姫は再び頭を下げると紅茶の入ったカップを差し出してきた。中の紅茶は少し冷たい部屋の中で温かな湯気を立ち上らせており、香ばしい茶葉と蜂蜜のような香りを漂わせていた。

「取り敢えず飲んでください。身体が冷えるといけません」

「あ、ありがとうございます」

受け取って中を覗くと鮮やかな朱色が灯りを反射して輝いている。じんわりと指に伝わる温もりを楽しみながら口に運ぶと優しい甘みと生姜のような辛味を感じさせた。

思わずホツと息が漏れる

「おい坊主、話し合いが終わったそうだ。俺は紅いの二人を呼んでくるから先行つとけ」

「あ、うんわかった。マシユ、もう立てる?」

「はい、大丈夫です。．．．ところで、あそこで話されている方は一体．．．?」

「それについても説明するからさ、よいしょつと」

立華は立ち上がるとマシユに手を差し出す。その手を掴むとマシユはゆつくりと立ち上がり立華と清姫の背中を追った。

(先輩の手・・・意外と硬いのですね・・・)

「・・・旦那様、少しよろしいでしょうか？」

「いや清姫・・・ちよつと手を貸しただけだから。そんな怖い顔しないで・・・」

「起きたようだね。気分の方はどうだい？」

「はい、もう大丈夫です。それでその・・・そちらの方は？」
マシユはジキルの前にいる男に目を向ける。

「怪我とかないようだなによりだ。俺の名は不動アキラ、アキラと呼んでくれ」

「えと、アキラさんですね。もしかしてあの時来てくれたのは・・・」

「ああ、彼だよ。あの広場を通りかかった時にね」

「別に目に入ったただけだから気にするな」

「・・・なるほど。アキラさん、ありがとうございます。貴方が来てくれなければ私たちはおそらく飲み込まれていました」

ペこりと頭を下げるマシユにアキラはそっぽをむく。それと同時に後ろから今来たであろうモードレッドの声が聞こえて来た。

「大体！てめえはなんでそんなに馴れ馴れしいんだよ！俺たちはそもそも初対面だろうが！」

「いいじゃん別に減るもんじゃないんだし。それに君はなんだかほつといたら一人突っ走りそうな気がするし気になるんだよ」

どうやら立華ともめているようだ。

とはいえ仕方ない。そもそもモードレッドは英霊、偉業を成し遂げた者たちの魂だ。現代知識があるうが力と共に生きてきた彼らにはそれぞれ誇りがある。

つまり馴れ馴れしい立華がおかしいのだ。

「何というかあれよな。反抗期の兄と妹といったところか。妙に手慣れておる」

「そういや坊主には妹がいたな。屋敷で写真を見たが勝気そうな娘だった」

『知らず重ねているのかもね・・・』

しかし彼らはそのことについて触れない。

何故なら彼は子供、17歳の少年である。家族の温もりに手を無意識に伸ばしているのかもしれない。

だから言わない。

まあ翻弄されるモードレッドが面白いというのも否定はしない。
い。

「さて、全員揃ったところで話を始めよう。何から知りたい？」

最初に口を開いた彼は全員を見渡して問いかけた。それに立華は手を挙げるとジキルを見て質問する。

「まずはこの街の現状について新しい情報だな。何しろあんな化け物みたいな蟲が出て来たんだ、街の人たちも心配だ」

「・・・あれは出来損ないのデーモンだ」

その問いにアキラは腕を組みながら答えた。そして立華はその言葉の意味に疑問符を浮かべた。

デーモンとはアニメ、漫画「デビルマン」に登場する敵のキャラクターの名前だ。

はるか古代の力が物を言う時代、その時代の生物たちは厳しい環境や敵に対応するために有機物無機物関係なしに合体することで己の力とする能力があった。その力を有する存在こそデーモンである。

「デーモンってあの・・・デビルマンの敵の？それに出来損ないって・・・？」

「・・・」

アキラは目をゆっくりと閉じるとやがて意を決したように語り出した。

「最初に言っておこう、俺の住んでいた世界・・・ここですうとこの異世界だが、人間とデーモンの戦争によって滅んだ」

?!

今何と言ったか。

『ちよつと待ってくれ！じゃあ君はあれかい、違う世界から来たというのかい?!』

「違うドクターそうじゃない！アキラさんそれって・・・」

世界が滅んだ？なくなってしまったと言うのか。立華達はジキルを除いて絶句した。

こんな情報は、アニメにもなかった。

「奴らは人間を食うことでその人間と同じ姿に変わることができ。人間はその違いが分からず同士討ちを始め、やがてただ殺す事

を目的とした悪鬼となって言った」

「俺もデビルマン・・・悪魔の身体を手に入れた人間として戦いはしたが、結局親玉には勝つことが出来ずに岩礁でただ一人絶望していた・・・」

「そんな時だ。奴らが現れたのは・・・」

赤黒い空が広がっていた。

人、否生き物の気配一つしない世界。至る所から黒煙が舞い、人工物の残骸が辺りに散らばっている。

そんな世界の片隅に、淡く輝く人型が膝をついていた。

その人型・・・いや、ただの人型ではない。身につけているものは何も無い。遠目から見たら女性に見えるシルエット、乳房があり、ウエーブのかかった金色の髪をしている。しかし股の間には女性にはないはずの男根がある。

そして何よりも、その背中には眩いばかりの多くの翼を生やしていた。

天使、とでも形容すべきか。

顔つきは中性的。その瞳いっぱい涙を浮かべ、足元に横たわる何かに口を開いている。

その存在はしばらく話しかけ続けるとやがて後悔するかのような顔を浮かべ空を眺めた。

その時である。

「面白い。異なる世界の観測、かつてラウムの提唱した説もあながち間違つてはいなかったということか……。とはいえ、このサーヴァントの力無くしての観測は不可能だったのだが……。物語の結晶、実に興味深い。」

「それにこの生き物の生態、これを利用すれば我々は【半永久的なエネルギー】も可能だろう。ではロンドンにて行ってみようか。あそこなら、この生き物たちを有効利用することが出来る。」

何かが現れた。

『バカな！魔神柱が君たちの世界に現れたと言うのか?!』

途中でロマンが待ったをかけて質問した。

「マシユ、これって確か……。魔法、何だよね」

「はい、宝石翁ことキシユア・ゼルリツチという人物にしか行うことが出来ない魔法、並行世界の運営に相当します」

「奴ら……。それだけやばい存在なのか……」

「話を続けるぞ。奴らは俺の世界に存在した全てのデーモン、デビルマンの死体を奪っていった。デーモンの王サタンはそれに對抗しようとせずただ奴らに身体を奪われてそのまま生き絶えた。俺は對抗しようにもその時は足はなく目も見えなくてな……。ただ感じる事出来なかった」

「何が目的なのかは後になってわかったが、その時の俺は奴らが真つ当ではないと言うことだけわかっていた。だが俺にはもう力も闘志もわからない、戦うなんてできはしない。そんな時だ」

世界が何かに飲み込まれて行く。

横たわっているアキラは自分の宝物だった街が、せつかく作つたみんなの墓が崩れ、飲み込まれ、奴らの一部にされて行くのを光のない瞳で覗いていた。

もう自分には関係ない。

疲れてしまった。

バトンを受け取ることなど出来るはずもない。

そこまで考えた彼は、ふと違和感を感じることに気づいた。

(落ちている……?)

先ほどまで彼は岩礁に横たわっていたはず。そんな彼に突如として訪れたのは自身の身体の浮遊感だった。

頭の働かない彼はその違和感に気づくことはない。

(いったい(た……け) ☒)

(かれ……を……)

すると次の瞬間、彼の思考を遮るかのように頭の中に声が聞こえてきた。

「俺以外の生き物は存在しないはずの世界だ、状況も相まって混乱したがそれ以上に混乱したのは――」

見えないはずの視界に光が溜まり始めた。その光はだんだんと人の形へと変化して行き、やがて女性の姿へと変化した。その女性とは

「……………!!!?」

姿を確認したアキラは目を見開きながらその女性へと手を伸ばした。

まさか？

そんなはずはない

だがそんな、

あれは

あれは

あれは！

（もしも、もしも貴方がまだ人を信じることができるのならどうかお願い。

あの人たちを、助けてあげて！）

美樹!!!

「……………」

「あの……アキラさん?」

急に口を閉じたアキラにマシユは思わず声をかける。するとアキラはいや、呟き再び語り出す。

「急に光が視界に広がったと思ったら気付けばこの街に倒れていた。不思議だったのは欠損したはずの身体が傷ひとつなく元どおりになっていたんだ」

「ここからは僕も説明しよう。彼はその後頭の中にこの世界の状況や情報が流れてきたと言っていた。おそらくこれはサーヴァントにも付与される現代の知識のようなものだろう。聖杯のお陰なのか、それとアラヤによるものなのか、それはわからないが僕は僕たちに味方してくれた」

「だが彼はこんな姿だ。だから人目に付かないようにたった一人で戦ってきた、というのが事のすべてだ」

調査

「・・・聞いて良い？」

全ての話を終え、立華達は再び町の調査の為外を出歩いていった。

彼の口から語られた物語は悲惨としか言いようのないものだ。人類の為に戦い続けたにも関わらずその人類自身から裏切られ、最後には自分一人しか残らない。

あまりに酷いそれは彼らの口を閉ざすには十分だった。そんな中、最初に口を開いたのはやはりというか立華であった。

「そんな目にあつたのにどうして戦えるんだ？」

「！、おい、坊主それはー」

「いや、いいんだ」

思わずキャスターが止めるも構わないとアキラが手を振る。

「・・・アキラさん、こんな事聞くのはあまりにデリカシーがないというのはわかっている。でも・・・」

そこまで言って一呼吸おく。

「アキラさん、俺たちもさっき聞いた通り人類史というものを背負って戦っている。この戦いを勝ち抜いた時俺たちの時代は元に戻

り本当の明日が来る。でも決して報われる事はない」

「きつとここにいるみんなは座に帰ることになりカルデアも解体されると思う。いや、それくらいならまだいい。もしかしたら全員秘匿という的にーーー」 「それくらいにしろ、どうしたのだ立華よ」

急に早口に語る立華の語りをネロは止める。いつもと違うその様子に全員が目を丸くした。

「……話を聞いた後薄々とは考えていたんだ。この戦いが終わった時俺たちがどうなるんだろうって」

「家族の元に帰ることをずっと考えていた。でもそもそも俺は帰れるのか？ここまで深く関わってしまった人間を、話聞いた魔術師って人達はただで返すのか？」

「先輩、それは……」

「アキラさんの事を聞いて、な。もちろん俺自身迷ったまま戦場に出るのは邪魔にしかないというのは学んできた。だからこそ考えないようにしていたというのもあるかもしれないが……」

「見返りを求めるわけじゃない、でも、今更だけどうかんじまったんだ。」

『立華くん……』

「もしも、人類が俺たち敵になるかもしれない、という想像が」

キヤスターは何弱気になつてやがる、と言おうとしてやめた。

なんの迷いもなく戦う。それは自分達の様に豪傑だからこそで
きる考え方だ。

一緒に戦い続けたからこそ意識してなかった。彼がただの民で

しかないということに。

「なあ、アキラさん。貴方はそれだけの酷い目にあつたにも関わらず、なんでまた人の為に戦うんだ？」

そう言い終わると立華は下を向く。

「……………」

「そうだな、なぜ、か……………」

一呼吸おいたアキラは立華に向き直り考え込む。

なぜ、よくよく考えてみれば一体なぜなのだろう。自分の大切な人達はもういない。みんな、人間によつて殺されてしまった。

今でも覚えている。やっと自分の中の答えが出たばかりの時、待っている人達のいる家は地獄とかがしていた。

そして

鉄槍の先にさらされていたあの子の、あの子だった物を手に取った瞬間。自分の中で何かが崩れる音がした。

なのに何故だろう

「すまん、そこんところ、まだ俺にもわかってない」

なぜ俺は、未だに人の為に戦おうとしているのだろうか？

「先輩……………」

「いや、なんかあれだな。ちよつと考え過ぎちまつたな。忘れてくれ。やっぱ俺は何も考えず明日に向かうほうがあつてんな！」

「そうだよ、そんなこと考え出したらキリがねえ。今はテメエのやりたいことをやりたい様にやりやあいんだ！」

首をふつて頬を叩いた立華は再び普段通りの笑顔を浮かべた。すると前を歩くモードレッドが振り返らずに手を振りながら応える。

「……坊主」

「立華、やはりお前は無理を……」

しかしサーヴァントの顔は晴れない。彼は茶化す様に誤魔化した。が聞いていたものには本音の様に聞こえたからだ。

「マシユさん、貴方は大丈夫なのですか？」

「……正直どうとも言うことができません。私自身怖いと言う思いはあります。しかしそれは皆さんが傷ついてしまったら、と言う想像の恐怖です。先輩のあれは何か……その……」

「ひとりぼっちの恐怖」

え、とマシユがつぶやく。その一言を言ったのは意外にもネロだった。

「ああ、わかる。余もわかるとも。愛しているものから拒絶される恐怖、彼奴の場合守ろうとしているものか？どちらにしろ、話を聞く前までは意識してなかったと見えるな」

『……タイミングというか間が悪かったと言うべきか、すまない。実は時計塔がある今回の特異点の為に軽く魔術師たちの事について説明していたんだ。何かあつた時警戒するように』

「いや、仕方ねえだろうそれは。確かに魔術師つーのは楽でもねえ場合の方が多い。俺自身そうだったしな」

そう言つてキャスターは腹をさする。何かを思い出したせいかうんざりとした表情を浮かべていた。

そのように彼らが話し合っている間にも立華とモードレッドと明は先に進んでいく。気づいた彼らは追いつく為に少し駆け足をし、てすぐ後ろについて言つた。

「……先輩、私は……」

拠点に待たせてる奴がいる。少し寄らせてくれ。

そう言つて明は立華達を連れて少し町外れの林に入つていった。そこは霧の町と違って薄暗くこそあれ少しひんやりとした林で、霧もほとんどなく息も気持ちよく吸えるところだった。

そんな林の真ん中、そこには掘つ建て小屋のような建物が一軒佇んでいた。

「ここが拠点……？」

「的外れっつーかなんっつーかな。みつからねえわけだぜ。」

「景色とほぼ同化してたね。 …、あれ、そういえば待たせてる奴って……？」

明は立華の問いに答えるより早く小屋のドアを開く。
すると次の瞬間

ドン！

「にいちゃんおかえり！」

黒いローブをまとった何かが明の腹に飛び込んだ。

「うおおっ！なんだ敵襲☒」

「立華、落ち着け。こいつが待たせていた奴だよ」

そう言う腹に縋り付いている者を抱えて立華達にも見えるようにする。

「……女の子？」

「おお！なかなか愛いむすめではないか！顔の傷が少し気になるが」

ローブの下から現れたのは銀の髪の毛が目立つ女の子だった。歳は小学生くらいだろうか。明を掴む手には包帯が巻かれ、まだ幼さの残る顔には似つかわしくない大きな接合跡が目立っている。

モニターから観測していたロマンが声を上げる。

『その子はサーヴァントかい？』

「え？この子が？」

「ああ、ジャック挨拶しな」

「……にいちゃん、この人たち……誰？」

立華達の姿を見た女の子は徐に殺気を放ち威嚇した。それを

見たネロやサーヴァント達は警戒し、いつでも武器を取り出せる準備をする。それを見て明は手をかざす。

「こいつらは大丈夫。解体しなくていい……」

「……ふーん、にいちゃんが言うのなら」

「すまん、こいつはジャック。多分お前たちと同じでサーヴァントだ。」

明の背中に回った少女——ジャックは先ほどまでの殺気を収め此方を観察するように覗く。

「それとほら、土産だ。大事に食べよ」

「わあ！ありがとう！丸ごといいの？」

背中に背負ったリュックから真新しい林檎を取り出すとジャックはすぐに視線もそらし両手を差し出した。

その有様はサーヴァントというよりは……

「なんと言いますか……子供そのものと言った感じですね」

『しかし彼女は間違いなく英霊のはずだよ。センサーからは小さいけど間違いなく反応があるし……』

「なんつーか、英霊って本当に個性的なんだな」

立華は視線をジャックに合わせるように腰を下ろすと手を差し出した。それに気づいたジャックは林檎を齧ろうとするのを一旦やめて興味有りに視線を向ける。

「俺、藤丸立華。君のお兄ちゃんの友達だよ。」

「にいちゃんの……友達？」

「おう！君、名前は？」

「私達はジャック。ジャックザリツパー。」

「よし！いきなり押しかけて驚かせて悪かったな。これからよろしく」

差し出された手に若干躊躇いながらそつと手を重ねる。そして握ったのを確認すると立華もそつと握り返し笑顔を浮かべた。

「あなたって……なんだか不思議な雰囲気の人ね？まるでお母さ

んみたいで……でもちよつと違つてて……。私達が怖くないの?」

「(私達?) おう、怖くないぞ。利発そうない子だな」

そう言つて銀髪をそつと撫でてやる。ジャックは目をつぶりくすぐつたそうにするとすぐに明の後ろに隠れてその横から顔を覗かせた。

「はは、くすぐつたかつたかな?」

「「「「……」」」」

「ん? どうしたみんな」

握手している最中、周りが静かすぎることに気づいた立華が全員を見渡した。

全員は固まっていた。

そう、まるでビデオを一時停止したかのごとく驚きの表情のまま固まっていたのだ。そしてそんな中から一番に声を出したのはマシユだった。

「あの、先輩? ちよつと……」

「?どした?」

手招きのままに近づく。固まった表情のマシユは立華が手の届く位置まで来ると同時にその表情を焦りへと変えて掴みかかる。

(何やってるんですか何やってるんですか!?!いきなり近づいてザックリやられたかもしれないんですよ!?)

(ま、マシユ待つて、揺らし過ぎ)

(幾ら何でも危な過ぎです! つい先ほど殺気ぶつけられたばかりだったじゃないですか☒)

(マスターお怪我は!?!どこも痛くありませんか☒)

「……立華よ。今のは流石に不用心すぎるぞ」

「流石に肝が冷えたぜ。あまりに自然だったから思わず流しちゃまった……。師匠に知られたら修業不足つて殺されるな俺」

「馬鹿野郎! 不用心にもほどがあんだろ! 危険かどうかもわかん

ねえのか！」

「わ、悪かったって。でも明さんの仲間だし大丈夫かと……」

全員から責められタジタジになる。

しかしこれがキツカケなのか先ほどの睨むような目つきとは違い、どこか見極めるような目線に変わったのは今後を考えると結果オーライと言えるだろう。

「と言うかジャックザリッパーって、あの有名な？」

ジャックザリッパーとは1888年にイギリスで連続発生した猟奇殺人事件犯人の呼び名である。世界で最も有名な未解決事件であり、現在でも犯人の正体についてはいくつもの説が唱えられている。

『こんな幼い子がジャックザリッパー……。なんだろう、僕たちの知る歴史の人物像が崩れていく。』

ロマンが通信機越しに悩むように呟く。

「もしかしたら宮本武蔵とかも女の子だったりするかもしれないですね」

「流石にそこまではないと思うけど……」

「よし、荷物はまとめたか？」

「うん！もういいよにいちちゃん」

そこまで話し合えて背中に荷物を背負ったジャックと明が立ち上がった。どうやらこちらが話している間に動く準備が出来たらしい。

「悪いな、この間引っ越したばかりなのに……」

「気にしないでにいちちゃん。私達元々荷物少ないし」

そう言っ手を持った林檎を再び齧り出す。それを見たマシユはモニターから地図を展開した。

「さて、早速調査を開始しようと思いますけど、改めてチェック

するポイントを把握しましょう」

「まず始めにロンドンと言えば時計塔ですね。魔術師の総本山にしてあらゆる可能性の魔術を秘めた神秘の砦。しかし此処は嚴重なセキュリティでもあるためもう少し調査を行ってからの方がいいですね」

「次に此処、あの有名なヴィクターフランケンシュタイン：Dr. フランケン氏についてですが・・・」

「そいつについては無駄だぜ」

そこまで話してモードレットが遮った。地図から全員が一旦目を離し彼女をみる。

「昨日くらいだったかな、たまたま爺さんの屋敷の近くに来た時には倒壊していた」

「倒壊？ああ、でも確かにこんなに湿気の強い空間なら軋むのも「いや、そうじゃねえ」え？」

「あの崩れ方はそんな自重で崩れたとかじゃねえ。自重で崩れたのなら建物の下の方が崩れて屋根をある程度綺麗に残す。だが俺が見たときは・・・」

「な、なんだこりゃあ・・・！」

それを見たモードレットは思わず驚愕の表情を浮かべた。

ヴィクターフランケンシュタイン。彼はこのロンドンに住む魔術師の一人で異変を解決するに当たり情報交換をする中だった。

今回モードレッドがこの場所に立ち寄ったのは偶然と言うわけではない。街を散策するにあたり彼女は必ずこの場所を通っていた。それは数少ない生き残りである彼を気遣ったのこともあった。

モードレッドは此処最近は何日調査を続けていた。というのも此処最近見なかった霧が再び発生した為である。

「おい！おい爺さん！返事しろよ！」

つい昨日まで悠然と佇んでいた屋敷は、どうしたことか無残にも崩れ去っていた。

しかしただ崩れたという有様ではない。そう、これはまるで――

「何がどうなってやがる……！まるでデカイ岩でも降って来たような……」

モードレッドの表現したように、屋敷はまるで上から潰されたかのように下敷きになっていた。屋根は衝撃によるものなのか粉々になっっており辺りに散乱している。庭も芝生のいたるところにめくれ上がった土が散乱し、どこから漏れたのか水溜りをいくつも作っていた。

「俺はその日から拠点には戻ってなくて屋敷近くを散策していた。つまり崩れたり異変が起きたらすぐに気付くはずなんだよ。な

のに屋敷はまるで俺のくるすぐ前に崩れたみたいな有様だった。爺さんを探してみたが・・・大量の血痕と爺さんの常に身につけていたネクタイのかけらが残るだけだった・・・」

沈黙が辺りを包む。そんな中最初にキャスターが一つの疑問をあげた。

「・・・・・・・・おい、そんなの俺たちや聞いてねえぞ？」

「あ？そりやあそうだろ今話し・・・あ」

「・・・・・・・・散策の計画立てる時、モードレッド聞いてなかった？屋敷に行くって」

「・・・・・・・・わり、直後に現れた父上似の赤の衝撃で忘れ

てた」

・・・・・・・・

「大切な情報なんだからすぐ報告しろよ☒」

グレート

「うおおおおおおおおおッ!」

第五特異点

独立戦争時のアメリカ大陸。神秘こそ薄いものの人類の転換期として重要な時代。

しかし、広大な大地で行われていたのは、ケルト軍と合衆国軍の花散る「東西戦争」だった。

「しっかりしてエジソン!この戦線は貴方が居なければ持ちこたえられない!」

魔王と女王率いるは古代ケルトの戦士たち。

大統王率いるは大量生産の権化たる機械兵士軍。

「おいおいおい!いくらなんでもあの衝撃はまずいんじゃねーか!」

「ぐ、ぐううううう・・・!」

特異点についた立華達はバーサーカー「フローレンス・ナイチンゲール」とキャスター「トーマスアルバ・エジソン」協力の元に、今回の特異点の原因であるケルト軍を迎え撃つこととなった。

もちろんそこに至るまでは大変な苦労があった。

この特異点の原因であるサーヴァントメイヴが王として召喚したのはバーサーカークラスのクーフリーンだったのだ。当然別側面などの英霊の事情を知らない立華は驚いた。第一特異点で出会ったジャンヌダルク・オルタはあくまでジルドレイが召喚した別人。

完全に同じ人物が二人いると言うのはリツカの中で混乱を生じさせた。

だが彼がこの特異点で行ってきたことを知った時、心の中で思った。

この戦い、自分の手でケリをつけたい、と。

例え別の側面であろうとクーフリーンである。これまでいくつもの冒険を彼と一緒に乗り越えてきた。

もちろん召喚された時点でその二人は別人であると言うことは聞いた。だが、その上で立華は自分の手で止めたいと思った。

なぜなら、彼と言う英雄に、こんな酷いことをして欲しくなかったからだ。

(こ、これは……!?)

(エジソンさん、どうかこの機体を使ってくれないか?)

「これは……!何という……!」

現状を説明しよう。

彼らは今、魔神柱の「軍団」を相手に戦っていた。

前回の特異点でかの魔術王は危機を感じた。あの存在を許してはならない。あの存在はあつてはいけないものだ。

千里眼で何も見られなかったからではない。たしかに違和感を感じたのは事実だが、これはもつと根源的な危機感だ。

そう、それはまるで……

(俺はあのサーヴァントを許せない。本人の心を踏みにじり、利用して名前を汚した。俺にとって兄貴は英雄だ。だからこそ、こいつに頼るんじゃない、自分の手で殴りたいんだ)

(それにこのままの戦力だとそつちの人たちに大きな被害が出る。確かに特異点を修復したらみんな無かったことになるかもしれない。でも、それを御構いなしになってしまったらダメだと思っただ。)

「彼は人間なのか……!?なぜ彼は、こんなものを動かせるんだ」

そう、大總統エジソンは現在、立華から借り受けたマジンガーZに乗っていた。

最初それを目にした時彼は感動した。

人類は、人はここまでたどり着くものなのか、と。

彼ほどの発明家の目ならそれがどれほどの芸術品かわかる。これは一種の到達点だと。自身を上回るほどの才能を持つ人物がいくら集まっても出来ないであろう存在だと。

そして同時に思った。

(なぜ人型なのか……と)

キャノピーにエジソンの吐いた血が降る。

紅の翼を広げた魔神は、砂埃に塗れながら大地に膝をついていた。確かにマジンガーによって戦線は維持することができる。しかしそれは立華以外にとっては諸刃の剣に等しいだろう。なぜなら――

「まるで子供の手の中の虫のような気分だ……！そもそもなぜこれほどの大きさのマシンが人型なのだ。こんなもの、一般人や、ましてや人間が制御出来るような代物ではないぞ！」

そう、マジンガーZは25mはあろうかという人型である。そんなものに人が乗り込み、ましてや操るなどとても不可能だ。ただ歩くだけでも凄まじい振動がコックピットまで届く。紅の翼、ジェットスクランダーで飛ぼうものなら内臓が飛び出すだろう。

尚、それでなぜ立華が操縦できるのかというと彼にはとある存在が力を貸しているからに他ならない。今この場で語るわけにはいかないが、藤丸立華はその存在により別の〇〇の物理法則が付与されている。だからこそ鉄の城を自由自在に操れるのだ。

(この身がエーテルによつて形作られたものでよかつた……！だがもう、指が……！)

エジソンはレバーを引き魔神柱にブレストファイヤーを放つ。しかし身構えない状態で放たれたそれはあらぬ方向に伸びていった。出力に耐えきれず、マジンガーZは巨体をよろけさせる。

「し、しまった……！」

その隙を魔神柱は見逃さずに人の体を無理やり繋げたかのような触手を伸ばし関節の隙間からマジンガーを乗っ取ろうとする。

「ちよつと！気をつけなさいよ！尻尾にかするところだったじゃないー！」

魔神の攻撃を捌く中召喚されたサーヴァント、エリザベートバートリーが叫ぶ。

特異点で力を貸してくれた彼女は、かつてない猛攻の中マジンガーZまで近づくと周りの触手を払ってくれた。

「エジソン、無理して付いてきてくれたのは嬉しいけど貴方は、もう……」

キヤスター、エレナブラヴァツキーがコックピットの中のエジソンに話しかける。彼は霊格こそまだ保っているが衝撃によってボロボロだ。このまま戦いを続けられぬ……

「否ー！」

「否否否否否否！断じて否！！！」

「彼は私に任せたと云った！！私ですら身の毛のよだつあの化け物を相手にするとうのくに、彼は私にこの半身ともいふべき物を預けてくれた！これ以上誰かが死ぬ必要はないと！そう言つて！ならばここで止まるわけにはいかないのだ！」

「それにここは我らの国！アメリカ合衆国である！よその国の、ましてやただの子供ですら戦っている中、大統王たる私が背を向けるわけにはいかない！！！」

「向けて、たまるか！！！」

そういうと彼は操縦桿に噛み付いた。

指が使えない？それがどうした。自分にはまだこの顎門がある。それも砕けたら今度は操縦桿を腕に突き刺し動かせばいい。

そしてそれすらも出来なくなったとしても、彼は決して戦うことをやめないだろう。なぜなら彼は、たとえどんなあり方であろうとも。

英雄なのだから。

「魔神柱の反応、尚も増加中！」

「あと30分もすれば戦線は崩壊してしまいます！」

「エジソンの霊気反応、どんどん低下していきます！このままでは！」

カルデア司令部。現在そこは多くのスタッフとキーボードを叩く音で埋め尽くされていた。

カルデアは立華とエジソンが分かれて戦うと提案した際スタッフをダヴィンチとロマンの二チームに分けてサポートすることとなった。

「…予想はしてたけど、やっぱり戦力を大幅に上げてきたね…」
ダヴィンチはその綺麗な顔に皺を寄せて唸っていた。

彼女はつい最近まで自身の工房にこもり大幅な工事を行っていた。
工事の内容は二つ。

一つは藤丸十歳の遺産の解析。

ガラクター一つでさえ、この世界の技術を1000年は飛躍させるだろう発明がいくつもあった。彼女は立華に許可をもらい、その発明の数々を解析、技術転用しボロボロのカルデアを立て直そうとしていたのだ。

そしてもう一つは……。

「偏屈な発明家はさておき、奴らにマジンガーZを渡すわけには
いかない……」

モニターの前の光景を目にし彼女は呟くと、近くにいた女スタッフに話しかけた。今は何パーセントか?と。

「シミュレーション継続中。訓練は全体で93パーセント消化。バイタルサイン全て良好基準値内。現在はレイシフト時の異常事態用空間喪失訓練シーケンス中です。」

「ほぼ完成……か」

そのやり取りの後ダヴィンチはもう一つのモニターに目を移した。そこには、立華のカルデア戦闘服と似たようなスーツにヘルメットを被った男が謎の空間に逆さの状態で腕を組んで浮かんでいる映像が映っていた。

「ダヴィンチ女史、このままではマジンガーZが奴らの手に渡ってしまいます。彼を出撃させるべきかと。」

「うむむ、それは、そうだけどさあ……」

オペレーターの言葉にダヴィンチは唸り声を返す。すると画面の男は聞いていたのだろうか、ゆっくりと瞳を開きませんをこちらに向けてきた。

『「おふくろ」。もう十分だぜ。そんだけ出来てりゃあなんの問題もない』

男の外見は大体20代半ばと言ったところか。スーツの上からでもわかる鍛え上げられたであろう肉体。まるで刀のように研ぎ澄まされた瞳。長年の間戦場を生きて来たような印象を受ける彼はギャップを感じさせる子供のような笑みを浮かべダヴィンチに話しかけた。

「うーん、やっぱその呼び方少し照れくさいなあ……ふつうにダヴィンチちゃんって呼んでもいいんだよ?」

『くくつ、あんたが俺をこの世に連れて来てくれたんだろう? ならばあんたは俺にとっておふくろさ。そんなことよりおしやべりなんてしてる暇あるのかい?』

そういうと彼は空間をゆっくりと回転し姿勢を正す。その様子を見たダヴィンチは諦めたようにため息を吐くと目を見開いて言った。

「芸術家で発明家な私としては中途半端な状態で君を出したくはなかったが……ここまで来たのなら仕方ない。君には早速だが命をかけてもらおうしかないようだな」

「戦いの時は来たよ!!」

その声とともにスタツフたちが慌ただしくマジンガーZの解析を一時中断して別のプログラムを開いていった。

「t-28、ブレーションコンドル! 発進準備!」

「おいおい、君そんな堅苦しい名前で彼を呼ぶもんじゃやない。

彼の名は……そうだね。」

「テツヤ、うん。鉄矢がいいな。重く、素早くどこまでも飛んで行ける鉄の矢。」

「鉄矢くん！発進だ！」

その声に男、鉄矢は笑みを深くし、発進ホールの中に飛び込んだ！

「我らのもう一つの切り札鉄矢くん！」

新たな体を携え限られた時間の中、戦闘力をフルに発揮し魔術王と47の魔神どもを

叩き潰せ!!!」

鉄矢はレイシフトコフィンがドッキングしたのを確認すると、目の前の操縦桿を握りつた。

「りょくかい！こちとら待ちくたびれてたんだ！行くぜ！」

ブレーションコンドル!!!発進!!!

次の瞬間、ドッキングした炎をそのまま形にしたかのような戦闘機「ブレーンコンドル」が時空間のホールを飛び出した。

「マジーンゴー!!!」

そして彼はキーンワードを叫ぶ。するとブレーンコンドルの前の時空間に揺れが生じ・・・

「そうー！これこそもう一つの魔神!!」

「偉大な勇者!!まさしく!!!」

グレートツ
!!!!!!

グレートマジンガー
!!!!!!

「いよいよ、負けが見えて来ちゃったかしら?」

「いや、たった五人でよくやった方でしようよ。」

長い時間争っていたが、それもついに限界を迎えた。戦場で一緒に戦っていた人たちは、エジソンが開発した機械兵によって遠くに逃がされている。しかし、五人の霊気反応はボロボロ、マジンガーZも半分の敵は減らし切ったが今や体の半分を魔神柱によって飲み込

まれており、このままではいずれ「最悪の悪魔」として君臨するだろう。

「やむを得ない、か。」

エジソンはフットペダルの横にあるレバーに目をやる。何かは見たら大体わかる。

「光子力ノヴァ」

自爆装置。当たらずもおからずである。この機体のエンジンを無理やり起動させ大量の光子力を外部に放出させるレバーである。しかしこれを起動した場合機体は無事でもパイロットは光子力に耐えきれずに焼け死んでしまう。

しかめた顔を見たアーチャー、ロビンフッドが言う。

「エンジンのオツさん、そう気に病みなさんな。十分やったよ、これであんたがそれを起こしても俺たちが死ぬだけで済んだんだから。」

「・・・悔しい、ああ悔しいな。あのとーへんぼくの野郎と比べればまだマシだが、確かに悔しい。出来ることならあの少年のように、私も主役になってみたかった。」

彼らに魔神柱達が迫る。後数秒するかしないかで彼らは飲み込まれるだろう。しかし英雄として、そんなことは許さない。そしてエンジンが、マジンガーの最終兵器を起動しようとした瞬間――

サンダーブレーク
!!!!!!

雷が、魔神柱を焼き尽くした。

何が起きた？

今この場にいる全員の考えたことはそれである。後数秒、次の瞬間自分たちは爆発に巻き込まれて座に帰るはずだった。だが光が起こった瞬間、気が着くと自分たちは無事で、代わりに先ほどまで飛びかかって来た魔神柱と、マジンガーを拘束していた触手を焼き尽くしたであろう謎の雷が帯電していた。

「・・・雷」

「見て！さっきまで晴れてた空が！」
エレナの声を聞いて全員が空を見上げる。あの魔神柱までもがだ。そこには異様な光景が広がっていた。

渦だ。巨大な渦。

先ほどまで快晴だった青空は、曇天に渦を巻いていたのだ。

そして、彼らは見た。

その雲間に現れた黒い影を。あの形はまさしく

「マジンガーZが・・・もう一体？」

それを誰が呟いたかはわからない。だが確かに雲間の中には、マジンガーZに似た黒い影が誰の目にも映っていた。

すると次の瞬間一際大きな雷がその影を照らしーーーーー

「マジンガーZ？それは違うな！」

彼が高らかに名乗りを上げた。

俺はグレート!!!!
グレートマジンガー
!!!!!!!

偉大な勇者だ
!!!!!!!

『ダヴィンチちゃん!! 一体何をレイシフト・・・つてマジンガーZなんて』

『ドクター!! 一体どうしたーってマジンガーがもう一体!?!』

マジンガーZの中の通信機が開き、ロマニアーキマンと藤丸立

華の声が響いた。その声を聞き英霊達はマジンガーZのキャノピーに目をやった。

『はーはっはっはっはっはっはっはっはっはっ！どうだいみんな！これこそ私がこしらえていた秘密兵器さー！』

『一体いつのまにそんなものを?!』

『その名もグレートマジンガー！究極を冠するアルファベットこそないものの、マジンガーZのデータとこれまで積み重ねられたエネルギーのデータを元に格闘戦に主軸を置いたスーパーロボットだ!!!』

グレートマジンガー

その全身はまさに、鋭利な刃物だった。マジンガーZとそっくりな見た目こそしているが、各所に鋭そうなヤイバを装備しており胸の放熱板はブーメランのような形をしている。頭の横に付いているツノは天に伸びており、炎を直接形にしたかのような冠を乗せていた。

急な援軍に魔神柱達は標的をグレートマジンガーに絞り飛びかかった。新たな戦力から潰した方がいと考えたのだろう。四方から伸びる触手を前にするグレートマジンガーだが、彼は微動だにしなかった。

「危ない！あの攻撃を食らうと、全身の隙間から奴らが入り込みぞぞ！」

エジソンが叫ぶ。だがグレートマジンガーのパイロットが浮かべていたのはーーー笑みだった。

「来な!!俺は少々荒っぽいぜ!!」

次の瞬間、魔神柱は驚愕した。

バカな、こいつ、なぜ隙間がない☒

そう、グレートマジンガーはロボットである。であるならば当然関節があるし隙間も出て来てしまうものだ。決して全てを塞ぎ切るなど出来ない、はずだった。

『そう!!スクランブルダッシュを見てわかる通り!私は第四特異点の宇宙線と超合金Zを融合することにより自在に変形させることを可能にした!その名も超合金ニューZ!』

リツカはその時らモニター越しに見た。そのマジンガーのコックピットにいたのは。

『彼は前の特異点の・・・』

こいつらは任せて先にいきな!

おとといきやがれ、俺は戦闘のプロだぜ!

『敵の攻撃は分子レベルで対応可能つまり!』

グレートマジンガーは一通り周りを見渡すと胸の放熱板を引き抜いた。シャン・・・という金属同士が擦れ合う音が周りに響きその放熱板を空に掲げる。すると次の瞬間—————

『つまり—————

放熱板は巨大なブーメランへと変化した。

こんなことも可能だぜ
!!!!!!

グレートブーメラン
!!!!!!

「さーて、覚悟しろよ魔神ども!!絶滅タイムだ!!!!」